Mission

伊吹ノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｉｓｓｉｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ３８０６Ｊ

【作者名】
伊吹ノア

【あらすじ】
臆病風の冒険。そんな物語があった。アイラディアと呼ばれる幻想の世界に。それは悲劇。悲しいままで終わってしまう物語。その物語が何よりも好きな一人の読み手がいた。その読み手は、好きだからこそバッドエンドで終わってしまうことがどうしても許せなかった。そこで筆を折る神（書き手）の力のなさに憤っていた。故に世界に降り立つ。
折れた筆を直して、世界（お話）を作り直すために。
悲しみに暮れるヒロインたちの、その笑顔を見るために。

1、時の氏神における、始まりの一筆（前書き）

伊吹ノアです。
４作目は、初の試み、ヒロインの一人称（第１話をのぞく）＆異世界が舞台のお話です。
今までは一応？現代ファンタジーばかりでしたが、個人的には異世界が舞台のお話のほうが好きだったりします。

1、時の氏神における、始まりの一筆

そこは、現実の世界に遠くて近い異界の地、【アイラディア】。
世界と同じ名を冠する神と、神を支える１２の根源が統べる場所。
かの地で暮らす人々【コドゥ】は、世界の全ての場所に存在し、世界を創り構成すると言われる１２の根源の力を体系化し、魔の法として具象化することで発展してきた。

月のアーヴァイン。
火のカムラル。
水のウルガヴ。
木のピアドリーム。
金のヴルック。
地のガイアット。
雷のガイゼル。
氷のルフローズ・レッキーノ。
風のヴァーレスト。
光のセザール。
闇のエクゼリオ。
時のリヴァ。

それらを扱うことのできる神の使い、【ナヴィ】の力を借りることによって。

しかし。
コドゥとナヴィ…アイラディアで暮らす二つの種族は、お互いを対等と認め合い、共に手を取り合って生きていくことができずにいた。
数が少なく、アイラディアと、各々が信ずるその根源に愛されてい

ることを自負し、ひとりひとりが大きな力を持つ、自尊心の高いナヴィ。
数は多いものの力を持たず、ナヴィに依存しなければ生きていくのも難しい……そんな劣等感を持つコドゥ。

そこには生物としての圧倒的な差がそこにはあって。
それなのにも関わらず。
ナヴィは命をかけてコドゥを守り、その願いを叶えなければならない。
そんな宿命をアイラディアに背負わされていたからだ。

それでも、始まりの頃は……まだ良かったのだろう。
コドゥを守ることがナヴィの全てであったならば。

ナヴィにしてもコドゥにしても、お互いがいなければ生きていけないことを、
ちゃんと分かっていたのだから。

だが。
ナヴィの中に願いを叶えることのできる力、【命のキセキ】を持つものがいるということが世に知れ渡ってから。
そんな命のキセキをその身に秘めた、１２の根源の【御名】を持つ特別なナヴィである、【レイア】がいることにコドゥが気付いてから。
世界は変わってしまった。

命のキセキというものが、ナヴィの命とも同じ……あるいはそれ以上のものを引き換えに、その力を与えられたもののあらゆる願いを叶える、といったものだったからだ。

その力を初めに使ったナヴィ……光の根源の御名を持つレイアが、一体どんな意図を持ってそれを世界に知らしめたのかは分からない。

その日から世界は、レイアであるないに関わらず、ナヴィたちにとって地獄と成り代わった。
己の欲望に駆られたコドゥたちに、その命を狙われるようになったナヴィは。
圧倒的なほどに数で勝るコドゥのその行動に驚き、戸惑いながらも抵抗しようとする。

でも、背負う宿命には逆らえない。
絶望の涙の中、一人、また一人とその儚い命を散らしてゆく。
コドゥのためにあるその願いを、結局叶えることもできずに。

そして……。
使われることのなかった願いの力は、持ち主であるレイアが命落とすことで、世界に溢れた。
溢れたその大きな力に、世界は耐えられない。
だんだんと世界は崩れ始めて。

そんな滅びに向かおうとする世界に見切りをつけた神は、ある特異な力と、新しい神になる権利をレイアのひとりに与え……その世界から去ってしまった。
レイアの中にある命のキセキ。
その力を取り出し、その背中の翼に溜め込み、仕舞い込むことのできる力を。
無慈悲な神は、その翼あるものに、世界を押し付けたのだ。

これは、そんな神と世界に翻弄され生きた……悲しいひとりのナヴィの物語。

―――アキヨ・シリヴァ著・『臆病風の冒険』、序。

2、臆病風と、悲しみの邂逅（前書き）

プロローグその2、です。

2、臆病風と、悲しみの邂逅

「ミャコっ！どうして戻ってきたのですかっ！？」
高貴なる水の騎士であるナヴィ。
そんなディノの切羽詰まった叫びが、寂れた礼拝堂に響き渡った。

その声色に焦りがありありと伺えるのは……とんでもない大勢が歩を進める音が地響きとなって聴こえてくるのが、はっきりと分かったからなんだと思う。

「何って、ちょっと忘れもの」
対して、息を切らせて戻ってきたミャコは、いつもの笑みさえ浮かべながら、そう呟いてみせる。
「っ！　そんな場合ではないでしょうっ！？」
「……」
返ってくる激昂にミャコは、少しだけ笑みの度合いを強めただけ。
時間なんかないはずなのに、長い長い沈黙が続いて。

「いったい、何をお忘れなのかしら？　このような所に」
この状況においても変わらないように見えるミャコに折れるように、ディノは戸惑いながらもそう問いかけた。
「忘れものは、あなたよ、ディノ」
「まさか、わたくしを助けに来たとでも？」
ディノは、ミャコの言葉にはっとなって顔を上げる。
でも、ミャコはゆっくりと首を振った。

「違うわ。だってこんな濡れ衣でむざむざ殺されるなんてまっぴらごめんだもの。アタイはあんたと違って水の国（ウルガヴ）とはもともと関係も

何もないわけだし」
「そう……ですわね。あなただったらそう言うでしょうね」
おどけた様子で辛辣な言葉を紡ぐミャコ。
なのにディノはそのことで初めて微笑みを浮かべた。

ミャコには分かってたことだった。
何かあってもここを動かないとディノが決めていることを。
それを止めることは、ディノの忠義、存在を蔑ろにすることだってことを。

それは、蓋を開けてみればありがちな話だったんだろう。
ミャコたちは、コドゥの手を逃れる旅の途中で、ディノの故郷、水の国に身を置いていた。
水の国の王はコドゥだったけど、民の信頼も厚くてナビィを対等に扱う……世界には珍しい、やさしい王だった。
何より、光の御名を持つナビィ……その身に秘めし【命のキセキ】で願いを叶えることのできた王は、ミャコたちにとって信頼の置ける人なのは間違いなくて。
特にディノにとっては、親にも等しい存在だったんだと思う。

だけど……。
王は、願いを叶えられない……叶えさせてもらえないと思い込んでいた息子によって殺されてしまった。
その息子も、水の国の乗っ取りをたくらんだコドゥに殺されて。

それが巡り巡って。
ミャコたちは、その罪をかぶせられてしまった。
水の国は、その王一人が全てを支えていたといっても間違いではな

くて。
王が愛されていたが故に、ミャコたちはそこから逃げる以外に濡れ衣を晴らす術を持ち得なかったんだ。

「それで、何をお忘れになったの？　逃げるのならもう時間ないですわよ？」
「ええ。ちょっと、確認したいことがあったのよ」
「確認したいこと？」

伺うようにディノにそう聞き返されて。
ミャコは覚悟を内に秘め、凄絶な笑みを貼り付け……言葉を続けた。

「あなたは死ぬのが怖くないの？　あなたの命のキセキを、知らない誰かに奪われるかもしれないって、思わないの？」
「……っ」
ミャコにそう言われ、ディノは表情を凍らせて俯くのが分かる。

「アタイはいや、そんなの嫌よ。だから、アタイはっ」
感情に任せた言葉は。
それ以上は出てこなくて。
それでも何かを口にしようとして。
それをディノに遮られた。

「ひどいナビィですわね、あなたは」
「……」
それはミャコ自身が一番分かっていたことだったけれど。
それでも改めて口にされると、とても辛いもので。

「必死に考えないフリをしてましたのに。……そうですわ、ミャコ

の言う通りです。わたくしは怖い。死ぬことではなく、誰ともつかないコドゥに、命よりも大切なものを奪われてしまうことが、怖くて怖くて仕方ないのです！」

何かこらえていたものが決壊したかのように、ディノは叫んだ。
その身体は震えていて。
ディノがそう思わないはずがないことくらい、ちゃんと分かってた。
それを分かっていて、ミャコは傷口に塩を刷り込むようなことをしてるってことを。
でも、それでも。
ミャコは言葉を止めることは許されない。

「今まで……アタイはみんなに黙っていた、隠していたことがあるの」
そんなミャコの言葉は、一見違う話題のように響いて。
「翼あるもののことは知っているでしょ？　レイアの命のキセキを奪う、アイラディアの死神のことは」
「もちろん、知っていますけど……」
ミャコの突然の話題の意図が掴めないまま、頷きそう呟くディノだったけれど。
その続きは言葉にならない。

何故ならミャコが、ディノの目の前……息かかるほど近くにいたからだ。

「ごめんなさい……それって、アタイのことなの」
瞬間、様々な感情とともにディノのアクアマリンの瞳に浮かぶのは……涙滴の紋様。
ディノが、水の根源の御名を持つレイアである、その証。

気づけばそれはミャコの手のひらにあって。
次の瞬間にはその背中にある黄金の翼へと吸い込まれる。
それが意味するところはつまり。
ディノの命のキセキがミャコに奪われたということで。

「どうして……？」
ディノは、微れ声で呟く。
命のキセキは、コドゥでなければ奪うことができないのはずなのに。
どうしてミャコにそれができたのかと。
翼あるものに命のキセキを奪われたナビィは、そのまま命を落とすと聞いていたのに。
どうして自分は立っていられるのかと。

「翼あるものはね、トクベツなの。レイアが一つしか抱えきれない命のキセキを、その翼に溜めておくことができるの」
それに、ミャコは答える。
それを伝えることがせめてもの義務だと思ったから。

そして……ディノから離れて。
薄い笑みを貼り付けながら、ミャコは背中にある黄金色に縁取られた一対の翼をはためかす。

「あなたが死なないのは……もう死を覚悟していたからなの。分かる？　アタイはこの時を待っていたのよ、あなたが死ぬ気になってくれるまでね。……だって、そうすれば殺して奪う手間が省けるでしょう？」
口調は辛辣なままで。
言葉のナイフは受けるディノよりも、むしろミャコ自身を傷つけて

いるってことにミャコは気付いなくて。

「それでは、最初からそれが目的でわたくしたちに近付いたのですか？」

「……そうよ」

「エミィさんにも、そのつもりで近付いたとでもいうのですか？」

「……」

一瞬の沈黙。

それは周りの……もうすぐそこまで近付いているだろう騒ぎすら消そうになるほどの長い一瞬で。

「……そうよ、始めからえっちゃんにも、そのつもりで近づいたの。猫かぶって仲の良いともだちのふりをして、いつかその寝首をかいてやろうって……思って、たんだからっ！」

「……」

再び訪れるは静寂。

それは、さっきのものとは少し違ってて。

「さきほどの言葉、撤回させていただきますわ。あなたは、不器用で、それでいてやさしいひと……」

ミャコは、何を言われたのか分からなくて顔を上げて。

ディノが女神のようにやさしい、涙交じりの微笑みを浮かべているのを知って。

ますますわけが分からなくなって。

「なんでっ！？　アタイは、あなたをっ……騙してっ！　あなたの大切なものを奪ったのに！」

「だってあなたは泣いてくれているもの。わたくしのために」
「……っ」
そう言われて。
ミャコは初めて、自分が大粒の涙を流していることに気付いた。

「これはっ……うれし涙よっ！」
慌てて涙拭っても、それは止まらない。
ミャコはその感情を、抑えることができなかった。

「ありがとう、わたくしのために泣いてくれて。わたくしの唯一の心残りを解決してくれて……」
「違うっ！　アタイは本当にあんたをっ！　騙してただけなんだからっ！！」
本当に救われる。
そんな表情のディノに、縋り付くようにミャコは叫んでいた。
最初はディノを……みんなを騙して、いつか命のキセキを奪ってやろうって思っていたはずなのに。
どうしてこんなにも涙が出て……哀しいんだろうって。

「最後のひとがあなたでよかった。わたくしの願い、命のキセキを……よろしく頼みますわね？」

そしてそれが……ミャコの聞いた、ディノの最期の言葉だった。
すぐに怒号ともつかない、コドゥたちの声がして。
ミャコはそこから逃げ出したからだ。

———天にまで届く、慟哭とともに。

それからも……。
そんなミャコの旅は続いた。
大好きなひとが今にもどこか遠くへ行ってしまう。
そんな悲しい旅が。

でも……どんな旅にも途中があるように、この旅にも終わりが迫っていた。

ついに辿り着いたのは、ミャコを除いて最後の命のキセキを持つ……マイカ・エクゼリオのいる闇色に染まった城。

強大な力でコドゥを抑え込み、この世界を牛耳ろうとしていた、闇の根源の御名を冠するレイア。
そんなマイカから命のキセキを奪うことができれば……ミャコの願いを叶えることができる。
この世界の神になれる。
ナヴィが幸せに暮らせる世界を作ることができる。
ナヴィで唯一、それを知っていた翼あるもののミャコは、そう確信していたのに。

いざそのマイカを目の前にした時。
こんなはずじゃなかったと。
自分はいったい何をしているのかと。
とめどない後悔がミャコを襲った。

見上げるほどに大きな扉を開けて、ミャコがマイカのいる玉座に目を向けた時。
マイカが刹那垣間見せた表情は……孤独から解放されたことへの安

堵と、やってきたものが自分の近しい者ではないことへの絶望感だった。

「翼あるものっ……ふたりを、どうしたっ！？」

「……」

二人……それが、マイカの片腕であり家族でもある二人のレイアのことだろうことは、ミャコにもすぐ分かったけれど。

闇の根源の御名を冠するレイアとして皆に恐れられたマイカが、開口一番部下の心配をするなんて、思ってもみないことだった。

まるで、ミャコのほうが諸悪の根源であるかのような……そんな物言い。

「アタイが一人でここに来たってことが……それの答えよ！」

「……っ！」

風をまとい、肉薄するミャコ。

それを迎え撃つように、マイカが闇の力を解放して……。

戦いが、始まった。

それは、まさしく命の削りあい。

ミャコとマイカは幾度となくぶつかり合い、その戦いに終わりはないかのようにも見えたけれど。

三日三晩続いた果てのないように見えたその戦いは。

ミャコの勝利で幕を閉じた。

二人の力の差はほとんどなく、決め手……勝因は、少しの運と偶然によるものだったんだろう。

「……負けちゃった、あなたの勝ちだね。あたしの命のキセキ、好きにすればいいよ」
「ええ、そうさせてもらうわ。これで、ようやくアタイの願いが叶うんだから」
膝を突いたままで発する、何も感情を含まないマイカの言葉。
身体も心もひどく疲れていたけれど……ミャコはそれに無理矢理笑みを張り付かせて、何とか言葉を返す。

「願いかぁ。あなたは、全てのレイアの力を手に入れてまで、何を願うの？　一人きりになった、この世界で」
「……」
いざマイカにそう聞かれても、ミャコはすぐに答えることはできなかった。
最初は、こんな世界を変えたいって、ナビィが苦しむこの世界を失くせばいいって思っていたのに。
今、ミャコの心にあるのは、深い悲しみと後悔だけだった。

思い出すのは、散っていった大切な仲間たち。
そして、大好きだった一番のともだち。
全ての思いが背中にあって……。
全てを奪ったのはミャコ自身で。
そんな犠牲と引き換えにできる願いなんて……この世にはないんだって、気付いてしまったから。

「みんなと会いたいな。えっちゃんに会いたいよ……」
ぽつりと呟いたのは、きっと本当の願いだったんだろうけれど。

「ようやく終わったか……さて、大人しくなった所で、命のキセキ

を渡してもらおうか」
しかし、そんなミャコの呟きは。
突然降って沸いた第三者の声によってかき消された。

「……っ！」
「な、なにっ？」
ミャコもマイカも急に掛かったそんな低い声に、びくりとなる。
気付けば……周りをたくさんのコドゥに囲まれていた。
周りに気を配っている余裕のなかった……ふたりの戦いを嘲笑うかのように。

「待ってたぜ？　くそ生意気なお前が、こうやって弱るのをよぉ？」
「……くっ！」
コドゥの誰かが言った一言に、ミャコはようやく状況を理解した。
「まさか負けるとはなあ？　ま、オレたちにはどっちでもよかったんだけどよ。お前らナビィが後生大事に持ってるもんを……いただくのにかわりはないからな」

初めから、そのつもりだったのかもしれない。
レイアの中でも特に突出した力を持つマイカを出し抜くには、まさにこの瞬間しかなかっただろうから。
嫌悪感を伴うニヤニヤ笑いを浮かべながら近付いてくるコドゥたちを、ミャコはこの時ほど心底憎くて……怖いと思ったこはなかった。

「っ……下っ端のコドゥのくせにっ！　王は、王はどこっ！」
それでもマイカは叫ぶ。
たった一人信じた……コドゥの名前を。

「悪いねぇ。これもその王のいいつけなんだ。だから、大人しく命のキセキってやつ、渡してもらおうか？」

「なん、なんでっ！？　これが、王の……王の命令だとでも言うの！？」
「そうだよ、最初からお前の力が命のキセキが目当てだったのさ」
「……っ」

そしてそれが……決定的な一言だった。
それまで張り詰めて精悍だったマイカの表情が、くしゃりとゆがむ。
このとき初めて、目の前にいるマイカが……あるいはミャコ自身よりも弱い、ひとりのナヴィであることに、ミャコは気付かされた。
たった一人のコドゥのために、全ての泥をかぶって、いつか命のキセキで願いを叶えてもらう……そうやって生きてきただけなのだと。

「そんなの……そんなのっ、嘘だーっ！！」
瞬間、闇の力が爆ぜる炎になって、爆発した。
コドゥたちは、次々と闇の炎に巻き込まれ……なすすべも言葉もなく灰と化して消えてゆく。
炎はそのまま周りの建物にも燃え移り、大きくなって……やがてマイカ自身にも火をつけた。
それは、マイカの慟哭とともに放たれた命の火、だったのかもしれない。

「嘘っ、うそだよぉ……ほ、欲しいならっ……あげたのにっ！」
「……マイカ」
レイアだけが知っている、命のキセキの使い方。
それは、本当の意味で、愛してもらうということ。
それは、教えられるものではなく。
その身に持つナビィがいくら望んでも与えられるものではなくて。
結局、マイカにとってたったひとりだけのコドゥは、それを望まなかったのだろう。

ここにいないという時点で……その全てを物語っていて。

「……」

自らの炎につつまれ、ぽろぽろと涙をこぼしながら消えゆこうとするマイカに。

ミャコは眦を決し、ゆっくりと近付いた。

そして……闇の炎をものともせずに抱きしめて。

命のキセキを奪った。

それは、一対のブラックオニキスの中に潜みし……円の中に描かれた星。

マイカが闇の根源に従いしレイアである証。

「……っ、どうして？」

呆けたように呟くマイカ。

「決めたんだ、マイカ。アタイ……みんなの願いを叶えることにする」

「みんなの、願い？」

「そう、レイアみんなの願いよ。今はね、こんな世界で願いは叶わないかもしれないけど、いつかきっと世界が生まれ変わって、自由に願いを叶えられる時が来ると思うから……アタイがあなたの願い、預かっておいたげる。今度あなたに返すまで死んでも守るから」

だから今は、安心して……おやすみ。

そんな呟きとぬくもりに……お互いが、一瞬だけ時を忘れる。

ほんのついさっきまで敵だったはずなのに、怒りも憎しみも二人の中にはもうなかった。

ただ、マイカの命のキセキを受けたミャコの翼が……それを証明するかのように輝いていて。

「ありがと……」
マイカの最期の言葉は……そんな感謝のひとこと。
ミャコはただ……そんなマイカの残り火を抱いて。
大声で泣き続けた。
こんな世界に生まれたことが悲しいのか。
結局、自分の思惑通りになってしまったのが悔しいのか。
一番大切な友達を失った時に枯れたはずの涙が止まることはなかったけれど。

「……行かなくちゃ、アタイの願いを叶えに」
ミャコに泣いている暇はなかったから。
やらなくちゃいけないことがあったから。
ミャコは顔を上げて歩きだした。

震えるほどの高さの……あの場所へと。

そして……。
ミャコが最後にたどり着いたのは。
アイラディアの神が舞い降りると言われる、風の祭壇だった。
ミャコが昇ってきた石の階段以外は、四方八方が雲海に囲まれた場所。
その場所で命のキセキを内に秘めた翼を捧げれば、願いは叶う。
世界の神として、世界を救うことができる。
ミャコはただそれだけを信じて。
これから翼舞うだろう虚空を見つめ……祭壇の中心に向かって、全ての願い背負った翼をはためかせた。

すると、黄金に縁取られた翼が、一つの意志を持っているかのように、ミャコの身体から離れる。
それは……ミャコが、ただひとりのナビィへと戻り、神になろうとするまさにその瞬間。

これですべてが終わったのだと。
ミャコはずっと信じていたのに。
ふわりと舞い上がった黄金の翼を囲むように表れた命のキセキを目の当たりにしたとき。

「えっ……？」
ついて出るのは、愕然としたそんな呟き。
浮かぶ命のキセキが、１０しかなかった。
１１の命キセキを集めなければいけないはずなのに。
最初に気づいたのは……そこに風の根源を表す翼を模した、ミャコの命のキセキがないことだった。
何故？
溢れる焦燥感を必死に押さえつけて考えて。
ミャコは一つの結論にたどり着く。
ミャコは、勘違いをしていたのだと。
本当はミャコをのぞいて１１の命のキセキを集めなくちゃいけないのに。
その数の中に自分のぶんを数えてしまっていたのだ。
笑えない思いこみ。
情けなすぎて涙が溢れてくる。
願いを叶えるに至らなかった黄金の翼は、その舞う力を失ったかのようにミャコの両腕に舞い落ちて。

「あとひとり、探さないと……」
それが誰なのか。いったいどこにいるのか。

この、ナヴィにとって地獄のような世界で、生きているかも分からない相手。

ひどい目にあっているかも知れない。
もう手遅れなのかも知れない。
今の今まで助けられなかった自分自身が……何より悔しかったけれど。

「さあ、命のキセキを渡せっ、願いを、叶えてもらおう」
「……」
再び駆け出そうとしたミャコの足は、そこで止められた。
知らない誰か……コドゥの誰かの声が耳にうるさい。
たぶんミャコがここに来るのが分かっていて、それで追いかけてきたのだろう。
ミャコにはそれに、気が付いていた。
ここに辿り着くまでに、数え切れないほどのコドゥに追われ続けていたし、今も、ミャコがやってきた階段から、ぞくぞくとコドゥがやってくる……そんな気配がしたから。
ミャコは、断崖絶壁のふちに、自然と追い詰められて。
そんなコドゥたちの方を初めて振り向いた。

「さあ、よこすんだ！　もう後はないぞっ！　大人しく命のキセキをよこせっ！」
再び聴こえてくるのは、歩み寄りの余地など全くないコドゥの一人のそんな言葉。
それを聞いたミャコは……ふっと笑みをこぼす。

絶体絶命。
だけどこんな結末を迎えることをどこかで予期していた自分自身に

気づいたせいもあるだろう。
けどそれは……単純に、その言葉がおかしいと思ったからなのかもしれない。

「本当はね、コドゥがナビィにいちいち聞くものじゃないのよ、そんなことは」
多分それは、ミャコがコドゥたちに見せた……最初で最後の本当の笑顔で。
ミャコはそんな笑顔のまま、みんなの願いのこもった翼をぎゅうと握りしめて。
とんっと軽く地を蹴る。
夢幻の雲海広がる空へと、落ちてゆく。
そんなミャコに追いすがるようなコドゥの声を振り払うようにして。
遠い世界に旅立っていってしまったみんなに会いにいくことを。

ただただ願いながら……。

3、地維の母との再会は百合風味

頭の中で、高らかで爽やかな笛の音が響いてくる。

「……っ！？」

それを認識したと思ったら、ミャコは目を覚ましていた。

山と聞いたら川と答えるみたいに、それが当たり前のこととして。

混乱。

頭の中が、さっきまでの夢でぐちゃぐちゃになっていて。

「夢……？　まさか、そんなわけないじゃない」

なんだか他人事みたいに響く、ミャコ自身の声。

だけど、言ってることは間違ってないはずだった。

あれは、夢なんかじゃない。

紛れもなくミャコ自身が体験したこと。

なのに、激しい違和感が拭えない。

考えれば考えるほど、混乱が深まっていくような気がする。

ミャコはそれ以上考えることをやめて、辺りを注意深く見渡した。

あまり見覚えの無い部屋。

簡素だけど清潔そうな感じのベッド。

小さめの鏡台と箪笥。

窓口には一輪の黄色い花が咲いてる花瓶と水さし、羽ペンとメモ帳が置いてある。

家なしのミャコだからそうだと断言はできないけれど。

たぶんここは、コドゥたちが使う旅の宿か何かの一室なんだろう。

建物の上階にあるのか、窓の向こうへと目を向ければ。

広がるは色とりどりの屋根と、それほど遠くない場所に聳える、アイラディア大陸を支える山々が見えた。
射し込む太陽の光は、翼を日干すにちょうどいいくらいの暖かさを保っていて。
ひどく眠気を誘う、のどかな情景。
元々気ままにのんびりなのが性に合ってるから……自分の置かれている状況を一瞬だけ忘れて、和みそうになる。

だけどその瞬間。
トントンと階段を上ってくる人の気配に気付いて。
ミャコははっと我に返った。
それがどれほどの意味があるかも分からないままに、ミャコはベッドのところに丸まっていた掛け布団を引っ掴み、それで身体を覆うようにしてしゃがみ込んだ。

さっきまでのことは夢なんかじゃない。
あの高さから落ちて怪我ひとつしていないのはどうにも不思議だったけれど。
ここが死んだ人の行く世界でないのなら。
死ねなかったのなら。
どんなひどい目に遭わされるかも分からなかった。
ミャコ自身よりも、みんなの願いの詰まった翼だけは守らなくちゃって、そう思って。

「……っ！？」
大声を出しそうになるのをかろうじて止める。
抱えていたはずの翼がなかった。
当然背中にもない。
すでに奪われてしまったのかと、最悪の想像が頭をよぎる。

泣きたくなる気分の中、不幸中の幸いにも近付いてきた人の気配は、ミャコのいる部屋を素通りしていくのが分かって。
とりあえずすぐにはこの部屋にやってこないだろうことを察すると、慌てて起き上がり、行方不明の翼を探した。
もう奪われてしまったのなら、この部屋にあるはずもなかったんだろうけど……。

「な、なんで……？」
アイラディア様から授かった金色に縁取られた純白の翼は、ちゃんとそこにあった。
もう随分と長い付き合いのはずの、麻でできた道具袋が真新しい。
その口元からはみ出るようにして仕舞われている。
ぞんざいで罰当たりな仕打ち。
慌てて駆け寄って手に取って。

「え……？」
気付いたのは力抜けるほどの違和。
翼は、恐ろしいくらいに軽く、小さかった。
まるでおもちゃのような翼。
そこに、命のキセキを内包する輝きも重みも感じられない。
まさしく、何もかも振り出しに戻ってしまったかのような、そんな有様で。
それこそがミャコの置かれている状況についての正しい答え、だったんだけど。
その時のミャコは、当然そんな都合のいい解釈なんてできるはずもなくて。

「探さなくっちゃ」
叶わなかったレイアたちの願い、その結晶。
それは、それぞれに世界にひとつしかないものだから、価値は物凄

いんだと思う。
だけど逆に、その結晶はこの世界を壊してしまいかねない危険なものでもある。
どこにあるのか。
誰が持っていったのかも分からなかったけれど。
なんとしても取り返さなくちゃいけなかった。

味方はもう誰もいない。
周りはみんな敵。
一人ぼっちのミャコの行く先は、絶望という名の暗雲が立ち込めるようで。
それでもこうしてまだ生きている以上、ミャコは止まるわけにはいかなかった。
世界を救う神様として、この世界から離れてしまったアイラディア様を継ぐものとして、進み続けることがミャコの意味であり使命なのだと。
悲壮感すら湛えて、今一度自分自身を見つめ直した時。

「失礼するよ」
いきなりかかるはノックの音と、誰かの入ってくる気配。
「……っ！」
反射的に掛け布団の中に包まったミャコだったけれど。

「なんだ、いるじゃないか。だったら返事をしておくれよ、子猫ちゃん」
「……」
よくよく聞いてみるとそれは、クールに芝居がかった、懐かしさを覚えるナヴィの声で。
ミャコには、その向けられる声が信じられなかった。

ただ、丸まってることしかできなかった。

「もうお天道様も白けきっているよ？　目覚めのキスがご所望なら、顔を出してもらわないと」

「うにゃぁっ！？」

しかし声の主は、そんなミャコのことなんかお構いなしな言葉を発していて。

さらにあろうことか、掛け布団ごと持ち上げられ、言葉のやさしさとは裏腹に床に放り投げられる始末。

易々と相手の思い通りになるようなナヴィとは一味違うって自負してたミャコだったけれど。

相手の方が一枚上手だったらしい。

殺気も何もないそれになす術も無く転がされて、ついでに掛け布団まで引っぺがされて。

ぽかんとするミャコに対して向けられたのは……人好きのする朗らかに花咲く笑顔だった。

翠緑にきらめく短めの髪が、風もないのにきらきらと靡いて星を撒く。

その瞳は、本当にそこにガーネットでも潜ませているんじゃないかってくらい澄み切った朱色で。

それを一度目の当たりにしただけで、今まで張り詰めていた緊張の糸がふっとゆるんで、力が抜けてしまった。

この世界は悲しいって、ひとりぼっちだって、そんな事思ってるのはミャコだけなんじゃないのかなって、そんな錯覚にすら陥る。

何故ならば……それは忘れたくても忘れられない、だけどあり得ないはずの、知っている人の顔だったからだ。

———セイル・ガイアット。

地の根源、【ガイアット】の御名を冠するレイア。

見慣れていた深緑の貫頭衣ではなく、何故かエプロンドレスを身に

つけてはいたけど、その滲み出る高貴さみたいなものは、やっぱり彼女以外にありえなかった。

「ほら、なんて顔しているのさ。笑顔だよ笑顔。一日の始まりはすがすがしく行こうじゃないか」

目の前のセイルさんは、表情を変えぬままそう言って、手のひらを差し出してくる。

混乱気味のミャコはそれを、半ば無意識にままに手に取ってしまった。

翼あるものは、アイラディアの死神だと、ずっと恐れられて……触れる事を避けていたはずのそのぬくもり。

何故だか、拒む気持ちは湧いてこない。

「ありがとう」

自然と、つられるように笑顔。

「ふっ、礼なんていいさ。……それより、可愛い子猫ちゃん、きみは氷の姫君に会いに行くのではなかったのかい？　あまりのんびりしていると、日が暮れてしまうよ？」

少しだけ、困惑気味な顔。

もしかしたら、照れているのかもしれないけれど。

その後に続いた言葉に、今度こそミャコは驚きを隠せなかった。

「え　？氷の姫？　会いに行くって……」

反芻しかけて、言葉を失う。

確かにミャコは、風の祭壇で１１の命のキセキを集める命を受け、手始めに氷の根源の御名を冠するレイアに会いに行くつもりでいた。

その居場所も何も知らなかったミャコは、風の祭壇に一番近いヤーシロの街で、占い兼情報屋をしていたセイルさんに会い、その助言を受けた。

だから……そのことだけを考えれば、セイルさんの言葉におかしな

所はないんだろう。
ただ、それがもうとっくの昔に終わってしまったこと……過去のことでなければ。

「どうした子猫ちゃん。顔色が優れないようだが」
「えっ？　あ……うん、なんでもないよ？」
しばらく自失していたミャコを気遣うようなセイルさんの言葉。
ミャコはそれに慌てて繕うように、そう言って見せながら。
もはや際限なく膨らみ始めた混乱と、内心で戦っていた。
いや、改めて気付かされたといってもいい。

全てが終わった過去のこと。
それは、今目の前にいるセイルさん自身も含まれる。
この町……おそらくヤーシロの町だと思うけど。
ここに来たとき、ミャコはセイルさんが地の根源の御名を冠するレイアだとは知らなかった。
でも今は違う。
そんことを、ちゃんとミャコは知っている。
だって……セイルさんの命のキセキを奪ったのは、ミャコなのだから。
セイルさんは、アイラディアの死神の犠牲者のひとり、だったのだから。

「……」
ミャコは混乱の渦から抜け出せないまま、セイルさんを見つめる。
「どうかしたのかい？　私の顔に見とれるのは一向に構わないのだけども」
「えっ？　あ、それはそのっ」
つまりこれは一体どういうことなのかと考えをまとめようとして。

セイルさんにそう言われて、はっと我に返る。
いつに間にやらお互いの顔の位置が随分と近かった。
そう、まさしく洒落にならないくらいの距離に。

「ああ、みなまで言わなくてもいいよ。全部分かってる。私が欲しいのだろう？　ほら、いくらでも奪ってくれたまえ」
本気なのか冗談なのか。
真意の読めないからかうような表情。キスを待つ仕草。

「うにやぁっ！？　だ、だだ駄目だって！　しかもナヴィ同士でっ！」
思い出した。彼女はこういう人だったっけ。
だけど今思えば冗談交じりのその行為が冗談にならないってことを、セイルさんは気付いていたのかもしれない、なんて思う。
ミャコの本当の正体を知っていたのかもしれないって。

「ナヴィ同士だからいいんじゃないか」
「だ、だから駄目だって！」
「ふふ、恥ずかしがりやさんだね」
前言撤回。
やっぱりセイルさんは素でこういう人なんだろう。
ミャコもどっちかと言えば可愛いナヴィには弱い方だけど。
なんというか直接的すぎるというか、とにかくたちが悪いのがセイルさんその人で。

「戦略的撤退！」
ミャコは条件反射でその場から逃げ出していた。
「残念、こっちはいつでも準備ができているからね」
追いすがることもなく、余裕な捨て台詞なんか吐いちゃってるとこなんか、余計に油断ならないものを感じさせたけど。

ミャコがセイルさんから逃げ……部屋を飛び出したのには、ちゃんと訳がある。

ミャコが今置かれている状況。
とりあえず一人になって。
何がどうなってるのか、把握しなくちゃって……そう思ったからだ。

4、金色のひつじの一喝、天に届く

結論から言うと、部屋を飛び出してすぐに、ミャコは今ここにいる状況というものを思い知らされた。

目が覚めて、最初に思い浮かんだ都合のいいことこそが、やっぱり今のミャコが置かれている状況に一番近かったんだろう。
そう、ミャコはすでに終わってしまったはずのことを、繰り返しているようなのだ。

何故ならば。
宿屋兼酒場らしい建物の玄関口。
人のいない番台に立てかけてあった日めくりのカレンダー。
そこに、『ガイアットの月、３日』と書かれており、その日付が。
ミャコ自身が旅に出た日から数日しか経っていなかったからだ。

――――どうしてこんなことになってしまったのだろう？

――――もう一度、大切な仲間で友達だったみんなに、会いたかった。

まさしく、ミャコの本当に願っていたことが叶ってしまったかのように。
こんな、ミャコにだけ都合がいいみたいな奇跡が起こった理由。
それは当然ミャコには分かりようもなかった。
アイラディア様が、失敗したミャコにご慈悲をくださったのかもしれないし、何かほかの理由があるのかもしれない。
その理由が分からないのは、少し怖いことでもあったけれど。

もう一度やり直せる。
しかも失敗したこれからの記憶を持ったままで。
そう考えるだけで、ミャコの心は躍って。
浮かれているうちに……今度こそ失敗はできないといった重圧に気付かされる。

臆病風。
そうミャコを称したのは誰だったか。
そのことで、少し冷静になったミャコは。
外出用のケープを羽織り、フードをかぶって、建物の外に出ることにした。
それらには、涙滴の紋様が刻まれている。
水の根源【ウルガヴ】を示し、水の国の王へ従うナヴィであることを示すそれらは。
風のレイアであるミャコにとっては正体を隠すために重宝するものだった。
ナヴィに寛容な唯一の大国である水の国、その国に従じるナヴィだと分かれば、そうそう街中で命を狙われることはないからだ。
何より、ミャコ自身の特徴でもある金ぶちふさふさの耳を隠すにはもってこいのはず……だったんだけど。

「……なんで？」
宿屋兼酒場を出てすぐ。
ミャコは呆けたような声をあげていた。
ガイアットの月特有の、大地の香りがするうららかな日差し。
その日差しから身を守るようにミャコと同じウルガヴの紋様が入った様々な服を身につけたナヴィたちが何人も目に入ってくる。

朗らかに買い物に興じるもの。
遠目に見える公園広場でおしゃべりしているもの。
もの珍しげに通りを歩く旅人たち。
それは、やり直しができると今さっきまで浮かれ気を引き締めていたミャコを打ちのめすには、充分な光景だった。

目の前に広がるそれは、思い出せる今までと同じようでいて、全く異なる。
まるで流行りもののように身につけているウルガヴの紋様入りの服もそうだけど。
それよりもミャコは、町中でなんの警戒もなさそうに歩くナヴィたちに驚きを隠せなかった。

それは、ミャコがかつてこの風の祭壇に最も近い町であるヤーシロを訪れた時にはまず見られることの無かった光景だからだ。
ナヴィは、みんなコドゥのことを恐れ、願い叶えると決めたコドゥ以外には姿を見せないのが普通のはずだったのに。
よくよく見てみれば、天下の往来でコドゥと談笑しているものも数多くいる。

それは、ミャコが理想として思い描いていた光景には間違いはなかったけれど。
その時ミャコが感じたのは、漠然とした不安だった。
やり直せると思ったのは気のせいで、ここはミャコの知らない、ミャコが神様になって救わなければならない世界とは別の世界なのかもしれない、と。

「キミ、一人？　オレらとあそばない？」

そんな風に考えて、ぼうっと立ち尽くしていたのがいけなかったんだろう。
声をかけられ、顔を上げれば。
そこにはニヤニヤと不快で不躾な笑顔を貼り付けたふたりのコドゥの姿があった。

「君みたいなカワイイコが一人でいると、ワルイヤツに命のキセキとられちゃうよ？」
「……っ」
命のキセキ。
それを内に秘めた特別なナヴィ。
レイアの名を冠する世界で１２人しかいないと言われるもの。
どうしてミャコがそのひとりだと、気付かれてしまったのだろう？
それが分からなかったから、コドゥはナヴィを手当たり次第傷つけ、その命を狙っていたはずなのに。

でもそれは。
逆に言えば何の罪も無いナヴィが傷つくことがなくてるってことで。
ミャコにとってそれは、願ったり叶ったりなことではある。

「オレはダイロン。キミ、なんて言うの？　まさか御名とか、持ってたりして？」
「俺はイスルだよ。　つーかさ、実にけしからん体つきだね、うむ」
「……」
見下すような笑顔は変わらず、にじり寄ってくるふたりのコドゥ。
ミャコにとっては全くおんなじに見える、そんな顔。
それが怖くて、二人から離れるように一歩下がる。

思わず周りを見回す。
僅かに感じる……実は宿の外に出たときから感じていたいつくもの

出所の分からない視線。
その出所を探そうとしたけど、ミャコのほうに向けられた視線はひとつもなく。
それに、ミャコの中の不安が増大して。
人数が増える前に逃げるべきか戦うべきか。
ミャコの思考にそんな選択肢がよぎった、その瞬間。

ジリリリリンッ！
突然、金属を打ち鳴らす音が響いた。

「こらぁ！　そこのチンピラコドゥどもーっ！　何してるっ！！」
甲高い鈴鳴るようなナヴィの声。
ミャコや二人のコドゥだけでなく、周りの視線までさらに強まってる気がして。
ミャコはなんだかますます落ち着かなくなっていたけれど。

「おまえらまさかウルガヴ法を知らない悪党か！　ナヴィを害するコドゥは牢屋行きだぞ！」
そう叫ぶのは、何だか奇妙なナヴィの二人組だった。
いや、実際しゃべっているのはひとりなんだけど、うーん、なんて言えばいいんだろ？
あ、そう、さかしまの腹話術師って表現が一番しっくりくるかもしれない。

その二人組、喋っていないほうのナヴィは、ナヴィにしては珍しい、ウェーヴのかかった黒色の長い髪と、黒真珠を思わせる瞳の持ち主だった。
今までたくさんのナヴィに会ってきたけど、その誰にも当てはまらない、初めて見る子だ。
凄く目立つ容姿をしているのに、どこか気配が希薄というか、影の

ような雰囲気があるのは、その白蝋めいた顔に、表情が乏しいからなんだろう。
まるで人形のような、でも一度見たら忘れられないような、どこかで目にしたような惹き付ける何かを持ったナヴィだ。

もうひとりは、その黒髪の人形めいたナヴィの肩に腰掛けられてしまうくらい小さなナヴィ？だった。
どうして疑問符がつくのかと言うと、金色フルアーマーを身にまとい、大仰な鉄仮面でその顔が分からなかったからだ。

ナヴィだと咄嗟に思ったのは、その囀る小鳥のような高く細いナヴィ特有の声せいで。
そのすべてが金色のミニサイズのフルアーマーには、まるで何かの目のように陽光を反射する円形の筒にはめ込まれた、鏡のようなものがついている。
鏡は暗く透き通っていて、見ようによってはその中に重なる円の紋様があるようにも見えて。
何だか見つめられているようで落ち着かないそれに、ミャコは見覚えがなかった。
たぶん、根源を示す紋様とは別物なんだろうけど……。

「な、なんだよいきなりっ！」
「オレたちは声かけただけだぞっ！」
甲高く通る小さなナヴィ？の言葉に、うろたえ反論する二人のコドゥ。

「ウソつけっ！　そのコ泣きそうじゃないかっ！」
「え？　あっ……」
怒り心頭な様子のフルアーマー。
黒髪のナヴィは、何も語らない。

ただ、責めるようにコドゥたちを見つめている。
だけど、その言葉に一番びっくりしたのはミャコだった。
見かけの割りに泣き虫。
それもよく言われたことで。
ミャコは何だか情けないやら恥ずかしいやらで、慌てて顔を伏せた。

「ちょっ、待てって！　本当にオレたちは何もっ！」
「そうだよ！　ただ声をかけただけだって！」
すると、ますます焦った声を出す二人のコドゥ。
何だかその言葉は真に迫ってて。
もしかしたら本当に悪気は無かったのかな、なんて思い始めたとき。
交わす言葉を持ち合わせていないようにも見えた黒髪のナヴィが、
そこで初めて口を開いた。

「……それが嘘でないなら今のうちにさっさと立ち去ることだな。
ダイロンとイスルと言ったか？　君達が悪役として舞台に上がりたい、と言うなら話は別だが」
思ってもみないほどに饒舌。
見た目にそぐわない、コドゥのような言葉遣い。
そしてあからさまに、コドゥを挑発するかのような……ミャコにはちょっとよく分からない部分もある、そんな台詞。
ミャコはそれに驚きもしたけど、同時に焦った。

アイラディアの世界でナヴィがコドゥに逆らうのは普通じゃない。
確かに力はナヴィのほうが圧倒的ではあるけれど。
逆らうものではなく、従うものであることがナヴィにとっての通念だからだ。
だけどそれは、それぞれの根源のもとに命のキセキを持つ、普通じゃないナヴィ……レイアには当てはまらない。
逆に言えばコドゥにただ従うことを良しとしない我侭なナヴィがレ

イアに選ばれ生まれてくるのかもしれないけれど。
「お、おい、滅多なことを言うなよ！　くっ、くそっ。逃げるぞっ！」
「違います、俺らは違いますよーっ！」
ミャコがそんな事を考えているうちに、二人のコドゥは慌てて逃げ出していく。
まるで何かに怯えるように。
自分たちは無実だと、アイラディア様に訴えかけるみたいに。
一触即発なまずい事態かと思いきや、あっさりと引いたコドゥたちに拍子抜け半分、安堵半分でその背を見つめていると、強烈な視線に晒される感覚。

「な、何？」
内心びくびくしながらその視線の先、奇妙な二人組に顔を向けると。
ぼそっと独り言を言うみたいに、黒髪のナヴィの呟きが届いてきた。

「……猫耳巨乳か。ベタだな」
「えっ……？」
たぶん、ミャコと会話するつもりじゃなかったんだろうけど……その言葉の意味を理解するのに、しばらく時間がかかって。
その何もかも見透かすような目が、どこに向いているかに気付いて。

「わわわっ、こ、これは違うのっ！」
ミャコは慌ててフードからはみ出ていた耳を隠す。
「……」
「アキ様、ここはそっちかよ！　ってツッコむシーンじゃないの？」
小さなフルアーマーのナヴィは、手刀を振り下ろすふりをしながら、黒髪のナヴィの沈黙を代弁するかのようにそんな事を言う。
「……」

しかし、黒髪のナヴィは答えない。
まるでもう語ることはないとでも言わんばかりに。
まるで時間でも止まったしまったみたいに。
ただ、ミャコのことを見つめている。

……アキ。
やっぱり聞いた事の無い名前だった。
この世界は今までミャコがいた世界と違う。
別にやり直しをしているわけじゃない。
そう、はっきり宣言されたような、そんな気もしたけれど。

「あのっ、その……ありがと、助けてくれて」
あのまま二人が来なければ騒ぎになっていた可能性は高かった。
下手に抵抗していたら、ミャコがレイアの一人だということが町中に広がっていたかもしれない。
でも、あのコドゥがミャコの正体を知っていたのは確かなようだったし、それがあのコドゥたちだけとも限らない。
いろいろな事が不確定で断定はできないけれど、一刻も早くこの場所を、この町を離れたほうがいい気がして……ミャコはひとつ頭を下げるとその場を立ち去ろうとする。

「ちょっとちょっと！　せっかく助けてあげたのにありがとうではいそうですかで終わるわけないでしょっ、ここは払うもん払ってもわなぎゃわわぁっ！？　いたい、いたいですってアキ様！　ピーナッツになっちゃう！」
言われてみればそりゃそうだよねと振り返ると、アキと呼ばれたナヴィの細い指が、後ろから鉄仮面のこめかみ部分をぎゅっとしぼっていて。
「わかった、わかったからはーなーしーてーっ！」

あっさりと白旗をあげる小さなナヴィ。
やはりというかなんというか、主導権はアキと呼ばれたナヴィにあるらしい。
そこでようやく手を離し、解放されたフルアーマーのナヴィは、ぜえぜえと息をつき、深呼吸して息を整えてから再び顔をあげる。
相変わらず、その表情は見えなかったけれど。

「えっと、あらためまして……お礼の代わりってわけでもないんだけど、この近くにナヴィ専用の酒場兼宿屋があるって話を聞いたんだけど知らない？」
「ナヴィ専用？　それってもしかしてここかな？　一応アタイが泊まってるとこなんだけど」
振り返って示すのは、セイルさんのいる酒場兼宿屋。
言われてみれば、ここの酒場には昼間からたむろしてて当たり前のはずのコドゥたちの姿はなく、人っ子一人いなかった記憶がある。

ここがナヴィのためだけの宿屋だというのなら、閑古鳥だというのも納得のいくことだろう。
何せ、ナヴィだけで旅するなんてこと、それこそ普通じゃないからだ。
旅をするなら、必ずその従うべきコドゥがいるはずだった。
まぁ、この世界がミャコの知っているものと同じかどうかは、最早確証は持てないんだけど。
ミャコとしては、それ以前に目が覚めたらここにいたわけで。
実のところ、泊り客かどうかすら怪しかった。

と、ミャコと同じようにその建物を見つめていた黒い髪のナヴィは、ミャコの言葉を聞き終えるが早く、くるっとミャコに向き直り、その手を差し出してきた。

「え？」
いきなりの行動にわけが分からず戸惑っていると、躊躇なくその手が近付いて、ミャコの手に触れた。
見た目以上に脆く柔らかく、そしてあたたかい手のひら。
うろたえる間もなく、ぐっと引っ張られて。
気付けばミャコたちは、連れ立って宿屋の中へと入っていた……。

5、新たな世界で、臆病風が目指すもの

「おや、子猫ちゃん。帰って来たかと思えばお客さんを連れてきてくれたのかい？　ほほう、これはまたべっぴんさんだ」
半ば強制的に宿屋兼酒場へと舞い戻ると。
カウンターにいたセイルさんが、感嘆の声をあげて近寄ってくる。
そして、不躾なくらいじっと、黒髪のナヴィを見つめる。
黒い髪のナヴィってなかなかいないから、気持ちは分からなくもないけれど。
見られることに慣れているのか、黒髪のナヴィは負けじとセイルさんのことを見つめ返していた。

そして、なにか言おうと口を開きかけて。
「あなたがここの店主？　部屋のほうは空いてるかしら？　一泊したいんだけど」
それを遮るかのように、フルアーマーのナヴィが口をはさんだ。
甘く高く、軽快に喋りだすフルアーマーに、眉を上げるセイルさん。
すぐにセイルさんの興味がその小さなナヴィに移った。

「ああ、もちろんだよ。うちはナヴィ専用の宿屋だからね。むしろこちらからお願いしたいくらいだ」
ミャコほど驚いた様子もなく、そう言って笑ってみせる。
そして、そのやり取りで確信したのは、どうやらここの世界でセイルさんは、ミャコの知る情報屋ではなく、ここを経営していること、だった。
やっぱりミャコの知るものとは違う世界なのかなとは思うけれど。
そこかしこに前の世界の面影があって、何だかミャコは落ち着かなかった。

「へぇ、どうりでコドゥくさくないわけだね。人が入ってるって感じでもないけど。……ちなみに、おいくら？」
「お一人様一部屋、１００Ｂ（バイテ）でどうかな？」
「ええっ！？　た、高くない？　１００Ｂって、普通の宿の１０倍じゃん！」
セイルさんの言葉に、誰よりも早く反応したのはミャコ自身だった。
「ん？　一体何を驚いているんだい？昨日説明したばかりだろう？私の愛というサービスつきだと。それで納得してくれたじゃないか」
初耳と言うか、目が覚めたらこの宿のベッドの上だったわけで。
お金を払った記憶も、その説明とやらを聞いて納得した記憶もミャコにはなかった。
その場に流れる、なんとも言えない空気。

「や、ほら。だって、１０倍でしょ？　よくよく考えてみればやっぱり高いなって？」
その時ミャコは、何も知らない自分のことを知られてはいけないような、そんな気分になっていて。
だからそう言って誤魔化し笑い。
セイルさんは、そんなミャコを訝しげというか、ちょっと心配そうに見ていたけれど。

「……ウルガヴ法が世界に広まって一般化したとはいえ、ばれなきゃ法を破ってもいいって考える輩も少なくない。そもそも法なんて関係ないなんて悪人どもも、町の外に出てしまえばドリードどもと変わらない比率でお目にかかるだろう。
自然とともに生きてきたナヴィであるから、空の下で眠りにつくなんて当たり前、なんて観念は捨てるべきなんだよ。ウルガヴ法という頼もしい味方ができたとはいえ、ナヴィにとってこの世界が危険である事には変わりないのだからね」

【ドリード】。
いつの頃からか現れた、コドゥやナヴィを害する存在。
その性格は野卑で凶暴で、意思疎通はできない。
その数も種類も多く、ミャコも全ては知らないけれど。
戦う術を持っているナヴィならともかく、コドゥにとっては危険な存在だった。

きっと、ミャコと同じように高すぎるかなってセイルさん自身が思っている部分もあったんだろう。
新たなお客さんのため、とばかりにこの宿が高いわけを教えてくれる。
ウルガヴ法。
それは、ちょっと前に聞いたばかりの言葉だった。
それも、前の世界にはなかったものだったけど、この世界では知らない人はいないのかもしれない。
知ったかぶりしてるのもまずいだろうから、そのうち何かで調べとく必要があるかも……なんて考えていると。

「つまり？　この宿屋にはそういった危険がないってこと？」
「ああ、そうさ。この宿屋に泊まっている限りは、君たちに快適な就寝を約束しよう。それが、私の愛だ」
フルアーマーのナヴィの問いかけに、歌うようにそう宣言するセイルさん。
なるほど、愛ってそういうことだったんだ。
たぶん、セイルさんの力で、この宿を守ってるってことなんだろう。
うーん、まぁそれなら、安くはないのかな？
身の危険の心配をせずに眠れるって言うのは価値のあることだと思うしね。

「……ま、仕方ないか。んじゃ１００Ｂね」
そこまで話を聞いて、ミャコと同じように、納得したらしいフルアーマーのナヴィがそう言うと、黒髪のナヴィがお金を支払う。
そう、宣言通り、一人分の宿賃だけを。

「すまないが、お一人様一部屋１００Ｂなんだ」
「ん？　１００Ｂあるでしょ？」
「いや、しかし、君たちは二人なんだから……」
「ああ、そう言うこと。大丈夫大丈夫。ワタシはアキ様の肩当てだから、人数には入れなくてもいいんだよ。ほら、一心同体ってヤツ？」
「肩当て、だったんだ？」
変なナヴィだと思ってたら、そもそもナヴィでもなかったらしい。
……って、いくらなんでもそれはないでしょ。
確かに随分小さな子だなぁとは思ってたけど、ちゃんと二人には別個の意思があるし、何より喋りが軽快だしね。
まぁ、身体が小さいぶん確かにスペースは取らなさそうな気はしなくもないが。
あまりの宿賃の高さに対しての苦しい言い訳だと取られてもおかしくなかった。
もっとも、二人してその表情が分からないからその真意のところは掴めなかったけれど。
「……そうか、ならお一人様で」
元々取る気はなかったのか、あまりに堂々と値切るものだから感心したのか、あっさりと頷くセイルさんがいて……。

「それじゃ、改めて自己紹介といきましょうかね！」
流されるまま流されて、気付けばミャコは二人にあてがわれた部屋にまでやってきてしまっていた。

流されるままでいたのは、なんだか先の見えない自分自身が進むべき道を提示してくれるかもって、そんな予感めいたものもあったからなんだけど。

「まずはワタシね。ワタシはルーシァ。今はアキ様の『肩当て』をやってまっす！」

「……っ」

肩当てだと言い張るフルアーマーのナヴィ、ミャコの知らないはずのナヴィ。

そのはずだったのに、紡ぎ出されたその名を聞いて、ミャコは思わず言葉を失ってしまった。

何故ならその名前、ルーシァという名前が、ミャコの知っている名前だったからだ。

忘れたくても忘れられない名前のひとつだったからだ。

【金】の根源の御名（ヴルック）を冠するレイア。

翼あるものによってその命のキセキを奪われてしまったナヴィと、同じ名前だったからだ。

偶然、たまたま同じ名前のナヴィ。

きっとそうだと無理矢理納得させてる自分がそこにいる。

何故なら、その姿も声も、ミャコの覚えているものとは全く違うのは確かだったからだ。

ミャコは内心の動揺をなんとか抑えつつ、続きを促す。

「で、こちらがアキ様だよ。まぁ、さっきから名前呼んでたからもう知ってると思うけど」

「……」

ルーシァの言葉に、黒髪のナヴィ……アキは頷くだけだった。

ただ、ミャコの内心を見透かすみたいに、その黒い瞳で見つめてい

る。
しばらく奇妙なにらめっこが続いたけれど。
よくよく考えてみれば、今度はミャコの番、なんだろう。
ミャコはちょっと慌てて自己紹介をする。

「えっと、ミャコです。よろしく」
そうして実際自己紹介して気付いたことは、実はお互いに名を名乗ったただけで相手のことはほとんど分かってないじゃん、ってことだった。
ナヴィにとってそれは、自分の命を守るために必要なことと言えばそうなんだろうけど。
自分を棚に上げてちょっとだけ寂しい気持ちになる。
たぶんそれは、前の世界で見て見ぬふりをしていた感情で。

「それで……話っていうのは？」
気付けばミャコは、そんな事を聞いていた。
すると、ルーシァがそう言えばそうだったとばかりに頷いて、それに答えてくれる。
「あ、そうそう。ミャコさんてこれからチャウスの山に向かったりする？」
「え？　う、うん。そのつもりだけど……」
一瞬、何で分かったのかなと思ったけれど。
ここヤーシロの町は、チャウスの山へ向かうために立ち寄る必要のある場所にあることを思い出し、頷いた。

『氷の姫』に会いに行く。
ミャコが目覚めたとき、セイルさんは確かにそう言った。
氷の姫……氷の根源の御名を冠するレイア。
ミャコにとって、一番の友達だった……えっちゃん。
繰り返していようが別世界だろうが構わない。

もう一度会えるのなら、すぐにでも会いたかった。

前の世界でえっちゃんは、その身を守るためにチャウスの山のてっぺんにある、
レッキーノ氷山の奥で氷付けになって眠っていたから。
もしかしたこの世界にも、えっちゃんはそこにいるかもしれない。
だからミャコは、ルーシァの言う通り、これからチャウスの山に向かうつもりでいたのは確かなんだけど。

「もしかして、一人で行くつもり？」
「う、うん。そのつもりだったけど」
「やっぱりね、引き止めて正解だったよ。ダメダメ、危ないって！
このまま山に向かったら、【翼あるもの】に遭遇するかもしれないんだから」
「えっ……？」
ミャコは、ルーシァの言っている言葉の意味が一瞬理解できなかった。

翼あるもの……ミャコは確かにここにいるのに、一体どういうことなのだろうかと。
もしかしたら、ミャコには全く関係ない別人のことかもしれないけど、内心穏やかじゃなかった。

「えっと、その『翼あるもの』って言うのは……？」
自分がそうだとはとてもじゃないけど言えなかったミャコは、そんな内心の動揺を隠せないままルーシァにそう問いかける。

「ええっ！？ミャコさん、知らないの？　あー、なんかそんな気はしてたんだよね。なんかミャコさんて世間知らずっぽいっていうか……あ、でも、噂くらいは聞いたことあるでしょ？　ナヴィの大切

なものを盗んでっちゃう死神さんなんだけど……その人がね、今チャウスの山にいるらしいんだ。
どんな人なのかは分からないけど、もしミャコさんがチャウスの山に行くんなら、一緒にどうかなって思って」
すると、ルーシァは火でもついたみたいにそうまくし立てた。
つまりは、危なっかしいミャコが目に止まり、親切で声をかけてくれたのだろう。
唯一難点を挙げるとすれば、ミャコがその【翼あるもの】かもしれないってことを全く考えてなさそうなところだけど。

「それは……その、むしろこっちからお願いしたいくらいだけど、いくつか聞いてもいい？」
会話をしているうちに、ミャコの中にいくつもの疑問が沸いてくる。
「ん？　何かな、何かな」
「あのさ、なんでその……ルーシァたちは、チャウスの山に『翼あるもの』がいるって知ってるの？」
しかも、その正体すら分からないというのに。
そう思って問いかけると、すぐにルーシァの答えを返してきた。

「それはもちろん！　アキ様の力だよ。アキ様はね、未来を知ることのできる予言の力を持ってるんだ」
まるで自分のことのように自慢げにルーシァは言う。
それは本当のことだからなのか、アキは相変わらずたんまりのままだったけれど。
未来を知る力……それは、ミャコが初めて聞く類のものだった。
ミャコの知る限りでは、そんな力を使うナヴィに会ったことはない。
もしかして、アキはミャコが会うことのできなかった【時】のレイアなのかもしれない。
と、そんな事を考えて、アキのことを見つめていると。

何を思ったのか、不意にアキが口を開いた。

「ミャコは、どうしてチャウスの山に登る？　そこはドリードも多い。野盗もいる。長く険しい道と聞くが」

アキは多分、無口というのとは少し毛色が違うのだろう。

その、時に饒舌な様を見ていると、必要なことだけ喋るタイプなんだろうなって気付かされる。

そしてそれは、ミャコにとっても重要なことだった。

初めて登ったときは、命のキセキを集めなきゃいけないって、そんな強迫観念みたいなものが確かにあった。

でも、今はどうだろう。

繰り返しているのか、全く別のものなのか。

もし、この世界が繰り返しているのならば、二度とあんな過ちを犯したくないって思う。

悲しいだけの結末は、嫌だって強く思っていて。

「会いたい友達がいるんだ。だからかな」

ミャコが口にしたのは、それだけだった。

それだけで充分だった。

そのほかの面倒な色々なことは取りあえず置いておいて、ミャコはただ本音を口にする。

「そうか。……それなら、私たちの登る理由は、そんな君を助けることにしておくよ」

「あ……」

返ってきたのは、初めて見るアキの笑顔と、たった今山に登る理由ができたみたいな、そんなアキの言葉だった。

「手伝うのは構わないけどさ。ワタシたちの本来の目的も忘れないでくださいよ。アキ様」

多分それは、アキなりの冗句だったんだろう。
「あなたたちの目的って？」
遅ればせながらそれに気付き、ミャコは何気なくそう問いかけて。
「それはもちろん、【翼あるもの】を探し出してとっ捕まえて……自分のしたことに対して後悔させてやるに決まってるじゃないか？
ねえ、アキ様？」
「……っ」
「……」
アキを見上げながら発せられたルーシァの言葉は、さっそくミャコを後悔させるのに充分な威力を持っていた。
言葉を失うミャコ。
アキはそれに頷くことも言葉も返すこともない代わりに、ただ困ったような顔をしていて……。
たぶんきっと、この世界だって甘くない。
自分がそうだと言えない臆病さをただ噛み締めて。
そんな感じでミャコは。
新しい世界の長い長い一日を終えたのだった……。

6、臆病風、心友に思いを馳せる

次の日。
ミャコたちはセイルさんに見送られて、ヤーシロの町を後にした。
結局ミャコは、セイルさんが命のキセキを持つ特別なナビィ……レイアであることに触れなかった。
そのわけとしては、かつてミャコが出会った情報屋のセイルさんと、ナヴィのために宿屋を経営しているセイルさんが別人の可能性もあるって思ったせいもあるけれど。

一番の理由は、ミャコ自身怖かったからなんだと思う。
過程はどうあれ、ミャコはセイルさんの命のキセキを奪ったことに変わりはない。

それは悲しくて怖いこと。
できるのなら二度と体験したくなかった。
それが事態を先延ばしにしているだけだとしても、やっぱりミャコはセイルさんに何も言うことができなかったんだ。
別れ間際には、そんな鬱屈した思いを抱えて悶々としていたミャコのことを心配げな目でセイルさんが見ているのが分かって、余計に申し訳なかったけれど。
言い訳をさせてもらえれば、多分今のミャコには考える時間が必要だったんだと思う。
同じ悲劇を繰り返さないようにするには……どうすればいいのかって。

永遠に溶けることがないレッキーノ氷山を頂に構える霊峰チャウス。
アイラディアの世界で二番目に高い場所。
風の祭壇からも真っ白な雪をかぶった二又の頂がよく見えて。
旅に出たら真っ先に向かおうと決めていた場所だった。
かつて、ミャコが一度来たことのある場所。
そう確信させるほどに、ミャコ目の前に広がる景色は変わらない。

「それでそれで？ミャコさんのお友達ってどこにいるの？」
と、山のふもとではまたその勢いを失わない陽射しの中。
チャウスの山道に入り、最初の分岐ぶつかったところで、ルーシァがそんな事を聞いてきた。
アキは相も変わらずのだんまり。

相反するふたり。
共通するのは、暑そうだなっていうことくらいだった。
ルーシァは自分のことを肩当てだと言い張り、その無骨なフルアーマーを脱ぐこともせず、アキの肩に張り付いているし。
今は邪魔にならぬよう後ろにくくってあるアキの珍しい黒髪は、漏れずに陽射しの熱を溜め込んでいそうで、見てるこっちが暑くなる。

「取り敢えず頂上ね。道は分かってるから、ついてきてもらっていい？」
「そりゃもちろん。そのために一緒してるわけだし、そもそもワタシたちの方は行き当たりばったりだからね。何せ翼あるものがチャウスの山に現れるって情報しかないわけだし、どこにいても一緒って言えば一緒だから。後は運任せだなー。
まぁ、道中ばったり出くわしてラッキーなんて話はうますぎるかなぁとは思うけどね」
弾丸のようにまくし立てるルーシァ。

話好きと言うかなんというか、喋ってなければ死んでしまうんじゃないかなってくらい舌好調だった。
もしかしたら、あまり口を開かないアキのぶんまでって意味合いもあるのかもしれないけど。

「……」
ルーシァの矢継ぎ早の語りを背景にじっとミャコを見つめてくるアキの視線がなんだかむず痒かった。
それは多分、翼あるものってミャコのことじゃないのかなって、後ろめたいせいもあったんだろう。
「そ、そっか。それじゃあここは右ね。左の道でも頂上へ行けなくはないんだけど、日陰になるような場所もないし、何しろ遠回りだから」
ミャコはそんな自分を誤魔化すようにしてふたりを促し、歩き出す。

言葉の通り右手に折れると……すぐに木陰のちらつく並木の道に出た。
今この時期は、匂いたつような深い緑一色の葉が踊ってるけど、その葉は、時期によって明確にその色を変える。
前に来たときも、全く同じ色だったから、変わっていないことが少し残念に思えるけれど。
やっぱりここも見慣れた道で。
左手に広がる陽光きらめく湖のせいか、うって変わって涼しい道をミャコたちは進んだ。

「やっぱりミャコさんはこの辺りに詳しいの？」
「う、うん。まぁ、そうかな」
だといいなと希望も交えつつ、ミャコは頷く。
「ま、友達に会いに行くってんだからそりゃそうだよね。……とこ

ろで、その友達っていうのは？
聞いてもいい？　もしかしてもしかして、ミャコさんが心に決めたたった一人のコドゥだったりしちゃうのかな？」
影落とす面差しのせいでその表情は分からなかったけれど、何だか楽しげなルーシァ。
「こ、コドゥ！？　ま、まさか！　違うわよっ、ナヴィに決まってるでしょ。っていうかコドゥにそんな感情抱くわけないって」
友達って呼ぶことすら無理。
ルーシァの言葉にムキになってそう言い返すけど、言ってるそばからその言葉がミャコの心に痛く響く。
「……決まってる、そんなわけがない。そう思ってるうちは何も変わらない。悲劇を繰り返すだけだ」
と、そこにかぶせるように、唐突にアキが口を開いた。
アキが口を開いたってことは、きっとそれが必要だと思ったからなんだろうけど。

「アキは……コドゥの味方なの？」
見て見ぬふりをしていた図星を指されたような気がして。
気付けばミャコはそう聞いていた。
それに、しばらく考え込むような仕草を見せていたアキだったけれど。

「……どちらとも言えないだろうな。それは、ナヴィだろうがコドゥだろうが変わらない。私はこうして面と向かって判断することにしているからだ」
返ってきたその言葉に、ミャコはそれ以上反論する術を持ち得なかった。
コドゥだって悪人ばかりじゃない。
例えば、水の国の王様などは尊敬に値するひとだし、逆にナヴィの中にだってどうしようもない悪い奴がいる。

理屈では分かっているんだけど……。
それでもその言葉をなかなか受け入れられないのは、やっぱりミャコが臆病だからなのかもしれなかった。

「一応ナヴィってヤツはコドゥに従順で献身的ってのが神様の建前……じゃなかった言い分なんだから、たとえそう思ってなくても上手く振舞うのが、ナヴィが生きていくためのコツでしょ？　まぁ、正直なのは美徳だと思うけど、あまりあからさまな態度は取らないほうがいいんじゃない？
露骨すぎると、なにかあるって疑われるかもよ？　ほら、さっき町で会ったコドゥみたいにさ」
「う……それは、そうかも」
ミャコは、昨日のいやなことを思い出して、憂鬱な気分になったけど。
同時に目からウロコが落ちる思いだった。
どうしてミャコがレイアの一人だと気付いたのかなってずっと悩んでいたけど、それは単純なことだったんだ。

別に、彼らはそれに気付いたわけじゃなくて。
ルーシァの言う通り、いかにも何かあるって態度をとってたから勘繰られたんだ。
ようは、からかわれていたのだろう。
今の今までそんなことにも気付けなかった自分が凄く恥ずかしかった。

「ま、そう言う計算とかできなさそうなタイプのほうがモテるんだろうけどね」
「そ、それはイヤだよっ」
「だからそう言う態度がダメなんだって……」
人を襲うような危険なドリード出るところなのに、まるで緊張感の

ない会話。
旅の連れの影響なのか、世界が違うからなのか、町でも外でも常に気を張っていた……いろいろな意味で危うかった自分は、もうそこにはいなかった。
それは、ルーシァの言葉じゃないけれど。
うまく生きていくためには、決して悪くないことのはずで。

そんな益体もない、でも意味のあるやり取りをしつつ歩みを進めていると。
しばらくして並木の道を抜け、一気に視界が開けた。
ごつごつした岩の増え始めた山道は、山の形に合わせるかのように急激に折れ、坂の角度がはね上がっているのが目で分かるくらい急な斜面になっている。

山登りは、ここからが本番だった。
ここからはドラゴンの住処で、下手に歩き回れば彼らの巣の真っ只中に飛び込んでしまうことだってある。
ドラゴンの巣をうまく避けることができたとして、頂上まで一日でつけるかどうかだろう。

「とりあえず、ドラゴンの巣は避けて通るようにするわね。……頂上付近に氷の一族が棲む村があるから、そこまで頑張りましょ」
「ええと、確かルフローズの村だったっけ。『氷の姫』がいるって有名なところだよね」
ミャコは、ルーシァの言葉に頷き、わずかに近付いてきた白い一対の頂を見据える。

『氷の姫』。
それは、アイラディア大陸……とくにチャウス山付近で暮らす人々の間では有名な話だった。

チャウスの山の頂上、レッキーノ氷山。
生き物を拒む極寒の地。
その一角に、七色の氷棺が埋め込まれていて。
誰の手にも触れられぬように眠り続ける一人のナヴィがいるのだと。

「それって本当なのかな。あの山のてっぺんに本当にいるの？　その氷のお姫様って」
別に、ルーシァの言葉を否定したいわけじゃないし、噂を信じてないわけじゃない。
ただミャコは確認したかったんだ。
ルーシァが言うように、今も氷の姫がちゃんとそこにいるのかどうかを。

ミャコの、前の世界での記憶では……もうそこには氷の姫はいないはずだった。
アイラディアの死神。
その毒牙にかかって彼女は……。

「……ミャコ？」
その瞬間、アキに名前を呼ばれて。
ミャコははっとなる。
胸の奥が軋み、熱を持っていて。
瞳から溢れる寸前だった涙を、慌てて拭う。
そして、苦笑いを浮かべた。

「どうかした、ミャコさん？」
表情は分からないけれど、やっぱり心配気なルーシァの声。
「ううん。なんでも。それより急ご？　あんまりもたもたしてると、日が暮れちゃう」

だけど今のミャコには、そう誤魔化してふたりに背を向けて、駆け出すことしかできなかったんだ……。

7、臆病風の金銭感覚

「あ、ちょっと止まって！」
それから、広まった急斜面の道を駆け上がって。
草も木も伸び放題の、ドラゴンの生息地帯に近づいてきたことを示す獣道に入った頃。
ミャコは、そう言うとともに後ろを振り返った。
すると、つかず離れずついてきていたアキが、とくに息を切らすこともなく立ち止まり、その澄んだ黒い瞳でじっとミャコを見てくる。
「なになに、どうかした？」
そして、ついさっき様子がおかしかったミャコのことはとりあえず考えないようにしてくれているのか……言葉を返してきたのはいつもアキの肩の上で悠々自適なルーシァだった。

「あ、うん、そのね。このまま登ってくとドラゴンの巣に直行しちゃうから……ついてきてくれる？」
ミャコは、そんな二人に感謝しつつ、脇にある道かどうかも分かりづらい細く狭い獣道を指差した。
その先は日の光の届かない、鬱蒼と茂る森の中へと入っていく道だ。ツタが絡まって張り巡らされていて、先が見えにくくなっている。

「ん？　まぁ、ついてくのはもちろんだけど……この道って下ってない？」
そう、そこはルーシァの言う通り、これまた急激に下っていく道だった。
それは一見、頂上を目指しているミャコたちにしてみれば遠回りにしか見えなかったけれど。

「うん。そうなんだけどね、これが意外に近道なんだよ」
ミャコはちょっと得意げにそう言う。
ミャコがそもそもこの道を知ったのは、何も知らずに真っ直ぐ上っていって、ドラゴンの巣に突っ込んで散々な目にあったおかげだった。
だからまぁ、実は自慢できることでもなんでもないんだけど。
近道は事実なわけだし、後は本当にこの先がミャコの知っているものと同じかどうかを祈るのみで。

しかし、そんな内心の不安は、杞憂に終わった。
道の曲がり具合や、生い茂る木々の配置まで。
鮮明にこうだったと思い出せるほど、同じだったからだ。

ミャコにとってもっとも都合がいいのは、ミャコが辿ってきたアイラディアの世界での人生ともいうべきものを、悔やんでも悔やみきれない結末を、やり直せることなんだろうけど。
そんな独りよがりなことが、現実に起こりえないだろうことは、ちゃんと分かっている。
だけど少なくとも、この世界はミャコの知るアイラディアの世界と根本では変わらない……そんな気がしていた。
どうしてミャコがこの世界に放り出されたのかは、分かりようもなかったけれど。

いい加減下っていくと、獣道で分かりづらくはあったけど、再び分岐の道に差し掛かった。
一つはそのままどこまでも下っていくような道。
そしてもうひとつは、きつい角度で先が見えない登りの道だ。
ミャコは、二人に目配せだけで左の道へと足を向ける。
突き出した岩壁を折れ、ますます傾斜の厳しくなった道を進むと。

そこは両脇を背の高い岩壁に囲まれた、長くくねった坂道だった。
普通に登ってくれば、まずは通らないだろう道。
それもそのはず、この道はかつて道ではなく、溶けた氷山の水が流れ出す川だったらしい。
その名残なのか、足元がわずかにしっとりしているのが分かる。

「で、ここから先は確かに近道なんだけど、見ての通りの一本道だから……」
「ドリード……ドラゴンとかに出くわしちゃったりなんかすれば、戦いは避けられないってことだね」
神妙に呟くミャコに、何故かちょっと嬉しげに聞こえるルーシァの声。
まぁ、巣の中に突っ込むよりはましだから、この道でドリードに遭遇するのは仕方ないと言えば仕方ないんだけど。
もしかして、ルーシァって好戦的なナヴィなのかなってちょっと思ってしまう。
戦うことが苦手でしょうがないミャコにとってみれば、理解に苦しむって言うか、ある意味羨ましいやらって感じで……。

そんな事を考え、口にしたからいけなかったのか。
ミャコたちは運悪くドリードと遭遇してしまった。

しかも、ドラゴンが三匹。
火ドラゴン（カムラル）と呼ばれる、非常に厄介なタイプのドラゴンに。

グルルルッ……。
こっちがその存在に気付いたのとほぼ同時に、三体のドラゴンは威嚇の唸りを発する。
体長は数いるドラゴンの中では小柄なほうだろう。

とはいえ三体もいると、道は完全に塞がってしまっていた。
鋭い爪や牙はドラゴンの標準装備ではあるけれど、その身体にドラゴン特有の硬いうろこは少なく、つるりとした肌を持っている。
他のドラゴンと比べて身を守る術に乏しい代わりに、性格は凶暴で獰猛で。
怒りに任せて吐き出してくる炎の吐息は厄介極まりなかった。

「おっ、出たな出たなっ！　お前たちがさては翼あるものだろ！
覚悟しろっ！」
なるほど、単純にそれを期待していたのだろう。
いつぞや聞いたばかりの芝居がかったルーシァの啖呵が辺りにこだまする。
そのせいで完全にこちらを敵と認識したのか、その場に焦げるようなつんとした匂いが漂いはじめた。
それは、カムラルドラゴンが炎の吐息を吐く前の合図のようなもので。

「って、そんなわけないでしょっ、第一あいつら翼なんかないじゃない」
さすがにそれはないだろうと、思わずミャコはそう突っ込んでしまった。
「あ、それもそっか。……んじゃ、どうする？　戦う、魔法、逃げる？」
すると、冗談だったのか本気だったのかよく分からない様子のルーシァが、全く緊張感の無い調子でそんな事を聞いてくる。
「逃げるっ！」
だからミャコは、ほとんど反射的にそう叫んで、今来た道を引き返そうとしたんだけど……。

「来るぞっ！」

響き渡る、緊迫したアキの声。
それまでも自己主張していた炎の気配が、いよいよ耐え切れないほどになって。

一体どんな仕組みでそんな音が出るんだろうと思わずにはいられない、炎の生まれ吐き出される音。
とっさにしゃがむと、頭上スレスレに螺旋に束ねられた炎が通過していくのが分かる。
打ち出された三つの炎は、その熱波でミャコの肌を焼き……後方に炸裂する。
たちまち背後の草木が燃え上がって。
それにより理解したのは、逃げ道を塞がれたことと、大火事になる前になんとかしなきゃ、なんてことで。
それじゃどうしよっかとアキたちがいたほうに目をやれば、そこにふたりの姿はなかった。
見た目で言えばコドゥのほうが大きくて頑丈そうに見えるけれど、そもそもコドゥとナヴィではつくりが違うのだ。
あの程度の炎ならば……直撃を受けたって、まぁ死ぬことはないと思う。
かといって、熱いものは熱いし、甘んじて受ける必要もないのは確かで。
きょろきょろと辺りを見回せば、まるでその背に翼でも生やしてるんじゃないかなって思えるくらいに、高く高く跳躍しているアキの姿があった。
その右手に細剣を構え、左肩にフルアーマーきらめくルーシァを乗せたアキの姿が。
円の内に描かれた二つの針。
時の根源を表わす紋様をその鍔に施してある、その細剣。
それは、アキに出会ってからずっと気になっていたものの一つだっ

た。

アキはそれを隠しもひけらかしもしなかったけれど。
それは否が応にもミャコが前の世界で会うことのできなかったたった一人を想起させる。
時の紋様を象った細剣。
それを持つナヴィ。
アキが時の根源の御名を冠するレイアなんじゃないかって。

ふと浮かんだそんな考えは……何もミャコの独りよがりで都合のいい希望ってだけでもなかった。
多分これは、ミャコ自身も風の根源（ヴァーレスト）の御名を冠するレイアだからなのかもしれないけれど。
ただのナヴィと特別なナヴィ……レイアの違いが、なんとなく分かるんだ。
それを言葉に表わすのはちょっと難しい。
たとえて言うなら、レイアであるナヴィは他のナヴィと比べて光っている、とでも言えばいいだろうか。
あるいは、その他大勢じゃない個性。
それがミャコに光ってると感じさせるのかもしれない。

その光が……見上げるミャコの目をくらませて。

勝負は一瞬でついた。

ザシュッ！
「ゲギャァッ！」
カムラルドラゴンの脳天に刺し込まれる細剣。
上がる断末魔。

やられた方は何が何だか分からなかっただろう。
まさしく時間でも止めたかのように、気付けばアキが懐にいたのだから。

でもそれは、言葉通り時間を止めたわけじゃなくて。
時が止まったと、そう思えるほどにアキが早いんだ。
素早さだけは自身あるかもって思ってたミャコが、やっとこさ目で追えるほどの素早さで急降下し、驚くほどの的確さでドラゴンの急所を突いただけ。
時の力が見られるかもしれないって期待は見事に裏切られた形だったけれど。
震えくるほど実感したのは、アキの単純な強さだった。

まともにやりあって果たして勝てるかどうか。
……気付けばそんな事を考えてしまっている自分が嫌で。

ぶんぶんと首を振って、その高揚する心を冷ましていると。
そんなミャコの目の前で、予想だにしてなかったことが起こった。
細剣に貫かれ、絶命したはずのカムラルドラゴン。
後は骸と化すだけのそれから、赤い煙のようなものが噴き出してくる。

「え？　な、なにこれっ……」
ミャコが起こりえないことに動揺を隠しきれないでいると、その煙は死んだ火竜を覆うように広がってゆく。
その煙にまかれてはたまらないとばかりに逃げ出す他の火竜たち。
それに習うようにして、ミャコも間合いを取って。
呆然と見守る中、しばらく漂っていた赤い煙は……しかし唐突にその姿を消した。
そこには死んだはずの火竜の姿はなく。

ただアキが表情もなく立っている。

「んー、１００Ｂってとこかな。セイルさんちの宿賃ひとりぶんにしかならないけど……楽勝だったし、まぁこんなものか」
と思ったら、アキの肩上にいたルーシァが、何かを持っていた。
日の光に透かすようにして覗きこんでいるのはくすんだ赤い石で。

「……」
命のキセキ。
それを見たとたん、ミャコの頭の中に雷を打ち込まれたみたいにそのフレーズが走る。
ただそれは、いつか見た輝石宝石とは比べるべくもなかったけれど。

「それは……なんなの？」
ミャコの記憶にない、知らないもの。
気付けばミャコは、おそるおそるといった感じでそう聞いていた。
そんなミャコに顔をあげるアキとルーシァ。
なんと言うか、ふたりは不思議そうな顔をしていて。
「……あれ？ミャコさんＢ（バイテ）の原石、見たことないの？　だって、ドリード倒したら落とすでしょ？」
「え？　そうなの？　あーっと、その。ドリードとかと戦うの怖くて逃げてたから……」
どうやらミャコは、またしてもこの世界での当たり前のことについて聞いてしまったらしいことに気づいたのはその後で。
バレバレの嘘をついて誤魔化すことしかできないミャコ。

「でも、そしたら旅の資金は？　だってこんな近道知ってるくらい旅慣れてるんでしょ？　もしかしてミャコさん手に職持ってる人？
　それとも元からすごくお金持ちだったりする？」
だけど、返ってきたのは矢継ぎ早に繰り出される、そんなルーシァ

の言葉で。
下手な嘘でますます傷口を広げてしまう、学習能力のない自分が、なんだか情けなくて。

「あ、いや、そのぉ……」
とうとうミャコは、何も言えなくなってしまった。
ミャコはこの世界とは別のとこのひとで、気付いたらセイルさんの宿屋にいて、この世界のことは全く知らないに等しいのに、だけど前の世界の面影がある。
……正直に、そのことを話すべきなんじゃないのかなって、思ったけれど。

「あまり詮索するなルーシァ。誰にだって話せない事情があるだろう？」
それまでミャコから視線を外すことなくだんまりを続けていたアキが、ルーシァをたしなめるみたいにそう言う。
「……」
ミャコは、その言葉に正直救われる思いだった。
よくよく考えてみると……自らこの世界の住人ではないかもしれない得体の知れない存在だって告げることは、何だかとても怖いことのように思えたからだ。
今ここにいるミャコが消えてしまうような……そんな恐怖を覚えたからだ。

「んー……まぁ、それもそうだよね。分かった、聞かないでおいてあげるよ。
しっかしバイテの原石も知らないとは、このルーシァ、ミャコさんに俄然興味が沸いてきちゃうよー」
アキの言葉には素直に頷いたルーシァだったけど。
ただでは引かないとばかりに、そんなからかうような台詞を吐く。

迂闊なミャコの自業自得といえばそうなんだろうけど、その人をくった言い方に臆病なくせに負けず嫌いの火がついたというか、何とか仕返ししてやりたくなって。

「それならミャコだって、ルーシァの素顔がすっごく気になるよ？　ルーシァずっとその鎧兜着たままなんだもん。……ねえ、一回脱いでみてくれない？」

それが出会ってからずっと気になってたのも確かだったから、返す刀でそんなことを聞いてみる。

「そ、それはダメっ！　って、中身なんてないもんっ！　ワタシは肩当てなんだからーっ！」

すると、意地になってあくまで肩当てだと言い張るルーシァ。

彼女の素顔もそうだけど、何でそんなに肩当てにこだわるんだろうって強く思う。

「……だから言ったんだよ」

思わず笑みをこぼすミャコをよそに、わざわざ口に出してそう呟くのが印象的で。

いろいろと知らないことも多くて、やっぱりここはミャコの知るアイラディアとは違うんだって実感しつつも。

この旅が前の世界のように孤独に終わらず、賑やかなまま続くことを強く願うミャコなのだった……。

8、臆病風、柵から解放される

それ以降も幾度となくチャウスの山に棲むドリードたちと遭遇したけど。
そのほとんどをうまくやり過ごし、どうしようもない時だけ戦って（といっても剣を振るってくれたのはアキばかりで、ミャコもルーシァも見てるだけだった）、ミャコたちは頂上を目指しチャウスの山道を進んだ。

危険な場所を避けての行軍とはいえ、山登りは思いのほか順調で。
これならなんとか日暮れまでには頂上につけるだろう。
ミャコはそう思ったこともあって、休憩を提案した。
おそらく山の中腹あたり、ひょうたんみたいな形の岩肌から、雪解け水の流れ出す……かつて一度休んだことのある場所で。

「そう言えばミャコさん、ドリードとの戦闘を極力避けてるみたいだけど、何か理由あるの？　別に戦えないってわけじゃなさそうだけど」
日陰があって、ひんやりとした落ち着く空間。
今のところあたりにドリードの気配はない。
そうなってくると自然と話題はお互いのことになって、ふと思い出したようにルーシァがそう聞いてきた。

なるべく戦わずして逃げるっていうのもそれなりに技術のいることであるのは確かで。
ルーシァがそう聞いてくるのも無理はなかった。
余計な詮索をするなって感じのしかめ面になってるアキがいたけど、何もかもそんなんじゃお互いの仲の進展なんか望めないのも確かな

んだろう。
それはミャコの本意じゃなかったから……そんなアキを制して、ミャコは口を開いた。

「別に気のきいた理由があるわけじゃないよ。……ただ、怖いんだ。戦うのが」
「そうなの？　ワタシには……こういう言い方したら失礼になるかもだけど、なんていうか三度のメシより好きそうに見えるけど」
ミャコはルーシァの言葉に苦笑いするしかなかった。
そんなルーシァの人を見る目はあながち間違ってないんじゃないかなって思う。

ミャコは、ルーシァの言う通りの人物なんだと思う。
だから怖い。
何かと戦うのが。
血を流しお互いの命を削ろうとする行為が。
戦うことは生まれながらの欲のようなもので、一度解放すれば……
その歯止めは効かなくなるような気がしていた。
大切な人すらその手で傷つけてしまう気がしていて、嫌だったんだ。

「何それ？　一体アタイはルーシァにどんな風に見えてるわけ？」
ミャコは、一人考え込んでいた自分を誤魔化すみたいにそんな事を言う。
「それはほら？　ワタシの口からはとてもとても？」
それを察して気遣ってくれたのか……そう言う性格なのかはわからないけど。
芝居がかったそんなルーシァの言葉が返ってきて。

「ひどっ。それ最悪だって」
普通なら、半分本気で半分ノリで、口の悪いルーシァに鉄拳制裁！

とかするとこなのかもしれないけど。
ミャコはそうやって苦笑を浮かべるだけしかできなかった。
そんな他愛もない触れ合いでさえ、ミャコにとっては勇気がいるものだったから。

「ノリが悪いなぁミャコさんは。ここはびしっと突っ込んでいいばめ……ぎょわぁっ？　ちょっ、何で！？　いたいいたいいたいーっ！」
「……」
そんなミャコに、案の定不満げなルーシァがいて。
かと思ったらそれまで二人のやり取りを聞いてるだけだったアキが、おもむろにルーシァの小さな頭を握りこんだ。

上がるルーシァの悲鳴。
それはミャコの考えを見透かしたかのようなアキの行動だった。

「ありがと……」
「……」
何でか知らないけど、気付けばミャコの口からそんな言葉が出ていて。
言葉はなかったけれど、いえいえと笑うアキがそこにいて。

「ちょっとぉ！　ここは和むシーンじゃないでしょー、はーなーしーてーっ！」
ルーシァの泣きそうな叫びが、あんまりにもよく通るから、おかしくなって。
ルーシァには悪いけど、ミャコの表情には自然と笑顔が浮かぶようになっていて。

ひとりでこの山を登った時とは比べ物にならないくらい穏やかで楽

しい気分の中……ミャコたちは山頂に程近いルフローズの村へと辿りついた。

「……」
眼下に見下ろせる、寒く高い場所ならではの知恵がふんだんに施された家並み。
ちょうど日が沈む頃合いで、傾斜のきつい藁葺きの屋根はオレンジ色に染まっている。
それは、かつて見た、もうないはずの光景。
自然と神妙な気分になっていく。
もっともそれは、その燃えるような夕日の色が、この村の末路を連想させたからかもしれないけれど……。

「それで、ミャコさんのお友達はどこにいるの？　いい加減山登りも疲れたし、できればワタシたちもお邪魔したいかなーって」
そんな事を考えていると、同じように町並みを見下ろしていたルーシァが、さっき聞いたばかりのような問いかけをしてきた。

「あ、そっか。うん、えっちゃんは……ミャコのともだちは、この村に住んでるわけじゃないんだ」
「そうなの？　……え？　だって、他に人が住むようなとこあるの？」
そう、ここは氷の根源【ルフローズ・レッキーノ】の領地。
チャウスの山の頂上に程近い場所だ。
あたりはほとんど氷でできた岩肌ばかりで、本来は人の住むようなとこじゃなかった。
村の中でさえ、日が沈めば氷のナヴィの独壇場になる。

「住んでるっていうか、眠ってるはずなんだ。厚く冷たい氷の中で」
黙っていたってどうにかなるわけじゃないし、いずれは分かることだから、ミャコはきっぱりとそう言った。

「それって……まさか氷の姫のこと？　ミャコさんの友達って、氷の姫のことだったの？」
「う、うん。ごめんね、黙ってて……」
続くはずの言葉は言葉にならない。
何故ならば、本当にえっちゃんがいるかどうか分からなかったし、ミャコは友達だって思っててもこの世界のえっちゃんはそうじゃないかもしれなかったからだ。

セイルさんがミャコの知るセイルさんと同じようでどこか違うように。
えっちゃん……エミィ・ルフローズ・レッキーノだって、ミャコの知る彼女と違う可能性はおおいにあった。
それに、もしえっちゃんがまだここに眠ったままであるのならば。
えっちゃんはミャコのことを覚えてはいない、あるいはまだ知らないはずだった。

何故なら、この場所から連れ出したのはミャコだし、えっちゃんをえっちゃんって呼べるくらい親しくなったのも、えっちゃんをここから連れ出してからずっと後のことだったからだ。

「いや、うん。謝ることはないんだけどさ……」
ここに来るまで言わなかったことに頭を下げると、ルーシァは首を振ってアキと顔を見合わせる。
「あーっと、実を言うとね、それならそれでこっちの目的も達成で

きるっていうか、手間が省けるわけなんだけどさ……えと、その、ワタシたちがここに来た理由は、翼あるものを探しにきたってことももちろんあるんだけど、アキ様の予言はもう一つあって……」

それまで軽快に語っていたルーシァだったけれど。
そこまで話したところで、言いよどみ伺うようにミャコのことを見上げてくる。

金色の面差しのせいでその表情は分からない。
それにより、ふいに心中に広がっていく、漠然とした不安。
内心の焦燥を抑えられないままにルーシァの言葉の続きを待っていると、そこで口を開いたのはアキの方だった。

「満月の夜にルフローズの村は灰と化す。
翼あるものの炎に晒され焦れることによって。
氷の棺にその身を閉じ込めた氷の姫をも巻き込んで……」

朗々と歌うように。
アキは紡ぐ、予言の言葉を。
それを耳にしたとたん、全身の血が沸騰するような感覚がミャコを襲う。
気付けばミャコは、叫んでいた。

「ちがう！　ミャコは火なんかつけてないっ。つけたのはルフローズに住むコドゥたちじゃない！　氷の棺にいたえっちゃんを追い詰めたのはヤツらだもんっ！」

フラッシュバックするその時の自分。
初めてここに来たミャコが目にしたのは、氷の中で眠る氷の姫を追い出し捕まえようと山に火を放った村人たちの姿だった。

氷山に眠る姫君。
それを一目見ようと集まってくる旅人たちのために作られたルフローズの村は、それまで氷の姫の力で暮らしていけた恩を忘れ、自分たちの欲を満たそうとしたのだろう。
えっちゃんが氷の根源の御名を冠するレイアかもしれない……ただそれだけの理由で。

だからミャコはそんなえっちゃんを助け出し、山を降りた。
えっちゃんの悲しみ混じった怒りを受けたことで村がどうなろうとも、ミャコたちには関係ないって、その時は思ってた。

だけど……今はちょっと違う。
結局ミャコがそうやってえっちゃんを連れ出したから、村は滅び行くことになって。
えっちゃんを連れ出したせいで、えっちゃんのかけがえのないその命を散らせてしまった。
すべてはアイラディアの死神の所業。
叫んだのは図星を指されて追い詰められたからにすぎない。
これ以上自分の罪を自覚したくなくて、見苦しい言い訳をしてるだけだったんだと思う。

自分がとんでもない失言をしてしまったのだと気付いたのは、そこまで考えた時だった。

「ミャコさん？　アキ様は別にミャコさんがやったなんて言ってないけど、もしかして……」
ミャコの激昂に戸惑いつつも、そう聞いてくるルーシァの言葉で、はっと我に返る。

「ミャコさんが翼あるもの、なの？」
そこに、ルーシァの決定的な一言が下されて、ばしゃんと冷や水を浴びせられたような感覚。
あまりにもあっさりと追い詰められたからなのか、変に冷静になってるミャコがいて。

「……うん。そうだよ」
ミャコはきっぱり、そう頷いていた。
ここで誤魔化したとしてもいずれはぼろが出るだろうし、もっとはっきり言えば……黙ってひとりで抱え込んでいることに疲れてたんだと思う。

ミャコはアイラディアの死神と言われた存在。
翼あるもの。
思えば、その真実を語る時は……いつもそれを聞くものの命を奪う、その間際だった。

それは辛く悲しくて、何より怖くて。
ミャコの心はずっと磨耗し続けていたんだと思う。
だけど今、こうして口にしたら、その開放感は尋常じゃなかった。
抱えきれない罪のことを聞いてもらえるだけで、こんなに楽になるとは思わなかった。

気付けばミャコは、涙を流している。
それを悲しいものとは違う、初めての涙で。
ミャコは、どんな罰でも受け入れる。
そんな気持ちになっていたけれど。

「あれ？　でもでも翼は？　見当たんないけど」
返ってきたのは、ミャコの言葉をまだ信用してないみたいな、そんなルーシァの言葉だった。
「……翼は、ここに」
それは、ミャコが思っていた返答とは異なるもので。
引っ込んだ涙。
わけの分からないままに、ミャコは道具袋にしまってあった翼を取り出してみせる。

「ふぅん、取り外し可能なんだね。これは意外だったなぁ」
するとルーシァは、ひどくあっさりとした様子でそんな事を言う。
そんなルーシァに、ただミャコは戸惑うことしかできない。

「……なんで？　ミャコは翼あるものなんだよ、驚かないの？　怖く、ないの？」
まるで今まで看取ってきたレイアたちと同じような、優しげなリアクション。
そこには、怒りも憎しみも恐怖もない。

「そんな泣きそうな顔で言われても、怖くはないよね、残念ながら。あ、でもでも、びっくりはしたかな。まさかたまたま助けたミャコさんが翼あるものだとは考えてなかったから……ねえ、アキ様？」
それは、今も今とてミャコをじっと見つめてるアキも同様で。

「……まさか。そうだと気付いていたに決まってるだろう？」
「ええっ？　そんな、聞いてないよっ！」
少しだけ勝ち誇ったかのようなアキの笑み。

初めから気付いていてどうして？
そんな疑問で頭がいっぱいになる中、静かな笑みを湛えたまま、ア

キが一歩ミャコに近付く。
そして、振り上げられるアキの手。
その動作に、びくりとなったミャコだったけれど。
「……怖がることなんか何もないさ。ミャコは、まだ何もしちゃいないんだから」
静かな笑みは苦笑に変わり、ナヴィらしい柔らかな指先がミャコの涙をぬぐう。
それは、アキと言う人物の真実を知る上での、決定的な一言。
だけど……ミャコにはそのことについて考える余裕がなかった。
「心配しなくていい。悲しいことが起きそうになったら……涙が零れそうになったら、私が止める。……私たちの使命は、ミャコを助けることだって、そう言ったはずだろう？」
ドキッとするようなそんな言葉を、物凄く近い距離で囁かれたからだ。
驚き顔を上げれば。
そこにはアキの頼もしい、だけど少し照れくさそうな、満面の笑顔がそこにあったからだ。
それは、まさしく。
瑞々しい太陽の花が開くようで。
たぶんきっと、これが初めてだったんだろう。
泰然として無口の向こうにある、本当のアキのことを感じたのは……。

9、金色のひつじ、ウルガヴ法を説く

それから……。
ミャコたちは、ルフローズの村にある宿をとって。
改めて今後のこととか、いろいろなことを話し合うことになったんだけど。

「もう知ってるかもしれないが……改めて名乗っておこう。私はアキ・リヴァ。時の根源リヴァの御名を冠するレイアだ」
「ワタシはルーシァ・ヴルック。見ての通り今は肩当てだけど、金の根源ヴルックのもとに生まれたレイアだよ」

それにあたって開口一番ふたりが口にしたのは、本当の意味での自己紹介だったんだろう。
薄々予感はあったとはいえ、聞いたミャコのほうが動揺を隠せなかった。

「ミャコ・ヴァーレストよ。風の根源ヴァーレストの御名を冠するレイアで……」

続きは言葉にはならない。
翼あるもの。
アイラディアの死神。
言わなくてももう分かりきってるからってこともあったけれど。
他のレイアの命のキセキを奪う翼あるもの。
そんなミャコが目の前にいて、それを分かってるのに平然とレイアであることを、二人が名乗ったせいなんだと思う。
怖くないって、助けるって言ってくれた言葉の証明というか、本気の表れだって気付いたからなんだと思う。

ミャコがそんな二人に戸惑い、それでも名乗ってくれたことに感極まっていると。
「で、改めて本題に入ろうかな。……ぶっちゃけちゃえばワタシたちの真の旅の目的、なんだけどさ」
ルーシァが、話を切り替えるみたいに一呼吸置いて、そう語りだす。
「ワタシたちの旅の目的はね、このアイラディアの世界を救うことなんだ。今はまだ世界は平和の道を辿ってるけど……命のキセキって言う世界のバランスを崩しかねない力が世に出た以上、世界は滅びへと向かってるんだって。その真っ只中にいるミャコさんならうすうす気付いているのかもしれないけど」
ミャコは、ルーシァのその言葉に、こくりと頷く。
薄々どころじゃない。
まさに、ミャコの旅の目的こそが、世界の滅びを止めるためのものだったからだ。

「あ、でもでも、こうやって偉そうに語っちゃってるけど、ワタシはつい最近までそんなこと全然知らなかったんだ。自分の中に、そんな世界のバランスを大きく崩してしまうような力があることだって、分かってはいたけどそれについてまともに考えたことなくてさ……」
そこでルーシァは、アキのことを見上げる。
相変わらずのだんまりだったけれど、その澄んだ黒い瞳は、ミャコとルーシァの会話を真剣に見守っているのが分かる。
世界を救うなんてだいそれたことに、本気で立ち向かっていることが分かる。
「ある時アキ様がワタシのとこにやってきて、こう言ったんだ。アイラディアの世界を悲しいまま終わらせたくないから……手伝って

ほしいって」
それは、ついさっきアキの口から出た言葉だったけれど。
「それだけだったら何言っちゃってるのこの無愛想なナビィはとか思うところなんだろうけどね。アキ様が時のナヴィで、未来を予言することのできる力を持ってるって、言ってることが全てホントなのかもって思い知らされるのに、たいして時間はかからなかったよ」

その時のことを思い出してるのか、ルーシァはそこでしばらく言葉を止める。
かと思ったら、ふいに顔を上げて。
「ワタシはね、ヴルックの洞窟の地下深くに暮らしてたんだけど……いきなりやってきた不器用でまっくろなナヴィはこう言ったんだ。もうすぐここにワタシの命のキセキを狙った悪党どもがたくさんやってくるって。ヤツラの手に落ちる君の姿なんて見たくないって。……初対面なのに、こっちが泣きたくなるくらい必死なの。今の今まで他人だったはずなのにさ。なんていうのかな。きゅんと来たっていうか、ちょっとくらい話聞いてもいいかな、なんて思っちゃって……」
歌うように、今もそこにある思い出に浸るみたいに、ルーシァは胸に手を当てていた。
口調はぶっきらぼうなとこもあったけど、それは間違いなく彼女にとって特別な思い出なのだろう。
聞かなくても、ミャコにはそれがよくわかって。

「結果、驚いたね。言った通り来たのよ。それも真夜中にわんさかと小汚い悪党どもがさ。みんなして物騒な武器とか持ってて、その目はギラついててさ。我先にって感じに洞窟の中に入ってくわけ。それを傍から見ていたワタシはぞっとしたね。その対象がワタシだったんだって思ったら……おかしくなりそうだった」
暗い面差しのせいでその表情は分からなかったけれど。

そのぞっとする気分とか、おかしくなりそうな感覚とか、ありありと伝わってくる。

そんなルーシァ以上にミャコがその言葉に怖気を覚えたのは……。
命のキセキを狙ってやってきたコドゥたちの存在に気付かなかった、ミャコの知るルーシァがその後どうなったのか、この目で見たからなんだと思う。

命のキセキを狙ってやってきたコドゥたちにどんなひどい目に遭わされたのか。
それは、今となっては想像するしかないわけだけど。

ヴルックの洞窟に辿り着いたミャコが見たルーシァは、もうすでに人の姿を失っていた。
目に映るものを手当たり次第に殺す、それだけの存在になっていて。

もし、そんなひどい目に遭う前にルーシァを助けることができたのなら。
それは、たくさんある前の世界でのミャコの後悔と、叶わない願いだった。
世界を悲しいままで終わらせない。
アキはその言葉の通りに、叶わなかったミャコの願いを叶えてくれたのかもしれなくて。

「だからね、ワタシはすっごくアキ様に感謝してるんだ。惚れたっていってもいいかもね、何せ命の恩人だし。……それからまぁ、いろいろあったけど。
結局ワタシは、アキ様についてくことに決めたんだ。アキ様の夢に付き合いたいって、そう思うようになったんだ。アキ様の『肩当て』

としてね」

ルーシァは、アキの肩の上で誇らしげにそう言って笑う。
ふいにぷいと顔を背けたアキは、だんまりのままだったけど。
照れ隠しなんだろうなって事がよくわかるあからさまなアキの態度に、ルーシァはくすくすと笑みをもらして、言葉を続けた。

「でね、ちょっと話長くなっちゃったけど、結局何を言いたいのかというと、ここにいるワタシたち以外の残りの9人のレイアにもね、悲しい運命を暗示する未来が予言されてて……ワタシたちはその運命をひっくり返しちゃおうって思ってるんだ。何か起こるか事前に分かってればみんなを救える。命のキセキを正しい形で使うことができればこの世界だって滅びに向かうことはない……そう思ってるんだよ」

命のキセキが世界を壊す引き金となる理由は、その力が本当の意味で正しく使われなかったせいにある。
ミャコ自身が正しく使えるかどうかは別としても……そのルーシァの言葉は間違ってないはずだった。

「だからね、ミャコさん。よかったらミャコさんの力を貸してほしいんだ。
ううん、そうじゃないな、これから行動をともにして欲しいんだ。
ミャコさんがひとりでその使命を負って、ひとりで悲しい思いしなくてもいいようにさ。……どうかな？」

強制はしない。
あくまでミャコ自身の意思で。
ルーシァの言葉には、そんな意味合いが込められている。

「ありがとう、アタイもひとりじゃ心細かったから。むしろこっちからお願いしたいくらいよ」
だからミャコは迷うことなく、そんなルーシァの言葉に頷いた。
だってそれは、ミャコ自身も考えていたことだったからだ。
これから起こる悲しいことをすでに知っているのなら、それを止めることができるんじゃないかなって。
この世界は、本当にミャコが叶えたかった願いを叶えてくれる、そんなものなんじゃないのかって、そう思ってたから……。

こうして、ミャコたちの行動指針が決まって。
次の議題に上がったのは、アキの時の力だと言う、予言についてのことだった。

「未来のことを予言できるのはいいんだけど、結構抽象的なんだよね……これが」
何でもアキの予言の力というのは、その出来事が起こる数日前に突如アキの頭の中に降りてくるものだという。

その内容は結構曖昧で、ルーシァの時は、
『金の名を持つものの棲家。闇に紛れて賊が現れる。それを知らぬ名を持つものは、彼らに捕らわれ、その意思の及ぶところのないくぐつとなる……』
という一文だったらしい。

「今回だってさ、曖昧でしょ。翼あるものがどうだとか氷の姫がどうだとかさ。
とりあえずチャウスの山に来たのはいいけど、よりにもよってミャ

コさんが翼あるものなわけでしょ？その氷の姫って、ミャコさんのお友達なわけでしょ？　アキ様はその事知ってたみたいだけど……」
「……」
一体どういうことなのよと、ジト目（ミャコの予想）でアキを見上げるルーシァ。
一方のアキは、さっきから全く口を開こうとはしなかった。
ちゃんと話は聞いてくれてるみたいなんだけど、一分の混じりけもないその黒の瞳からは、そんなアキが何を考えているのか、ミャコには到底判断がつきそうもなくて。
たぶんきっと、しゃべる必要性を感じてないからこそのだんまりなんだろうけど。

「一応ゆっとくけど、ミャコは火なんかつけないよ。火の力だって使えるわけじゃないし」
確かにミャコは翼あるものだけど……前の世界でだって火をつけたのは村のひとだし、そもそも今だってそんなことをする気はさらさらない。
アキの予言がどうであれ、そのことだけははっきりさせておきたかったから、ミャコはきっぱりはっきりそう宣言する。

「うーん。ミャコさんがそんなことをするようなひとじゃないってのは分かるんだけどね。いくら曖昧だとは言え、アキ様の予言は当たるからなぁ。いや、当たらないようにするのがワタシたちの目的なんだけどさ、ワタシが危機一髪だったのも確かだし、ほんとに翼あるもののミャコさんいたし。
……ううむ。あ、そだ。もしかしてミャコさん、自分の中に火遊びしちゃいそうなもう一つの人格とか眠っちゃったりとかしてない？
　ほら、闇のナヴィとかによくいるでしょ？」

どうしても火をつける犯人をミャコにしたいのか、予言を信じてるからなのか。
相変わらず弾丸のような口調でそんな事を言うルーシァ。

「そんなことあるわけないでしょ。それに、アタイ思ったんだけどさ、翼あるものってミャコとは違う翼あるものだったりしないのかな？　ここに来る途中でさ、ルーシァ、カムラルドラゴン見て言ったじゃん。きっとミャコじゃなくて、翼の生えたドラゴンかなにかなんだよ」
言ってるうちに実はそんなオチなんじゃないのかなって本気で思い始めるミャコ。
そこには、もし二重人格なミャコが正解だったらどうしようっていう怖さもあったからなんだけど。

「そう言われると、そんな気もするよね。……結局のとこどうなんですか、アキ様？　もうちょっとなんて言うか、詳しいこと分かりません？」
再びアキにお伺いを立てるルーシァ。
今更と言えば今更だけど、アキとルーシァって不思議な関係だってその時思った。

話を聞いた限りでは、出会ったばかりのはずなのに、長年連れ添ったパートナーみたいに互いの立ち位置をしっかり把握してるように見えるし、敬語使って様づけしてる割には堂々とアキの肩を独占してるし……。

ああ、そうそう、初めて会った時は逆だと思ってたんだよね。
アキがお人形さんでそれを操ってるのがルーシァなんじゃないのかな、なんて。

そんな感じの益体もないことをミャコが考えていると。
だんまりではなく、ルーシァの言葉に何やら考え込んでいたアキが、おもむろに口を開いた。

「……そもそもの論点がおかしい。翼あるものが誰かなんてこの際二の次でいい。考えるべきところは、誰かじゃなくて何のために火をつけなければならなかったのかってことだ」
言葉の前半部分、ちょっと屁理屈っぽいのはアキも分かったんだろう。
再び敢えてそっぽを向きつつ、アキはそんな事を言う。

「何のために、ですか」
「それはほら、えっちゃんが……じゃなかった、氷の姫がいるからじゃないの？」
それは、考えるまでもない単純なことだった。
氷の棺の中に眠るえっちゃんをどうにかして起こそうと火をつけたのだ。
さっきは火をつけたのは自分じゃないって言ったけど……その事を考えると少し複雑だった。
眠ったまま出てきてくれなかったえっちゃんが出てきてくれるにはどうすればいいのか、何か方法を探していたのは、ミャコも同じだったんだから。

そんな事を考え出して、陰鬱な気分になっていると。
それまでそっぽを向いていたアキがすっと振り向く。
そして、ミャコとルーシァともに見回してから言った。

「だったら話は早い。私たちの目的は他のレイアを助けることなんだからな。

火をつけられる原因になった氷の姫にこの山から下りてもらえればいいんだ。もちろん、私たちとともにね」
そうすれば、チャウスの山が火の海になることはない。
まるでその自信があるかのように、アキは言う。

「でも、一体どうやって？」
「それこそ、ミャコの役目だろう？　友達だって言ったのはミャコじゃないか。
火事になるから危ないってことを友達が言うなら、頑固な姫も出てきてくれるんじゃないか？」
当然の疑問に、当然の答えを返されるミャコ。
今更になってミャコの知ってるえっちゃんじゃなかったらどうしようとか、そもそもミャコのこと知らないんじゃなかろうかって、思ったわけなんだけど。

結局、引くことはできなかった。
それじゃあ早速氷の姫に会いに行こうと、トントン拍子に話が決まってしまったからだ……。

※　※　※

村に着いた時は、あまり気にかけてはいなかったけれど。
やっぱりルフローズの村も、ミャコの記憶にあるものとは様子が違っていた。
不躾だけど出所の分からない視線は相変わらずで。
山頂にある氷山群へ向かう道すがら気付いたんだけど、ここでもヤーシロの町と同じようにウルガヴの紋様……涙滴の印が入ったフー

ドや法衣、マントに身を包んだ氷のナヴィたちがちらほら見える。
中にはコドゥと談笑しているものもあって、前の世界で訪れたときに見た、生きてるのか死んでるのかも分からないような暗さがそこにはなかった。
それは、とてもいい事ではあるんだろうけど。

「やっぱりウルガヴの紋様をつけたナヴィが多いのね。ルフローズの住む、ナヴィは氷の根源（ルフローズ・レッキーノ）の一族しかいないはずなのに……どうしてなんだろ？」
ミャコは、半ば無意識にそんな事を呟いていて。
「どうしてって、ミャコさんだってウルガヴのフードかぶってるじゃない。ミャコさん風の一族（ヴァーレスト）なんでしょ？」
氷の姫さまの好物はと聞かれて、反射的に甘いお菓子って答えたこともあって。
出店で飴を買っていたルーシァがアキとともに戻ってきて、すぐにそう言葉を返してくる。
ちゃっかり、ミャコの呟きが届いていたらしい。

「だって、これはその、水の国の王様にお世話になってるから……」
ナヴィに寛大な水の国ウルガヴ。
アイラディアの世界で、一、二を争う大国であるため、ウルガヴに身を寄せているナヴィだと分かれば迂闊に近寄ってくるものも少ないだろうって、そんな打算で着てたんだけど。
この世界でウルガヴの紋様のついたものを身に纏うのは、もっと他の理由があるみたいだった。
どちらかと言うと、忍ぶためと言うより、みんなに見てもらうための流行りものの一種であるかのような印象を受ける。
事実、ヤーシロでは忍ぶどころか、あからさまにコドゥに因縁をつけられたわけだし。

「あらら、まぁ、薄々はそうかなーって思ってたけど、ミャコさんもウルガ王にお熱だったんだね。
まぁ、気持ちは分かるけどねー。王のつくったウルガヴ法のおかげで、こうしてワタシたちはお天道様の下まともに歩けるようになったわけだし」
「お熱って。……違うよ。そんなんじゃないってば。王はみんなのお父さんみたいな人で……って、ウルガヴ法？」
からかう口調のルーシァに、何だか無性に恥ずかしくて言い訳してたミャコだったけれど。
いつぞや聞いた聞き覚えのないフレーズを耳にして、思わずミャコは反芻してしまった。
「うんうん、ウルガヴ法って最高だよねっ！
そのいち！コドゥはみだりにナヴィを傷つけてはならない！
そのに！コドゥはナヴィの自由を尊重すること！
そのさん！コドゥはナヴィの力の恩恵を受けていることに深く感謝すること！
……いやぁ、なんて言うの？　感動したね。世界じゅうにウルガヴ法が広まったときは、あんまり嬉しかったからワタシ全部覚えちゃったもん」

急にテンションが上がったらしく、それってなんなのかなって聞こうかどうか迷ってるうちに、ルーシァが嬉しげにそのウルガヴ法とやらの令文を並べ立てる。
その様はまるで、自分の手柄であるかのように嬉しそうで。
何だかつられてミャコまで嬉しくなってくる反面、紡ぎ出されたそのウルガヴ法の中身に、ミャコは驚きを隠せなかった。

かつての、前の世界は……アイラディアはナヴィに冷たいはずだった。
だけど、今こうして立っているアイラディアの世界では違うらしい。

「そ、それじゃぁ、命のキセキのことで不安がることも、もうないの？」
ミャコはちょっと混乱気味に、戸惑いつつもそう聞いた。
「こらこら。滅多なこと言わないの。……って言うかなんなのよそのリアクションは。まるで初めてウルガヴ法のこと聞いたみたいなさぁ」
「え？　あ、その……」
高めなテンションのままのルーシァに、ミャコは曖昧に濁して笑うことしかできない。
そう言う時に限って、何も言わずアキがミャコのことをじっと見てくるから、どうにも落ちつかなかったけれど。
ルーシァは、そんなミャコには気付かなかったのか気にしてないのか、さらに言葉を続けた。

「まぁ、さすがにそこまではね。法を破ったら罰せられはするっていっても悪党は悪いことするのに法なんか無視しちゃうわけだし、コドゥにとっても命のキセキは喉から手が出るくらい欲しいものであることは変わりないしねぇ。
……ま、町中でこんな話平気にしてられるくらいはナヴィにとって住みやすい世界になったんだし、それだけでもよしとしないと」
「そっか……」
一瞬期待はしたけど、やっぱり根本的な危険はなくなってはいないらしい。
それがいい事なのか悪いことなのか……世界を救うって宿命を背負わされたミャコにとっては、よく分からなくなっていて。

「それにさ、何が凄いって、このウルガヴ法を考えたのって……にぎゃあっ！？」
「ひゃぁっ！？」

それまで軽快に喋っていたルーシァが急に悲鳴をあげたので、思わずつられて声をあげてしまうミャコ。
よくよく見やれば、アキの手のひらがルーシァの金色の後頭部をわしづかみしていた。
何だか分からないけど、ルーシァはいつの間にかアキのお怒りをかっていたらしい。

「わかった、わかりましたって！　はーなーしーてーっ！」

恥も外聞もなく気にせず悲鳴をあげるルーシァを見ていると。
やっぱりルーシァの言う通り、住みやすい世界になってるのかなって、
しみじみ思う、ミャコなのだった……。

１０、氷砂糖、氷冠に眠るその理由

それから。
ミャコたちはルフローズの村を出て、チャウスの頂（いただき）、レッキーノの氷山へと向かっていた。

そこまでの道のりは、山途中と比べても随分と平坦なものだった。
ルフローズの村からそれほど離れていないというのもあるけれど。
それは何より氷の姫が眠る氷の棺がある場所までのルートを、観光客のためにと整備しているおかげなんだろう。
それがいいのか悪いのかと聞かれれば、ミャコにとってみればあんまりよろしくないわけだけど。

「そう言えば、なにげに気になってたんだけどさぁ、ミャコさん氷の姫さまとお友達って言ってたよね？　氷の姫さまって氷の棺の中でずっと眠ってるのに、どうやって友達になったの？」
「え？　……えーと」
そんな事を考えていると、懲りずにおしゃべり好きなルーシァがそんな事を聞いてきた。
思わず言葉に詰まるミャコ。
確かによくよく考えてみれば、気になる点ではあるだろう。

氷の姫はナヴィの中に命のキセキがあるという事実が世界に広まるよりも早く、自らを氷の中に閉じ込め、ここに眠っていたらしい。
それはコドゥかナヴィの命のキセキを狙うようになることを知っていたからなのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。

昔……というか前の世界で一度だけ氷の棺の中にいた理由を聞いてみたけど、その時は笑ってはぐらかされてしまったからだ。
ただ、誰の手にも触れぬようにと自分を氷の棺の中に閉じ込めたその行為は、皮肉にも世界で一、二を争う有名なナヴィとして知られることになるのに、それほどの時間はかからなかった。

その、自分は何かありますよって態度が、彼女を氷の姫へとまつり上げたことに間違いはない。
本人はそれを、『目立ちたかった』なんて言っていたけど。
その本当の理由に、ミャコは気付いていた。
コドゥたちの目が少しでも自分に向けば、その分だけ他のナヴィたちの危険が減る。
それを見越しての行動だったことを。

……と。ミャコはそこまで考えて、改めて一番の問題点を思い出した。
今の今まで考えている氷の姫のことは、あくまでミャコの記憶の中にあるものだと言うことを。

「えと、その……友達って言っちゃったけど、それはそもそもミャコが勝手にそう思ってるっていうか、たぶん向こうはミャコのこと知らないんじゃないかな？」
咄嗟に気の効いた言葉が思いつかなくて。
だけど違う世界から来たかもしれない、なんてとんちんかんな事も言えなくて。
気付けばミャコは、そんな答えになっていない答えを返してしまった。

「あ、そうなんだ。なるほどー、ミャコさんも氷の姫のファンだっ

たんだね。チャウスの山に来たことあるって言ってたもんね。姫は可愛いって評判だし、気持ちは分かるよ。あんまり好きすぎて向こうも同じ気持ちなんだって思っちゃうんだよね。……ええと、なんて言ったっけ、そういう人のこと」
答えになってないかと思いきや、ルーシァにとっては違ったらしい。うむうむと、一人で納得している。

「それってもしかしてストーカーのこと？」
「あ、そうそう。ミャコさんよく知ってるね！」
「そんなわけないでしょって否定したいんだけどね……」
無碍に否定できないのは、全部えっちゃんが可愛いからと言うことにしておこう、うん。

そんなこんなで。
ミャコは期待と不安の気持ちをせめぎ合わせたまま、チャウスの山の頂、レッキーノ氷山に辿り着いた。

「それで？　氷の棺っていうのはどこにあるの？」
ミャコが知っていて当然とばかりに、ルーシァが辺りを見回しつつ聞いてくる。
「あ、うん。……っと、その洞穴に入ってまっすぐだよ」
さすがに氷の根源ゆかりのある場所らしく、村と比べても寒さの規模が違った。
山の下では緑が青々と茂り、花の香りとどまることを知らないこの季節ですら、油断すると震え出しそうな寒さだった。
元々寒いのが苦手なミャコにとっては、あまり長居したくない場所でもある。

折り重なり連なる氷山の隙間隙間にある洞穴。
その中の一番大きなものを指し示し、ミャコは自分をかき抱くようにしてそう言った。

「寒そうだね、ミャコさん……」
「そう言うルーシァこそ、見てるこっちが寒そうなんだけど」
鎧の通気性がいいのか、金属でできた鎧がダイレクトに寒さを伝えてくるのか、すでにルーシァの声に寒さによる震えが混じってるのが分かる。

寒さなど無縁そうに見えるのは、アキだけだった。
まぁ、アキがぶるぶる震えて寒がってるなんて想像できないのは確かだけれど。
とはいえ、洞穴の道は、自然のものとは思えないほどに通りやすかった。

歩きやすい一本の道。
侵入者を惑わせるような、別れの道もない。
明かりはなくて薄暗かったけど、夜目のきくミャコにはむしろちょうどいいくらいで。
もうなんだか習慣になっちゃってる気がしなくもないルーシァとのいろんな世間話をする暇なく、ミャコたちはそこに辿り着いた。

「ふむふむ。思ってたよりも小さいんだね、氷棺って。なるほど、これは確かに名が知れ渡るわけだわ」
氷棺と言うより、人がすっぽり入る水晶の球といったほうがいいだろうか。
虹色の乱反射が近付くたびにその氷を様々な色に変化させている。
そのきらきらと輝く水晶球の中心に隠され、たゆたうようにして、

えっちゃん……氷の姫と呼ばれるひとりのナヴィが眠っていた。

（えっちゃん……）

色変える光のせいで、はっきりとその相貌ははっきりとはしなかったけれど。

相変わらず触り心地のよさそうな、藤色の髪。

トレードマークになってる、その髪を横っちょに括ったオレンジのリボン。

ルーシァほどじゃないにしろ、その小さな体躯も雪のような白い肌も、氷自ら発光してるようにも見える七色の光に照らされてなお、彼女はミャコの知っているえっちゃんに間違いなかった。

そう思っただけで、涙が出そうになる。

もうどこにもいなくなっちゃったはずのえっちゃんが。

ほんとに嫌なことをなかったことにしちゃったみたいに、時間が戻ったみたいに、ミャコの記憶と変わらない様子で眠っていたからだ。

「わざわざこんな見える……手の届きそうなとこに閉じこもってるんだもんねぇ。

欲深い悪党どもに狙ってくれるって言ってるようなものじゃない。

そうやって自分が犠牲になって少しでも悪党どもをひきつけておけば他の子たちが安全になるって、そう思ってたのかな」

と、ミャコが二人をそっちのけで感慨にふけっていると。

ルーシァの何だかちょっと怒った風のルーシァの声が聞こえてきた。

それは、えっちゃんが氷棺に閉じこもった理由として、ミャコが考えていたものと同じで。

自らを犠牲にしようとしていたえっちゃんに、同じように怒った自

分を思い出す。

「でもさ、それは無駄だと思うよ。コドゥの……人の欲望には限りがないんだから。
キミがここで尊い犠牲になっても、全く意味がないんだ」
でも、ルーシァの言葉はそれだけに留まらなかった。
もうほとんど、えっちゃんに問いかけるみたいに……残酷な現実を語っている。

「だいたいそんなこと勝手にされたって迷惑なのよ。ありがた迷惑っていうか余計なお世話って言うか？」
そこまで聞いて流石に言いすぎじゃないかって、カチンときた。

「ちょっと！　何もそこまで言う必要ないんじゃないの！？」
「わわぁっ！　ゆ、揺らさないでよぉっ！　分かってる、分かってるって、本気で言ってるわけじゃないってば！　……って言うか、ミャコさんが先に怒っちゃ意味ないじゃん。せっかこの怒らして出てきてもらおう作戦が台無しだよっ」
アキの肩上にいたルーシァを、両手で抱え込むようにしていたら、くぐもって返ってきたのはそんな言葉だった。

「え？　作戦？」
「そう、作戦。何せアキ様の予言が起こるまでもう、あんまり時間ないからさ。
なりふり構ってられないっていうか、何とかして起こさないと思ったんだよ。ここが、炎に焼かれないうちにさ」
「……」
だったらあらかじめその作戦内容を教えて欲しかったっていうか……たぶん、それは言い訳っていうか、後付けのような気がした。

だって、その表情こそ分からないけど、ルーシァのその言葉は本気に聞こえたからだ。
本気で自分の身を危険に晒すような真似をしているえっちゃんのことを怒っているように聞こえたからだ。
それは、アキが何も言わず見守っているから、余計にそう思えたのかもしれないけれど。

「……呼びかけたくらいじゃダメかな。ミャコさん、何かいい知恵ない？　氷の姫さまに会いに来たの、初めてじゃないんでしょ？」
そう簡単に出てきてくれる方法なんてないってことくらい、その方法を実践しようとしないミャコを見れば分かるはずだった。
だけど、ルーシァは少ない可能性にも縋るかのように、そう聞いてきた。
聞かれたミャコは、前の世界のことを思い出しながら考えてみることにする。

単純なのは、それこそ氷を壊したり、炎で溶かしたりってことなんだろう。
だけど、それはえっちゃんを助けるための、最後の手段だった。
強引なやり方であるのは確かで、炎つけて炙り出そうとしたコドゥの行為となんら変わらないからだ。

このままここにいることが危ないってえっちゃんに伝えることができて、えっちゃんが自分の意志で出てきてくれるのが一番いい形なんだろうけど……。

「ううむ……」
気の効いた案も出ずに、ミャコが悩みこんでいると。
何を思ったのか、アキが氷棺に近付き、その手を触れた。

「何故彼女は……こんな目立つ場所にいるんだろうな？」
そして、今さっき話題にしたばかりのことを口にする。
「え？　だから他のナヴィに目が向かないようにコドゥを引き付けとくためでは？」
いぶかしげにルーシァが聞き返すと、アキは頷いて。
「それはおそらく……正しいんだと思う。だが、二人が考えてる意味と、彼女の考えていた目論見は違うのかもしれないな」
そう言った。

「それってつまり？　ここにえっちゃんが……氷の姫がいるのには別の意味があるってこと？」
それは考えもしなかったよって、ミャコが反芻して聞き返すと。
もう一度アキは頷き、言葉を続けた。

「これはあくまで私の考えだけど……彼女はこうしてここにいることで、選別してたんじゃないかと思うんだ。こうすれば、たとえレイアだと自らで名乗らなくても、かもしれないってだけで多くの人が彼女の姿を見に来るだろう？　彼女はきっと、その中にいる自分にふさわしいと思える……命のキセキをあげてもいい、たった一人を探してたんじゃないかって思うんだ」
「そ、そんな……そんなコドゥなんて、いるわけないよ……」

それは世迷言だと、ミャコは思わずにはいられなかった。
かつては儚い夢としてミャコを含めたレイアが思っていて……叶わなかっただけに、余計にそう思える。
だけど、そこで。アキは首を振った。

「誰もコドゥとは言ってない」
「え？　そ、それって……」

じっと見つめられて、ミャコは動揺する。
コドゥじゃなくて、命のキセキを受け取ることができる人っていったら、翼あるもの……ミャコしかいなかったからだ。

ふと思い出したのは、前の世界での記憶。
氷山崩れるほどの火事に見舞われたあの時。
ミャコとともに行くことが、成り行きでなくえっちゃんの意思だったとしたら。
最初から、ミャコが何であるのか分かってて……ミャコを選んでついてきてくれたのだとしたら。

それはもう二度と知ることはできない、ミャコの想像の中の話だけど。
今の今まで気付くことのできなかった自分が、たまらなく悲しくて……。

11、臆病風VS翼あるもの

ルーシァによれば。
アキの予言は、その一文をアイラディアの神から下されてから、遅くてもだいたい2、3日後に発現するらしい。
今考えると、それより早いことだってあるんだろうから、のんびりヤーシロで一泊してたことに危機感を覚えたけれど。
そのタイミングは予言した本人のアキが分かってるんだろうなって思いたい。

となると、アキの予言が起こるまでのタイムリミットは、遅くて明日の今頃になるわけで。
ミャコたちには、時間がなかった。
だけど、そんな事情も知らないだろうえっちゃんは、何をしても氷の棺から出てきてくれる気配すらなかった。

壊すのも溶かすのも論外。
みんなで呼びかけてみても、えっちゃんは眉ひとつ動かさない。
甘い物好き（特にアイス）のえっちゃんだから、みんなで食べて見せて釣ろうとしてみたけど、やはり結果は芳しくなかった。

アキが言うには、こちら側の声が届いている可能性は高いらしい。
でなければ、自身の命のキセキをあげてもいいと思える人物がやってきても気付く術がないからだということなのだが。
ミャコは……そこまで聞いてはっとなった。

「あれ？　そう言えば……なんで二人はえっちゃんが氷のレイアだってこと、知ってるの？」
今の今までそれを口にしたことなどなかったはずなのに。

二人はえっちゃん……氷の姫が命のキセキを持つナヴィであることを当たり前のこととして話していた。
別に二人を信じてないってわけじゃないけれど、レイアがレイアであることを知られるのは、その命を預けたのと同義なわけだから……ミャコはそれを知っている理由を、どうしても知りたかった。

「知ってるっていうか、見れば分かるじゃん。コドゥとナヴィの見た目が全然違うのと同じで、ただのナヴィとそうじゃない特別なナヴィの違いなんて一目瞭然でしょ？　ほら、佇まいって言うか、オーラがあるっていうかさ、自分は他とは違うってアレだよ。……あ、でもでもこれって普通のナヴィやコドゥにはわからないことだろうけどね。レイア同士だからこそ分かることなのかも。
って言うか、ワタシミャコさんに会った時だってすぐに分かったよ。あ、レイアの子がコドゥにちょっかいかけられてるって。何の属性のレイアなのかとか、ミャコさんが翼あるものだったってことは、流石に分からなかったけど」

激流のようなルーシァの言葉。
まさかミャコのことも、最初からレイアだって気付かれてたなんて思いもよらなくて。
「そ、そうなんだ……」
ミャコは半ば呆然と、そう頷くことしかできなかった。
言われて見ればミャコだって二人に会ってすぐにレイアだと、レイアかもしれないって思ってたわけだしね。

それから気を取り直して、えっちゃんを目覚めさせるその方法を模索していたけれど。
日が沈んで暗くなるほどにいろいろ試したのに、うまくいかないか

ら……
ほんとにミャコたちの声が聞こえてるのかな、なんて思い始めていた。

「今日は無理かな……流れ的に。寒さも厳しくなってきたし、一旦仕切り直さない？」
と、そんな事を考えていると、ルーシァがミャコに向かってそう問いかけてきた。
アキが何も言わないということは、それは二人の総意なんだろう。

「でも、時間ないんでしょ？　いつえっちゃんが危ない目に遭うかも分からないのに」
たぶん、この後えっちゃんにどんな不幸が降りかかるのか、一度その目で見てたからこそ、ミャコは二人より焦ってたんだと思う。

ルフローズに住むコドゥに火をつけられて……命の危機を感じたえっちゃんは、氷のレイアであることを皮肉にも証明するかのように、その身に秘めし氷の力を暴走させてしまった。
山を焼こうとした炎が消えた代わりに、ルフローズの村は、その氷の根源を示す名前の通りに、すべてが氷の彫刻へと変わってしまったのだ。
家も人も動かず、溶けることのない氷へと。

そこまでするつもりはなかった。
見た目では分かりづらかったけど、えっちゃんの落ち込みようは尋常じゃなかった。
自分のしてしまったことをその命消えるまでずっと後悔していた。
それはもしかしたら、えっちゃんなりにコドゥと歩みよろうとしたのに、それが最悪の形になってしまったことに悔やんでいたのかも

しれなくて。

「んー、そうだね。ミャコさんの言いたいこともよく分かるよ。だけどさ、この寒さは氷のナヴィじゃないワタシらには危険だよ。助けようとしてワタシらがこの寒さにやられちゃったら意味ないでしょ？」

「それは……ルーシァの言う通りだけど」

ルーシァの言い分はもっともだった。

ルーシァのフルアーマーには、すでに霜がおり始めてるし、その声も僅かだけど震えている。

かく言うミャコも、すでに身体の芯まで冷え切っていた。

アキは見た目平気そうに見えるけれど、時折吐き出される白い息は、この場所がミャコたちにとって長時間いられる場所じゃないってことを如実に示しているようで。

それなのにも関わらず。

どうしてもここを離れたくないミャコがそこにいる。

二度と同じ、悲しいことは繰り返さないって、意地になってたからかもしれなかった。

「ミャコはいいよ。ここにいる。二人は村に戻って……むひゃっ？　ふ、ふめたいっ！？」

でもそれはあくまでミャコのわがままだから、無理に二人に付き合わせる必要はない。

そう思ってついて出た言葉だったけど。

その途中で、ミャコは両頬をつままれてしまった。

「そんな言い方されたら戻るに戻れないってさ。あ、そうだ。それじゃ交代制にしようよ。それに、予言されたことを回避するのに、

何もこの場所にずっといる必要もないんだよね。こっから外まで一本道なんだしさ。起こすことが無理なら、守ればいいんだ。氷山の入り口のとこならここよりいくらかはマシでしょ」
首を横に振ろうものなら、両頬に激烈なダメージを受けかねない。
そんな雰囲気。
ミャコは半ば強制的にそれに頷かされていて。

結局ミャコたちは、えっちゃんを起こすのをいったん諦め、レッキーノの氷山の入り口で待つことにしたんだけど。

それが起こったのは、アキとルーシァが暖を取るために村へ戻って、ほんとにすぐのことだった。

アキから借りたケープ（暖かいけど普通のケープだった）で身を包み、縮こまるようにして夜空を見上げていると。
それまで休むことなく明滅を続けていた星が、不意にその姿を消したんだ。
ミャコは初め、雲でもかかったんだろうって、そう思ってたけれど。
突然地面に吹き付ける強い風を感じて、風音に混じって聞こえてくる羽音に気付いて。
はっとなってミャコは再び夜空を見上げた。

「あれは……カムラルドラゴン？」
闇にまみれるようにして飛んできたのは、一見山登りの途中で遭遇したカムラルドラゴンに見た目が似ていたけど、その大きさは倍くらい違った。
さらに、その背には通常のカムラルドラゴンにはないはずの、赤黒く鋭角な一対の翼が生えていて。
ふと、月明かりでも映したのか、それの目が闇の中、赤く怪しく輝

いた。
そのギラギラした瞳は、確実にミャコのことを捕らえていて。
それの目的がミャコであることをミャコ自身が認識した瞬間。
それは、急降下しながら炎を吐き出してきた。

翼あるものと炎。
アキの予言に出てくる翼あるものは、ミャコじゃないのかもしれない。
そんな冗談めいた言葉が真実だったのかもと気付いた時には、もうその熱波が届きそうなくらい放射された炎が近付いてきているのが分かった。

このままじゃ、氷山が炎に包まれてしまう。
アキの予言の通りになってしまう。
えっちゃんを、この危険で一杯の世界に晒してしまう。
そう思ったら、いてもたってもいられなくなって。

「ヴァーレストよ！」
ミャコは叫んでいた。
自らがレイアとして仕えし、風の御名を。
とたん、ミャコの右手に目で見えるほどに強い風の【魔力】が渦をまいた。
ミャコは目前まで迫っていた炎を打ち払うようにその右手を凪ぐ。
それだけで、風の魔力はいつの間にか炎すら切り裂く不可視の刃と化していて。

ザシュッ！！
風の刃が炎に触れたその瞬間。
炎は雷を受けた大木のように中心から二つに隔てられ……その姿を保てられずに、虚空に散ってゆく。

だが。
それに、怯みはしたものの、そのまま激突しかねない勢いで降りてくるカムラルドラゴンの姿が見えた。
その剣みたいな牙が、鎌のような爪が、ミャコを狙っている。

「ヴァーレストよっ！」
ミャコは流れるような動きで……一度振り下ろした風の爪を翻し、空へとかちあげた。

「ゲヤァッ！」
闇の中、確かな手ごたえ。
まさか、あのタイミングで二撃目が繰り出せるとは思ってもみなかったんだろう。
事実、前の世界でここに来たばかりの頃のミャコだったら、不可能なはずの芸当だった。

長年旅をして戦ってきた経験の結晶。
それが失われなかったことに、ミャコはちょっと安心する。
その一方で、ミャコの根本的な部分は変わっていないんだってことに、少し気落ちもした。
せめてもの救いは……倒したことで降り注いできたのが、肉塊ではなく、色の薄い赤の石だったことで。

「これでえっちゃんは、外に出なくてもすむのかな……」
本当は、薄々気付いていた。
出てきて欲しいって、目を覚まして欲しいって声をかけていても、それがミャコの本意じゃないってことくらいは。
ミャコはえっちゃんに目覚めて欲しくなかったんだ。

自分自身の存在も含めて、外に出ることはえっちゃんにとって悲しいことにしかならないって、そう思っていたから。

だけど……。

そう簡単にうまくはいかないらしい。

風が切り裂かれて、空が泣いていた。

無数の星空隠す赤黒いものが、羽ばたきやってくる羽音によって。

※　※　※

「はぁっ、はっ……」

一体、どれくらいの数を倒しただろうか。

衝動に任せて向かい来る獲物を屠り続けて、荒い息をつく頃には。

鈍い光沢を持った赤い石が、そこかしこに広がっていた。

夜空を見上げれば、ようやくミャコが危険なものであると気付いたからなのか、むやみに突っ込むことはせず、様子を見るように中空を旋回するドラゴンたちの姿が見えた。

その数は一向に減る気配はない。

「キリがないわね……」

ミャコは放たれた炎を愚痴とともに無造作に払い、息をついた。

いや、当然キリはあるんだろうけど……そう思わせるほど、奴らは執拗だった。

警戒するくらいなんだから、ミャコの怖さとか分かってるはずなのに、まるで諦めようとしない。

まるで、そうしなければいけない理由があるかのよう。

こうなってくると、相手に終わりが見えないぶん、不利なのはミャコのほうだった。

風の力は無限じゃない。
限界がどれほどなのかも、使うミャコが一番分かってる。
このまま同じことの繰り返しじゃ、負けるのはこっちのほうだろう。
いっそのこと、その場から離れてもっと戦いやすい場所へ移動してみようか、とも考える。
奴らの狙いが、ほんとにミャコであるならば、その考えはありだと思うんだけど。
その時ふと思い出したのは、アキの予言だった。

ミャコがここを離れたら最後、奴らはきっと氷山……えっちゃんを狙う。
そんな確信めいた予感がミャコにはあって。
それだけはさせないって、心に誓ったまではよかったんだけど。

「えっ？」
それに気付いたのは、必然だったんだろう。
アキやルーシァのことをふと思い出して。
この騒ぎに気付いて助けに来てくれないだろうかとちょっと期待して。
ふいに目を向けたルフローズの村があるだろう空が……やけに明るく見えた。
ミャコは嫌な予感を抑えきれぬままに駆け出す。
そしてすぐに、村が見渡せる場所までやってきて。

「村がっ……！」
燃えていた。
赤く赤く。
おそらくは、あの大きなカムラルドラゴンの炎で。

その炎は、ルフローズの村を覆う背丈の低い針葉樹すらも色づけている。
村の集落から煙の上がり始めている場所もあった。
火事を知らせる、鐘楼の音が響いていないのが、余計にミャコの不安を募らせる。

アキやルーシァ、村の人は無事だろうか。
今すぐ見に行きたい、駆けつけたい、そんな衝動にかられたけれど。

「ギョエエッ！」
背後から聞こえるドリードの咆哮。

「しまった！」
あの場にいるミャコが邪魔なのであって。
ミャコを狙ってるわけじゃない。
そう気付かされた時にはすでに、一匹のカムラルドラゴンが氷山の入り口へと入り込んでしまっていた。
離れればどうなるのか、分かりきっていたのに、結局離れてしまった。
考えなしの自分自身が悔しくて腹が立ったけれど。
そんな反省してる暇などあるはずもなく。

「ヴァーレストよ！　力を貸してっ！」
ミャコは再び、自身の信じるその名を叫んだ。
今度は目に見えない風の魔力が、手のひらではなく、足元に集まっていくのが分かる。

風のように早く動ける力。
それこそが、ミャコの……ヴァーレストの御名を冠するレイアとし

ての、一番得意なことでもあって。
轟き粉塵をあげる風を身に纏い、氷山入り口に消えていったドラゴンを猛追する。

氷の棺、えっちゃんのいる場所まで辿り着くのは一瞬にも等しい時間だったけれど。
ミャコの目に広がるその光景は、まるで時が止まっているかのように緩慢に展開した。

背後からでも分かる、カムラルドラゴンの開けられた口。
集まり始める、火の魔力（カムラル）。
火が生まれようとする、きな臭い匂い。
氷のナヴィであるえっちゃんにとっては、火の魔力は毒にも等しいんだろうってことは容易に想像できる。
こんな至近距離で炎吐かれれば……氷が溶けるだけじゃすまないだろう。
でも、それでも、えっちゃんは目覚める気配はない。
まるで、ミャコの本当の願いを知っているかのように。
きいてくれているかのように、眠ったままに見えて。

「あああぁっ！」
その瞬間。
ミャコの感情が爆発した。
膨れ上がる風の魔力、初めてそれに気付いたように、カムラルドラゴンがこちらを振り向いて。

ドシャァッ！
それが……カムラルドラゴンの最期だった。
ミャコの右手のひらが、ドラゴンの喉元を貫いていたからだ。

強烈な酩酊を起こすほどの、確かな手ごたえ。
飛び散る生き物の血。
断末の言葉にすらならない吐息。
かつて否定しつつも、求めていた死の感触。

だが、それは長くは続かなかった。
まるで全てが幻であったかのように、ちゃちな作り物であったかのように、
そのぬくもりは消え、貫いた手の甲に赤い石が当たって落ちる。

「……っ」
ミャコはそこでようやく我に返って……青くなった。

えっちゃんが目を覚ましている。
その、サファイアの輝きを宿した、だけど眠そうな、とろんとした瞳で。

それは、目覚めたばかりだからじゃない。
それが、ミャコのよく知るえっちゃんのいつも通りだった。

えっちゃんが、ミャコのことを見ている。
心の中に燻り消えない衝動を吐き出してしまったミャコのことを。
ミャコが一番見られたくない姿を、一番見られたくない人に。

その時、ぴしりとその場が軋むような音が辺りに響いて。
自分にふさわしいと思う人を探している。
そんなアキの言葉がフラッシュバックする。

「どうしてっ……」
ミャコの願いとは裏腹に、えっちゃんが目覚めようとしている。

危険な外の世界に晒されようとしている。

どうして今、このタイミングなんだろう。
ミャコにはそんなえっちゃんが分からなくなって。

溶け始める氷棺に背を向けて、えっちゃんに背を向けて、ミャコは走り出していた。
まるで、逃げるみたいに……。

１２、臆病風と氷砂糖の共同戦線

ミャコは溶け始める氷棺に背を向けて、えっちゃんに背を向けて、走り出していた。
まるで、逃げるみたいに。

だけど……そんなミャコに、逃げ場はないらしかった。
レッキーノの氷山、その入り口まで戻ってきて。
見上げた中空に、今まで倒してきたカムラルドラゴンの何倍も何倍も大きい、
それこそが絶対、アキの言っていた予言の翼あるものなんだって、確信持てるくらいの畏怖をばらまく炎色の竜の姿があったからだ。

「アイラディア様の翼を持ちし者は、貴様か……？」
目の前の竜が口を開く。
ミャコにも理解できる……だけどどこか生き物の範疇を超えているかのような、そんな声で。
初めは、ミャコに言ってるんだってすぐには気付けなくて、おろおろと視線を彷徨わせてたけど。
アイラディア様の翼。
それは、ミャコだけに許された、ミャコだけが知るものだったから、自然と緊張感が高まる。

「何故、あなたがそのことを……？」
ミャコは油断なく目の前の巨竜を見据え、そう言葉を返した。
シラ切ってとぼけるとか、知らないって嘘ついたりするとか、そう言う駆け引きみたいなものをするべきだったのかなって気付いたの

は、既に言葉を発してしまった後のことで。

「ならば貴様には、その命散らしてもらおう。神を裏切り、成り代わろうとする偽者に組する者よ、カムラルの名のもとに、後悔して死んでゆくがいい……」

思ったよりは饒舌な、だけど有無を言わせない言葉。

「神を裏切るって、意味分かんないんだけど……つまりあなたは、火の国（カムラル）かなにかの関係者ってこと？　それとも、コウの知り合い？」

「……」

窺うミャコに、巨竜は答えない。

かくいうミャコも、そう言ったはいいものの、相手の正体を量りかねていた。

カムラルの名のもと。

それは多分、カムラルの御名を持つレイアのことを言ってるんだろうって気はする。

だけどミャコの知る火のレイアであるコウは、わざわざ人を使って自分の命を危険に晒すだろうもの……つまりミャコを消せ、だなんて命令するようなタイプじゃなかった。

彼女ならきっと直接くるだろう。

自分の命のキセキを奪おうとするものを、返り討ちにするために。

まぁ、この世界の彼女がミャコの知るその人と同じとは限らないけど。

彼女……コウ・カムラルの名を利用として、ミャコの命を、あるいはえっちゃんの命を狙おうとしている可能性もある。

「もう二度と誰かを犠牲にするつもりはないの。どうにか、話し合いで解決できないかな」

それは、ミャコの本音だった。
みんなの命のキセキを奪って……世界の滅亡を止めることができたとしても、それは意味のないことだって実感していたからだ。
まだあては全くないのが辛かったけど……みんなを犠牲にしなくてもすむような、
世界が平和になるその方法を、ミャコは探したかった。

「世迷言を。これだけの同胞を殺しておいて……」
「……っ」
殺気のこもった、冷たくにべもない言葉。
そっちがけしかけてきたんでしょって叫びそうになったけれど。
結果を見ればどうしたって彼の言い分は正しいんだろう。

もう二度と、誰も傷つけたり犠牲にしたりしたくないって言ってはみても。
結局、ミャコはミャコなんだろう。
自分を殺そうとする相手に無抵抗に殺されてやるほどお人よしでも弱くもない。
逆にそれは、普段必死で抑えている殺戮衝動を解放する引き金となる。

「……そうね。結局、ほんとの自分は誤魔化せないみたい」
だから、ミャコは左手を掲げ上げ、そこに不可視の風の力を込めて。
巨竜と対峙した。

その時のミャコは笑みを浮かべていたと思う。
多分それは、殺されるかもしれない強い相手に殺気をぶつけられて。
正当防衛を言い訳にして自分の衝動を思う存分吐き出させることが、嬉しかったんだろう。

「火の一翼（カムラル）、ガルラだ」
「風のミャコ（ヴァーレスト）よ……よろしく」

名乗りあいは戦いの合図。
誰が決めたかなんて知らないけど……気分は悪くなかった。
ミャコはもう一度小さく笑みをこぼして、巨竜ガルラに肉薄する。

「ヴァーレストよ！」
左の手に、見えない風の爪を宿し、ガルラの喉元に叩きつけるように突き出す。

ガツッ！
「……うっ」
相手は空を飛んでるし、何より的が大きい。
素早さには自身があったミャコだから、その一撃でそこそこダメージを与えられると思ってたんだけど。
ガルラは避けもしなくて。
風の爪はほとんど歯が立たなかった。
思い切り手を岩盤に叩きつけたようなしびれが返ってくるだけ。
これが本来の……ドラゴンそのものの姿と言えばそうなんだろう。
見た目からして年季の入ってるって分かる彼は、カムラルドラゴンの唯一にして最大の弱点すら克服してしまっているらしい。

「カムラルよ……全てを焼き尽くせ！」
そんなミャコを見て、ガルラはニヤリと笑みを浮かべたような気がした。
そして、次の瞬間には、ガルラの力の発動を促す言葉とともに、辺りにカムラルの……火の魔力が満ちた。
顔を上げれば、ガルラの開かれた口元に、高温ゆえに白く発光して

いる炎の渦が見えて。
ヤバイ！　と思ったのとほぼ同じくして、それは放たれた。
まるで闇を照らす小型の太陽のごとき輝きを放ちながら。

「ヴァーレストよ！　アタイを守って！」
何度も言うけど、ミャコは素早さには自信があった。
だから、それを避けようと思えばできたはずだった。
でも、ミャコは避けることができなかった。
ミャコが避ければその小さな太陽は氷山を直撃する。
ガルラから放たれる、火の魔力だけでもう、溶け始めてしまっている氷山。
その小さな太陽を受ければただで済むとは思えなかった。
中のえっちゃんにも危険が及ぶかもしれない。
たぶんガルラは、その事を分かってやったんだろうけど……。

お互いの力と力のぶつかり合い。
あえなく圧し負けたのは、ミャコの方だった。
悲鳴が爆音にかき消される。

「ぐっ……」
ミャコの耳に届いたのは、爆音に吹き飛ばされ、氷山の入り口に叩きつけられて呻き声を上げる自分の声だった。
「フフ、いつまで持つかな……」
次に聞こえてきたのは、そんななんだか楽しげなガルラの声で。
再び危機感を覚え、よろよろと立ち上がれば。
ガルラが二発めの小さな太陽をその口元に生み出そうとしているのが分かった。
ようは、避けることのできないミャコをいいことに、このままいた

ぶろうということなのだろう。
ミャコの風の力は、守る力には向いていない。
逆に、ガルラの炎の力は攻撃専門のような力だった。
このまま同じことの繰り返しでは、ミャコの敗北は必至だろう。

（とっておき、使うしかないかな……）
心中で呟いて、ミャコはちょっと苦笑を浮かべる。
とっておき。それは命のキセキを持つ特別なナヴィ……レイアだけに許された力のことだ。
この世界では分からないけど、仲間うちのみんなでは【レイアーク】なんて勝手に名前をつけて呼んでいた、ミャコたちの必殺技。

だけど、今の今まで出し惜しみしてたのにもちゃんと訳がある。
レイアークには、その凶悪なほどの強さを持つ反面、いくつかのリスクがつきまとう。
第一に、レイアークを使うことで自分はレイアであると証明してしまうことだろう。
これは理屈じゃない。
ミャコは風のレイアですって名乗り上げるより、よっぽど相手にレイアであることを強烈に印象づける。

二つめに、レイアークを使ったことの反動で大幅に行動力を殺がれてしまうことだった。
初めてその力を使った時、ミャコはまる二日、立つことすらままならなかった。
まぁ、今はさすがに、一度使ったくらいじゃそこまで動けなくなることはないけれど……ようは、とっておきの大技であるが故に、乱発ができないのだ。

そして三つ目。

今のこの状況だと、もしかしたらこれが一番厄介なのかもしれないけど。
レイアークは、普通にナヴィがそれぞれの信ずる根源の名を呼ぶことで発動する、ある意味お手軽な力と違って、その発動に時間がかかることだろう。
ミャコの場合、まずレイアークを放てるだけの風の魔力をためなきゃいけなかった。

「カムラルよ、焼き尽くせ！」
当然相手がそんな暇を与えてくれるはずもなく。
容赦なく3発目がミャコに向かって放たれた。

「ヴァーレストよ！　守って！」
レイアークを使うためには、この防御の力すら使ってる余裕ないんだけど、使わなきゃ氷山ごとミャコは溶かされてしまうかもしれない。

「か……あっ……」
風の力で防御してさえ、完全にその熱を防ぎきれずに、熱波がミャコの肺を焦らしてくる。
レイアークのことを思い至ったはいいものの、どうにも手詰まりだった。
結局、今の状況でミャコが勝つためには、それこそ死を覚悟するくらいの気持ちじゃなきゃダメなのかもしれない。

「……」
ミャコは瞳を閉じて、レイアークを使役するための力を集め始めた。
それは、世界のそこかしこに存在している風の魔力（ヴァーレスト）だ。
いや、ヴァーレストそのもの、と言ってもいいかもしれない。

びり、と空気が震え、ミャコを中心に渦をまくように風が動き始める。

「愚かなっ……」

そう言うガルラは、ミャコが何をしようとしているのか気付いたのかもしれない。

すぐさま4発目の小さな太陽を作り出す。

今まで一番大きく輝く、カムラルの力の塊を。

（問題はミャコの身ひとつで氷山を守れるかってことなんだけど、ね）

ミャコは集中を途切れさせないままに両手を広げて仁王立ちした。

レイアークの発動条件を満たすためには、最低でもガルラの攻撃を一度は耐え切らなくちゃならなかった。

耐え切れなければミャコの負けだ。

それを分かってるからガルラも今までの中で一番力を込めているのだろう。

単純に言えば、ミャコの根性とガルラの力の勝負だった。

「カムラルよ！　全てを焼き尽くせ！」

ゴウ！　と白い炎が猛る。

ガルラの言葉とともに繰り出されたそれは、熱風とともに死の気配すら運んでくるんじゃないかって戦慄をミャコに与えた。

風を集めているミャコに吸い寄せられるかのように、小さな太陽は近付いてくる。

それは、耐えられるかもなんてちょっとでも思ったミャコの甘っちょろさを証明するだろう威力があったのだろう。

だけど。

ミャコは、自分でも驚くほどに落ち着いていた。
目の前のそれに絶望することなく、風の魔力を集めることができた。
何故ならば。
比喩じゃなく、背中が凍り付いてしまうかのような、でも懐かしくて泣きそうになる、冷たい風の気配がしたからだ。

「レッキー……まもって」
眠たげでぞんざいな……だけどせっかく維持してた集中力が途切れちゃいそうになるくらい『可愛らしい』声が背中に伝わる。
氷の根源……ルフローズ・レッキーノの心が広いのか、あるいはそれだけ彼女に才能があったからなのか。
ぽそりとそう呟いただけで、ミャコの目前に虹色の光を潜ませ、透ける大きな氷の盾が出現した。

「なにっ！？」
ガルラの驚愕の声すら、その大仰な盾に遮られて遠い。

小さな太陽と細工美しい、ミャコをすっぽり覆う高さのある氷の盾。
お互いぶつかりあって互いの身を削りあう。
氷の力は確かに火の力に弱い。
天敵と言ってもいいかもしれない。
でも逆も然りなんじゃないかって、その時のミャコは思って。
気付けばその小さな太陽は、その氷の盾にのまれるようにして消えていった。
溶け消え崩れる、盾とともに。
ミャコのレイアークの発動条件が満たされたのは、まさにその瞬間で。

「風のキセキよ！　その姿を示せ！　アンヴァ・ヴァーレストッ！！」

ミャコのレイアの証でもある風の輝石……琥珀。
ミャコのまじないとともにミャコの身体から飛び出したそれは、瞬く間に巨大化、白金の虎へとその姿を変え……天に向かって咆哮する。
驚愕の、あるいは悲鳴かもしれないガルラの声は、その雄叫びにかき消されて届かない。

そして、その咆哮から世界に解き放たれるよりも早く。
白金の虎は、ガルラの喉元を……その凶悪な顎で、易々と噛み切っていた。

飛沫く血潮の代わりなのか……ガルラは何抵抗することなく、その生を終え、微かに輝く赤い宝石となって地面に落ちる。

一瞬、辺りを……風さえ止まるほどの静寂が支配して。
白金の虎は、幻であったかのように、すっと消えた。

ミャコが……ミャコたちが、勝ったんだ……。

13、氷砂糖のレイアークその1

一瞬、辺りを、風さえ止まるほどの静寂が支配して。
白金の虎は、幻であったかのように、すっと消えた。

ミャコたちが、勝った。
そう思ったとたん、ミャコの全身から、がくんと力が抜ける。
最近は、一日に三回くらいまで、この最大出力のレイアークを使えるほどにはなってたんだけど。
世界が変わったからなのか、久しぶりに放ったからなのか、抜ける力の代わりに入り込んでくる疲労と眠気、寒気は結構なものだった。
だけど悪い気分じゃなかったから、それにそのまま身を任せようとして……ミャコはそのまま倒れる。

「……あ」
と、そこに背後から声。
後頭部は、冷たいのに暖かい、どこか矛盾した手のひらに支えられる。

「わ、わ、重い」
ごすっ！
「にょわぁっ！」
だけど。そのびっくりするくらい小さな手では支えきれなかったらしい。
結局ミャコは凍って硬い地面に頭から落ちて、変な悲鳴をあげてしまった。

「へいき？」
「う……いたたぁっ……うん。だ、大丈夫だよ、えっちゃん。おか

げで目が覚め……はぅっ！？」
仰向けになって痛がるミャコを覗き込むように彼女……えっちゃんはそう聞いてくる。

それがあまりに自然だったから。
ミャコがレイアークを使う決意をして、ガルラを倒すまでの息のあったコンビネーションが、ミャコの知ってる前の世界のえっちゃんそのものだったから。

気付けばミャコは、アキとタメを張るほど表情の乏しい……だけど長年の付き合いのせいで心配してくれていると分かる彼女に向かって、素で言葉を返してしまった。

『えっちゃん』と。
さも親しげに。

「ほんとに平気？」
「あははっ、う、うん。平気平気っ！」
だけどそれが彼女には聞こえなかったのか……再び伺うようにそう聞いてくるから、ズキズキする後頭部を気付かなかったことにして、無理矢理立ち上がった。

薄く強い蒼の光を湛えた、くりくりで大きなえっちゃんの瞳。
そんなミャコの強がりすら、気付いてるよと言わんばかり向けられる。

「えっちゃんて、私のこと、だよね？」
さらに、ミャコの失言はばっちりえっちゃんの耳に届いていたらしい。

今更だけど確認するよって感じでえっちゃんが聞いてくる。
やっぱりえっちゃんは……昔の、前のミャコの事を知らない。
それは良かったのか悪かったのか。
ミャコに判断がつかなかったけれど。

「あ、うん。ご、ごめんね？　その、なんて言うの？　勝手に変なあだ名とかつけちゃって」
そんな心内は表に出さず、ミャコは誤魔化すようにそう言った。
すると、えっちゃんはゆるゆると首を横に振って。

「ううん。べつに変じゃない。私の名前エミィだから、あってる」
そんな事を言った。
ミャコはもちろん、えっちゃんの名前がエミィだと知ってるよ、なんて言えず、誤魔化し笑いを浮かべるしかなくて。

「あ……その、自己紹介してなかったよねアタイは……」
「あなたはミャコ。それも知ってる」
「え？　そうなの？　じゃ、じゃあ」
やっぱりアキの言う通り、氷の棺の中で眠っていても、現れるものを見て、その声を聞いていたのだろうか。
世界にたったひとつしかない命のキセキをあげられるただ一人を探していたのだろうか。
いろんな思いがあって、おそるおそるミャコはそう聞いていた。
すると、えっちゃんはミャコの心中が分かってるみたいにひとつ頷いて。

「うん、そう。私はミャコ、あなたを選んだの。命のキセキで願いを叶える、たった一人のひととして」
「う……あっ、ち、ちょっと、ちょっと待ってね？　だ、だってアタイはナヴィなのよ？　しかもえっちゃんと同じレイアで、極めつ

けはそんなレイアのこと狙ってる翼あるものなのにっ！」

アキにその可能性を示唆されてまさかとは思っていたけど。
ほんとにえっちゃんがそんな事言ってくるもんだから、ミャコは自分でもびっくりするくらいうろたえてしまった。
氷の棺の向こうでミャコの話を聞いていたのなら、きっとえっちゃんも全てを承知の上だったのかもしれないけど。

前の世界では考えられなかったくらいの勢いで、ミャコが話さないで秘密にしてたことを暴露してしまうくらいには。
でもそれはきっと、一度目に隠し騙し続けて悲しい結末になったことへの後悔に押されたせいもあったんだと思う。
そして、改めて聞きたかったんだろう。
こんなミャコにそんな事を言って本当によかったの？って。

「ぐふふ。大丈夫。ふたりの愛があればなんだって乗り切ることができる」
そしたらえっちゃんは、そんな不安とか混乱とかでわやくちゃになってこんがらがっていたミャコの気持ちを解きほぐすかのような……そんな言葉を返してくれた。

えっちゃんらしい、起伏のない棒読みのようなセリフ。
全力で似合わないえっちゃんの口癖になってる笑い声。
それらが全部、その奥底にある感情を隠そうとしてできないでいる、ミャコの知る不器用なえっちゃんに他ならなくて。

「そっか……そうだよね、うん！」
そっぽを向くえっちゃん。
思わずぎゅっと抱きしめたくなるのをぐっと我慢して、ミャコはそう言った。

理屈じゃない。
えっちゃんの心の中まで分かるわけじゃないから……それはあくまでミャコの想像だけど、ついて出たその言葉には理屈なんてないんだと思う。

まだ、出会ったばかりのミャコたちなのに。
ミャコには確信を持ってそう思えて。
それは決して一方通行じゃない。
そう、思っていて……。

※　※　※

だけど、今は出会い……ミャコにとっては再会の感傷に浸ってる場合じゃなかった。
ルフローズの村に蔓延する炎。
それをなんとかしなくちゃいけなかったからだ。

「……っ」
えっちゃんと連れ立ってやってきた村の様子と来たら、それこそ悲惨なものだった。
村を囲むようにした背の低い森は、完全に火の海と化していて。
それに倣うように、村の家々は燃えていた。
ミャコたちが泊まっていた宿もそう。
アキやルーシァたち、そして村の人たちは無事だろうか。
無惨にも燃え続けている炎を見ていると、不安ばかりが募ってくる。

「えっちゃん、平気？」

握られていた手にぐっと力が入って、ミャコは思わずそう聞いていた。
「……」
えっちゃんは、ミャコの問いには答えず、額から汗をを滴らせ青い顔をしつつも、燃え盛る炎から目を離そうとはしなかった。
「これは、私の責任。……はやく、この火をとめなきゃ」
だが、やがて顔を向けたえっちゃんは真剣な眼差しでそんな事を言う。
それだけで、ミャコはえっちゃんがレイアークを使うんだろうってことが分かった。
氷の姫の怒りをかって氷付けになったルフローズの村。
きっと、そんなミャコの覚えてる記憶と同じように。

ううん、それは同じなんかじゃない。
意味合いは真逆だった。
滅ぼし封じるためのものじゃなく、守り助けるためのものだろう。

「レイアの力を使うのね？」
再び聞いたミャコに、えっちゃんはこくりと首を縦にふる。
「それじゃ村全体が見えるところに行かなきゃだね。それに、まだ無事な人がいるかもしれない。先に助けなくっちゃ」
えっちゃんのレイアークを使うためには、村じゅうを見渡せる場所まで移動する必要があるだろう。
そして、それよりも先に、村の人たちを助け出さなきゃいけなかった。

周りに人の気配がないせいか、もう手遅れかもしれないって暗い気持ちにもなったけれど……少なくともアキやルーシァが、この炎にまかれて、なんてことになってるとは思えなかった。

まず、二人と合流する必要があるだろう。
その旨をえっちゃんに伝えようとして。

グオオォォンッ！

聞こえてきたのは、カムラルドラゴンの咆哮だった。
それは、威嚇……あるいは敵を前にした時の声。

「えっちゃん！」
誰かが……おそらくアキたちだろうと思うけど、戦っている。
当然えっちゃんにもそれが分かったんだろう。
目配せして頷きあい、ミャコたちは走り出す。

もれなく辿りついたのは、普段は人々の憩いの場になってるだろう、噴水のある広場だった。
噴水の水が止まり、周りの炎に赤く照らされる浅い水面に漬かるようにして、いつものように肩にルーシァを乗せたアキが立っている。

そして、そんな彼女たちを囲むように三体のカムラルドラゴンがいた。
ガルラほどではないが、やはり翼のある大きなもの。
水場に陣取って戦ってる辺り、流石といったところだろうか。
もうすでに、いくつもの赤い宝石が骸代わりに水面に没している。

ザシュゥッ！
「ギィヤァッ！」
なんて言ってる間にもアキは目にも留まらぬ速さで、素早さだけには自信持ってたミャコのお株を奪っちゃいそうな速さで、水面を蹴った。

水しぶきとともに心臓の部分を一突きされる一体のカムラルドラゴン。
断末魔の声とともにアキが細剣を払えば、ざぶと音を立てて赤い石が転がり落ち、水の中に没してゆく。
「ガァアアッ！」
と、仲間がやられたことに激昂したのか、自分自身に命の危険を感じたのか。
怒りの咆哮をあげる残ったカムラルドラゴンは、顎を大きく開いて炎の塊を生成し始めた。
それに、はっとなり駆け出そうとしたミャコたちだったけど。

「相変わらず学習能力ないやつらだよね。戦闘パターンが一辺倒にもほどがあるっての！」
しゃべる肩当てだと言い張ってたルーシァが、小さな腰に手をやり抜き放ったのは、これまた小さな銃だった。
『金』の根源に依るナヴィが好んで扱うもの。
大きさのことしか考えなければ、それは確かにミャコの記憶にあるルーシァも持っていたもので。

ドン、ドンッ！
熟達した銃さばき。
二発の金色の弾丸が、鋭いカーブを描きながら二体のカムラルドラゴンの元へ向かって飛び出していく。
見事なまでに、違うことなく、その弾丸は生成を終え、繰り出されようとしている炎にぶち当たって。

予想を遥かに超える爆音と爆風。
ミャコはほとんど条件反射で、その爆風からえっちゃんの身を守る。
頭ひとつぶんは背の低いえっちゃん。

何だか不満そうな声がくぐもって聞こえていたけれど……やがてその爆風も去って。
顔をあげると、そこにはもうカムラルドラゴンたちの姿はなかった。
おそらくカムラルドラゴンの炎で弾丸を誘爆させたんだろうけど。
その凄まじい威力に、感心と驚きがないまぜになっていて。

「アキ、ルーシァ！」
ミャコは、その驚きの感情からようやく脱すると。
もうちょっと抱きついていたい欲をなんとか振り払い、二人の名を呼んだのだった……。

１４、氷砂糖のレイアークその２

「お、やっと来たねミャコさん。その様子だと、氷の姫さまの勧誘もうまくいったってところかな？」
たぶん、ミャコたちがやってきてたのは気付いてたんだろう。
ちょっとからかうようなルーシァの声。
アキは今の今まで戦ってただろうに、息ひとつ切らした様子もなく、目してミャコとえっちゃんのことを見つめている。

「う、うん、まぁね。でも、ふたりとも無事でよかった。……やっぱりこの炎は、さっきの？」
アキの言葉通りになってしまったと、そのまま口にするのは何だか恥ずかしくて。
ミャコは曖昧に濁し、そう言葉を続ける。

「うん、ワタシたちがちょうど宿を出た時だったかな。突然翼の生えたカムラルドラゴンの大群が村の中に入って来たんだ。……村の人々はうまく全員避難させることはできたんだけど、みんなの住む家は守れなくて。そっちは、どうだったの？　やっぱりあいつら来たんだ？」
「うん、こっちにも来たわ、こっちには彼らのリーダーらしきやつが現れて……えっちゃんが助けてくれたおかげもあって、何とかやっつけることができたんだけど」
思うままにルーシァの問いに答えて、すぐにはっとなる。
今ルーシァはなんて言った？
村の人々を避難させたって言わなかった？
数百人はくだらないだろう村の人……全員を？

いったいどんな芸当をすればそんな事ができるのだろう？
よしんば警鐘を鳴らしたとしても、村全体がその危機を知るより火の回りの方がよっぽど早いだろう。
しかも村をドリードに襲われたと知ればパニックになるのは必至のはずで。

「村の人たちは無事だったの？　こんなに火がまわっちゃってるのに、全員？」
ルーシァの言葉通りのことなど、不可能に近いんじゃないかなってミャコは思った。
というかすぐには信じられそうもなくて、ついついそう聞き返してしまう。

「うん、もちろん。村の周り一帯は危ないって分かってたしね。今頃村の人はふもとの町に向かってるはずだよ。まぁ、その途中の危険までは流石に関与できないけど……たぶんみんな無事なんじゃないかな」
言うのは簡単だけど……それは凄いことなんじゃないかって思わずにはいられなかった。
隣にいるえっちゃんも、ルーシァの言葉に驚いたように目をしばたかせている。

「よく、そんな事ができたわね。一体……どうやって？」
村には、コドゥもたくさんいたはずだった。
二人には悪いけど、ミャコには、ルーシァたちの予言の言葉を受けて、コドゥたちがそれを単純に受け入れてくれるなんて、到底思えなかった。
だから、気付けばミャコはそう聞いていて。

「誰だって炎に焼かれて死にたい奴なんていない。予めそれが分か

っていれば、誰だってそのための対処はするだろう？　ただそれだけだよ」
「ふふふ、それこそがアキ様の力ですよ。ミャコさん」
返ってきたのは、ある意味にべもない……そんな言葉だった。
ようは、アキの時の力によるものなのだろう。
一体どんな力だったんだろう？
この目で見られなかったのが残念でならなかったけど……。

「ミャコ」
そんな事を考えていると、それまで黙ってミャコたちの会話を聞いていたえっちゃんが、ふいに声をあげた。
ミャコの袖を引っ張るえっちゃん視線は、上空に向いている。
その視線の先には、ルフローズの村に炎撒くことをやめない……翼あるものたちの姿が見えた。

「うーん、のんびり自己紹介してる暇もないみたいだね。この火事もなんとかしなきゃだし」
同じように上空を見上げて、苦々しげに呟くルーシァ。
「私にひとつ、いい案がある」
すると、それに答えるようにして、えっちゃんがそんな事を呟いた。

氷のレイアークを使う。
聞かなくても、えっちゃんのいい案ってのがその事だってことはすぐに分かった。
その力の凄さを、この目で見たことのあるミャコは知っている。
えっちゃんがその力を使えば、事態を収拾に向かわせることなんて簡単だってことに。
えっちゃんがその力を……レイアの証であるその力を使うことで、もうここにはいられなくなるってことを。
その中身こそ違えど、結局えっちゃんがこの場所を捨て外の世界へ

と飛び出さなければならなくなってしまうってことを。

そこまで考えて。
ミャコはすごく不安になった。
二度と同じ悲劇を繰り返したくないって思っていても、結局訪れる結末は同じなんじゃないかって……そう思ってしまったからだ。

「いい案ねぇ？　ずいぶんと自信あるみたいだけど……したらアタシらは何をすればいい？」
だけど、そんなミャコの心情とは裏腹に、初対面とは思えない、そんなやり取りをするルーシァとえっちゃん。
「ルーシァとアキには、のこったドリードたちを撃退してほしい。やりかたはふたりにまかせるから」
「ああ、そっかそっか。ワタシたちのことも見てたんだね。んー、やっぱりアキ様の言う通りだったってことかぁ。その有無を言わせない感じ、お姫様っぽくてステキだよ。……んじゃま、いっちょ言われた通りにしましょうかね？」
淡々と言葉を発するえっちゃんにちょっと驚き、それからしみじみと頷いてみせ、アキの顔を伺うルーシァ。
対するアキは、えっちゃんとミャコを交互に見ただけで何も語らない。
ようは、ルーシァの言葉を肯定するってことなんだろうけど。

「火の手のほうは、私とミャコにまかせてくれれば、もんだいないから」
そして、何だか傍から見ていると、心のうちで会話してるんじゃないのかなって思っちゃうくらいアキを見返していたえっちゃんが、唐突にそんな事を言った。
ミャコは、ちょっと驚いて目を見開いてしまう。

「……了解した」
「んじゃ出発ーっ！」
それは、えっちゃんに言葉にあっさり頷いて駆け出していくアキのせいもあったけれど。
何よりミャコが驚いて、懐かしい気持ちになったのは。
ミャコがえっちゃんに対してそうであるように、えっちゃん自身が、ミャコに対して背中を預けて戦えるかのような信頼を持ってくれているって、そんな気がしたからだ。
ほとんど初対面であるはずのミャコとえっちゃんには、まだそこまでの信頼関係は築けていないはずなのにも関わらず。

「つまり、今度は逆ってことだよね？　さっきミャコがあの力を使ったとき、えっちゃんが守ってくれたのと」
「さすが。理解が早くてたすかる」
でも、ミャコが驚いたのは一瞬のこと。
気付けばそんな風に、自然と言葉がついて出ていた。
それに、えっちゃんは満足そうにぐふふと似合わないにもほどがある笑みをこぼして。

次の瞬間には、辺りの温度がぐっと下がってゆく感覚に支配されていた。
辺りの熱気を吹き飛ばすくらいの、えっちゃんの内に秘められた氷の魔力が高まっていくのがよく分かる。
そんなえっちゃんの額には、汗が滲んでいて。

「ヴァーレストよ！　アタイたちを守って！」
ミャコはそんなえっちゃんを包み守るようにして風の力を展開した。
えっちゃんの盾になるよう前に立ち、空を見上げれば、闇に爆ぜる炎と煌く白刃が目に入った。
その肩の上には、二つの銃を手にしたルーシァの姿。

鈍い音とともに、その銃が火をふく。
相手にとって有利であるはずの中空での戦いだったけど。
二人はそんなものをものともせずに、確実に敵の数を減らしていった。
炎のたち始めた屋根を踏み台にしてアキが空を舞えば、たちまち赤い石の雨が降る。

どうやらミャコの出番はないみたい。
二人の強さに圧されるようにして、ちりぢりに散って虚空に消えてゆくカムラルドラゴンたちを見て、そう思っていたけれど。

「……っ！」
風に紛れてのくぐもった声は、ルーシァのものかアキのものか。
二人して驚愕の様子で、こちらを見ている。
いや、二人が見てるのはミャコたちじゃなかったんだろう。
ちりちりと首筋が熱くなるような……嫌な感覚。
ミャコはそれを考えるより早く動いていた。
レイアークを扱うために、じっと瞳を閉じて集中力を高めているえっちゃんの、その背後に。

そこには、今までずっとどこかに潜んででもいたのか、今すぐかぶりつきかねない勢いで大口を開けて炎を吐き出そうするカムラルドラゴンの姿があった。
その、透明度の低い赤の瞳と、視線がかちりと合う。
その瞳には、なんの感情も含まれてないようにミャコには見えた。
怒りも、殺意も、何もかも。
ついさっきまで戦っていたガルラのような……そこに存在している証みたいなものが欠けている気がした。
まるで与えられた使命だけを忠実にこなす、便利なつくりもののような……そんな感覚。

そこに感情の色があったのなら、もしかしたらミャコは多少なりとも動揺して、躊躇いもしたのかもしれない。
ただその時にあったのは、そんな何もないものに対する悲しさだけだった。
ミャコは、集中を高めるえっちゃんの邪魔にならないように、そっと風の守りから足を踏み出す。

「よせっ！」
今度ははっきりと聞こえたアキの声。
だけどミャコは聞かないフリをして、目の前のそれに手を伸ばした。
だって、目の前のそれは、もう炎を吐き出す寸前だったから。
えっちゃんが熱にやられないように、怪我しないようにするには、これしかなかったんだからしょうがない。
ミャコは伸ばした手のひらに風の力を纏わせる。
そして……強い圧力のかかったそれを、カムラルドラゴンの口の中に差し入れた。

ドゴオォォンッ！

「……っ」
物凄い至近距離での爆発。
焼けるようにを通り越して、手の感覚もなかったけれど。
それを口の中で受けたカムラルドラゴンの方がたまったものじゃなかっただろう。
自らの炎による爆発で首から先を吹っ飛ばしたカムラルドラゴンは……気付けば小さな赤い石になっていて。

「氷のキセキよ、その姿を示せ！　サファ・ルフローズ・レッキーノ！！」

凍えるほどに強い、えっちゃんの声が響いたのはその時だった。
突如として現れるは、大地を真白に染める無数の小さきもの。
サファイアの瞳を持った、もこもこ毛むくじゃらのうさぎ。

「アキ、ルーシァ！　ここから全速力で逃げて、町の外まで、早くっ！」
「……っ！」
「わわっ、ちちょっとぉ！」
たくさんいるそれが、見た目の可愛さに比べてとんでもないものだって分かってたミャコは、咄嗟にそう叫んでいた。
それだけで察してくれた物分りのいいアキが、ミャコの無茶を窘めにやってきた足を１８０度展開させて空を舞う。
そんなアキの突然の行動に、肩上のルーシァが抗議の声を上げていたけど。
ミャコ自身も、そんなふたりに構ってる余裕はなかった。

うさぎたちが動き出す前にと、ダッシュでえっちゃんのところまで戻り、えっちゃんに抱きつく。
役得というか、いきなり何しちゃってんのミャコって感じだったけれど。
あまりの見た目の可愛さにちょっかいかけてひどい目にあったことのあるミャコとしては、その時ばかりは恐怖の方が勝っていたんだと思う。

その小さき脅威が行動を開始したのは、まさに間一髪の……そんなタイミングで。
小さなうさぎたちは、その蒼い瞳をせわしなく動かし、鼻をひくつかせて四方八方ちりぢりに跳ね飛んでゆく。
するとどうだろう。

音も立てず、重さも感じさせず着地しただろう彼らの一歩が、大地に白氷の波紋を生んだ。
それの一歩で、赤茶けていた大地は一瞬にして霜をかぶせた凍土と化し。
二歩目で大地は氷の大地へと入れ替わる。
三歩で大地に地続きになってる村の家々が、民家を囲む背の低い木々が、氷の彫刻へととってかわって。
そして、４歩目。
白い彼らが一際大きく跳ねると、もはや村を我が者にしようとしていた炎を……芸術的な氷のオブジェへと変容させた。
薄く脆いそれは、一瞬の輝きを放ってパリと崩れ、中空の風へと流され消えてゆくのが分かって。
ルフローズの村が、その名の通りに。
氷の都と化すのに、さほど時間はかからなかっただろう。

「……うまくいった？」
ややあって……力の使役を終えたえっちゃんが、背中から抱きついてる形になってるミャコを見上げるようにしてそう言った。
「うん、火は完全に消えたみたい。アキたちも一目散に逃げてったの見えたし、大丈夫じゃないかな？」
「だったらミャコ、ちょっと離れてほしい」
言葉のわりにほどんど分からないくらいの、えっちゃんのわずかな抵抗。
レイアークは使いすぎると、本人の命も危険に晒しかねない大技だ。
使い慣れてる（って言っていいのかどうかは困りものだけど）ミャコはともかくとして。
えっちゃんは初めてその力を使ったはずだから、もう喋るのも億劫

なんじゃないかなって、弱々しいえっちゃんの声を聞いて、ミャコは思った。

「いやぁその……ミャコもさっきの力の疲れが今になって出たみたいでさ」

そんなえっちゃんを支えてあげてる、なんて言えば聞こえはいいのかもしれないけれど。

左手一本でミャコが抱きついているのには、当然わけがあった。

さっきのカムラルドラゴンと一緒に爆風を受けた右手。

感覚がないのは不幸中の幸いだったけれど。

とてもじゃないけどえっちゃんに見せられたものじゃなかったからだ。

「ミャコっ」

むずがるように、えっちゃんがミャコの名を呼ぶ。

ミャコの言葉が言い訳にもならないってこと、分かってるような口ぶりで。

「こげたにおいと血のにおい。……ミャコ、けがしてる」

「だ、大丈夫だって。このくらい平気平気っ」

平坦に事実だけを述べようとするえっちゃんの声。

流石にそこまで言われてしまうと否定もなにもなくて。

ミャコの返すことが出来たのは、下手な虚勢だけだった。

「ひどいんでしょ、みせなさい」

「えっと……無理？」

業を煮やしたかのようなえっちゃんの呟き。

ミャコはきっぱり否定の句を告げる。

それは、一番近い距離での、引くに引けない戦いで。

無駄なことと分かっていながら、長期戦を覚悟していたミャコだっ

たけれど。

ゴツン！

「ふにゃぁ！？」

えっちゃんの力がふっと抜けたと思って油断した瞬間。

伸び上げるようにしてえっちゃんの頭がミャコのあごに直撃した。

その思いもよらぬえっちゃんの行動に、もんどりうって声をあげて……えっちゃんから離れるミャコ。

「え、えっちゃん、そ、それは反則じゃないかな……」

「……っ」

星の飛ぶようなその衝撃に思わず涙目で抗議したけど、えっちゃんはそんなミャコの言葉には聞く耳もってはくれなかった。

ただ、火傷と裂傷で真っ赤なミャコの腕を見つめている。

「いや、その、これはね？　カムラルドラゴンに気付かなかったアタイのドジだから、その、あの、あんまり気にしないで？　たいした怪我じゃないし」

ミャコは、そんなえっちゃんに弁解するみたいにそんな言葉を返した。

でもって平気をアピールするつもりで腕を上げようとしたけど、腕はミャコの言うことなんて聞いてくれなくて。

引きつる痛みとともに、ミャコの血が滴り落ちる。

それは、霜のかぶった氷の地面にぽとりと落ちて、じわりと赤の波紋を広げる。

「あ……」

ミャコの大嫌いな……でも本当はそうじゃない赤の色。

じわじわと侵食していくように、ミャコの視界を覆って。

ついには、ミャコの意識すら飲み込んでいって……。

15、闇夜の灯火、その名は魔王

「……はっ」
次にミャコが目を覚ましたとき。
そこはルフローズの村にある宿屋のベッドの上だった。

ミャコの記憶にある、全てを閉ざされ凍りついてしまった、氷だけでできた寝室なんてものは。
ミャコの頭の中にしか存在していないかのように包み込むぬくもりがそこにある。

「……あれ？　えっちゃん、全部凍らせたんじゃなかったの？」
ミャコはのろのろと起き上がり、辺りをきょろきょろと見渡しながら……すぐそばでミャコのことを見ていたえっちゃんにそんな事を聞いた。

「そんなことしたらみんなくらせない。私はただ火をけしただけ」
対するえっちゃんは、少しだけ面食らった……あるいは呆れた様子で、それでもきちんとミャコの言葉に答えてくれた。

「それじゃ火を消したら、氷溶かしちゃったの？」
「……そうでもない。ここは二階だったから、比較的無事なだけ」
まるで何もなかったかのように、部屋が暖かいままだったから。
何気にそんな事を口にすると、今度は少しばかりばつが悪そうにそんなことを言ってくる。
となると、村の外は一面の氷の世界なのかなって思って窓外を見てみたけれど。
たぶん今は真夜中なんだろう。

その先には闇と静けさしかなくて、それを確かめる術はなさそうだった。

「いきなり目を覚ましたかと思ったら、何を聞いてるんだか。……そんなことよりミャコさんには色々と言わなきゃいけないことがあるはずでしょ。無茶をしたことの謝罪とか、その怪我を治してもらったことの感謝の言葉とかさぁ」

と、ミャコが窓の向こうの闇を見つめてそんな事を考えていると。その背後からいつもより大分近い気がするルーシァの声がした。

「あ、ルーシァ、だいじょ……って！　ルーシァが鎧取ってる！てゆうかやっぱり中に人がいたんだ？」

そう言えばえっちゃんのレイアークから無事に逃げられたのかな、なんて考えはすでに後の祭りで。

いや……まぁ、二人のことだから、あの可愛くて凶悪な白うさぎに捕まっちゃって氷の彫像になっちゃった、なんて思ってはいなかったけれど……

振り向いたその視線の先には、ちょっと驚きの光景が広がっていた。

ミャコの隣のベッドで深く眠っているアキの姿。

どこか怪我をしてるとか、そういう感じじゃなさそうだったから、それはまぁいいんだけど、

二つのベッドの間に置かれた鏡台……その机の上に、黄金色のフルアーマーを脱ぎ捨てた、小麦色のおかっぱの小さな小さなナヴィが、足をぶらぶらさせながら……そのトパーズのごとき金の瞳で、ミャコのほうを見上げている。

鎧を脱いでしまっていることはもちろん驚きなんだけど……何よりミャコが驚いたのは、今までずっとアキの肩上にいたルーシァがそ

の定位置を離れてしいまっていること、だった。

「失礼な、いるに決まってるでしょ……くちゅん」

感情のままに口から出たミャコの言葉に、肩を怒らせてぶるっと身を震わせ、くしゃみをするルーシァ。

たぶんそれは、初めて見るルーシァの素顔で。

えっちゃんに負けず劣らずの可愛さにミャコが何だかむず痒いものを覚えていると。

何を思ったのか、それまでミャコたちの会話を聞いていたえっちゃんが、ゆっくりとルーシァの所へと歩み寄る。

「さむいの、だいじょぶ？」

「あはは。大丈夫！　って言いたいとこだけどね、流石に命に関わるくらい鎧が冷えちゃって……うぅ、アキ様の肩当て連続記録が途絶えちゃったよ……」

「ごめんなさい」

「あ、いや、こっちこそごめん、愚痴みたいになっちゃって。……あの場はあれが最上だったと思うし、仕方ないよ」

「ありがと。そういってもらえると救われる」

ひどく真面目で、だけどどこか噛み合ってないような気もしなくもない、不思議なえっちゃんとルーシァの会話。

思わず微笑ましい気持ちになっていると。

そう言えば、と話題を変えるみたいに、ルーシァがその卵のようなちっちゃな顔を上げた。

「あ、そうそう。ミャコさん、腕の怪我のほうは違和感とかない？」

「え？　あ、そう言えば……」

言われて思い出す、ミャコが腕に怪我をしていたという事実。

だけど、忘れちゃってたのも無理なかったんだろう。

ふと目を向けた腕は、切り傷ややけどどころか、袖のほつれひとつもなかったからだ。
まるで……最初から怪我などしていなかったかのように。
「治ってる……。全然痛くないよ？　もしかして、ルーシァが治してくれたの？」
「ううん。ワタシじゃくてアキ様だよ。ムテキの時の力でね」
無事な手のひらをわきわきさせつつミャコがそう問いかけると、ルーシァはほとんど自分のことのように誇らしげにそう言って胸を張った。
いつもと違って表情が分かるぶん、ルーシァがアキのことを慕ってるんだなってことがよく分かる。

「私、時の力初めて見た。ミャコの手、みょわみょわなおってくの気持ち悪かったけど……すごかった」
「まぁ、見てて気分のいいものじゃないよね。でもミャコさん、これでひとつ貸しだかんね。アキ様に泣いて感謝するよーに！　……ってゆうか、もう二度とあんな無茶はダメだよ！」
「それには賛成。今日のことでミャコは笑ってうそをつくひとだって身にしみてわかったから……ようく監視してないと」
「ご、ごめん」
怒ってるふたりの言い分はもっともだったから、ミャコは反射的にそう言って頭を下げると。

「べつに怒ってるわけじゃない」
「そうだよっ、ごめんなさいじゃなくてありがとう、でしょ！」
だけどそれは逆効果だったらしい。
ますます怒っちゃってるふたり。

いや、まぁ……謝るくらいならあんな無茶をするなってことなんだ

ろうけどね。
ふたりに、いやアキにだって余計な心配させたってよく分かってはいる。

「そ、そっか……うん、それじゃぁ後で、アキにも礼を言わなきゃね」
だけどたぶん、ミャコはそんな自分を止めることはできないだろう。
誰かが傷つくくらいなら、ミャコがその傷を負ったほうが何倍もマシ。
前の世界の悲しい失敗があるからこそ、ミャコは強くそう思っていた。
そう言う意味では、やっぱりミャコはうそつきなのだろう。
そしてそれはきっと、死んでも治らないんだと思う。
そんな自分に、内心ミャコは苦笑しながら、改めてすっかり寝入ってしまってるアキのことを見た。

「アキが寝ちゃってるのは……やっぱりレイアークを使ったから？」
負ったはずの怪我をなかったことにする、アキの時の力。
またしてもその力を、ミャコ自身の目で見ることは叶わなかったのが、ちょっと悔しかった。
やっぱりそれってすごい力だよねってしみじみ思う。
それは、今まで時の根源による力をミャコ自身が目にしたことがなかったせいもあるだろうけど。

「レイアークって何のこと？」
「……あ」
そんな事を考えていたら、ルーシァが不思議そうな声色でそう聞いてきた。
思わず言葉を失うミャコ。

今更ながらに気付かされたのは、レイアークと言う言葉を、この世界ではミャコしか知らないというか勝手に名づけたものだということだった。

「いや、その。アタイたちのレイアの力って名前ないでしょ？　だからその、何か呼び方があったほうがいいかなってゆうか……」
ミャコは自然と顔が赤くなっているのを自覚しながら、しどろもどろにそう言った。
言葉にしながら、その言葉が、ミャコ自身一度口にしたものだったことに気付いて。

「ぐふふ。さすがミャコ。センスある」
「フフ、語呂もいいしね、いいんじゃない？　ワタシも何か名前ほしいなって思ってたことだし」
返ってきたふたりの言葉は、その時と同じように暖かいものだった。ちょっとだけ半笑いというか、からかい成分が入っちゃってるところが、むずむずしてくすぐったくて。

「うう……口に出すつもりじゃなかったのに」
思わずベッドの毛布の中に潜り込みたくなるミャコだったけれど。そんな風にがやがやわいわいやっていても、全く起きる様子のないアキの姿が目に入った。
深い眠り。まるで呼吸すら忘れているかのように。

「そう言えば話は戻るけどさ、アキが眠っちゃってるのって、やっぱりアタイに力を使ったから？」
ふいに心配になって、気付けばミャコはそんな事を聞いていた。
それを受けたルーシァは、そう言えばと相槌を打って。
「そうだよ、だから責任とってねって言いたいところなんだけど、残念ながら違うんだなこれが。

こうやって眠りが深い時は決まってる。アキ様のもとに、新たな予言が降りてくる兆候なの」
はじめはからかい半分、残りはちょっと秘密めいた真面目な口調でそう答えたのだった。

それが、えっちゃんの加わったミャコたち旅の一行の、新たな旅の始まりの合図だったってことを。
その時はまだ知る由もなかったけれど……。

※　　※　　※

そして、次の日。

「魔王に会いに行く」
目が覚めて開口一番発せられたアキの言葉は、そんなある意味ぶっとんだものだった。

「え、えっ？　本気で言ってるの？」
それが何を意味してるのか分からないわけじゃないだろう。
このアイラディアの世界で【魔王】と言えば、闇の根源エクゼリオの御名を冠するレイアである、マイカのことだ。

彼女が唯一信じたコドゥと手を組み、世界を支配せんと目論んだことからそう呼ばれるようになったわけだけど、会いに行くということはつまり、魔王に喧嘩を売りに行くってことで。

同じレイア同士とはいえ、戦うようなことがあればそれこそただじ

ゃすまないだろう。
アキとルーシァ、特にアキの力は未知数だけど、無茶も甚だしかった。
そう思って驚愕の声をあげるミャコだったけれど。

「ぐふふ……魔王って。これはまたごたいそうな名前」
そう言うえっちゃんの反応は、ミャコが思ってたのと少し違っていた。
「ほうほう、翼あるもの、氷の姫と来て次は魔王ですか。それも予言で？」
続くルーシァも、魔王と言う単語に反応しはしたものの、ミャコの思ってたのとは様子が違ってて。
何だか、みんなと魔王に対しての認識に隔たりをを感じるミャコである。

特にえっちゃんは、魔王マイカ、その配下であるふたりのレイアと戦って命を落としたのだ。
その時のことは、今も鮮明に思い出せる。

連れ出さなければよかった。
叫びだしたいくらいの後悔。
えっちゃんを死なせてしまったのはミャコのせい。

ミャコがいなければ。
ずっと、ずぅっとそう後悔していた。

目の前にこうしてえっちゃんが似合わない笑顔で笑ってる現実を目の当たりにしても、その時の痛みが消えることはなく。

「ミャコ、平気？」
「……っ」
と、いったん考え出せばどんどん深みにはまり、奈落に落ちていくだろうミャコの思考を浮かび上がらせたのは、心配げに伺うえっちゃんの声だった。
「あれ？　ミャコさん、もしかしてもしかして、その魔王って人のことも知ってるの？　何だか凄く因縁ありますって感じだけど」
「……」
続く声に顔を上げると、アキもルーシァも何だか心配げにミャコのことを見ている。

「あはは……うん、大丈夫。知ってるって言うか……あ、そっか」
大丈夫だよって、内心の痛みを押し込めようとして……気付いたことが一つあった。
ミャコの知っているアイラディアと今いるこの場所が違うかもしれないってことはもちろんありきなんだけど。
ミャコがこのルフローズの村に来て、レッキーノの氷山からえっちゃんを連れ出すことになった頃はまだ、えっちゃんの『氷の姫』っていう通り名みたいに、マイカの『魔王』って名声が轟いていたわけじゃなかったってことを。
だから、みんなが知らないのは当然のことなのかもって思ったんだけど。

「ひとりで何やら考え込んで納得してもらっても困るんだけどね、こっちとしては。……で、どうなの？　知ってるの魔王って人のこと？」
そのやり取りで、ミャコが何かを知ってるって確信したんだろう。
ずずいとにじり寄ってきたかと思ったら、寄ってきたのはアキの方

だった。
ルーシァはアキの肩の上にいるわけなんだから、ルーシァがそうしようと考えたら当然そうなるわけで。
アキ自身も、ミャコが何か知っているということに興味を持ったのかもしれない。
ルーシァ以上に、アキはなんだか真剣そうだった。

「ミャコって以外と顔ひろい？　あんまりそういうタイプにはみえないのに」
そしてそれは、えっちゃんも同じで。
「あー、うーんと」

何て言えばいいんだろう。
翼あるものの件もあるし、みんなの言う魔王はミャコの知ってるマイカとは違うかもしれない。
だけど氷の姫は確かにえっちゃんだった。
魔王がマイカじゃない保障もないのは確かで。
かと言って今はまだマイカはそう呼ばれてるわけじゃなさそうだし。
さて、どうしたものかと、考えて考えて。

「えっとね、その、闇のナヴィの……友達のことかもってちょっと思っただけなんだけど」
正直に、だけど違ってもフォローがきくように、ミャコは悩み、曖昧な感じでそう言った。
友達って言ったのは……ミャコの勝手な言い分だけど。
まさか命の奪い合いをした者同士とも言えないし、違う形で出会っていれば、マイカとは友達になれるかもって思ったのは確かだったからだ。
と、ミャコはそこまで考えてあることを思い立ち、口を開いた。

「その前にさ、アキの予言って正確にはどんなものだったの？」
アキの予言は、悲しい結末を迎えるかもしれないものたちを救うためにある。
それは確か、アキ自身が言っていたことで。
その予言の内容を聞けば、本当に魔王がマイカの事を言っているのか分かるかもしれないって、そう思っていて。

「……闇色に落ち、魔王は生まれる。たったひとりと決めた、想うものに裏切られ、棄てられて」

発せられたアキの言葉。
それは、今までのものと比べても随分と具体的に、ミャコに確信と怒りを持たせる、そんな予言だった。

「やっぱり間違いないみたい。その魔王って、アタイの知ってる子だと思う。止めなくちゃ、そんなこと、絶対……」
たったひとり信じていたコドゥに裏切られて。
そんなアキの言葉の通り、マイカが魔王と呼ばれる存在になったのは、まさにその瞬間だったんだろう。
それまでのマイカは、例えそう呼ばれようとも、中身はごく普通のナヴィだった。
たったひとりを想い、その人のためにと生きていた。
たぶん、彼女に命のキセキという力がなければ、レイアじゃなかったら……そう呼ばれることもなかったんじゃないかなって思う。
その事を考えれば、マイカが誰かを想い、誰かのためにその命を捧げることを止める権利はないかもしれない。

だけどミャコは、マイカを助けたかった。
たとえお節介だと言われても、そのことで涙を流すマイカを見たくなかったんだ。

「……同感だな」
強い意思を秘めた、アキの黒い瞳が燃えているのが分かる。
言葉は短かったけれど、絶対に止めるといった怒りにも近い感情がそこに含まれているのが分かって。
「はりきってるねぇ、ふたりとも。ま、ワタシもその気持ちは充分に分かるけど」
「ぐふふ……魔王を助けにいく。どんな子かなミャコのともだち、会ってみたい」

続くのは、ルーシァとえっちゃんの同意の言葉。
あまりにも一緒にいることが自然だったから失念していたけど、えっちゃんはミャコたちについてくる気満々らしい。
だけどミャコは、そのことについてはいいとも悪いとも言わなかった。
いつの間にやらアキやルーシァたちと、そのアキの予言にそって『悲しみを止める旅』に同行する気満々なのはミャコも同じで。
えっちゃんが自分の意志で外に出てきてしまった以上、危険なのはどこも変わらないし、だったらそばにいてくれたほうが、いざと言う時後悔しなくてすむって、そう思ったからだ。
……まぁ、一番の理由は、えっちゃんがそうしたいっていう意志を尊重したいってことなんだけど。

「よっし、それじゃさっそく出発しよ。ミャコさん、魔王さんのいる場所って分かる？」
改めてそう発せられたルーシァの言葉に、しかしミャコははっとなった。
ミャコがいなかったらどうやって探すつもりだったんだろって疑問も浮かんだけど。

それより何よりマイカのいるだろう通称闇の城が、アキの予言の有効期限である2〜3日以内では到底いけない場所にある、と言うことを思い出したからだ。

「……分かるけど、どうしよう？　こっから大陸ひとつぶんは離れてるよ？」

アイラディアの世界は、今ミャコたちがいるアイラディア、主に水（ウルガヴの一族が統制するリルミータ、主に地（ガイアット）の一族が支配するユーディル、そして主に闇（エクゼリオ）の力が蔓延するザオーキの4つの大陸がくっつき円を描くようにして構成されている。

アイラディアの大陸はユーディル大陸や、リルミータ大陸とは地続きになってるんだけど、アイラディア大陸からザオーキ大陸へ行くには言葉通り大陸ひとつぶん進むか、あるいは海を渡るくらいしか方法はなかった。

辺りに訪れる、嫌な沈黙。
もっとも、えっちゃんなんかは予言の起こるまでの期限のこととかはまだ話してなかったから、その場の雰囲気に合わせてくれたのかもしれないけど……。

「そっかそっか、それじゃあいったんワタシの家に戻ろっか。実はね、いいものがあるんだよ」
「……ルーシァ」
無理に気勢を張るかのようなルーシァの声。
鋭く、だけど心配げにその名を呼ぶアキ。

それだけでミャコは悟ってしまった。
ルーシァ自身が、アキの予言によってそのルーシァの言う家から、

コドゥの手を逃れるようにしてここにいることに。
そこに戻ると言うことは、自らの身を危険に晒しに行くようなものなのかもしれない。
アキに助けられなければどうなっていたか分からない、そんな恐怖もあるだろう。

「それって……」
「平気平気、っていうかそれしか選択肢がないんだし仕方ないよ。ワタシが躊躇うことで他の子が傷つくことになるなんて嫌だもん」
ルーシァは、ミャコの伺う言葉を遮るようにして、今度はきっぱりとそう言い放った。
そこには、一度救われたことへの恩返しにも似た強い気持ちがある。

「……好きにすればいい」
珍しく、ちょっと突き放したかのようなアキの言葉。
きっと、アキの心内でも葛藤があるのだろう。
ルーシァだけでなく、ミャコたちも含めて危険な場所かもしれない場所へと行かなければならないことと。
だけどそれ以外にミャコたちの選ぶ道がない、ということに。

「ええ、好きにしますよー。それじゃあさっそく向かおっか、我が城へ！　時間もないことだしね」
対するルーシァは、つとめて明るい調子で、そんな事を言う。
気持ちは複雑だったけれど。
結局の所、ミャコたちにはそれに頷くしか術はなくて……。

16、臆病風の面目躍如

そうして、ミャコたちがルフローズの宿屋を出たわけなんだけど。

「氷の町になってる」

宿屋の外……正確には眠っていた二階から降りてすぐ広がった光景は、まさにその言葉通りのものだった。

倒壊するほど燃え尽きてしまった建物はなかったみたいだけど、宿屋の一階も含め、村のほぼ全ての建物が凍りついてしまっている。延焼し、くちかけた建物を修復し、氷の家へと塗り替えるかのように。

中には、燃え盛る炎がそのまま残されてるものもある。

「ぐふふ、私の力、最強」

ミャコの感嘆の呟きに対して、得意げに似合わない笑みをこぼす、ミャコとおそろいのフード姿のえっちゃん。

「溶けない氷かぁ。やっぱりあの氷の棺と同じ材質なんだよね？」

ルーシァの問いにも、心持ち胸を逸らし頷いている。

そのやり取りに思い立ち、愛想良く送り出された（えっちゃんが氷の姫であることはフードのおかげかとりあえず気付かれなかった）宿屋の壁に触れてみた。

なるほど、氷のように冷たいけど、触れることで溶ける気配はまったくなかった。

このえっちゃんのレイアークで作られた氷は、手で触ったり陽に晒されたりするくらいじゃびくともしないんだろう。

それこそ、えっちゃんが許可しない限りは。

なんというか、流石レイアーク。出鱈目な力だった。
だけど、ミャコが驚いて立ち尽くす派目になったのは、その事だけじゃなかった。

「村の人は自分の家が氷になっちゃってるのに、あまり気にしてないんだね……」
そうなのだ。ミャコが一番違和感というか、おかしくないって思ったのはそのことだった。
宿屋のおばちゃん、通りを歩く人々。通りに並ぶ売り子のひとたち。ナヴィとコドゥが半々なのは、もう慣れてきたけど、誰も彼もがミャコが思うほどに氷の彫刻と化した町並みに違和感を覚えていない感じだった。
むしろ、それを当たり前として受け入れている節もある。

「そりゃそうだよ。村の人たちはみんな知ってるからね。ルフローズの村が翼あるドリードに襲われて、火の海になる所を、氷の姫がそのすっごい力で止めてくれたってね。幸いなことにみんなの家も、炎が中まで入ってきてるとこはまだそんなになかったから、暮らすのには支障ないし……村の人たちも、感謝ことすれ、文句言う人はいないんじゃないかな、たぶん。あ、でも今はもうなんでもない感じだけど、昨日の夜はみんな帰ってきてまぁ、騒がしかったよ。流石にね」

ミャコが昨日の顛末を知らなかったのは分かっていただろうから。
一度に頭に叩き込め、とばかりにまくしたててくるルーシァ。

「そう言えば村の人たちって避難してたんだよね。……アキの力だっけ」
「そうだよ、アキ様のあらぶる力とエミィさんの清廉された力が村を救ったのさ」

「……」
ミャコの言葉に、何故か得意げなルーシァ。
当事者のアキは何も語らない。

ミャコが見逃してしまったアキの力。
知りたくないと言えば嘘になるけれど。
たぶん、その時が来れば自ずと知ることになるんだろう……ってことにしておく。
その代わりに気になったのは、ルーシァの言葉の前半部分だった。

「でもさ、それって大丈夫なの、えっちゃん？　氷の姫が村を救ったって、みんな知ってるってことなんでしょ？」
ミャコは辺りをちょっと警戒するように見回しながら、そうえっちゃんに問いかける。
「だいじょぶ、私がそうだってことは誰もしらない。たぶんみんな私が棺から出てることも知らないはず。……棺のなかにちゃんとかわり置いてきたし」
すると、えっちゃんは心持ち小声でそう言ってから、ぐふふとやっぱり似合わない笑みをこぼした。
まぁ確かに、こんな笑い方するえっちゃんが姫だとは思わないかもしれないし。
えっちゃんがだいじょぶだと言うなら、根拠はないけど大丈夫なのだろう。

「だからばれないうちにここを出ることをおすすめする」
とか思ってるそばから不安になってくるえっちゃんの呟きが聞こえて。
「そっか、それじゃ早く山を降りよっか」
本当に大丈夫なのかなぁって、ちょっぴり不安になるミャコなのだった……。

※　　※　　※

時間が押していることもあって、チャウスの下山の道のりはかなりの強行軍になったわけだけど。
氷の姫なんて通り名を持つえっちゃんはそう見えて結構体力があって。
夕暮れまでにはヤーシロの町まで辿り着くことができた。
もう少し時間があればセイルさんの宿屋でゆっくりする所だったんだけど。

涼しい顔のアキや、そんなアキの肩に乗って楽ちんなルーシァはもちろん、久しぶりの外に感動しているのか、はしゃいでいるようにも見えるえっちゃんの元気ぶりにも押されて、セイルさんには挨拶だけしてそのままルーシァの家へ向かうことにする。
一度、世界のだいたいの流れを体験していたミャコは、当然ルーシァの言う『家』のある場所には予想がついていた。

主に風と氷、そして金の根源の力が溢れ、支配するアイラディア大陸。
４つの大陸に囲まれて円を形づくる母なる海。
金の一族が住まう地域は、その海に近い場所にある。
金の根源（ヴルック）の力により、独自の文化を持つグーラ王国がその中心だ。
ルーシァの家というのは、その外れにあるヴルックの洞窟のことだろう。

その洞窟は海にほど近く、海の満ち引きによって地形が変わることを知らなかったミャコは。

かつてここに立ち寄った時、洞窟の存在に気付けなかった。
見逃してしまった。

ようやくそれに気付いて、洞窟の中へと立ち寄った時には、もう手遅れだった。
グーラ王国の手が、洞窟の奥にまで伸びてしまっていた。

そこで何があったのか、ルーシァに何が起こったのか、それを知る術はもうないのだろう。
それは、ルーシァにとってもミャコにとってもいいことなのかもしれないけれど。
ミャコがそのヴルックの洞窟で会ったルーシァは、今の姿とは似ているようで、やっぱり似ても似つかないものだった。

赤銅色に光る……山のような体躯。
幽鬼のごとくゆらめく、鉄仮面の面差しから覗くのは赤い瞳。
その強烈な印象は、ミャコの心から離れていくことはない。
いや、離しちゃいけないんだと思う。

地の底から響くような声で名を名乗って。
楽にして欲しいと懇願してきたルーシァ。
最後の理性でミャコに願いを託してきたルーシァのためにも。

「さてさて、見えて来たよ我が城が」
そんな事を考えながら先頭を歩くアキ、その肩に乗っているルーシァの小さな後頭部を見つめていたら。
浜辺と洞窟が一望できる小高い場所へやってきた所で、ルーシァがくるりと振り向いた。

「……っ、あ。もう？」
はっとなって辺りを見回すミャコ。
それだけ長いこと自分の世界に入っていたのか、気付けばすっかり暗くなっていて。
右手がやわっこくて冷たいと思ったら、ミャコの無意識だったのか、えっちゃんが自発的にそうしてくれたのか、ミャコはしっかりとえっちゃんの手を握っていて。

「だいじょぶ、ミャコ？　つかれてる？」
「う、ううん。大丈夫。えっちゃんこそ、氷から出てきたばかりで平気なの？」
「へいき。むしろ楽しい。外の世界は止まることなく動いてるから」
流石に休みなしだったから、そう言うえっちゃんにも僅かに疲労の色が滲み出ているのが分かる。
でも、それより楽しい気持ちの方が強いのは本当なんだろう。
ここまでぼっとしてて、そんな楽しんでるえっちゃんと一緒に楽しめなかったのはちょっと残念に思えたけど。

「アキたちは？」
「問題ない。いや……むしろ問題なのはここからだろうけどな」
聞くと、ちょっと意味深なアキの言葉が返ってくる。
いや、そもそも返事が返ってきたってことは、意味があるってことなんだろう。
ミャコは、改めて辺りを見回す。
今の時間だと、洞窟の入り口は海の中で見えない。
だが、そこに洞窟の入り口があると分かるように、海面すれすれのところにほのかな黄色い光がともっていた。

カンテラや松明なんかじゃなく。
角ばった形をしているそれは、グーラ王国の技術の粋を集めたもの

のひとつだったはずだ。
それがつけられているってことは、暗にここはグーラ王国の支配下に置かれている、といってもいいのかもしれない。

「うーん、明かりがついてるってことは、中にグーラ王国のヤツラがいる可能性も否定できないね」
と、到着の宣言をしたっきり海の方、洞窟のある場所を見据えていたルーシァが低い声でそう呟く。

グーラ王国は、アイラディア大陸では唯一の王国でありながら、閉鎖的、排他的な部分のある国家だった。
その城下町でさえ、グーラで生まれたコドゥ、ヴルックに依る力を持つナヴィを除けば、王の許可印が入った通行証が必要になる。
他大陸それぞれの盟主国ですらその交流は乏しく、何か他の国には公表できないような何かがあるのではないかと、あらぬ噂が立つほどだった。
あの変わり果てたルーシァの姿を慮れば、それは噂ではなかったのかもしれないけれど。

「中にって、海の中？　グーラの人たちって、そんな事もできるの？」
洞窟の中は、水の（ウルガヴ）……熟達したナヴィでもない限り、通り抜けるのは難しいんじゃないかなってくらい海水が浸水するのを、ミャコは知っている。
だから思わず出た、そんな疑問だったんだけど。

「まぁ、元々できないことを可能にするのがヴルックの力だからね。海の中を影響なく進める道具は、ワタシも考えてたし、ワタシの家を勝手に占拠したヤツラがその方法について気付いていても、おかしくはないかも」

コドゥはナヴィの力を使って、暮らしを繁栄させてきた。
だけど、グーラ王国がこだわったのは、ナヴィの力を使わずとも、コドゥがナヴィのような力を使えるようになる、そんな技術だった。
遠くと遠くで連絡する道具とか、氷を使わずとも食べ物を保存しておける道具とか、炎なしに明かりを灯す道具とか、上げればキリはないけれど、そう言ったグーラの技術だけは、アイラディアの世界じゅうに広がっている。

グーラ王国が閉鎖的なのは、その技術のノウハウを独占したいって気持ちもあるのかもしれない。
ルーシァが言うような道具は、何だか規模が違いすぎてミャコは想像もつかなかったけれど。
金の御名（ヴルック）を持つルーシァが考えていたというのなら、そういうものもあるんだろうなって、気もしなくはなかった。

「ルーシァの言う通り、まだヤツラがいるとするなら、その目的はなんだ？」
と、そこに真剣な口調でアキが口を挟む。
「自慢じゃないけど、あそこにはいい道具がそろってるからねぇ。ヤツラにとってみれば宝の山なんじゃないかな」
一見、あっけらかんとしたルーシァの言葉。
だけど、そこには住処を奪われた悔しさも確かにある。

「ルーシァが帰ってくるの、待ってた？」
そんなルーシァを見て、どうやらえっちゃんも同じ考えに至ったらしい。
改めてその可能性に気付かされて、辺りに重苦しい沈黙が下りる。
たぶん、行く前にアキが渋っていたのは、その事を見越していたからなんだろう。

「このまま進めば……戦いは避けられないだろうな。」
「……」
一見、ただ起こるだろうことを述べているだけのように見えたアキだったけれど。
ミャコには気付くことができた。
その言葉のうちに潜む、怒りにも似た激情を。
ミャコがそれに気付けたのは、彼らが前の世界でルーシァにした仕打ちを知っていたからこそなんだろう。
だとすると、アキ自身にも同じことが当てはまるのかもしれない。
アキの未来を予言するという力。
一体どれくらいまで見えているんだろう？
それに、俄然興味が沸いてきたミャコだったけれど。
「ううん、さすがにこのまま真正面からは行かないって。実は、あの入り口とは別の入り口があったりするんだよねーこれが」
さっきまでの調子はどこへやら、朗らかにそんな事を言ってくるルーシァがそこにいて。
いささか拍子抜けしつつも、そんなルーシァに従い、ミャコたちは見晴らしのいい丘を下り浜辺へと近付く。
かと思ったら、洞窟の入り口のある場所には向かわず、浜辺からそこを避けるようにして森の中へと入った。
波音だけだったところに、突如として加わる生き物の声。
浜辺を外から覆うように広がる森は、ヴルックの洞窟の天井部分に座している。
突き出す半島の形をしているそれは、突き当たりまで向かえば当然

海に出ることができた。
だけど、今さっき通り過ぎたばかりの浜辺を除けば、望む海は随分と遥か下にある。
文字通りの断崖絶壁。
当然、すき好んでこんなとこを降りていくやつなんかいるわけないって感じなわけだけど……。

「ほい、今度こそほんとについたよ。この下のとこなんだけどね、ワタシしか知らない秘密の入り口があるんだ」
ルーシァの感覚では、そうでもないらしかった。
濡れた岩肌と波しぶきしか見えない……ちょっとシャレにならない高さの向こうを指差し、そんな事を言う。
「何もないように見えるけど」
「そりゃそうだよ。秘密の入り口だもん。一見しただけじゃ分からないさ」

不安なミャコに、自慢げなルーシァ。
どうやらすでにルーシァの中ではここを降りるのは確定事項らしい。
まぁ、風の祭壇の身の毛のよだつ高さに比べれば、地面が見えるだけマシと言うか、地面が見えるからこそ怖い気はしなくもないけど。

「ふっ」
「えっ！　も、もう！？」
そんな事を考えているうちに、なんの躊躇いもなくアキがひとつ息を吐き、軽く地を蹴って、飛び降りていく。
「お先ーっ」
風に流されて、そんなルーシァの人任せなのんびりとした声が届いて。
ちょっとやばい速さでぶつかる！　と息をのんだ瞬間。
まさしく時でも止まったかのように、ギリギリのところでアキの身

体が中空に制止した。
時の力を使ったのかな？って考えるヒマもあらばこそ。
たん、と軽い音を立ててアキがしぶく岩肌へ着地する。

「ほぇぇ、見てるほうが怖いよ、もう」
「ぐふふ……おもしろい」
不安一杯のミャコの呟き。
不敵な笑みを浮かべるえっちゃん。
一瞬、えっちゃんの言っている意味が理解できなくて。

「おさき」
おさきってなんだろうって考えてる間にも、あろうことかミャコを置いて中空に身を投げ出すえっちゃん。
危ない！って思って手を伸ばしかけたけど。

「ほ、ほ、ほっ」
えっちゃんが声を上げるたびにピキピキと岩壁から氷でできた足場が迫り出してきて、まるで階段でも降りるようにして下まで辿り着いてしまうえっちゃん。
みんなそれぞれの特性を生かしてるんだなあとミャコは感心していて。

「ミャコ、はやくー」
「……」
あれよあれよと言う間に消えてゆく氷の階段。
見えるのは、やっぱり洒落にならない高さから見上げてくる、何だか期待の眼差しのえっちゃんとアキの姿があって。
ルーシァなんか、ミャコが降りてくるのなんか当たり前って思ってるのか、ミャコのことなんか見てもいない。
えっちゃんの作った氷の階段を使って降りればよかったんじゃって

気付かされたのは、最早手遅れなその瞬間で。

（高所恐怖症なんですけど……なんて今更言えないよね……）

期待に満ち満ちた目。

そりゃそうだろう。

風のナヴィと言えば、１２種族あるナヴィたちの中で唯一その力で空を支配することのできる種族だからだ。

しかもミャコはその代表とも言えなくもない風のレイアだし、翼あるものなんて通り名までついている。

まさか、まともに飛んだことなんてほとんどない、なんて知る由もないだろう。

かといってここで降りられませんと泣きつくのはあまりにも情けない。

アイラディア様からもらった翼を使うこともちょっと考えたけど……その案はすぐに消えた。

それを背中につけると言うことは、翼あるものであることを覚悟しなければならない。

そんな怖さがあったからだ。

「ば、ヴァーレストよ！　力を貸して！」

ミャコはほとんど半泣きの投げやりでそう叫ぶ。

辺りの風をコントロールし、背中に風の翼をイメージする。

風は友達、そういう気持ちを持って飛べばきっと風も……。

ビュウウウッ！

言うことを聞いてくれるかもしれない、なんて考えたのが悪かったかどうかは分からないけれど。

ミャコは突然の突風に煽られてぐるぐると回転しながら落下してゆ

く。

「……ッッ！」

目を回し悲鳴をあげるミャコ。

だけど、その事すら風にのまれてかき消されて、ぐるぐるの視界の中、あれよあれよと言う間に近付いてくる波打つ地面。

ぶつかるっ！って思って目をつむり衝撃に備えて縮こまる。

だけど、来るであろう痛くて冷たい岩肌の衝撃は、ふわりとミャコの身体に風が纏わりついて。

気付けばミャコは、片ひざをつく格好でどこ傷つくことなく地面に降り立っていた。

おぉ、とどよめき降ってくるのは、水しぶきではなく拍手だった。

「三回半ひねりか、やるな」

「ミャコ、やっぱりすごい」

「何もそこまで派手に決めなくてもいいと思うけど」

三者三様のリアクション。

だけどそこには、一様に賞賛が混じっている。

風にいいように弄ばれただけのミャコには分からなかったけれど、どうやら風のナヴィとしての体裁だけは保てたらしい。

「ははははっ……それほどでも？」

ミャコは複雑な心境の中、その喝采に答え、苦笑する。

「よし、それじゃみんな無事に降りられたところで行きますかね」

そして、そんな余韻に浸る間もなく、ルーシァがそう呟いた。

「中は真っ暗だからはぐれないように手をつないでこっか。後、こっからは私語厳禁で。……大丈夫だとは思うけど、グーラのヤツラ

に感づかれても厄介だから」
続くルーシァの言葉を受けて、アキが手のひらを差し出してくる。
それをいつぞやのように掴み、見上げると、いつの間にやらしぶく岩壁の窪まったところに、ぽっかりと黒い穴が開いているのが分かった。
さっきミャコが降りる前にルーシァが岩壁に向かって何やらやってたのは、その抜け道を開くためだったんだろう。
ミャコはそう納得して、えっちゃんに手のひらを差し出す。
それにちょっとだけ笑みをこぼして手を繋いでくれる、えっちゃん。

ふたつのぬくもり。
同じようでいて感覚が全く違う。
その感触にも個性がある。
前の世界……その記憶ではほとんどする機会のなかったこと。
文字通り身体も、心も繋がっているような気がして心地いい。
癖になりそうかも、なんてことを考えていると。

「それじゃ行こう。アキ様、道はアタシが指示するから、よろしくっ」
再び指揮を取るルーシァ。
まぁ、ここはルーシァの勝手知ったる我が家なわけだから当然と言えば当然なわけだけど。

「わわっ」
その言葉を合図にして、ぐっと手を引っ張られて。
よろめいたのは一瞬。

みんなして連れ立って、暗闇の広がる穴の中へと入っていったのだった……。

17、臆病風の、内なる衝動

ルーシァの言う、秘密の裏道。
その中は本当に真っ暗だった。
どちらかと言えば夜目の利くミャコでさえ、道が分かれてるとか、うねってるとかが、かろうじて分かる程度で。

そんな中、アキはとにかく早かった。
足音をたてないかわりに、迷いもない。
いくつもに枝分かれしている水の滴る背の低い道を、止まることなくずんずんと進んでいく。
ルーシァはさっき指示するって言っていたから、喋らずともそれができる方法があるのかもしれないけど。

ミャコには、アキとえっちゃんの手を離さないでいるのが精一杯だった。
道を覚える余裕すらなく、ただルーシァの言いつけを守って語ることなく暗闇の中を進んで。

しばらくすると、それまでと地面の様子が変わっていることに気付く。
でこぼこつるつるとしていた岩の道は、いつの間にやらならされた平らな道になっていた。
目的地が近い、そう思い気持ちが浮かび上がりかけた、その瞬間。
「……っ！」
ふいに、数人が駆ける足音が近い天井から聞こえてきた。
息を殺すように、立ち止まりしゃがみこんだアキ。
ミャコもえっちゃんも、それに倣ってしゃがみ込んだ。
どうやらこのルーシァの家にグーラの人達が誰かが入り込んでいる

というのは本当らしい。
しかも、それなりの人数。
自然と緊張感が高まる。
どんな音も聞き逃さぬようにと、聞き耳を立てて。

案の定と言うかなんというか、上の人達は中々ミャコたちの頭上付近から去ろうとしない。
それは何かを探しているようで。
なら彼らは、一体何を探している？
ミャコがそう思った時。

「下だっ、下にいるぞ！　反応があるっ！」
「……ちっ」
その決定的な言葉が、はっきりとミャコの耳に届いて。
怒りのこもった舌打ちをするアキ。
ミャコたちの方を一度だけ振り向き、立ち上がって駆け出す。
ミャコは、やっぱり引っ張られるようにしてアキの後に続いて。

目指す目的地は近かったんだろう。
すぐに丸くくり抜かれて、ちょっと広くなってる場所へと辿り着いた。
その対面には、何やらごちゃごちゃくっついた赤い光の点滅している鉄の扉がある。
アキは、ミャコたちを引っ張ったまま鉄の扉に駆け寄った。
そして、体勢を低くしたと思ったら、肩上にいたルーシャが扉の光っててごちゃごちゃした部分にその小さな手を伸ばした。
そのまま、目にも留まらぬ速さで何かを操作する。
すると、赤い文字が浮かび上がった。

それは数字の羅列。

一見デタラメに見えるたくさんの数字の並び。
３０桁を超えたところで数えるのを諦めたミャコをわき目に数字はどんどんと増えて横滑りしていって。
ふいに聞こえる、ちん、と金属を打ち鳴らす音。
扉の周りから噴き出す水蒸気。
何が起きるんだろってミャコが目を白黒させる中、その鉄の扉は勝手に開きだした。

「おぉー……っ」
感嘆の声をあげるえっちゃん。
だけど、声を出したら駄目なことに気付いたのか、慌てて口を噤む。
そんな、微笑ましいえっちゃんに見とれていると、またもや問答無用で引っ張られた。

勢い余ってえっちゃんと一緒に転がるようにして、ミャコは開かれたその扉の中に入る。
入った扉のその先は相変わらずの真っ暗だったけど、そこそこ広い、いや……だいぶ広い四角い部屋だということが分かって。

闇に紛れて、ミャコよりもずっと大きい、たくさんのものが置かれているのに気づいた時。
扉の脇にいたえっちゃんを追いやるようにして、ぶしゅうと白い煙が噴き出し、鉄の扉が勝手に閉まった。
がちゃん、と何かが嵌るような音がして、扉が消えてなくなる。
一体どういう仕組みだろう。
無意識のままに扉に近付こうとして……ぱっと辺りが明るくなる。

「みぎゃっ！？」
突然の光に目をやかれて、思わず声を出してしまうミャコ。
「静かにね。ここまで来れば安心だけど、用心することに越したこ

とはないから」
すると、やっと喋れることに安堵しているかのような、ルーシァの囁きが聞こえた。

「だいじょぶなの？　みつかっちゃったけど」
それに、まだ安心するのは早いんじゃないのかなって、ミャコの気持ちを代弁するかのように、えっちゃんが小声で呟いた。
「平気平気、この場所にさえ来ればね。そこの扉あるでしょ？　これってワタシだけが知ってる特別なパスワード……まぁ所謂ひとつの『金』のナヴィだけが使える呪文みないなものなんだけど。いくらグーラのヤツラと言えど解読には時間がかかるだろうね。もちろん強度だってばっちり。少なくとも、ワタシたちがここでするべきことを終えるまでは、間違っても邪魔はされないよ」
すると、返ってきたのは今までで一番って言ってもいいくらい自信に満ち溢れたルーシァの言葉だった。

ルーシァの示す扉のあった場所を見ると、そこには灰色の壁しかない……と思いきや、壁にははめ込まれた形で同じ色の扉がはまっているのが分かった。
なるほど、だからさっき消えたみたいに感じたんだろう。
っていうか、見てて気付いたんだけど、こちらからだと本当にただの壁だった。
向こう側の人が入ってくるこない以前に、ミャコたちも出られないような気もするんですけど……。

「ま、外で騒がれてもなんだし、とっとと用事済ませちゃおっか。……アキ様、こっから見て右奥、一番遠いとこに、青い布のかけてあるやつがあると思うんだけど、そこまでお願いします」
「……」
ミャコがそんな疑問を投げかけるより早く、最早御者のような物言

いでアキにそんな事を言うルーシァ。
対する長いアキの沈黙は、それに腹を立てている、というのとはちょっと違うようだったけれど。
言われるままにミャコたちは、部屋の奥、随分と大きな青い布のかけられた何かがある場所までやってきた。
アキは、ルーシァが言葉を発するよりも早く、その青い布を取り去る。

「おおー、でっかい」
「鉄の……何？　これ？」
するとそこには、青光りする鉄でできた何かがあった。
それは一見すると、翼あるもののような大きな翼を持った何かが、その翼を一杯に広げて、空を飛んでいる姿を切り取って鉄の彫刻にしたみたいな、そんな感じだった。
それは、レッキーノの氷山であいまみえたガルラに匹敵するくらいの体躯を持っている。

「ふふふ、驚いてるね諸君。これぞ我が能力（ちから）の真骨頂！　人を乗せて、翼あるもののように夢幻の空を舞う、その名も『ブルバドゥ』よ！」
ミャコやえっちゃんのリアクションが、期待に沿えるものでテンションが上がったんだろう。潜めていた声はどこへやら、朗々と得意げにそんな事を言うルーシァ。

「いるぞ！　この向こうだ！」
と、そこにタイミング悪くそんな声が遠くに聞こえてきた。
「……コドゥ、たくさんいる」
上がりかけたその場の空気が、そんなえっちゃんの言葉によって、冷や水を浴びせ掛けられたかのような緊張に取って代わる。

ドゴゥンッ！！
「……うひゃっ？」
続いたのは、今の壁の継ぎ目になってる扉の向こうからの爆発音だった。
無意識なのかあえてなのか、繋いだままだったえっちゃんの手の力が強まる。

おそらく、発破か何かを使ったんだろう。
ミャコたちと同じ道を通ってきたのか、それとも他に別の道があったのか。
ミャコたちに気付いてからの手早さときたら、目を見張るものがあった。
それほどまでに、ミャコたちの……いや、ルーシァの力や、命のキセキが欲しいのだろうか。
呆れる一方で、そんなことは絶対にさせないって、強い気持ちミャコの中で燃え上がる。
ざっと辺りを見回してみたが、全て鉄の壁に囲まれていて逃げ場はない。

だとすると手段はひとつ。
戦うしかないんだろう。
狭い洞窟の道、逃げ場はないのは向こうも同じだ。
ミャコのレイアークを、開いた扉と同時に繰り出して……。

「ルーシァっ」
なんて、ちょっと物騒なことを考えていると、急かすようなアキの声が聞こえてくる。
「……案外幼稚だなぁ、壁があったらいきなり爆破ですか。そんなんじゃ一生かかったって壊せやしないってのに」
対するルーシァは、そんなアキの言葉を聞いているようないないよ

うな、皮肉げな声をもらしていて。

「まぁいいや、とっとと脱出しましょ。ほらほら、アキ様は前に乗って、ふたりは……そうね、エミィさん、ミャコさんの膝の上で我慢できる？　これって二人乗りだからさ」

かと思ったら、逆に急かすみたいにそんな事を言った。

「……」

「わかった。ほらミャコ、はやく」

それを即座に理解したのか、一つ頷いて前方……（どうやらそれは乗り物らしい。前後に並ぶ形で、翼の真ん中部分がへこんでいた）の席へと乗り込んだアキ。

一方のミャコは、わけの分からないままにえっちゃんに背中を押されるようにして乗り込んで。

「よいしょっと」

「あわわわっ」

それに続いて乗り込んでくるえっちゃん。

あろうことか顔を付き合わせる形で見上げるようにぎゅっと抱きついてくる。

「おもい？」

「にゃ！？　ははっ、まさかっ、そんなことはないけど……」

平気そうなえっちゃんに対し、ミャコは冷や汗だらだらものだった。

何て言えばいいんだろう？

ふと気を抜けばわーって叫びたくなって、ミャコの中の抑えていた何かが暴れ出してしまうような……そんな感覚。

おんなじナヴィのはずなのに、何でこんなやわっこくてあったかいんだろうって考え出すと、全身のぞわぞわ感が止まらない。

「ぐふふ、たまりませんな」

「……みぎゃっ！？」
そこに止めをさすように、えっちゃんの意地悪な笑顔。
似合わないこと甚だしい笑い声。
ぼふんと、胸の谷間に吸い込まれる、えっちゃんの顔。
かっとなった。もう、色々と。

自然と、ミャコの手が伸びる。
鋭い爪を潜ませたミャコの手のひらが。
見下ろすえっちゃんの首は、その両手で余るほどに細く華奢で……。

「ちょっとちょっと、じゃれあうのはいいけど前向いてなきゃ危ないよお姫さま。これから空を飛ぶんだから」
「む……そうか、それじゃ仕方ない」
「くしゅっ……？」
それは、ミャコが我を失うほとんどギリギリのタイミングだった。
ニヤニヤしてるのが想像できるルーシァの声。
それにしぶしぶといった風に、えっちゃんがもぞもぞと方向転換。
そのおかげで、えっちゃんのつやつやの髪がミャコの鼻をくすぐって、くしゃみひとつで我に返る。

「あ、あれ？」
「あ、ごめん」
ミャコは、何が起きたのかも分からず呆けていると、えっちゃんは見上げるようにしてそう言ってきた。
「え？　な、何で急にこんな？　ち、ちち近いよっ！？」
触れるほど、というか完全に触れ合ってる距離。
背後にいるミャコを見上げる視線がやばいくらいにツボで。
しかも、何故か手持ち無沙汰になっていたミャコの手に気付いたのか、抱えるように握ってくるから……もうたまらない。

「……きゅう」
ミャコの完全敗北だった。
ミャコの弱っちい心は、距離感ゼロのおいしい……じゃなくて、危険な状態に耐えられるはずもなく。
そんなミャコにできることは、その意識の中へと撤退することだけだった……。

18、臆病風、世界の差異をとみに思う

風の音が聞こえる。
強く、早く……まるで空を飛ぶような風切り、流れる音が。

それと重なり聞こえるのは、なにか大きなものの鼻息。
ぶろろろと、間断なくミャコの耳朶をうつ。
ふと、鼻先を覆うように甘い香りがして……ミャコは目を覚ました。

「っ、わわわっ」
視界一杯に広がる、えっちゃんのさらさらの髪。
ミャコの鼻先にもたれかかってくる。
慌てて飛び退こうとしたけど動けなかった。
何か、狭いところに座っている。
風に飛ばされぬ命綱代わりにと、えっちゃんがミャコの手を掴んでいる。

ごつ。
「ふぎゃっ」
結果、えっちゃんに思い切り頭突きされました。
そのおかげでミャコは再度、はっきりと我に返って。
もう一度辺りをきょろきょろと見渡した。

空、雲、風。そして頭上を照らす朗らかな太陽。
目に映るものは、空舞うことでしか味わえないことばかり。

「と、飛んで……」
思わず悲鳴をあげそうになったけれど、鼻を強打してきたえっちゃんが、心地よい風に誘われたのか眠っていたから、慌てて口を噤む。

「お、ようやく起きたねミャコさん。どう？　ワタシの最高傑作は。ミャコさんの翼にも負けてないでしょ」
と、ミャコが目を覚ましたことに、ルーシァが気付いたらしい。
何故かルーシァとおそろいで色違いのかぶとをかぶっているアキの肩上で、得意げに胸を張っている。

「空を飛ぶって、そのままの意味だったんだ。これがルーシァの……金のナヴィの力なんだね」
金のナヴィの力。
それはやはり、他の１１の力とは一線を画しているらしい。
人々が生きていく上で便利なものを作る力。
そのナヴィの力量にもよるだろうけど、ようは何でもありに近い。
前の世界では、やっぱりまともに体験することのなかった力で。

風のナヴィでもないのに空を飛ぶことができる。
ミャコはその言葉以上に、ルーシァの力の凄さを感じていた。
たぶんきっと、ここまでの力が使えるのは、金の御名（ヴルック）を冠するレイアである、ルーシァだけなんだろうなって、そう思って。

「この空飛ぶ道具を作る力って……ルーシァのレイアークなの？」
ミャコは、小声でそう聞いていた。
「いやいや、これはワタシの発明のひとつにすぎないよ」
「へぇ、凄いのね。ルーシァって」
「いやぁ、それほどでもあるけど？」
それからは、やっぱりお互い小声で分からないことへの質問攻めだった。

例えば、他にはどんな発明をしたの、とか。

いったいこれはどうやって飛んでるの、とか。
機嫌がいいのか、ルーシァも快く答えてくれる。

「あ、そう言えば……どうやってあの洞窟から脱出したの？　コドゥ、たくさんいたはずなのに」
そして、最終的に聞いたのはそのことだった。
結構話し込んでいたけど、包み過ぎ行く風のせいか、えっちゃんは船を漕いだままで。
同じく眠ってでもいるのか、かぶとをかぶったアキはしゃんとした姿勢のまま、一度もミャコに視線を向けることなく、前を見ている。

「ああ、その時のこと？　惜しいことしたね、ミャコさんも。あのタイミングで気絶しちゃうんだもんなぁ」
一体なにがあったの？
そう聞いてくることがなかったのは、ミャコがなんで気を失う破目になったのか、もしかしなくても気付いているからなんだろう。
表情は見えなくても、ニヤニヤしてる様子が、容易に伺える。

「自分で言うのもなんだけど、壮観だったよアレは。ぐいーんって床が沈んでさ、ざばっって滝になったみたいに海が割れてさ。……いやぁ、もったいない。あんな凄いのが見られないなんて」
大げさに身振り手振りの効果音つきで、そんな事を言うルーシァ。
まぁ、脱出できたのは確かなんだろうけど、ミャコが見てないからって、何か誇張してるんじゃないかって思わずそう疑ってしまうくらいに。

「浪漫だな。確かにもったいないことをしたかもしれん」
「うぅ。そんな事言ったって……」
と、そこで。寝てなかったのか、ちゃっかり会話を聞いていたらしいアキが口を挟んでくる。

アキがわざわざ口に出してしまうくらいなんだからほんとに凄かったんだろう。

なんかこんなことばっかりだなって、ちょっとへこむ。
だいたい、今日はミャコが対人恐怖症だって分かってて抱きついてくるえっちゃんが悪いんだよっ。
……って、あれ？

（対人恐怖症？）
何で急に、ミャコはミャコのことをそう思ったんだろう？
ふいに湧き出す、わけの分からない疑問と違和感。

「そう落ち込むな……見えてきたぞ。ザオーキ大陸が」
でも、そんな不可解な感覚は、そんなアキの言葉で……魔法のように吹っ飛んでいってしまった。

「ほんとだねー。いやぁ、近い近い！」
「……ん？　ついた？」
ルーシァが歓声をあげて、えっちゃんが眠気眼でのびをする。

「ぐふふ、ちょうどいいまくら」
「っ？　も、もうっ。えっちゃんてば！」
頭がちょうど胸に当たるのが気に入ったのか、またしても顔に合わない笑みをこぼして寄りかかってくるえっちゃん。
文句は出るけど、微笑ましい成分が強くて、さっきまであったような気がするぞわぞわ感はそこにはない。

ミャコはそれに首をかしげる。
確かめるようにえっちゃんを抱きしめて。
もう慣れたのかな？

なんて思いながら、これから向かうだろうザオーキ大陸へと視線を向けたのだった……。

※　※　※

そんなこんなで。
半分以上寝ていたせいか、ほんとにあっという間の感覚でザオーキ大陸に到着したわけど。

「さてさて、いざ魔王の城へっ！　ミャコさん、案内よろしくっ」
羽ばたきもせず、ルーシァの言うブルバドゥが降り立ったのは、波寄せる白い砂浜だった。

続くはずの大地は、大波のように突き出しせり出している、えぐれた岩壁で見えない。
ここに来るまでに気取られてれば話は別だけど、たまたまここに海からやってこない限り、止めたルーシァの力の結晶を見咎めるのは難しいだろう。
そこは、まるでブルバドゥを隠すためにあるような場所だった。

「たぶん、ここからあんまり遠くない場所に魔王の住む城があると思うんだけど」
ミャコはそう言って、返しになって向こうが見えない岩壁を見上げる。
アイラディア大陸からまっすぐ進んできたのなら、これを超えればたぶん城が見えるはずで。

「……」

同じようにせり出す岩壁を見上げているアキがいる。
真剣な面持ちのアキを見ていると、アキなら翼なくても飛び越えていけるんじゃないかなって気がしたけれど。

「フックつきロープもあるにはあるけど、下手なことして崩れでもしたら困るしね。迂回してこ」
「……」
ルーシァがそう言うから、ブルバドゥをそこに残し、ミャコたちは海側に出て、上陸できそうな所まで迂回することにした。
そのことに、何だか残念そうな様子のアキの姿が印象的だったけれど。

「わ、今度はほんとにお城だ。黒いお城」
距離のためか微かに霞んで見える、本物の城を見て、心なしかはしゃいだ声をあげるえっちゃん。
やっぱり、かつてここにミャコときたえっちゃんと、今のえっちゃんは違うんだなってしみじみ思った。
まぁ、えっちゃんとここに来たのはえっちゃんと旅するようになってからずっとずっと後なわけだから、そりゃ違うに決まってるんだけど。
ミャコにはそんなえっちゃんだけでなく、その城すら違うもののように見えてしまう。

砂浜から直接、緑豊かな大地へと続いていくなだらかな丘までやってきて。
ミャコは、改めてその目的の城を見据えた。
見えるのは、夜になったら闇にのまれて消えてしまうんじゃないかなって黒い色の壁を持つ、城の尖塔だ。
それを支えているように見えるのは、ルーシァの家付近にあったも

のとは規模の違う、暗く鬱蒼と茂る森。
ミャコが前にここに来た時は、闇の力によって生まれたドリードたちが跋扈する森だったけれど。
まだ陽が落ち始めたばかりのせいか、何か得体の知れぬものが棲まうような、そんな不気味さは感じられない。

（……それもそっか）
だけど、ミャコはその違う理由が、この時ばかりはすぐに分かった。
あの城に住む主が魔王と呼ばれるのはもっと先のこと。
まだ何も始まってはいないんだから、って。

「あの城に魔王さんがいるの？」
一応だけど、なんて言わんばかりにそう聞いてくるルーシァ。
そこでミャコは、またしても答えに窮してしまった。

えっちゃんの時と同じだ。
ミャコはそのルーシァの問いかけに、確信を持って頷くことができない。
闇のナヴィであるマイカたちが暮らしてるのかすら、この目で見ない限り確たるものが得られないのだから。

「えっと、急な引越しとかしてなければ、いると思うんだけど、氷の姫で世界に広まってるえっちゃんと違って、魔王って呼び名はあんまり広まってないっていうか、ミャコが勝手に呼んでるっていうか、アキの言う魔王がほんとの彼女たちと限らないっていうか……ほら、翼あるものの例もあるし」

だから結局。
ミャコの口から出た言葉は、まとまりのないそんな言葉で。

「つまり、行ってみなければ何もかも分からないってことだな」
返ってきたのは身も蓋もない、アキのそんな言葉だった。
「まぁ確かに、言ってみてからのお楽しみってのはこの旅の醍醐味みたいなものだよねぇ」
でもそれは……口にしたからにはやっぱり意味があったんだろう。
ミャコの曖昧な言葉に納得してくれているルーシァがそこにいて。
もしかしてアキってば、困ってるミャコのことを助けてくれたのかな、なんて思っていて。

「ミャコっ」
それまでルーシァが買ってくれた飴ちゃんを手に城の方を見上げていたはずのえっちゃんが、らしくない誰何の声をあげる。
視線の先には城ではなく、ただ広がる海。
そこに染みを広げるような、ゆらめく何か。

「おや？　船、だね。ひぃ、ふぅ、みぃ、４隻も」
ルーシァもそれに気付いたらしく、律儀にその数を数えている。
「まだそこそこ距離はあるみたいだけど……だいぶ大きいよ。アレ、どっかの軍船かも」

それがほんとん軍の船だとしたら。
何しに軍の船が来たのか。
考えれば、そこには悪い想像しか浮かばない。
一人のコドゥに惑わされ騙されて、魔王と化す破目になるひとりのナヴィ。
それを阻止するためにやって来たミャコたち。
単純に考えるのならば、その船に乗っているのは……魔王をこの世に産み落とす結果となった張本人なんだろう。
前の世界では、結局その黒幕の姿を確認することはミャコにはできなかったんだけど……。

「涙滴の紋様……水の国の船だな、あれは」
同じように船を見据えていたアキが、低い声でそう言うから、ミャコはぎょっとなる。

「水の国？　まさか！？　だって水の国は……ナヴィに一番やさしい国のはずなのに？」
わざわざアキが嘘を言う意味なんてないだろうから、そこにいるのはアキの言う通り水の国の軍船なんだろう。
だけど、マイカに酷いことをしたのが水の国の人たちだなんてなかなか信じられなくて、思わずミャコは反論してしまう。

「おそらく、現王とは無関係に動いているんだろう。他に軍の船を動かせるものがいるとすれば……確か、現王には息子がいたはずだ。子であるのに命のキセキの恩恵を受けられぬと勘違いし、現王にあまりよくない感情を抱いている、と聞いている。おそらくは、独断で動いているんだろう。……もっとも、そんなものは勘違いで、なにか別の理由……現王が友好を結びにこの地へ足を運びに来ただけなのかもしれないけどな」
「……っ」
だけど、返ってきたのはそれ以上に反論の余地を与えないかのような、辻褄のあう完璧な答えだった。
そう、確かに現王……ウルガ王が、ナヴィを傷つけるような真似をするとは思えない。
だけど、彼には息子が二人、娘が一人いた。

そのうちの一人、ガブリエ王子。
後に現王を手にかけることとなる……ミャコの思い出せる限りでは一番だって言っていいくらい憎いコドゥが。

マイカを騙し、泣かせたコドゥ。
魔王にしたコドゥ。
それが、ウルガ王を殺したガブリエ王子と同一人物とするのはいささか暴論な気はするけど。
確かに、水の国の軍船がここにやってくる、その辻褄は合うような気がした。

「友好を結ぶための船か……だったらすごく助かるんだけどね」
だからミャコは反論する代わりに、ごく低いだろう希望的観測を口にする。

「うーん。悩むなぁ。あの船の意思がなんなのか待つべきか。一足先に城へと乗り込むべきか……」
「軍の船、みてみたい気もするけど。コドゥたくさんいたらいやだし」
ここでミャコたちが選ぶべき道は、ルーシァの言う二つに一つ、なのだろう。
ミャコの服の裾を掴んだままののんきなえっちゃんのそんな言葉を聞いていると、
ただ待ってるのは危険のような気もしなくもないけれど。

気付けばその正しい答えを求めるみたいに、ミャコを含めたみんなの視線は、アキに向いていた。
こう、困ったときのアキ、というか、この数日で確実にミャコたちのパーティーのリーダー的ポジションを獲得しちゃってるアキである。
表情はさほど変わってはいないようだったけど。
意外とそんな立ち位置が満更でもなかったんだろう。
視線を受け、一同を見渡したアキは、おもむろに口を開く。

「せっかく先に上陸したんだ。会いに行こう。魔王に。船の彼らはその後に一緒になって迎えればいいだけのこと。善意の客だろうが、悪意の客だろうがな」

いっしょに。

それは、今までアキがそうしていたように、起こる悲劇を防いで、あわよくば行動をともにしよう、と言うことなのだろう。

その言葉に異を唱えるものなど、当然いなかった。

何よりミャコたちがここにいることが、その言葉に説得力を持たせていたから……。

１９、無垢なるは月の色人、木蔵の花

アキの予言を臆面通り考えるとするならば。
あの水の国の軍船に乗ってやってくるものたちは、日の暮れだした今日はやって来ないんじゃないかなって思っていた。
何故なら、彼らが上陸する頃はこの辺りは夜になっているはずで。
力押しで魔王を倒しに……マイカの命のキセキを奪いに来たわけじゃなく、騙して抱き込んで利用する腹積もりなら、日が沈んだ夜に訪問、なんて不審がられてもおかしくないようなことをするとは思えなかったからだ。
少なくとも初めは、魔王となるものの信頼を勝ち取ろうとするはず。
最後の最後まで騙され、信じていたかつてのマイカのことを思うに、それはあながち外れてないんじゃなかろうかってミャコは考えていたけど。

その不審がられてもおかしくない時間帯に、森に入ったミャコたちは。
案の定というかなんというか、思い切り不審の風に晒されることとなる。

それは……陽が赤く暗く染まり出して、ゆったりとした暖かい雰囲気に見えた森の空気が一変した時のことだった。

「……え？」
まるで生き物のみたいに、足を踏み入れたミャコたちを非難するがごとく、茂る葉がざわざわと揺れている。
「何かいる」

それの正体がなんなのか、最初に気付いたのはえっちゃんだった。
指し示すほうに目をやると、両手両足と尻尾を巧みに使って木々の枝づたいに離れていく緑色のもこももした……猿の姿が見える。

「あれは……」
闇の魔王、その片腕のひとり、『ミズ』のレイアークに見えた。
だけど、ミャコの記憶にあるものと比べると、随分と小さい。
たぶんそれは、ミャコみたいに一度に全力を出すタイプのものじゃなく、極力力を使わずに温存する……おそらくは偵察のようなものなんだろう。

ざわざわと、一斉に騒ぐ森。
その数はひとつじゃないらしい。
どうやら、この森一帯を覆っているようだった。
キィキィと警告の鳴き声が連鎖のように木霊する。

そして……。
ざぁっと、一層強い風が吹いて。
流れる雲に陽が完全に隠れ、出番の早いだろうまんまるの月がその顔を覗かせた時。

「来るぞっ！」
アキの緊張感こもった叫びを合図に、それはやってきた。
えっちゃんのレイアークに勝るとも劣らない強烈な存在感を含んだ風とともに。

「グルルルルルッ……」
そいつは、意思疎通なんかくそ食らえって感じで、ミャコたちに向かって低い威嚇の三重奏を漏らしている。

見上げるほどの大きさのそれは、三つの首があった。
青黒く、たくましく引き締まった体躯に支えられて。
三つの首それぞれには、まるで剣のような光沢を放つ、鋭く太い牙が生えている。
間断なくそれぞれが荒い呼気を繰り返し、その牙の隙間から血のような舌を覗かせていて。
極めつけは、その首を、体躯を支える前足だろう。
ひとつの首とは比べ物にならないくらい大きいそれには、五つの刃が仕込まれている。
ブクブクと沸き立つ紫色の何かを滲ませながら。

「あれは……ドリードじゃないな」
「ミャコさんの言うところのレイアークってヤツですか」
レイアだからこそなのか、アキとルーシァの二人は、すぐにそれの正体が何か分かったようだった。
「おー、強そうなわんこだ。ミャコのにゃんことどっちが強いかな」
逆に緊張感のないえっちゃんは、そんな事を言ってふらふらと近付いていきそうになる。

それは、ミャコやえっちゃんがかつて命をかけて戦った相手だった。
その時の恐怖が甦って、ほとんど無意識のままに、ミャコはそんなえっちゃんを引き寄せる。

「魔王の片腕、アズのレイアークよ。レイアークにはレイアークって所だけど」
「こっちは戦いに来たわけじゃないのなら、戦うわけにはいかないよね？」
どうする？っといった感じでルーシァが聞いてくる。
まるで、ミャコに何か策がある、そうと分かってるみたいに。

「この手をまさかいきなり使うことになるとは、思わなかったけどね……」
そんなルーシァに、ミャコは深いため息をついて。
えっちゃんの手を離し、しょっていた道具袋からあるものを取り出した。

「……ほね？」
緊張感のない様子は変わらぬままに、えっちゃんは首をかしげている。
まぁ、徐々にミャコもそんな感じになってはいるけども……。

そう、それは骨だ。
骨に見せかけた、動物兼ドリード用の餌（特大）。
ここに来ることは、分かっていたから……ヤーシロの町で念のために買っておいたものだ。

「ケル！　べぇ！　ロス！」
ミャコは、片腕で何とか持つことのできる特大の骨を掲げながら、ゆっくりと威嚇の声を上げ続けるそれに近付き、その名を呼んだ。
主と身近なものしか知らないはずの、その名前を。

これで全く見当違いの名前だったのなら、ただただ笑えない結果になったわけだけど。
案の定、三匹はぴくりと反応した。
すっと、威嚇の声を止め、息遣いだけが聞こえてくる。
かつて一度だけ、彼らの主であるアズがそう呼んでいるのを聞いたとがあったんだけど、効果は抜群だったらしい。
後は、元々仲良くなるきっかけのつもりで買ったこの骨がどれくらい通用するか、なんだけど……。

「それっ！　とってこい！」
ミャコはそれを彼らの鼻先に近付け、かと思ったら振りかぶって遠くへと投げる。
うまい具合に放物線を描いて、森の茂みの向こうへと消えてゆく骨。

「まさか、そんなことで……」
つられるはずがない。
アキはそう言いたかったんだろう。
ミャコも半分以上、やけくそだったのは確かだったんだけど。

「行っちゃった」
えっちゃんの、ちょっぴり残念な声が辺りに響いて。
かと思ったら、草に隠れた向こう……骨の飛んでっただろう所から、何やら激しく争う声が聞こえてくる。
ミャコにはそれが、一本しかない骨を三匹が喧嘩して奪い合ってるのかな、なんて益体もないことに思えて。

（まさか、そんなわけないよね……）
思わずミャコは苦笑を漏らす。
気づけば、進む道を塞ぐ障害がこうも容易くなくなってしまったことに、一同軽い拍子抜けを覚えていたけれど。

「なんて言うか、ほんとに生きてるみたいだねあのレイアーク。……ま、いっか。戦わずにすんだんだし。今のうちに急ごう」
ルーシァの言う通りだった。
もたもたしていると、戻ってきてしまうかもしれない。
思うより早く、ミャコたちは城へと向かって暗い森の中を駆け出す。

「これからどうするのっ！」
「とりあえず走って！　城の場所は彼らが案内してくれるはずだから！」
走ってるのはアキのはずなのに、走りながら喋ってる雰囲気を醸し出してるルーシァに、ミャコは先行するえっちゃんに手を引っ張られながら、そう叫んだ。
その回りの木々には変わらずざわめきが続いている。
よくよく見ると、そこかしこに光る一対の目は、ミャコたちに付かず離れずに付いてきているのが分かる。
襲ってこようとしないのは、小さな彼らが、やっぱり偵察用だからなのだろう。

「案内してくれる？　ミャコ、あのさるどもと、もう仲良しさん？」
何故だか彼らに対してだけ風当たりの強い口調な気もしなくもないえっちゃんが、器用に背走しながらそんな事を聞いてくる。
「ふふ、まぁね。ある意味、そうかも」
走ってるうちにハイにでもなったのか、ミャコもおかしなテンションでそう答える。

たぶん彼らは、ミャコたちを案内してるとは思っていないだろう。
彼らはただ、城に近付くもの、主に近付くものを監視しているだけなのだ。

よってミャコたちが少しでもそのルートに外れると彼らはミャコたちの元を離れていく。
たくさんのレイアークは、力をあまり使わずにすむぶん、コントロールが難しいのだ。
事実えっちゃんだって、火を消すときに使ったはいいが、命令系統なってなくてばらばらの好き放題だった。
そんなレイアークの力をただ一つの命令とはいえ、固く守らせてい

るのは凄いと言えば凄いんだけど……ちょっとツメが甘かったね。
まさかその習性を知って裏をかいてくるなんて、思ってもみなかったんだろう。

「いたい、いたいょっ！」
「アズちゃん！！」
枝の上を駆ける、ミズのレイアークたちを見やりながら森を走っていると。
やがてミャコの耳に、案の定というかなんというか、二人のナヴィの声が届いてきた。

だけど、ちょっと様子がおかしい。
ミャコはみんなとちょっと顔を見合わせると、その声のするほうへと飛び込んだ。
二人が何者かに襲われてる？……一瞬そんな事を考えてしまったミャコだったけど。
木々の途切れた岩壁の窪みに隠れるようにしていたのは、ミャコの記憶と変わることのない、闇の魔王の片腕、二人合わせて両腕？の、アズとミズだった。

アズは、月の根源アーヴァインの御名を持つレイアで、額に巻かれた青い鉢巻がトレードマークだ。
そこから零れる肩までの髪は、赤い月のような光沢を放っている。
ミズは、木の根源ピアドリームの御名を持つレイアで、その小さな頭の倍はあろうかという桜色リボンがチャームポイントだ。
同じくそのリボンに纏められてる肩口までの髪は、新芽の萌芽を思わせる黄緑色をしていた。
視覚的にもまちまち、よるべの根源も違う。
だけど二人はほんとの姉妹と言っていいくらいによく似ていた。

それは、ミャコとえっちゃんに負けないくらい、二人が仲良しさんなんなのもあるからなんだと思うけど。

危惧していたそれ以外のものの気配はなかった。
遠巻きにミズのレイアークで作られたものたちが見守っているだけで。
それなのに、アズは苦しそうだった。
ミズも心配気にそんなアズの事を気遣っている。
目の前に侵入者がいるというのに、まるで気がつく様子がなくて。

レイアークの力で守られたあの森を抜けられるはずはない。
もしかしたらそんな自信も、二人にはあったのかもしれないけれど。

……ふいに、ああ、そっかと、ミャコは納得してしまった。
ほとんど同じようでいて、確かに違う部分のあるセイルさんやえっちゃんと同じように。
かつてこの場所で会った二人と、今目の前にいる二人は違うんだって。
はっきり言ってしまえば、ミャコの知る二人と今の二人では、レイアとして生きるための経験に大きな差があるんだろう。
ここにいる二人は、世を席巻する魔王と化したマイカにふさわしき片腕になる……
ずっとずっと前の二人なのだ。

だからツメが甘かった。
まだ世界の嫌なことを何も知らない、無垢な二人。
それに気付くと、当初感じていた恐怖感は跡形もなく消え去っていて。

「大丈夫？　どこか痛いの？」
ミャコは、そう声をかけていた。
そこで初めてミャコたちに気付いたらしい二人は、びくりと顔を上げる。

潤んだエメラルドを秘めし瞳と。
青ざめた月を思わせる、瑠璃の瞳。
そこには、一瞬だけ、敵意と怯えが浮かんでいたけど。
気をきかしてアキは剣を納めていたし、ミャコの手を繋いだままの緊張感のないえっちゃんとかがいたし、何よりミャコたちみんながナヴィだって気付いたんだろう。
何やら痛がっているアズの代わりにと、並べるとどちらかと言えば大人しい印象を受ける、ミズが口を開いた。

「わたしたちの森に誰かが入ってきたから、追い出そうとしたんですけど」
何の警戒心もなく、当の侵入者の前で。
ミャコはそれに、どうもいたたまれなくなって。
「あの……ごめんなさい。それって多分、ミャコたちだと思うんだけど」
思わず正直にそう言ってしまった。

「え？」
驚いて、一歩下がるミズ。
きょろきょろと辺りを見回して、ようやく自分のレイアークが権化したものたちが、警戒するようにミャコたちを囲んでいたことに気付いたらしい。
「そ、そんなっ……」

色を失ったようなミズの呟き。
しかもちょっぴり震えてるし、何だか見てるミャコの方が泣きたくなってきちゃって。

「くぅっ。ボクのケルベロスを倒してきたってのか……いたっ、いたたた」
「アズちゃん！　……っ、お願いです攻撃を止めてください、ケルベロスをいじめないで！　アズちゃんが死んじゃう！　わたしがアズちゃんに代わりになんでもしますからっ！」
「……えーと」
二人の剣幕に言葉を失うしかないミャコ。
なんかすごく大げさと言うか、勘違いしているような気がしなくもない。
っていうか、止めてって。
そもそもミャコ、骨っこあげただけで何もしてないと思うんだけど……。

「さぁ、ミャコさん！　か弱きナヴィの悲痛な願いに、どう応えるのかっ」
なんて事を考えていると。
ちょっと離れた後ろから、そんなルーシァの説明的な小声が聞こえてきた。
気付けば、ちゃっかりえっちゃんもアキも後ろに下がっていて……。

どうやら全部ミャコに押し付けるらしい。
ミャコは、内心で深い深いため息をついて。
その仕打ちにひどく冷めた……というか、冷静になったミャコは、こう言っちゃなんだけどこの茶番の真実に行き当たる。

レイアークの力は、言わば使うレイアとイコールだ。

特にアズのように一体で大きなレイアークならばそのダメージはそのままアズに返ってきてもおかしくない。
そうなると、アズが痛がってるのはやっぱりミャコのせいなんだろう。
骨っこが一本しかなかったから三つの首が喧嘩してしまった。
お互いを噛み合うくらいに激しく。
……どうやら、そんなミャコの妄想は正しかったらしい。
未だにアズが痛がっているということはまだ喧嘩してるってことなんだろう。

「とりあえず、アズがレイアークの発動……ケルベロスを戻せばすむことだと思うんだけど」
「……あ」
ミャコの疲れたような、決定的な一言に、呆けたようにミズが声をあげる。
痛がっていたアズの動きも、ぴたりと止まって。

「なんていうか……その、ごめんね」
ミャコには、そう言って苦笑を浮かべることしか、できなかった。
ミャコの記憶にある、二人とは違うってのは分かっていたけど。

そのミャコの心に残る思い出とは逆方向にかけ離れた二人のと出会いを、痛感しながら……。

２０、闇夜の灯火、気がつけばそこにいる（前書き）

毎度のことだけど、サブタイトルがしんどい……。

２０、闇夜の灯火、気がつけばそこにいる

その後。
とても気まずい雰囲気のまま、変に頑固なところがあるらしいミズの何でもしますから発言にほとほと困り果てて。
ミャコはなんとか、ミャコたちがここに来た理由を聞いてもらうということで妥協してもらった。
そのためには、落ち着いて話せる場所でもあればなおいいかも、というわけで。
ミャコたちは、ミズとアズが言うところの、森の基地へと案内されたわけだけど。

「へぇ、これはなかなか、いいね」
二人の言う基地。
それを見てルーシァが感心したような声をあげる。
「えっと……はい、がんばりました」
それに、未だおどおどした様子で頷くミズ。
「凄いでしょ。ミズちゃんは森の木たちが友達なんだょ」
それに、自分の事のように得意げに胸を張るアズ。

ミズと違って喋る鎧……じゃなかった、ルーシァに戸惑ってる様子は最早微塵もない。
ついさっきまでは、アキの肩の上で軽快なトークを始めるルーシァのことを随分と警戒というか驚いていた二人だったけど、そこらへんの性格の違いも、はっきりとしているらしい。
むしろ真反対の性格って言っていいのかも。
それなのに……似てるって感覚を覚えるのは、こりゃいかにって感じだけど。

確かに、ルーシァが唸るのもよく分かる。
ミズが作ったという基地は、言葉通りちゃんと基地になってるように、ミャコには見えた。
しかも、それらは全て、周りの木々で作られている。

まず、基地のメインというか真ん中にあるのは、三本の背の高い木々が葉をつけたままに複雑に絡まってできた物見やぐらだった。
なるほど、これなら空から見てもそこにやぐらがあるとは思うまい。
実によくできてるなと感心する。
それに加えて、作戦会議用の丸テーブルに丸椅子。
枝にかけられたハンモック。
木でできた氷室に鏡台、本棚。
そしてさらに、作成途中だったのか、木でできた設置用の罠なんかもあった。
ルーシァの言葉に素直に頷くだけある、頑張りっぷり。

「あ、お茶を用意しますから、お好きな席へどうぞ」
しかもお茶まで出るらしい。
「ありがと、何か悪いわね」
自然とそんな言葉も出るというものだろう。
ミャコは少し恐縮しつつも、手近な丸椅子へと座らせてもらった。

「あ、それって……ワタシが作った魔法の瓶じゃない？」
「え？　あなたが作ったんですか？　凄いですね。重宝させてもらってます」
何やら薬缶にしては随分と縦に長い銀色の筒を使ってハーブティーを木製の湯飲みについでいくミズ。
そこにアキとともにいたルーシァが声をかけて。

何だか盛り上がっている。
「は～い、隣の人に回してね」
「あ、うん」
ミャコは甘い花の香りと、楽しげに微笑むマイカにつられて笑顔で頷く。
何の花だろう？
おいしそうな匂いだった。

「アズちゃん、お茶だよ～」
「はーい！」
マイカが、物見やぐらに興味を示していたえっちゃんとともにやぐらの上にいたアズに声をかける。
すぐに元気で素直な声が返ってきて。
先程までの緊張感はどこへやら、あったかいお茶の湯気のように、ほんわかしてくる。

「あっ、マイカ様っ！　お砂糖そんなに入れちゃだめですよっ！」
「ええ～いいじゃん。甘いほうがおいしいんだから」
繰り返し行われてるんだろうなって二人のやり取りが微笑ましい。
魂の削り合いに等しいそんな戦いをしたことしか、彼女たちとの記憶はなかったけれど。
まだ魔王になる前のマイカたちの関係はきっとこんな感じだったんだろうなってちょっと思って。

「……あれ？」
ものごっそい違和感、気付いたのはその時になってからだった。
いつの間にか、話のためのお茶会の面子が増えている。

このメンバーだったら、ルーシァの次にちっちゃな（と言うか、ミャコから見ればアキ以外はみんなちびっちゃいんだけど）ナヴィ。
どピンクの派手派手なドレスに、ワインレッドおかっぱ頭。
アクセントのきいた、黒い蝶々の髪留め。
底知れない無邪気さと純粋さに、残酷な修羅のエッセンスを一滴垂らしたかのごとき漆黒を潜ませた紫の瞳。
闇の魔王……マイカ・エクゼリオ。

「あなた、いつの間に……」
今の今まで、そこにいることを認識するまで気付けなかったミャコ自身に驚きを隠せない。
そう、彼女は気付いたらそこにいた。
あくまでも自然に、そこにいるのが当たり前であるかのように。

すっと背中を落ちる冷たいもの。
たぶんそれは、その事だけで、マイカがミャコの知る畏怖すべき対象、魔王と呼ぶに相応しい子だって、実感してからなんだろうけど。
「あたし？　今来たとこだよ？　アズちゃんもミズちゃんも夜になっても帰ってこないからさ、心配になって見に来たの。そしたら、お友達みんなで楽しそうなこと始めてたから……つい混じっちゃった」
そんなミャコの恐れを吹き飛ばすみたいに、マイカは破顔した。
そこには、敵意や殺意のようは負のものは全く含まれていない。
今さっき実感したものが嘘であったかのように。

「あれ？　マイカさまも来てたんだ。それじゃみんなでお茶しょー」
「わ〜い。こんなにたくさんで夜のお茶会するの初めてだね」
この中で誰よりも幼いナヴィが、そこにいるだけで……。

そんなこんなでお茶会が始まって。
マイカのことについては、ミャコの中でうやむやになってしまった。
それは、マイカの本当がどうであろうと、マイカが涙こぼすようなことは絶対に止めたいって、そう考えてる気持ちがあったからなんだと思うけど。
それより何より、楽しげにはしゃぐマイカを見ていたら余計なこと考える必要ないよねってそう思ったからなんだろう。

「ええと、改めてまず自己紹介からかな」
だからミャコは、気を取り直して、集まった面子を見渡し、まずはそう切り出した。
「アキ・リヴァだ。その名の通り時の御名をもつレイアだ……よろしく」
すると、一番手に答えたのは意外にもアキだった。

「やっぱり」
「そうだょねぇ。道理でボクの力がきかないわけだょ。おんなじレイアなんだもん」
「……」
こっちのことを信じてもらうために、正直に話そう。
それは、ここに来る前に決めていたことだった。
それに驚くかなと思っていたけど、アズやミズの反応は思ったよりか大人しいものだった。
それはたぶん、かつてルーシァが言ってたように、二人にも何となくその予感があったからなのかもしれない。

そんな中マイカは、名乗ったアキをじぃっと見つめていた。
それはアキも同じで。
まるで睨み合いのように、ずっと続きそうにも見えたそれは、しか

しすぐにカタがついた。
ルーシァやえっちゃんが、それに続いて自己紹介をしたからだ。
そうなってくると、必然的に次はミャコの番なんだろう。
マイカやアキだけじゃなく、みんなの視線が集まってくる。
アキたちまでミャコに視線を向けているのは、ミャコがほんとのミャコのことをちゃんと言えるかどうかってとこなんだろう……たぶん。

「ミャコ・ヴァーレストだよ。風のレイアで……翼あるものとか、アイラディアの死神って呼ばれてる」
マイカたちがミャコの正体を知ってどんな反応をするのか。
正直見当もつかなかったけれど。
後ろめたいまま黙ってるのはもう嫌だったから、思い切って全てをぶちまけた。

前の世界では、まともに言うことすらできなかったこと。
慣れってのはちょっと怖いなって、そんな事を考えてたミャコだったけど。

「ふぅん？　翼もないのに翼あるものなの？　変なの」
「そうやって自分にあだ名つけるの、はやってるんですか？　正直死神というのはあなたのイメージじゃないような気がしますけど」
「二つもなんて欲張りだなぁミャコちゃんは。でもよかったぁ～。あたしもね、『魔王』って言う通り名を使おうかどうか、迷ってたんだよ」
「……あれ？」
ミャコは、さっきと同じ、でも意味合いは全然違う、拍子抜けした呟きをもらしてしまう。
これは盲点だったっていうか……三人の反応を見ていると、翼ある

もののことを知らないんだってうかがえる。

「よし、今度はボクたちの番だね。ボクはアズ・アーヴァイン！
月のレイアで……かっこいい通り名を考え中だょ！」
「ええと、ミズ・ピアドリームです。御名の通り木のレイアで、アズちゃんとは生まれたときからの付き合いで、マイカ様とは……」
「二人が可愛かったからね、お友達になってもらったんだ。このあたし、マイカ・エクゼリオ……闇の魔王のね」
律儀に自己紹介、ミズとアズがマイカの元にいるその理由まで語ろうとするミズ。
それに繋ぐようにして、マイカがそう纏める。

三人一緒にいる、その理由。
あえて語らせなかった、その理由。
ミャコははっきりと聞いたわけじゃなかった。
だけど、かつての記憶で予測はできる。

刃向け合う間柄であった以上、そんなに深い話をしたわけじゃなかったけど。
何故そこまでして魔王につくのか、ミャコは聞いたことがあったからだ。
その時は、二人そろってその命救われたからと言っていた。
きっと、この世界の二人にも、命救われた、そんな何かがあったのかもしれない。

たぶん、二人はレイアであることを隠してなかったんじゃないかなって思う。
木の一族と月の一族は親密な間柄だと聞いていたけど、グーラの国と匹敵するくらいに閉鎖的だった。
二人の命のキセキを、その二つの一族だけで利用しようとしていた

のかもしれない。
何も知らない二人を騙して。
マイカはそんな二人を一族のしがらみから救ったんだろう。
利用するためじゃなく、ただ一緒にいて欲しくて。

「なんか、今つけましたーって感じだけど、それじゃあマイカさんが魔王ってことでいいんだ？」
……なんて、知りもしないのに勝手に三人の過去を妄想していると。
自己紹介も終わったところで、改めて次の話題とばかりに、ルーシァがそんな事を言った。

「うん、いいよ～。それがたぶん、あたしの役目、なんだろうし」
「……」
無邪気かと思えば、かつての畏怖を思い起こされる、意味深な言葉。
そんなマイカは、再びアキのことをじっと見つめている。
アキも、やっぱり同じようにマイカのことを見返していた。
まるで、視線だけで秘密めいた何かを話し合ってるみたいに。

「さしずめ今回は、そんな魔王を滅ぼそうと大軍が攻め込んでくる……そんなとこ？」
「あれ？　マイカ、知ってた……？」
どうしてその事を？って息をのむ場面だったんだけど、もしかしたら会話に混ざりたかったのか、小首を傾げてそう聞き返すえっちゃん。

「まぁね。海の方にいる闇が、船の灯りが眩しいって言って騒いでたから。
それに……アズちゃんとミズちゃんをそれぞれの一族からさらってきちゃったわけだし、こうなるだろうなってことは薄々感じてたんだ」

たぶん、さっきミズの言葉を遮ったことを考えると、本当はそのこと言うつもりなかったんじゃないかなって思う。
でも、えっちゃんがあんまりにも素直に聞くもんだから、つい口から出ちゃったんだろう。
言って舌を出し、バツが悪そうにしているマイカを見ていると、そんな気がして。

「別にボク、さらわれてきたわけじゃないぃょ。マイカさまとミズちゃんと一緒にいるほうが楽しいって思っただけだもん」
「そうですよ、マイカ様。わたしたちがマイカ様のお側にいるのは、わたしたちの意志です。人聞きの悪いこと言わないでください」
それに反論するように、アズとミズのまっすぐな言葉が、マイカに直撃して。

「うぅ、その方が絶対に魔王っぽいのにぃ」
泣き笑いのような表情を浮かべて、マイカは照れくさそうに愚痴を零す。

一見、誰も寄せ付けないような、魔王って言葉がふさわしいような、そんな強さを無邪気さの裏に隠してるマイカ。
だけど、そのさらに奥には、どこまでも優しくて寂しがりやな幼い見た目のままのナヴィがいる。

思えば初めて出会ったとき、マイカは何より先に二人のことを心配していた。
二人のために、さらってきたってのもたぶん本当で。
お友達になりたかった……一緒にいたかったっていうのも、本当な

んだと思う。
それは……改めて、マイカという一人のナヴィのことを知ることができたその瞬間で。
知ったからには、やっぱり助けてあげたいって思う。
かつてのような、悲しい思いをさせたくないって、強く思って。

「やっぱり、水の国の人たちは、マイカたちが目的なんだよね……」
「マイカさんがアキ様の予言で言う魔王だとするなら、まぁ間違いないだろうねぇ」
「水の国？　月や木の人たちじゃないの、あの船って？　それに、その予言って？」
何でなんだろうって思って無意識に出たミャコの言葉にルーシァが反応して。
その真新しい言葉に、マイカは目を輝かせる。

どうやら危機感よりも、好奇心のほうが勝ってるらしい。
まぁこの場合、こんな言い方されれば誰だって気になるに決まってるけど
。
何だか、本題に入るまで大きく話が逸れてしまっていた気もしつつも、ミャコたちは早速本題に入ったのだった……。

21、臆病風とお人よしの集まり

何でも願いが叶う、命のキセキが世に知れたことを導火線にして、世界に滅びの危機が迫っている。
それがアキの始まりの予言。

それを防ぐためには、世界にある命のキセキ、それを内に秘めたレイアたちを守り助け、命のキセキが本来あるべき形で使われるようにしなくてはならない。

それは、言葉で単純に表わせるほど簡単なものじゃなかったけど。
アキの予言の力は、そんなレイアたちの悲しいさだめを知ることのできる力を秘めていた。
ルーシァにもえっちゃんにも、でもってきっとミャコにもそんなさだめがあって。
その悲しいさだめを打ち破ることで、ミャコたちは今ここにいる。

こうして改めて考えてみると、アキの力ってちょっと凄すぎないかなって気はする。
前の世界でアキがいてくれたら。
そんな理不尽なことを考えてしまうくらいには。

「それで……今度はあたしたちの番ってことなんだ？　あたしたちを助けるために、あなたたちはここへ来たってこと？　その予言っていうのに導かれて」
ミャコたちがここに来た理由。

それを、真剣な面持ちで聞いていたマイカは、そう呟いて、考え込むように空を見上げる。
そうしてると、この中で一番幼く見える彼女が全然そうは見えなくなるから不思議だった。

「想うものに裏切られ……か。う～ん、何て言うかさ。そこのとこだけはプライドとして反論したいとゆうか、強くて気高い闇の魔王のこのあたしが、いちコドゥ無勢に心奪われるなんて、ありえないと思うけどな～」
「……」
そう言うマイカの言い分も、もっともだった。

――『欲しいなら、あげたのに！』

だけど、信じたコドゥに裏切られ、泣きじゃくるマイカが目に浮かんで複雑な気分で顔を伏せるしかないミャコ。
同時にちょっとだけ思うのは、あの時のマイカは、確かに悲しい目にあったかもしれないけど。
そんなことあるはずないって思ってたマイカが本気で誰かを想うことになる、コドゥを信じることになるきっかけがあったのは確かだったんだろうってことだった。

その悲しい運命を止めるということは、その本気の想いがなかったことになるってことなんだろう。
その気持ちを奪ってしまうってことなんだろう。
その責任は取らなくちゃいけない。
ミャコはそう思っていて。

「……あるはずがない。そう思ってるうちは何も変わらないさ。その意味を知る機会を奪ってしまうことは謝ろう。予言なんて曖昧な

ものを信じられないのも分かる。だからこれからのことは、私たちの我が侭だと思ってくれていい。君自身すら想像できないだろう悲しみの涙を勝手に止めに来たおせっかいな奴ら。その程度に考えておいてくれればね」

まるで、そんなミャコの気持ちを代弁するみたいに。
まるで泣きじゃくるマイカのことをその目で見たと言わんばかりに。
それまでずっと沈黙を守っていたアキが、口を開いて。

「なんかさ……くどき文句みたいだよね、それって」
返事を待つアキに、マイカはそんなこと言って再び空を見上げる。
そして、アキを見て、何故かミャコを見て、ちょっと表現に困る複雑な笑みを浮かべた。

「くやしいなぁ。すごく悔しいのは何でなの？　アキちゃんも、ミャコちゃんも今日が初対面なのにさ、どうしてあたしを、そんな目で見るの？　まるで、ずっと一緒にいる友達みたいにさ。
そんな顔されると、何であたしだけ覚えてないんだろって、そう思っちゃう」
「……っ」

言われたアキは、珍しく目を見開いていた。
たぶん、ミャコも同じ。
マイカを知っていること。
心には思っても、言葉や顔には出してない、そのつもりだったのに。

ここは、どう言葉を返せばいいんだろう？
ミャコにはそれがすぐには思い浮かばなかった。
謝るのも何か変だし、かといって何も言わないのも……。

「だいじょぶ。それ、私もおんなじ。ミャコもアキも、それにルーシァも、私のことすごく知ってた。……たぶん、どうしようもないくらいのお人よしなんだと思う。だから、会ったばかりでも、もう親友。疑うことを知らない。いきなりえっちゃんって呼ばれたのは、びっくりしたけど。
でも……うれしかった」
なんて思っていると。
助け舟を出してくれたのはえっちゃんだった。
たぶんそれは、咄嗟に出たえっちゃんの本音だったんだと思う。
言葉の繋がりはばらばらで、たどたどしかったけど。
それだけに真摯にその言葉が沁みてくる。

「うぅ、ありがとー。エミィさーん。ワタシも仲間に入れてくれて」
それを聞いたルーシァは、完全に涙声で。
「……そっか、うん、そうだね～。確かにみんなそんな顔してる。末期で手の施しようがなさそうな、お人好し病の患者さんだ」
ふだんは聞けないだろうえっちゃんの本音に応えるみたいに、マイカは破顔する。
それは、どきっとするくらい可愛い笑顔で……。

事態が急激に動いたのは、そんな風に和んでいた時だった。

「っ、誰か来ます、この森に！　しかも……とてもたくさんです！」
それまで、穏やかな笑みすら浮かべてミャコたちの会話を聞いていたミズが、急に立ち上がったと思ったら、そんな切羽詰った声をあげた。

「なんだって？　ボク、ちょっと見てくる！」

それに、鏡写しのように立ち上がったアズが、そのまま駆け出し、軽い身のこなしで物見やぐらへと上ってゆく。
そして、両手のひらで丸を作ってやぐらをぐるりと一周。
そして、ミャコたちが来た方向、海のあった方向でぴたりと止まる。

「でっかい船……そこからたくさんのコドゥが出てくるのが見えるょ！　先頭はもう森に入っちゃってる！　みんな鎧着てて槍とか持っててなんだか怖いょ！」
それからミャコたちに向かって叫ぶ言葉は、その映像が浮かんできそうなほど、具体的なものだった。

「アズちゃんは月明かりさえあれば、どんな闇でも見通せるんだよ」
その何故を問う前に、マイカが誇らしげにそんな事を言う。

「水の国のひと……夜はこないんじゃなかったの？」
緊張した面持ちの、えっちゃんのもっともな言葉。
その答えを求められるミャコ。

「そのはず。なんだけど……どういうことなのかな？　だって予言と違う……」
言いながら、自身の記憶との齟齬に、動揺を隠せない。
死の間際まで、ひとりのコドゥを信じていたマイカ。
それには、そうなるだけの下地があったはずだった。
こんな夜に、武器を持ってたくさんで押しかけて、そこまで好意的に思うようになるなんて、ありえるのかと。

「まさか、ワタシたちがいるの、気付かれたのかな」
「その可能性はあるかもしれないけど、だからって強行するの？
ミャコたちが抵抗するの、分かってるはずなのに」
そんな態度を取られて黙ってるミャコたちじゃない。

こういう言い方はなんだけど、今ここには世界の半分以上のレイアがいるのだ。
戦って無事にすむ相手じゃないことくらい、ミャコたちに気付いているなら考えれば分かりそうなことだった。
「もしかしたら、初めからそのつもりだったのかもしれないな。懐柔する……手に入れるのに、
優しく接するとは限らない。力づくでも屈服させられるような、なにか策があるのかもしれないな」
「へえ？　それはそれは……面白いこと言うね、アキちゃんは」
悩むミャコたちに答えを提示するみたいに、ふいにアキが口を開く。
「力づく……それってつまり、あっちにもレイアがいるってこと？」
「それは、有り得ないな。それなら予言に示されているはずだ」
ミャコたちに対抗できるもの。
すぐに浮かんできたのは、ミャコたちと同じレイアだった。
でもそれにはきっぱりと首を振るアキ。
自分の予言に、相当の自信があることが窺える。
「あるいは、何かドリードを手なづける術でもあるのかもしれない。
他のナヴィを手駒するというのはあまり考えたくはないが……」
しかし、そう言うアキの表情はすぐに苦悩のそれと変わった。
ミャコたちレイアほどじゃないけれど、戦力として考えるなら、コドゥよりナヴィのほうが上だろう。
コドゥに従順なナヴィならば、命令されて戦いに参加する、なんて可能性もある。
つまり、アキが苦悩してるのは、そのナヴィたちのことなんだろう。
それは、アキの予言の力がレイアのことしか知りえないという残酷

な事実にも思えて。

「アズちゃん、もっとよく見てみて！　他に何か見えない？　ドリードっぽいのとか、ナヴィが混じってるとか！」
それを慮ったのか、マイカが上にいるアズに向かってそう叫んだ。
言われてすぐに、再び手で丸を作り、じっとその先を見つめる。

「うーん、全身の鎧の人が多くて。見える範囲には、ナヴィやドリードはいない感じだけど……んん？何か変だな。コドゥってみんな顔が同じだからよくわかんないけど、顔の見えてるひとは、みんなおじいさんみたいな……ううん、すごく痩せたひとかな？ガイコツみたいな……」
悩み悩みの、必死なアズの声。

「まさか、アンデッドか？」
不死者（アンデッド）。
人とほとんど変わらない姿をした、別名ゾンビとかグールとか呼ばれるドリード。
呟くアキの言葉は、アズの見たものの答え。
そんなセリフに思えたけれど。

「ふ～ん？　闇の力（エクゼリオ）であたしに喧嘩売ろうってこと？　面白いじゃない」
まるで裏返ってしまったみたいに、ぞっとする声で笑うマイカ。
そう、アンデッドは、それを使役する力は、闇の力によるものだった。

アズの見たもの。
アキの読みが正しいなら、マイカと同じ、闇の力を持つ何者かが、水の国の船を使ってまで、やって来たってことになる。

その時、唐突に思い出したのは、火の力を下手なナヴィよりうまく扱うガルラのことだった。

レイアであるミャコに対抗しうる力を持ってた、火の力を持ったドリード。
それは、考えてみれば、かつての世界では有り得ないことだった。

コドゥでもナヴィでもない、その二つの種に拮抗しうる第三の種族。
そんなものがもし存在しているのなら、彼らのようなもののことを言うのかもしれない。
ミャコが確信の持てないその考えが、妄想めいたその考えが、どうしても頭から抜けなかった。
もしかしたらそれは、喋るドリードであるガルラを見たときから、薄々感じていたものなのかもしれないけれど。

「相手の出方にもよるけど……作戦を立てなくちゃね。向こうがワタシたちとやる気なら、
こっちにも準備があるってこと、見せてやらなくちゃ」
重い雰囲気を振り払うように、朗らかにルーシァはそう言う。
戦わないですむならそれに越したことはないんだろうけど……そもそもここに来たのは、予言によって起こることを止めるためだった。
そのために戦わなくちゃならないのなら、それは充分目的の範囲のはずで。

結局。
ルーシァの言葉に、異を唱えるものはいなかったのだった……。

22、臆病風と月の色人、先陣を切る

「ミャコさん……こっちだょ」
ミャコはアズに手招きされて、危なっかしくも森の木々、その枝葉を足場に駆け抜けてゆく。

その周りには、ミズが作り出したもこもこの猿たちが、キィキィとつかず離れず取り囲んでいて。
そんなミャコたち二人は、相手の出方を見極めるための、偵察を任されていた。

船から下りてきたもの。
その目的はなんなのか、その最後の見極めをするために。

「この辺りで待ってればいいかな」
「わわっと」
急にぴたりと背の高い枝葉の上で、制止するアズ。
実はついていくのがやっとで、いつ落ちるのかとヒヤヒヤしていたミャコは、急に止まったアズに驚き、そのまま抱きつくような体勢になってしまう。

「ふわふわだね、ミャコさん」
「ご、ごめん」
特に気にした様子もなく、笑みをこぼすアズ。

触れられなかったはずのぬくもり。
それに気恥ずかしくなって、ちょっと悲しくなって。

さりげなく身を離し、ミャコは苦笑いを浮かべる。

ミャコたちが待機している場所は、海側から均された道の続く、船からやってきたものたちがやってくる可能性の高い場所だった。
月明かりに照らされる、そこだけ草の生えていない、道だと分かるその場所を見据えながら、彼らがやってくるのをじっと待つ。

「ねえ、ミャコさん」
たぶんきっと、この作戦が成功するためには一番重要な役目を任されただろうミャコたち。
そんな緊張感をほぐすためなのか、緊張などには元より縁の無い性格なのか。
気さくな様子でアズが声をかけてくる。

「なに？」
「ミャコさんさぁ、さっきはマイカさまに言われて誤魔化してたけど……ほんとはボクたちのこと知ってるんじゃない？」
「……っ」
無邪気に何の悪意もなく、アズはミャコがただ唯一秘密にしていることを蒸し返そうとする。
何か言いたかったけど、言葉が出てこない。

「ほら、さっきさ、ボクのこと助けてくれた時、アズって呼んでくれたじゃん？　ボクのこと、よく知ってる仲良しさんを呼ぶみたいにさ」
「それは……」
言い訳のできない、決定的な証拠だった。
ミャコがこの世界の人じゃないってことを知られてしまうことへの。

今まで、アキやルーシァにも、えっちゃんにも結局言えなかったこと。
どうして今の今まで口にできなかったんだろうって、そう思う。
口にしたってミャコが消えるわけじゃないんだろう。
ミャコが嫌われるわけじゃない。
ウソつきだって、騙してたんだって、非難されるかどうかも分からない。
実際にそれを口にしたわけじゃないんだから、どうなるかなんて誰にも分からないのに。

「ごめん、アタイ……」
なのに、そういうことになるかもしれないって怖かったのは。
そんなミャコをずるいって、罪悪感を持ってたからなんだと思う。
みんな悲しい目にあって終わっちゃったのに。
ミャコだけこんな続きがあって、やり直しがあって許されるの？
って。

「何でミャコさんが謝るの……？」
「……」
不思議そうに聞いてくるアズに、やっぱりミャコは答えられない。
その理由を話したが最後、怖いことしか待っていない、そんな気がしてならなかったからだ。
臆病なミャコには、俯いてその返事から逃げることしか、できなかった。
そんなミャコを、アズはどう思ったんだろう。

「やっぱりそれって言っちゃいけないことなのかな？　ボクはミャコさんがそうだといいなって思ってたから、その答えが聞きたかっただけなんだけど」

小首を傾げて、ちょっと残念そうにアズは笑う。
ミャコは、そんなアズの言葉の真意を測りかねて、思わずアズを見返してしまった。
青白い月のような瞳が、まっすぐミャコのことを見ている。

ミャコが違う世界のひとで良かったってこと？
一体どういうことなんだろう？
ミャコは、その答えを求めて首を横に振る。

「言ったら……アタイ自身が消えちゃう気がしたから、言えなかったの。でもね、そうなんだ。
ミャコは、この世界の……」
ひとじゃない。
そう言おうとして、続きは言葉にならなかった。
アズの小さな手のひらに、その口を塞がれたからだ。

「だ、ダメだょ、消えちゃ！　言わなくていいょ、もう分かったから。ボクは知りたかっただけなんだ。それを知ることで、ミャコさんをどうこうしようってわけじゃないんだょ。
……ただ、お月さまみたいな髪をしたミャコさんが、本当のお月さまだったらいいなって思っただけなの」
焦って泣きそうな顔をして、それを誤魔化すみたいに。
アズは中空に浮かぶ、まんまるの月を見上げている。
二の句が告げないミャコは、そんなアズの言ってる言葉の意味が、こう言っちゃなんだけどいまいち分からなかった。
ここで最初に会った時にもちょっと思ったけど、何か独特の世界を持ってるっていうか、思い込みが激しいというか、詩人さんな感じがする。

「アーヴァインの御名を持ってるボクが言うのもなんだけどさ。お

月さまって何のためにあるんだろって、ずっと思ってたんだ。お日さまが出てる時は見えないけど……いつもお空にいて、いつもボクたちのことを見てるのは、何でなんだろうって」
「……」
ミャコの口を塞いだまま、何もツッコミできないまま、自分の世界に入ってしまったらしいアズは、
そんな事を言う。

「でもね、ボク分かっちゃったんだ。お月さまの正体。ミャコさんのおかげだょ。
だからこれ以上は聞かない。せっかくお友達になれたのに、お月さまに帰っちゃうの、ボクやだもん」
そして、一人でしみじみと納得して、その手を離してくれる。

「えっと、うん。アタイも帰りたくはないかな、はは」
何だかよく分からないけど、違う世界の住人……ミャコの故郷は、お月様になってしまったらしい。
この世界どうやって来たかも分からないミャコは、当然そんなアズの言葉を否定なんてできるはずもなく。
そこはかとない罪悪感に包まれながらも、苦笑して、そう頷くしかなかった。
何故この世界に月があるのか、その意味を考えればこの世界の真実が見えるってことを、その時は気付くこともなく。

キィキィッ！
と、その時だった。
少し離れた森の向こうから……いや、そこらじゅうから、ミズのレイアークによって生まれた者達の鳴き声が夜の静寂に届いてきたの

は。

「来たっ！」
続いて、夜目のきくアズの鋭い声。
アズの視線の先を追えば、確かに何者かが、隊列を組んでこちらに歩み寄ってくるのが分かる。

「でも、ミズのレイアークがいろんなとこで騒いでるってことは……」
「森……城ごと囲む気なのかも。ボクたちが逃げられないように」
さっきとは打って変わって真剣な声。
囲む気、つまり当初の予測通り、こちらと話し合いに来たというわけじゃないんだろう。
否応に緊張感が高まる。

「後は、相手の意思を確認するだけだね」
「う、うん」
ミャコたちは、そう言葉を交し合うと、そのまま地面に降り立った。
そして、月明かりに照らされた、相手に見えやすいところまで歩いてゆく。

それこそが、今日の作戦でもっとも重要なミャコたちに与えられた役割だった。
相手がミャコたちをどうしたいのか、逃げも隠れもせずに聞いてみる。
有無を言わさず攻撃されるかもしれない、危険な役割。

ミャコとアズが選ばれたのは、まぁ選ばれるべくして選ばれたって感じだろう。
本域ではないとはいえ、レイアークを連発していて、今もミャコた

ちを守るためにその力を使っているミズはもちろん、作戦上ほかの場所での役割を持つえっちゃんやルーシァも論外。
いろんな意味で、交渉と言うか会話に向いていないアキとマイカはもっと論外といった感じに。

だが、その危険な役割をミャコたちが相当するにあたって、多少の不満も出たのは確かだった。

あたしの心を奪おうとするコドゥがどんなものか、見てみたい……。
なんてだだをこねてるマイカがいたり。
みんなで口をそろえてミャコは無茶しいだって言われたり。

そんなわけで……アズはミャコのお守り兼、森の案内役だったりした。
一応ミャコが相手との交渉役になってる。
ただ、元気そうに見えるアズだったけれど、すでに一度レイアークを使役している。
もし二度目のそれを使うようなら、アズの力量にもよるけど、アズの身を危険に晒すことは間違いないだろう。
あくまでミャコたちは、相手の出方を伺うことだけど……できるのなら戦わない方向でいきたいところだった。

キキッ！
と、じわじわと大勢の気配が近付いてくる中、ミズの作り出した緑色の猿一匹が、ととっと降り立ってアズの耳元まで駆け上がる。
そしてミャコにはよく分からない言語でふむふむと会話。

「ミャコさん、ここ以外の敵さんは、やっぱり森を城を囲むようにして進軍してるみたい。みんな闇の力に依るドリードたちだって」
敵、つまりはそう言うことなのだろう。

やはりただの話し合いではありえないようだ。

「もうあちらさんには話し合いする気はなさそうだょ？　もう作戦、次の段階にしちゃう？」
こちらからは戦うつもりはないとはいえ、アズにとっては初めてに近い実戦なのだろう。
下手したら殺されるかもしれない。
命のキセキを奪われるかもしれない。
そんな緊張感と焦りが、アズから伝わってくる。

「まだ早いわ、確実だと分かっていても、交渉はしてみないと」
「あ、ちょっと、ミャコさん！」
マイカの心を踏みにじった奴がどんな奴だったのか。
まぁ、そのコドゥとは別人の可能性もあるけど、ミャコも知りたかったってのが本音で。

ミャコはそう言い、一歩前に出る。
より、月明かりに晒される茂みの無い場所へと。
アズは、そんなミャコにへばりつくようにして、後ろについてきていて。
そんなアズに、無茶はしないことを目と目で約束して。

再び前方を見据えれば、水の国の軍を表わす涙滴の紋様の入った旗が、揺れてミャコの視界に入った。
次に、綺麗な葦毛の馬。
それに仕え、後に続くように見えるのは、やはり水の紋様が入った銀の甲冑たち。
その中で、ロングスピアを持ち、馬を引いていた銀甲冑のひとりがスピアの柄をたてて立ち止まると、その一群は、音そろえて一斉に静止する。

「この地に住む闇のナヴィとは、お前たちのことか？」
と、闇に隠れ見えなかった馬上から、ミャコが思ってたよりも若く、そして冷たく虚ろな声が響いてきた。
「だったら何よ。こんな夜更けにそんな大勢で。仮にも天下に名高い水の軍のひとが、そんな常識なしで許されるわけ？」

一応ミャコは今、いつものウルガヴのケープの上に、アズとおそろいのまっくろなローブを身に纏っている。
その背中と、胸元には闇の根源を表わす、円のうちに描かれた星……その紋様が刻まれていた。
それでミャコたちが闇のナヴィのひとだって勘違いしてくれるかどうかは、相手次第なんだろうけど。

「……今すぐ闇のレイアを差し出せ、連れ去ったという月と木のレイアもだ」
「そんな事して、どうするつもりよ」
名を呼ばれてこわばるアズを庇うようにして、だけどとぼけることもなく、ミャコはそう聞いた。
その返答次第で全てが分かる。
そんな期待を込めて。

「決まっている。アイラディア様を裏切りしレイアはこの世界にとって害悪。ひねりつぶして、くだくのみ」
「……っ」
そして返ってきたのは……予想の範疇ではあるけど、一番聞きたくなかった、そんな言葉で。

「バーカ、そんな事絶対させるもんですか」

心の内から滲み出す怒りにも似た衝動を何とか抑えると、ミャコはべっと舌を出し、交渉決裂の意を示す。

「ならば全員まとめてむごたらしく死ぬがいい」
どこまでも冷たい、感情の含まない声。
それを合図に、銀の甲冑が一斉に獲物を向けてくる。

「アズっ！」
ミャコは背後のアズに一声かけて。
身に纏っていたフードを、向けられた槍先に、馬の鼻面にかぶせる。

ヒヒィンッ！
驚いた馬がいなないて、前足をあげた。
すると、馬上の人物が月明かりに晒され、その正体を露わにする。

「っ！」
「ミャコさん、早くっ！」
ミャコの掛け声とともに駆け出していたアズが、悲鳴に近い声をあげた。
作戦のための釣りかと思いきや、結構本気な声。
それは不覚にも、ミャコが馬上のコドゥその人に目を奪われ、立ち尽くしていたからなんだろう。

「あなたはっ……」
ほんとに一瞬、そこに唯一尊敬すべきコドゥであるウルガ王の姿があるのかと思ってしまった。
だが、現王より一回りも二回りも若い。
それはおそらく、かつて耳にしたことがあった、海上で行方不明になったという二番目の王子だったんだろう。
親殺しの兄とは似ても似つかないのは、母親似だったからか。

予想に反して優しげな顔立ちが、先程までの会話とのギャップを感じさせる。
激しい違和感、と言ってもよかった。

「わっと！」
そんな事を考えていると、ローブを突き破っていくつもの槍先が飛んできた。
ミャコはそれを軽く上体を逸らしてやり過ごす。

「何やってんのミャコさん！　ボクたちが掴まっちゃったら意味ないんだょ！」
そこに怒ったようなアズの声。
そうだったと思い立ち、そのままミャコは走りだす。

「水の国の……ナヴィだと？　ううっ……」
と、そこに聞こえてきたのは、今の今までとは打って変わった、人の温かみのようなものが感じられる、だけど苦渋に満ちた、そんな声だった。
思わず、反射的に振り向くミャコ。
青く長い髪に隠れていた、その相貌と目が合う。

「にッげ……ロッ……」
ウルガ王と同じ、お茶目で純粋な青の瞳。
その瞳で、ミャコをしっかりと見据えて、王子は呟く。

……逃げろ。
ミャコには、それがさっきとはまるで逆の言葉に聞こえて。
何が何だか分からなくなって、混乱しかけた時。
その首ががくんと落ちる。

「殺せっ！　レイアも、レイアに組するものも皆殺しだっ！」
そして、再び顔をあげたときにはすでに別人がそこにいた。
その頭上に立ち昇る、黒い煙のようなもの。闇の魔力。

「ミャコさんってば！」
ついにはそこでぐいとアズに引っ張られて。
銀の甲冑たちが、その槍先がすぐそこまで近付いていたのに気付いたのはその瞬間で。

「っ、ヴァーレストよ！」
はっとなったミャコは、アズに繋がれた反対側の手に見えない風の渦を作り出し、足元に叩きつける。

ドゥンッ！

「わ、わ、わぁっ！」
激しい風圧に、甲冑どもが、ミャコたちがともに吹き飛ばされて。
アズが悲鳴をあげる中、ミャコは打ち付ける風を翼に換えて、森の中へと飛んで行った。

目まぐるしく天地が入れ替わる急旋回。
ものすごい勢いで近付いてくる木々を華麗に？　交わし、充分森の中に入ったところで、立ち並ぶ木々のひとつに足かけてくるっと一回転。
アズが傷つかないようにふわっと降り立つ。

「こ、ここ」
「ここ？」

「こわかったょう！　ボクは風のレイアじゃないんだから無茶しないでってば！」
「……ご、ごめん」
思いっきし無茶しました。
今の一連の行動、成功したのもまぐれです。
なんて口には出せない本音を心内にしまいながら、それをその言葉ひとつに集約させる。

「もうっ、作戦と違うじゃんか！　相手が敵だって分かったらすぐに逃げるんじゃなかったの！」
だが、さっきまでの興奮冷めやらぬのか、アズが涙目で抗議してくる。
「うん、そうなんだけどさ。あの馬に乗った人、おかしくなかった？　なんて言えばいいんだろ、何かに操られてるっていうかさ」
「えぇ、そう？　ボクにはよく見えなかったけど……」
何かに操られている。
そんな風に見えたのは、どうもミャコだけだったらしい。
なまじ知らない人でもなかったからなのか、その辺りはよく分からなかったけど。

キィキィッ！

なんとなく二人で考え込んでいると、森の奥のほうから城のほうへと向かって逃げていくたくさんの緑色の猿たちの姿が見えた。
さらに、木々と闇にまぎれて、いくつもの人影が見えてくる。
「ミャコさん、こっちも来たょ！」
アズの声とともに、聞こえるのは甲冑のがちゃがちゃと軋む、たくさんの音。

落ち着きを取り戻した他しい馬の蹄の音。
どれもが、確実にミャコたちの元へと近付いてくるような、そんな悪寒。
予感じゃなくて、物理的に感じられるもの。

「ねぇ、これって……」
「うん、闇の魔力だね。マイカさまの力に比べたら、ぜんぜん弱っちいけど」
悪寒の正体。
立ち昇る、黒い煙の正体。
それは、辺りの闇に溶け込み紛れる、何者かの闇の魔力だった。
水の国の王子、あるいはその部下たちが……コドゥが使える代物じゃないことは確かで。
やっぱり、彼らの裏で糸を引いている何者かが別にいるらしい。
ミャコが達した結論はそんな感じで。

「とにかく城へ急ごう。囲まれちゃったらまずいし……あ、そだ。今度はボクの番だょね。
いっくぞー、アーヴァイン！　変身だっ！」
そんな事を考えていると、アズは月の魔力を高め、その拳を天に掲げた。
するとアズに月の光が降り注ぎ、その小さな身体はみるみるうちに大きくなってゆく。

「うわっ！？」
ミャコが驚いて（一度見たことあるはずなんだけど）目をしばたかせていると、アズは気付けば青い毛並みがふさふさの犬へと姿を変えていた。
アズのレイアークがケルベロスなら、アズ自身が月の力で変身した

その姿は、さしずめフェンリルと言ったところだろうか。
こんな時に言うのもなんだけど、物凄く苦戦した記憶が呼び起こされて。

「ほら、早く乗って！」
そんな事を考えて内心びびっているミャコなんかものともせず、アズはそんな事を言う。
言われるままに背中にまたがると、そのままダイブしたくなるくらいぬくぬくのふかふかだった。
敵対していたときは、こんな事も知らなかったんだなって、ちょっと切なくなって。

「よし、しっかり掴まっててて、いくょーっ！」

アズがそう叫んだ瞬間。
ミャコは飛ぶがごとく風を切っていた。

周りの視界が丸く見えるほどに、目まぐるしく視界が移り変わる。
夜の森のざわめきすら……置いてきぼりにされるくらいに。

23、臆病風、月の色人との空中遊覧を禁ずる

「ちょっ、アズ、飛ばしすぎにゃぁっ！」
月のナヴィとしての能力、『獣化』。
流れのままに、その頼もしい背にまたがったものの、その速さは半端なかった。
抗議の意味も兼ねて首に抱きつき、軽く叩いたら、それがまずかったらしい。
スピードをあげろと勘違いしたのか、それともさっきの仕返しなのか。
開いた口がでかくなるんじゃないかってくらい押し寄せる風の勢いが増す。

「……っ！」
こんな速さで逃げちゃったら作戦の意味がなくなる。
そう口にしようとしたけど、もうそれすら言葉にならなくて。
それでももがもがともがいていると、突然物凄い負荷がミャコにかかった。

「んぎゃっ！」
まるで空気の壁に叩きつけられたみたいな衝撃。
さすがにそれはひどいよって抗議の声をあげようとすると、そんなミャコより先にアズのほうが低く唸った。
その瞳は、じっと前方、揺れる茂みの向こうを見つめている。

来る！
ミャコがそう思った瞬間だった。
黒煙のように吹き上がる闇の魔力。

それをまとって飛び出してきたのは、各々獲物を手にした三体の銀甲冑だった。

「あっ、さっき見た……おじいさん？」
ついて出たアズの疑問の言葉。
それは、そのうちの一体……兜が取れてさらけ出されたコドゥのその顔を見て言ってるんだろう。
「違うよ、アズっ、あれがゾンビよ！　ドリードの一種！」
ただれた肌、腐臭、濁った目。
死者がドリードと化したもの。
闇の力持つものが支配し、使役すると言われている存在。
なのにとんちんかんなことを言うアズのことを考えるに、マイカはその力を使うことはなかったんだろう。

あんなのがいたら、衛生面でもよくないし、陰鬱な気分になることうけあいだ。
かつてミャコたちがここに来たとき、森は彼らの棲家だった。
何があってそうなったのか、その事を考えれば、早くこの地を訪れなかったことに、もう取り返しのつかない後悔を覚えたけれど。
ミャコたちの言葉が判ったのか、それでも単純に獲物と見たのか、ゾンビどもは奇声を上げてこちらに向かってくる。

「アーヴァインよ！」
それに対するアズの行動は早かった。
自らの信じる御名を叫ぶと同時に、その喉から吐き出されたのは、大気を歪ませる紫色がかった渦だった。

バチィッ！

「ガッ！」

それは三体のゾンビの中心で炸裂。
迫り来る勢いだった彼らの動きを止める。
重力。
獣化と並ぶ月のナヴィの代表的な能力だ。

「切り裂け、ヴァーレストよ！」
その威力を身をもって体験したことのあるミャコの行動も早かった。
不可視の風まといし右手のひらを振り上げて、返す勢いで突き出す。

天から地への力が極端に跳ね上がるアズの力。
それをうまく利用して、叩きつけたミャコの風は、その堅固に見えた銀の甲冑を、いとも容易く押しつぶした。
飛び散る腐った肉片。
よく見れば古びた、水垢のついた銀の甲冑が、細かになって大地に降り注ぐ……その直前にそれらは霞み消えて、黒い石へと取って代わる。

「やっぱりミャコさん、知ってるんだ。今の力だって、初めて見せたのに」
「いやぁ、はは……」
反射的に一番効率のいいだろう手段を取ったミャコに、目ざとく気がつくアズ。
ミャコはそれに、曖昧に笑って誤魔化すしかなくて。
身に沁みたのは、アズが思っていた以上に、よく気付く子ってことで。
そんなアズに改めて感心していると、犬の姿のままのアズは、鼻をひくひくさせて顔をあげた。

「今ので気付かれたみたい、どんどん集まってくるょ」
「誘引は成功ってとこかな。後はお城までついてきてくれるかってことなんだけど……」
「うん、それなんだけどさ、いい事思いついちゃったんだょね」
夜空を見上げながら、楽しげにアズは言う。
それに、ミャコはそこはかとなく嫌な予感を覚えたけれど。

「飛ぶから！　微調整よろしくっ！」
「え、ち、ちょっと！」
焦るミャコより早く、体勢低く沈み込むアズ。

ウオオォォンッ……。

そのまま天まで届けと遠吠え。
迫り来る甲冑たちの注目を一手に引き受け、森の木々の合間をぬって高く飛んだ。

月に照らされて美しく。
その存在を誇示するがごとく。
咄嗟に腹ばいになってしがみ付かなきゃ、ミャコはそのまま振り落とされていただろう。

一瞬にして彼方に見える森。
その隙間を埋めるように、月明かりを反射させて蠢くものたちの姿が見える。
進行方向に僅かに顔をあげれば、そこには漆黒の城が見えて。
聞こえるのは、余韻残るアズの遠吠え。
それに呼応するかのような、馬のいななき。

楽しげに暴れ、纏わりつく風の音。

「ヴァーレストよ！　城まで運んで！」

もうミャコにはやけに近い気分で、普通に呼びかけるみたいに、力を発動する。

それは、高いとこが怖くて余裕がなかったってこともあるんだけど……思いのほかうまくいった。

背中に生えた、風の感覚。

感じる浮遊感。

風に包まれてる感覚。

みるみるうちに、城の尖塔が近付いてきて。

「わわ、ぶつかるっ！」

「えぇっ！？　そ、そんなっ！」

慌てふためく二人の悲鳴。

気が抜けたのか、身体が軽いほうが衝撃を和らげることができるだろうって判断したのか。

ナヴィの姿に戻ったアズと、もつれ合うようにして中空を回転する。

それは、自分のほうが下だって言い張る熾烈な戦いによるものだったけれど。

こういうのはやっぱり身体が大きい方が勝つらしい。

見事に勝利したミャコは、アズを包み込むようにぎゅっと抱きしめて。

衝撃に備えて身体をぐっとこわばらせていると、そんな攻防の全てを台無しにするみたいに、

城の屋上、その石タイルでできた地面にぶつかろうかと言う瞬間、

ミャコたちをふわりと悪戯な風がさらった。

それでようやく理解したたのは、風の力自体が飛ぶことを怖がるミャコをからかって遊んでいると言う事実で。
気付けばミャコは、アズを抱きしめた状態で、無事に足から屋上へと降り立っていた。

「はぁ、うーっ……」
心の底から搾り出すような安堵のため息。
こんな悪戯な風とずっと付き合ってかなきゃいけないと思うと、何だか泣けてくるミャコだったけれど。
「あ、あれ、ミャコさん？　無事だったの？」
ミャコと同じように覚悟を決めて瞳を閉じていたアズが、ミャコの腕の中で目をぱちくりさせている。

抱きしめてるミャコが言うのもなんだけど、背中向けて見上げられるのってやばいよね。
きゅんとするっていうか……今の今まで自分でずっと否定し続けてきたつもりのミャコだったけれど、何かミャコって節操ないっていうか、ナヴィが大好きなんだなぁってしみじみ自覚してしまったよ。

「あはは……うん。うまく着地だけはできたみたい。いっつもこうなんだよね。気難し屋っていうか、いたずらっ子っていうか、風さん、あんまりミャコの言うこと聞いてくれなくて」
「んもう！　ミャコさん本気で泣きそうな声あげるんだもん。ボク色々と覚悟しちゃうとこだったょ」
半笑いで言い訳すると、アズは頬を膨らませて講義してくる。
冗談抜きにその身体は震えていたから（ひょっとしたら震えていたのはミャコのほうだったのかもしれないけど）、そんなアズをよりしっかりと抱きしめてあげた。
それは半分以上、ついぞ前に自覚したばかりの、ミャコがそうした

いからって気持ちの表れ、とも言えたけれど。

キィキィッ！

そんなまったり？とした空気もつかの間、ミズの力から生まれた猿たちが、鋭い警告の鳴き声を発しながら次々と城の屋上へとよじ登ってきた。
それにより役目を終えた彼らは、ぽんとコミカルな音を立てて消えてゆく。
それを見たアズは、密かに名残惜しいミャコから離れて、城下が見えるところまで駆け出していった。
そしてすぐに振り向き、ダッシュで戻ってくる。

「まずいょっ、もう城門まで来てるっ！」
「うそっ！？」
せっかく決死の近道をしたのに、どうやら前半もたもたしすぎてたのが仇となったらしい。
血相変えてミャコたちは城の中へと入ってゆく。

「ついてきてミャコさん！　地下に案内するからっ！」
実の所一度来たことのある場所だから、地下室のある場所も知ってたんだけど、そんなことで問答してるヒマもないので、ただ頷いてアズに続いていて。

「よし、いっくょっ。風さんの力、期待してるからっ！」
だから城の中に入って、地下まで続く螺旋階段手前の踊り場までやってきて。
一度だけ振り向いてそんな事を言うアズの言葉の意味が、一瞬理解できなかった。

理解したのは、一足先にアズが螺旋階段の隙間……奈落まで続いていそうなその場所に飛び込んでいった、その瞬間だった。

「うわぁっ！　な、何しちゃってんの！？」
ミャコは青くなって、慌ててその後を追う。
それは、一度死ぬような目にあったからなのか、そこまでミャコのことを信頼してくれたのか、
それこそまさに自殺行為にしか見えない究極の近道だった。

「ば、ヴァーレストよ！　加速！　アズに追いついて、守って！」
悲鳴に近い命令口調。
風の力も、この時ばかりはふざけてる場合じゃないってことが分かってたのか、うまいこと言うことを聞いてくれた。
ぐんとトラウマになるくらいに落ちるスピードがアップし、まずアズに追いつく。
さっきとは打って変わって楽しげなアズの手をかろうじて掴んで懐に抱くと。
ガスガス当たる階段の取っ手に内心泣き言をもらしながら、我慢して体勢を整え、空いた手のひらに風のクッションを作り出す。
地下の灰色の地面が見えたのはまさにその時で。
ミャコはクッションを打ち出すと、歯を食いしばって丸まった。

クッションが衝撃でつぶされ、ミャコの足にまでその衝撃が伝わる。
さほど広くない地下室に、砂埃の混じった突風が吹き渡って。

「ごほっ、ごほっ……ああっ！　今度こそ死ぬかと思った！」
「わうっ！？」

行き場の無い怒りを吐き出すみたいに絶叫すると、その勢いで腕の中にいたアズをぽいと放る。

「うわっ、ぺっ、ぺっ。投げることないじゃんかーっ」

文句は言うも、非常に嬉しそうで楽しそうなアズ。

はやり、どうやらさっきのでクセになってしまったらしい。

もう二度とアズを連れて飛んだり落ちたりはしない！

未だじんじんと痺れたままの足の痛みを必死で我慢しながら、そう誓ったミャコだったけど……。

「ミャコ……うるさい。突然きて、迷惑」

何だかすごく久しぶりな気もしなくもない、えっちゃんのにべもないそんな言葉に、そりゃないよって思わず力抜けて座り込んでしまうミャコ。

どうせ全部ミャコのせいですよぉ、とくさくさしながらえっちゃんのほうに顔を向けると。

そこには顔に飛んでくる砂埃をルーシァという盾？で防御しているえっちゃんの姿があった。

それはそれは優秀な盾だったのか、ルーシァの身体前面は真っ白い埃に覆われている。

「くおうーっ！　殺す気、ぐっ……ごはっ、ごほっ！　ち、窒息、窒息するぅーっ！」

それは、冗談じゃないルーシアの本気の悲鳴。

慌てて駆け寄って鎧を脱がし……なんとか事なきを得たわけだけど。

「……ごめんなさい」
涙でぐしぐしのルーシァを見てさすがに申し訳ないって思ったんだろう。
おろおろして、平謝りするえっちゃん。
「ひどい、ひどいよう。せっかく頑張ってるひとに向かってこの仕打ちは酷すぎるっ！」
「ご、ごめん」
「うう、地下室の掃除をさぼったボクのせいだょね、ごめん」
その泣きっぷりが真に迫っていたので、いたたまれなくなってミャコもアズも頭下げる。

「いいもんいいもん。ミャコさんから慰謝料がっつりもらうから！」
「えっ……な、なん」
なんでミャコなの！？って反論しようと思ったけど、全くもってミャコに責任がないってわけでもなかったから……その反論の機会を失ってしまう。

ドドゥンッ！

と。
上方……おそらく城の正門だろう。
それがついには壊れ、雪崩れこむような音が聞こえて。

「って、遊んでる場合じゃなかったね。ミャコさんたちが来ないからちょびっと焦ったけど……
頃合いやよし！　よろしくエミィさん！」
ミャコが呆気に取られる中、ばばばっと再びフルアーマーを着込んだルーシァが、ミャコの肩上に陣取り、さっきまでの涙など幻であったかのようにそう宣言する。

もしかして今までのやりとりは、頃合い待つ時間合わせか何かだったのかと思ってしまうほどの変わりっぷりだった。
そんなルーシァが小さな指でびしっと指さすのは、海まで続くという用水路だ。
流れの速い水は、ぽっかりと空いたトンネルの向こうに吸い込まれている。

「やっと私の出番きた」
やっぱり何事もなかったかのように、えっちゃんはそんなルーシァの言葉に頷き、ルーシァが指さした反対側の水の噴き出している場所へと歩み寄る。
そして中々勢いの強い水に無造作に手を突き出す。

「おおっ」
すぐ近くで聞こえる、アズの感嘆の声。
それもそうだろう。
えっちゃんがその小さくか細い手を差し出しただけで、その水はたちまち凍りつき、その流れを止めたからだ。
まさしくあっという間に用水路の水は流れ消え、苔の生えた石の地面が露わになる。

「３０数えたらどかーん。……気をつけろ」
かと思ったらえっちゃんはそんな事を呟き、ミャコたちの返事も待たずにぺたぺたとトンネルの向こうへと走り出してしまった。

「３０っ！？　やばいじゃん！」
早い展開について行けなくて……というか、着地の衝撃による痺れがまだ残っていたミャコは、
さらにそう言ってえっちゃんの後に続くアズのことをぽかんと見つ

めるしかなくて。

「……ちょ、何してんのミャコさん！　あと２０！」

「わ、わぁっ！？」

みしりと、氷の軋む音。

見れば透ける氷の向こうに新たな水が迫っているのが分かって。

ようやく事態を理解し、トンネルに向かって走り出す。

「いたっ、いたたっ。足が頭がっ！　ここ天井低いよっ！」

「うわぁっ！　人選誤ったぁーっ！」

真っ暗なトンネルはごつごつしてて滑りやすく、尚且つ天井が低かった。

ナヴィにしてはデカイほうのミャコには、ちゃんと立って進むことすらもままならない低さで。

当然先行した二人のようには進めない。

狭いトンネルに、ミャコとルーシァの悲鳴が木霊して。

それを覆い隠すみたいに背後からせまる怒涛の水。

「え？　ちょっと！　まだ１０秒あ……」

そんなルーシァの叫びも、あえなく背中の轟音に打ち消されていって……。

２４、金色のひつじの作戦とその展望

バシャァンッ！

「い、いったぁ……」

ミャコとルーシァは水にのまれて……息ができなくて意識飛びかけたその瞬間。
そんなミャコをたたき起こすみたいな、落下による打ち付けられた衝撃に襲われる。

「こ、こんなつもりじゃ……なかったのに……ぶくぶく」
頭を振り振り顔を上げると、そこは滝つぼだった。
深い森の中、わずかに届く月明かりに照らされて、そう言って力尽きたルーシァが水面下に沈んでいくのが見える。

「ミャコさん、手をっ」
あの鎧、やっぱり重いんだなってしみじみ思っていると。
見事水に流されることなくトンネルを抜けたらしいアズが、浅い滝つぼにへたり込むミャコに手を貸してくれた。
一方沈んでったルーシァは、そこに待機していたミズとえっちゃんに救助されているのが見えて。

「うぅー。ぐしょぐしょだ」
思わず愚痴るミャコだったけど、それも作戦の想定内と言えばそうなんだろう。
水面には、えっちゃんが作った氷がだいぶ小さくなってぷかぷかと浮いている。

これで証拠は残らない。
まさか、城に攻め込んだ彼らも、すでに城の中がもぬけの殻だとは思っていないだろう。
よしんば城にいないことに気付いたとしても、すでに手遅れ。
仕掛けは上々って感じだ。

「……っ、敵さんはほぼ全てが城の中に入ったみたいです」
猿たちを使ってそれを確かめる役割を負っていたミズは、ルーシァを介抱していた手を止め、はっとなってそう呟く。

「うう、けほっ。よ、ようやく……ワタシの出番……た、たまやーっ」

すると、ルーシァはよろよろと立ち上がり、いつの間にやら取り出した銃の引き金を、
まるで最後の力を振り絞るかのように引いてみせた。

カチッ。
聞こえるのは、鉄を打つ小さな音。
だけど、弾丸は出てこない。
刹那の静寂。
一瞬水でしけって壊れちゃったかと思ったけど……。

森の茂みの向こう、城のある方向から聞こえてくる爆発音。

「はじまりましたね……」

それを聞いて、沈んだ呟きを漏らすミズ。
「それじゃ、急いでマイカさまたちと合流しょ」
それはアズも同じで。
気持ちが沈むのも仕方ないよねって思う。
今までずっと暮らしてきた場所を離れることになってしまったんだから。

「うん、そうだね」
自分の住処が燃えて崩れゆくさまを見なくてすんだのは不幸中の幸いか。
言って駆け出すミズとアズにミャコは頷き、またまた鎧を脱ぐはめになったルーシァを、お人形さんみたいに両手でぎゅっと抱きしめてるえっちゃんとともにその後を追った。
もちろん、ルーシァの脱ぎ捨てた鎧はミャコが持って。

今回の作戦、発案者はルーシァだった。
まず、ミャコとアズが相手の目的を探る。
相手がこちらを害する目的でやってきたことが分かったら第二段階。
ミャコとアズは、追いかけてくる相手を誘導しながら城に向かう。
そしてそのまま地下へ直行して、第三段階。
戦わずして逃げるという今回の作戦の肝となる部分。
闇の力から生まれた彼らが水を嫌う、というのは結果論だったけれど。
ミャコたちはその逃げの一手を、地下を流れる用水路に託した。
それは、森を囲い逃げ出さないように包囲していた彼らの裏をかく

もので。
ミャコたちを追って城の中に入った彼らが城の中にミャコたちがいないことに気付くより早く、ルーシァの力で城を破壊することだった。

ルーシァの金の力（ヴルック）で作られた『ボムズ』。
それは、火の力（カムラル）にも似た、物を爆発させ、壊し、火をつけるもので。
ミャコたちが交渉してる間に、それを城じゅうにしかけていた。
後は、相手がもれなく城に入ったことをミズのレイアークの力で確認し、爆発させるだけだった。
今頃、闇の城は火の海だろう。

それだけを思えば、ミャコの知る結末に似ていたけど。
火に焼かれることで……死してなお縛られることになった彼らの魂が解放されることを、ミャコは祈りたかった。

まぁ、そんなわけで何とか作戦を成功させたミャコたちは、城を離れて森を抜け、落ち合う場所と決めた浜辺を目指してるわけなんだけど。

アズとミズ、そしてマイカがずぅっと暮らしてきた住処、それを破壊するというそんな作戦に対して、やっぱりマイカは渋った。
マイカにとって闇の城は思い入れのある場所だろう。
だからマイカが渋るのも仕方ないとは思ったけれど。
渋っていたのは、そもそも城を云々のことでじゃなかった。

きっと、強がっている部分もあったんだろうけど。
闇の城は三人で暮らすのには広すぎて、目立つから引っ越そうと考えていたそうで。

何よりマイカは、城を壊すことにより、自分たちの所在を不明にさせる意味合いがあることにも、ちゃんと気付いていた。

マイカが渋っていたのは、その作戦の計画の中にマイカの出番がないことだった。
ゾンビ程度なら、真っ向からぶつかっていけばいいじゃないかって、身も蓋もない感じでだだをこねていた。
確かにこの面子なら、それは可能かもしれないってミャコもちょっと思ったけど。

結局、渋るマイカをなんとかなだめすかし、ミャコたちの足でもある、ルーシァの『ブルバドゥ』のある入り江の番をしてもらうことにした。
同じく出番のないアキを、そんなマイカのお守りにして。

だけど……こう言っちゃなんだけど、ミャコはちょっと心配だった。
じっとしてるのが嫌でやきもきしているだろうマイカを、果たしてアキが抑えておけるのか、と。
まぁ、それはミャコの勝手な心配なわけだけど。

そんなミャコには、もうひとつ気にかかることがあった。
死者の水の軍が闇の城に攻め込んだのは、決して彼らの意思じゃない、ということが。
彼らを操っている……闇の力を使う黒幕がいる、ということが。

思えば、ミャコと会話した水の国の王子……てっきりミャコは彼と話してたとばかり思っていたけど……その相手こそが、本当の黒幕なんじゃないかなって、そんな気がしていた。
だとすると、死者の水の軍をどうにかしただけじゃ、何も終わってないってことになるんだけど……。

グォガァンッ！！

「うひゃっ、こ、今度はなにっ！？」
突然の爆発音。
えっちゃんのお気に入りの人形よろしく抱きかかえられていたルーシァが、はっと我に返ってそう叫んだ。

「今の、お城の爆発じゃないよね？」
「うん。聞こえたの海のほう」
「マイカ様っ！」
「今のは、マイカさまだょ！　何かあったんだ！」
ミャコの問いかけに、みんなの視線が海のほうへと注がれて。
ミャコたちは再び駆け出す。

すぐにぐっと道が下って、見えるのは海と、上がる黒煙。
それは、死者の水の軍が残した船から、上がっているように見える。
もっとよく確かめようと、さらに近付こうとして……。

「船が！　沈んでく……」
先行していたアズが立ち止まり、そう呟く。
追いついてよくよく見れば、確かにその言葉通り、４隻の船は沈んでいた。

いや、それは沈んでいるというより、崩れて海に向かっていくみたいに見えた。
まるで、何かに解放され、その役目は終わったと言わんばかりに。

「マイカ様っ！」
と、その船たちがほとんど海の中へと消えていった頃。
船の止まっていた浜辺に降り立つマイカの姿が目に入った。
ミャコは大方の予想通り、やっぱりマイカはじっとしていられなかったらしい。
アキの姿がないことに、ルーシァと顔を見合わせ、訝しく思いながらも、再び走り出してしまったアズとミズの後を追いかける。

「あれ？　思ったより早かったね？」
現れたミャコたちを見て、悪戯がバレた子供みたいに舌を出すマイカ。
見ると、そのピンクの派手派手ドレスは、煤にまみれ、あちこちに引き裂かれたような痕があって痛々しかった。

「マイカさま、大丈夫！？」
「マイカ様、お怪我を？」
叫び、突進するんじゃないかって勢いでマイカに駆け寄るアズとミズ。

「ああ、これ？　平気だよ、一張羅はちょっと汚れちゃったけど」
見た目はともかく、まるでこたえていない様子で朗らかに笑う。
だけどそれは、明らかに戦いの後だった。

「……一体何があったの？　お留守番しててって言ったのに」
無事だったみたいだからよかったものの、思った通りになっちゃったなって内心へこみつつ、ミャコはそう問いかける。

「ん？　ちょっと退屈に我慢できなくなっちゃってさ。船でも見にいこうって思ってここまで来たら船にむかつくやつがいたんだよね。

多分、煙か何かのドリードだと思うんだけど、偽物の神がどうのこうの言ってて、神に仕える闇の眷族は俺だ、とか言い出してさ、あたしのこと殺そうとしたから……返り討ちにしちゃった、どぉーん！って」
するとマイカは、実に楽しそうに身振り手振りあったことを解説してくれた。
そう言うマイカの言葉に聞き覚えがあって、ミャコははっとなる。

偽物の神に組するもの。
火の名（カムラル）において。
それは、ガルラが言っていた言葉で。
一体どういうことなんだろう？
それは、ミャコたちと喋るドリードの彼らに、それぞれの神様が別々に存在しているかのようにも聞こえるけれど。

「そしたらさ、船が崩れ出して、沈んじゃったんだ。多分、あの船とゾンビたちを操ってたのはそいつだったんだろうね。元々船も苔とかすごくて、ずっと昔に海の底に沈んでたやつだったみたいだし……」
続くマイカの言葉は、ゾンビたちを見てミャコが考えていたことと同じだった。

「あれだけの数を操るなんてやるじゃんって思ってたけど……弱かったな～。このことが最初から分かってれば、城も壊さなくてもよかったのかもね」
だけど続いた言葉がやっぱり身も蓋もなくて。
くたびれもうけの骨折り損って言われてるみたいで、さらにへこむ。
「ま、どっちにしても作戦成功ってことだね。あたしも楽しめたし、

ごくろうごくろう！」
そんなミャコたちを見て、フォローするみたいにマイカが笑って。
「それはいいんだけどさ……マイカさん、アキ様は？」
たぶん聞きたくてしょうがなかったんだろうルーシァの問いかけ。
一瞬の間。
何だか焦らしてるみたいでドキドキしたけど……。
「あ、そうそうアキちゃんったらひどいんだよ。お話してたら急に眠っちゃって、何しても起きないんだもん。だから退屈になっちゃって」
まるでお留守番できなかったのはアキのせいだ、とでもいいだげなマイカ。
でもなんだ、寝てるだけか。そう思って安堵しかけて……。

「また予言が下されるんだ……」
ルーシァの重い呟きが、辺りに響く。
それの意味するところはつまり。
ミャコたちには休む暇もないらしいといった、純然たる事実だった……。

25、臆病風の、既に回避されていた予言

そんなこんなで。
ミャコとルーシァなんかずぶ濡れだし（水の国のローブだけあって、スケスケにならないですんだのは助かったけど）、そうは言ってもちょっとは休みたいなぁなんてぼやきつつ、アキが寝てるという『ブルバドゥ』のある入り江まで戻ってきて。

「あれ？　アキ様起きてる……？」
身体を起こし、じっと虚空を見つめたままのアキを見て、不思議そうにルーシァが首を傾げる。
微動だにしないアキの瞳は、どこか切羽詰っているようにも見えて。
そこはかとなく嫌な予感のするミャコだったけど。

「……予言が下された。それも、三つ同時にだ」
その嫌な予感は、戻ってきたミャコたちに気付いて発せられたアキの言葉で、確信めいたものへと様変わりした。

「予言って、今回の件と同じようなのってこと？」
『ブルバドゥ』から少し離れた場所で火を焚いて、それをみんなで囲むようにして話し合いの場をかためた後、初めにそう聞いたのは、マイカだった。

「ああ、そうだ。たった今……まだ会っていない４人のレイアの命の危機を知らせる予言が下された」
４人……ここにいないセイルさんを除けば、残った全てのレイアの

数に相当する。
「そんな、一気に４人も？　こんなこと今までなかったのに……」
フルアーマーを着込み、ようやく定位置に戻ったルーシァだったけど。
その表情見えなくとも、言葉通りそれがありえない事態であることがよく分かるほどに、その声は重く沈んでいる。

「今度のはどんなの？」
そんなルーシァの代わりに、先を促すようにえっちゃんが聞いた。
アキはそれに重々しく頷き、歌うように言葉を紡ぐ。

「雷の魂を宿したサーカスの猛獣使い、光の使いと手を取り、永久の見世物と化す。
孤高の炎、強き魂を持つもの。孤独の残酷さを知り、物言わぬ氷の彫刻と化す。
水の国の騎士、守るべき光の王女を守ることも叶わず、その剣を折る。偽りの神をあがめる狂信者の手によって……」

「……」
長く重い、永久に続くような沈黙。
だけど、アキの口から紡がれたその予言の中身が浸透してくるにつれて、ミャコはさらに愕然とした。

「そんな。３つともここからじゃ遠いよ。一度にこの数日以内で何とかするなんて……」
不可能だった。
誰かを助ける代わりに誰かが犠牲になってしまう。
そう考えたら怖くて動くこともできない。

「遠い……それってミャコ、みんな場所、しってるってこと？」

だがしかし、ふいに発せられたえっちゃんの言葉に、そこにいるみんながミャコに目を向けた。
みんなして絶望の中に光を見た、そんな顔をしている。

「え？　そ、それは……たぶん、知ってるよ。雷の猛獣使いっていうのはユーディル大陸で一番有名なサーカス団で花形張ってる、カコのことだろうし。孤高の炎って言えば同じユーディル大陸のカムラル火山に暮らしてるコウのことだと思う。
水の騎士は言うまでもなく水の国（ウルガヴ）の聖騎士をつとめてるディノのことだし、ディノが仕えてるのが光のレイアにして水の国の王女の……ユーミのことじゃないかな」

今更もう、何で知ってるのかなんて考えてる余裕なくて、指を折々、ミャコはそれに答えた。
ミャコはその言葉に間違いないよねって強い確信めいたものを持っていた。
何故ならば、アキの予言はレイアの危機を知らせるものだからだ。
ここにいない子で、まだ会ってないレイアは、もうその４人しかいないんだから。

「ミャコさん。顔が広いねぇ。さすが翼あるものってところ？」
「ミャコ、友達たくさん、すごい」
そんなミャコを誉めそやすルーシァとえっちゃん。
何故ミャコがそんなにも顔が広いのか、特に疑問に思うことなく、各々納得してくれたらしい。
ただアズが、やっぱりって顔で瞳をきらきらさせてたのが、ちょっと気にはなったけど……。

「なんだ、それなら話は早いじゃん。これだけお友達がいるんだもん。みんなで手分けして助けに行けばいいんじゃない？」

「それしか……ないだろうな」
どこか楽しそうなマイカの言葉に、重々しく頷くアキ。
手伝ってくれれば助かるなぁとは思ってたけど、ちょっとびっくりなミャコである。

「手分けって、手伝ってくれるの？」
「何を今更～。もうとっくに巻き込まれてるじゃん。何せもう、帰るとこなくなっちゃってるんだし」
そのびっくりを口に出すと、マイカは心外そうな顔をして皮肉げに笑った。
「ご、ごめん」
「んもう。真面目だな、冗談だよ。……つまり恩返しくらいさせてってこと。それにここまで来たらさぁ、レイアが１２人全員揃ってるとこ、見てみたいじゃん？」
くすくすとおかしそうに、マイカは笑う。

「だったら善は急げだね、セイルさんにも応援を頼もう」
みんなで手分けして他のレイアたちを助ける、そう決まったところで。
ルーシァが手を打ち、何やら鏡のようなものを、ルーシァが持つ金の力で、その小さな手のひらに出現させた。
何だろって思って覗き込んでいると、ルーシァが何やら操作して、それまでルーシァとミャコが写ってた鏡がぐにゃりと歪み、黒くなったと思ったら、そこには相変わらず妖艶で不敵な笑みを浮かべた、セイルさんの姿があった。

「ふふふ。ようやく私の出番のようだね。おやおや？　しばらく見ないうちに可愛い子たちが増えたようじゃないか。うれしいね。さぁ、みんなまとめて私の胸に飛び込んでおいでよ」

ルーシァの珍しい力に、そこにいるみんなが集まってアキにくっつくようにして鏡を覗き込んでいると、セイルさんが本気で嬉しそうな顔をして、腕を広げている姿が見えた。
アキはみんなによってたかられて迷惑そうにしていて。
最近自分自身のことをちょっと自覚したせいか、そんな嬉しそうなセイルさんの心情が分かるような気がしてきたミャコが、いいやら悪いやらだったけど。

「それは後でね。今は緊急事態なの、話を聞いて！」
「緊急事態？　まぁ、私に連絡してくる時点で予測はしていたがね。……聞こうじゃないか」
ルーシァの言葉に、片眉を跳ね上げ、手を下ろし真剣な表情になるセイルさん。
そんな彼女に、ルーシァは今までのことを手短に話して見せて。

「ふむ。一度に3つの予言か。なるほど、のんびりしてはいられないということか」
実に頼もしい笑顔で、そう呟くセイルさん。
だけどその時ミャコは、そんな二人のやりとりに違和感を覚えた。
だからミャコは、話の腰を折ることを分かっていながら、口を開いていた。

「あれ？　セイルさん、アキの予言の力のこと、知ってたの？」
「ん？　ああ。初めて会った日に聞かされたよ。私の宿から出てはいけない。故郷に帰ってはいけない……ってね。出なきゃ死ぬぞって脅されたのさ。そう言われると怖いもの見たさに出たくなるものだが、可愛い子の頼みは聞く主義でね。……もちろん、見返りはたっぷり戴いたが」
言ってウィンク。

アキとルーシァがそろって肩を震わせる。
どんな見返りなのかは、怖いから考えないでおくとして。

「そんな話、全然聞いてないけど……」
「あ、そうだった。ミャコさんその日寝たっきり朝まで起きなかったもんね。言い忘れてたよ」
しれっと、そんな事を言って笑うルーシァ。
つれないなぁとは思ったけど、その時のミャコだって二人にたくさん秘密にしていたことがあったのは確かだったから……何も言えなかった。
でも、これで微妙に引っかかっていたことが解決したのも確かだった。

ナヴィ専用の宿を探していたアキたち。
たぶん初めから、セイルさんにも用があったんだろう。
山に登る前にわざわざ泊まったのも、セイルさんに予言のことを話し、ひいてはセイルさんのことを助けるためだったに違いない。
ミャコのことはレイアだと分かってたってことは、セイルさんに対しても当然そうだったってことだから。

「ふむ、新しい子もいることだしね。改めて名乗っておこうか。私はセイル・ガイアット。華麗なる地のレイアさ。可愛い子たちの味方だ。その胸にしっかと刻み込んでおいてくれたまえ」
そんな事を考えていると、セイルさんはノリノリで高笑いなんぞしながら、どうどう名を名乗った。
レイアであることを怖がって話さなかったミャコを笑い飛ばすかのようにあっさりと、豪快に。

ミャコはそんなセイルさんに思わず笑みをこぼしてしまう。
それは、ガイアットの人はみんなセイルさんみたいだって噂を思い

出したせいもあったけれど。

「アズ・アーヴァインだょ！　ょろしくっ！」
「ミズ・ピアドリームです……えっとその、よろしくです」
「マイカ・エクゼリオだよ。強そうだね、お姉さんも」
それに初顔合わせの三人が、ならって名を名乗る。
アズは元気一杯に、ミズはおどおどと、マイカは実に楽しそうに。
「ふふふ、ああ、よろしくしてくれたまえ」
それを受けて、セイルさんは、本当に満足そうな笑みを浮かべていて。

そんなわけで……改めてセイルさんがミャコたちの『世界を救う旅』その仲間に加わることとなって。
ちょうどきりよく8人となったミャコたち。

残った4人を助けるために、2組に別れて行動する。
そう事がうまく運べばよかったんだけど。

ミャコたちには、徒歩以外の移動手段が、ルーシァの『ブルバドゥ』しかなかった。
そこで、よりにもよってもう一つの移動手段として挙がったのが……なんとミャコだった。
とはいえ、風の力だけじゃそんな長時間、尚且つみんなを乗せて運ぶ、なんて真似ができるはずもなく。

「ええっ、ミャコを？　無理だよ、そんな」
何言ってるのって顔をアキに向け、そう言う。
「翼を使えばいい。ミャコは翼あるもの、なんだから」
だけど静かに、アキにそんなことを言われて。

「……そ、それは」
ミャコは違う意味で言葉を失ってしまった。
それを背中につけることの重さと、それを背につけて飛ぶミャコのことを、見たことのないはずのアキが、まるでそれを知っているかのような口ぶりをしたからだ。

「覚えているか？　翼あるものに会いに来た、ルーシァがそう言っていたことを」
「あ、そっか。そう言えばミャコさんの時の予言の一文、ちゃんと聞いてなかったよね。エミィさんの件で曖昧になっちゃってて」
ミャコがそんなことを考えていると、畳み掛けるようにアキが、ルーシァが、そんな事を言う。
ミャコはルーシァの言葉に、そう言えばと改めてアキの顔を伺う。

「重いさだめを背負いし翼あるもの。孤独とともに哀しみの空へと落ちてゆく。
……それがミャコ、君に下された予言だった」

歌うように言葉を紡ぐ、アキの言葉が心に響く。
それは、その通りだったからなんだろう。
前の世界でのミャコのことが、ありありと思い浮かんで。

「そうだね。覚悟はしてたはずなんだけど」
ミャコはアキの言葉を受け、ちょっと自嘲気味に笑うと、道具袋からその翼を取り出した。
アイラディア様から授かった黄金の縁取りがされた白い翼。
他のレイアの命のキセキを奪うことのできるもの。

この世界に来てから……ミャコはそれが怖くて、背中に負うことができなかった。

命のキセキは、その宿主が死んでしまうことで、その膨大な力の行き場を失い、世界を壊す。
だからその前にミャコがその力を奪い、翼にしまう。
それがミャコの使命。
アイラディアの死神なんて言われるようになったことへの始まり。
ひとたびそれを背に負えば、ミャコの大切で大好きな人たちがその命を散らしてしまうんじゃないか。
それは、結果じゃなくミャコの思い込みにも等しかったけど。
ミャコにとっては、避けようのない事実だったから。
今の今までそれを背に負うことはなかった。
覚悟できてるって言いながらも、ミャコは逃げてたんだと思う。
この翼を背負えば、アキの予言通りに、一度体験した悲しいことが起きてしまうんじゃないかって。

だけど今は、そんな事言ってられないんだろう。
その宿命を負わずとも、かつて悲しいままに遠くへ行ってしまった子たちが、同じ運命を辿ろうとしている。
背に腹は変えられない。
そう思い、翼を背につけようとして。

「っ、ちょっと待ってくれ。ミャコは勘違いしている。覚悟って……何故今になってあえて口にしなかった君への予言を口にしたと思っているんだ？」
珍しく、アキの慌てたような、うろたえているような声。
ミャコは思わず手を止めて、そんなアキを見る。
「そもそもそれを口にしなかったのは、口にしたらミャコが私たちの前から逃げてしまうんじゃないかって、そう思ったからだ。ミャコは、自分が翼あるものだと言うことを隠したがっていたからだ」
しかし、その口調はすぐに落ち着いていて。
自分自身のみならず、ミャコにも落ち着きを取り戻させようとする。

落ち着いて考えてみれば。
何故今になってその話をするんだろう、というのは確かにあった。
まぁ、アキの言う通り、いきなりそんな予言の話をされたら、臆病なミャコは逃げ出してたかもしれないけど。

「だから私はあえてそれを口にしなかった。だから言わずに予言によって起こることを防ぐことにしたんだ」
一体、どうやって？
そう言わずとも、ミャコがそう聞きたがっているのが、アキには分かったんだろう。
アキはちょっと呆れたような、淋しそうな、そんな顔をする。

「気付いてもらえなかったのはちょっと悲しいな。ミャコは今まで、決してひとりじゃ……孤独じゃなかっただろう？」
「ミャコ、つれない」
苦笑のアキ。
そう言ってさりげなくミャコの手を掴むえっちゃん。

「っていうか三日ルール忘れてるよミャコさん。ミャコさんはとっくに起こるはずだった悲しいさだめから外れてるってことをさ」
そして、決定的な補足をルーシァが口にして。
「あ……」
ミャコはようやく理解した。
ミャコに下されたという予言による悲しい結末が、ミャコの知らないままに代えられていたということに。
アキやルーシァ、セイルさんにえっちゃん、マイカとアズとミズ。
みんなが側にいてくれたことで、抱えていた宿命を語ることで、救われていたというその事実に。
目が覚め、陽光昇るような気持ちになって。

ミャコは改めてみんなを見渡す。

「ありがとう」

一人ぼっちなんかじゃない。

それをはっきり伝えてくれるみんなの笑顔。

ミャコはひとつだけ涙をこぼして、だけどすぐ同じ笑顔を浮かべて。

そう言葉を返したのだった……。

26、臆病風、思い起こせば初めての遊覧

そうして。
ミャコは今、何の憂いもなくなった黄金の翼を、上がり始めた朝日をいっぱいに受けて。
一路水の国を目指して飛んでいた。
両肩には、溶けない氷のロープ。
それを伝って目線を下にやれば、お手製の氷でできた籠に座って、気持ち良さそうに風を受け、そのさらさらの髪を靡かせたえっちゃんが目を細めている。

「お客さーん、乗り心地のほうはどうですかーっ！」
「さいこーっ」
風と羽ばたきの中、声を張ってそう言うと。
えっちゃんが笑顔のまま顔を上げ、そう言葉を返してくる。

あの後。
早速ミャコは翼を披露して、ようやく風のナヴィらしくなったとか、偉い人に見えるとか、別人のようだとか、褒められてるんだかそうじゃないんだかよく分からない賞賛を受けつつも、実際に飛んで見せた。
心のつかえが取れたからなのか、飛ぶことに思ったより恐怖心は感じない。
問題はなさそうに見えたんだけど、いざそれぞれがどこに向かうか決めようとした時に、その問題は発覚した。
翼は生えても、やっぱりミャコはミャコと言うか、ルーシァの乗り

物とは違って、その背に人を乗せて飛ぶ、なんてことは不可能だということが分かったのである。

当初の計画では、４人４人で別れる手はずだったんだけど。
たとえミャコ側にルーシァがいたとしても他に二人を背負ってくのはきつかったし、
それより何よりルーシァの『ブルバドゥ』は、ルーシァがいないと動かないらしくて。

色々あーだこうだと考えて。
結局今の形になった。

ミャコ側、水の国のあるリルミータへ向かうのは、えっちゃん自慢の溶けない氷で籠をつくったえっちゃんと、アイラディア大陸から合流することになってるセイルさん。

雷のレイアのカコや、火のレイアのコウがいるユーディル大陸には、アキ、ルーシァ、マイカ、アズ、ミズという組み合わせに。
それは、三人一緒のほうがやりやすいといったマイカの弁と、予言を回避したとはいえ、地の国のあるユーディル大陸には寄らないほうがいいだろうというセイルさんに対してのアキの言い分もあっての結果だった。
今ミャコたちのできる最上の組み合わせだったんじゃないかなってミャコは思う。
それでも強いて苦言をあげるなら、ルーシァの『ブルバドゥ』の後ろの席に三人でぎゅうぎゅうになって座るマイカたちが、ちょっと不憫だったかな、なんてことで。
悠々自適なえっちゃんを見ていると、余計にそう思うミャコだったけれど。

ふと、そんなえっちゃんがごそごそしていたと思ったら。
取り出したのはルーシァから預かってた鏡みたいなやつだった。
それを両手で持って覗き込んでいるえっちゃんを背中から見ていると、やがてそこに映し出されたのは、相変わらず笑顔のセイルさんで。
強い風の中、何かを話し込んでいるえっちゃんとセイルさん。
何を話してるのかなって知りたいのは山々だったけど。
この風の中、聞き耳立てられるほど余裕があるわけでもなく、驚くほどに軽い氷の籠をそっと背負いなおし前方を見据えた。

朝方ザオーキ大陸を出発して半日ほど。
見慣れてきた海と空だけのまあるい世界の端っこに、目指すリルミータ大陸が見えてくる。

「ミャコ。セイルさん待ち合わせ場所のシノイの町についたって」
「え？　も、もう？　わ、分かった」
話が終わったのか、鏡をしまい口元に手を当てて、えっちゃん渾身の大声がミャコに届いてくる。
ミャコはそれに大声で答え、翼を急がせた。

シノイ。
元は光の一族が主に暮らしていた町。
現在では、そこで暮らしていた一人のナヴィが水の国の王の元に嫁いだことで、水の一族と和平を結び、水と光の一族が共存している。
そんなシノイの町は、ミャコたちレイアにとっても大きな意味を持つ町だ。
何故ならシノイは、始まりのレイアが生まれた町なのだから。
世界で唯一命のキセキを正しく使うことのできたナヴィのいた町。

願うならばその力を正しく使いたい。
そう思うミャコたちのとっても、捨て置けない場所だった。
けど、そこをセイルさんとの待ち合わせ場所に決めたのは、それが理由ってわけじゃない。
水の国ウルガヴに一番近い町って理由もあるにはあるけど。
そこには、水の国の騎士、ディノ・ウルガヴがいるはずだからだ。

アイラディアの神にも、コドゥにも、最も従順で敬虔だとされる水の一族。
レイアの生まれにくい環境の中で、レイアとして生まれたディノは、水の国の王女にして二代目になる光のレイア……ユーミ・セザールを守る盾であると同時に、ユーミと同等の地位を持っていた。
水の国の宝として、水の国を象徴する二人のレイアとして。
水の王ウルガがそれをどんな意図を持ってなしたかはミャコにはよく分からない。
あるいはえっちゃんのように、レイアであることを晒すことで、国を持って二人を守るつもりだったのかもしれないし、二人の命のキセキを使うに相応しい人物を探していたのかもしれない。
初代の光のレイアを愛することで、正しく命のキセキを使いこなしてみせた王のことだから……何らかの意味があったんだろうけど。

そんな王のこと、水の国のこと、ただ一人願いを叶えた光のレイアのこと。
ミャコに知るきっかけを与えてくれたのがディノだった。

かつてのミャコは、えっちゃんとともにシノイの町へと訪れ、そんなディノと出会い、町や国を離れたがっていたディノを仲間に加えて、新たな旅に出たわけだけど。

その時のミャコたちと、今のミャコたちとでは、同じようでやっぱり違うんだろう。

前にシノイを訪れた時より時期は遅いし、何よりそんなディノを町や国から離してしまったことが失敗だったってことを知っている。
それに、アキの予言、二人に訪れる命の危機、それがミャコの知っているものであるならば、明らかに起こる時期が早い気がした。
それが、ミャコの記憶の通りのものならば、それは水の国の崩壊を意味していて。
必然的に気持ちが焦る。

「ちょっと飛ばすよ。えっちゃん！　ちゃんと掴まっててて！」
「わわ」
ぐんと急降下、思う通り空を飛べている自分に、何か夢を見てるような気分になりつつも、ようやく見えてきた港町へと急いで。
逸る気持ちのまま、ミャコは辺りを確認しながら、町に程近い野原に降り立つ。
足から降りて、えっちゃんの氷の籠ごと抱え込む形で、ゆっくりと。

「とうちゃくっ」
それは、決して進む道に絶望していない、えっちゃんの元気な声。
村を滅ぼしてしまったことで、強く傷つき沈んでいたえっちゃんとは大いに違う。
ミャコはそれに複雑な思いを感じつつ、氷の籠を無に帰すえっちゃんに合わせて、翼を待機状態に変化させた。

「あ。ミャコの翼なくなった」
それに気付いたえっちゃんが、不思議そうな顔をしてそう言うので、ミャコはなくなってないよと一言笑ってから振り向いた。

「あ、ちっちゃくなってる。ミャコ、かわいい。こっちのほうが似合ってる？」
「喜んでいいような、ダメなような…」
えっちゃんの言うように、待機状態の翼は、ミャコの肩から膝まであった通常のものから姿を変え、
手のひらほどの大きさになっているはずだった。
これだとちょうど道具袋にくっついて、おもちゃみたいになるので、作り物ですって言い訳ができる。
一度つけたら全ての叶わなかったレイアの命のキセキを集めるか、ちぎれ壊れるまで取れない（実際はそんなことなかったけど）、この翼の苦肉の策だった。

通常状態の時よりも興味津々なえっちゃんが、遠慮なく触ってくるのがくすぐったくてパタパタと抵抗していると、ふいに生暖かい風が吹いた。

「ん？雨でもふるのかな、黒い雲」
見上げるえっちゃん。
確かに大陸の……水の城があるだろう場所よりも遥か向こうに、黒い雲がわだかまっているのが分かって。
根拠はないのに、なんとなくいやな予感がする。

「急ご、えっちゃん。天気が崩れても困るし」
「うん」
えっちゃんと同じようにその向こうの空を見上げつつ、ミャコはそう言った。
そして、なんの躊躇いもなくミャコからえっちゃんの手を取り、駆け出す。

そして。
ふいに沸いて出た不安とは裏腹に、ミャコたちは何の問題もなく、シノイの町の前まで辿り着くことができて。
宿屋かどこかで待っているんだろうなって思ってたセイルさんを、何故か町の入り口に立ってる門番さん（別に関所とかがあるわけじゃなく、ほとんど立ってるだけ）からも見えないような、背の高い草むらの中で発見した。
ミャコたちがそんなセイルさんを見つけることができたのは単純。
そんなセイルさんのほうから声をかけてきてくれたからだ。

「待ちくたびれたよ、子猫ちゃんたち」
「わ、びっくりした」
急に声をかけられたから……二人してびくってなって。
振り返ればそこには、待ちくたびれたようには見えない、セイルさんの朗らかな笑顔がそこにあった。

「何してんのそんなとこで……って、いうか随分早かったね」
「ああ、私のレイアとしての力の賜物さ。大地を走るならお手のもの。君の可愛らしい翼にも引けはとるまい……後は、この子の案内もあったしね」
翼での移動にはそれなりに自身もあったんだけど……それにしてもセイルさんがここにいるのは早すぎるような気がして。
思わずそう聞くと、返ってきたのはそんな言葉だった。

「あ、ルーシァ」
「えっ？」
セイルさんの力、レイアークって確か……なんて考えようとして。
呆けたように呟くえっちゃんに、ミャコは思わず素っ頓狂な声をあげてしまう。

えっちゃんの視線の先を追うと、そこには地の国の紋様の入ったマントをばさっとはためかせるセイルさんが腕に抱えてる、小さな金色のフルアーマーの姿があった。

「めぇ」

ミャコとえっちゃんの視線が集まったことに気付いたのか、何だか変な言葉を返すルーシァを訝しく思っていると。

何を思ったのかえっちゃんが、とてとてとルーシァに近付き、その暗い面差しの向こうを覗き込む。

「めぇっ」

「……っ！」

何か怖いものを見たみたいにびくっとなってだだだって戻ってくるえっちゃん。

「も、もしかして、羊でもいた？」

その鳴き声と、今頃ユーディル大陸にいるはずのルーシァがここにいるわけないって事実と、かつてルーシァと戦ったときの、そのレイアークの記憶。

それらを鑑みて聞いてみたミャコ。

えっちゃんはそんなミャコをじっと見て、

「ぐふふ……後悔したくなければ、ミャコも自分でみればいい」

「めぇ～っ」

似合わない笑みと、イジワルな言葉。

どうぞと言わんばかりの、誘ってるような羊っぽい何かの鳴き声。

「や、やめとく……」

臆病なミャコは、そう答えるのが精一杯だった。

たぶん、ミズのお猿さんみたいな、あまり力の使わないタイプのレイアークなんだろうなって、勝手に納得することにして。

「そ、それで？　何でこんなとこに？　別にシノイは危険な町じゃないと思うけど」
セイルさんも、国を出てきたわけだから、ミャコみたいにコドゥのたくさんいる町が嫌なのかも、なんて思いつつもそう聞いてみると。
「危険かどうかは計りかねるが……町がおかしいのは間違いなさそうだよ」
ルーシァ？を肩の上に乗っけて、いささか真面目な口調でセイルさんはそんな事を言う。

「おかしい？」
「ああ、そうとしか言いようのない何かが、町で起きているようだ。あの、時のお嬢さんの言う予言に関連してるのかもしれないが、私には判断つきかねるものでね。実際体験してみれば分かるだろうが」
セイルさんは、自分にそう言い聞かせるみたいに頷き、歩いていこうとする。
だけどすぐに立ち止まって。
「ああそうだ。この町を落ち合う場所に決めたのは、何か訳があるんだろう？」
そう聞いてきた。
ミャコはそれにひとつ頷き……答える。

「うん、この町にディノが、水の騎士がいるはずだから」
「場所は？」
「光の神殿のほう……かな？」
アイラディアさまの像が祭ってある、神聖な場所。
初めに、ディノと出会った場所。
確証はなかったけど、ディノは今もそこにいるような気がして。
ミャコはそう答える。

「神殿か。よし、では早速向かうとしようか」
そして、今度こそそう言って華麗に先陣を切るセイルさん。
ミャコはえっちゃんと連れ立って、その後についていったのだった
……。

27、水銀（みずがね）の騎士、臆病風に神を見る

「もうすぐ門番の前を通る。なるべく顔は隠しておくんだ」
シノイの町。
門番さんたちの見えるとこまで来て。
セイルさんは、ミャコたちだけに聞こえる声でそんな事を言う。
それには断る理由はない。
おそろいの水の紋様の入ったフードをかぶって、セイルさんの後に続いて。

「シノイの町へようこそ！」
お決まりの、何の変哲もない言葉。
気になってその門番さん（なんと、コドゥとナヴィの、二人一組だった）をちら見する。

「……っ」
別に通せんぼしてるわけでもないし、難癖つけるわけでもない。
だけど明らかに、門番さんたちはミャコのことを見ていた。
いや、じっくり観察していた、といってもいいかもしれない。
そこにはただ興味深げな視線がある。
なまじ敵意や悪意が感じられないのが、余計にミャコの不安を掻き立ててきて。
一体なんなんだろう？　そう思いつつも、それ以降声ひとつかけられることもなく、ミャコたちは町の入り口である門を通過して。

「……っ！」
町へと入り、いくばくもしないうちに、セイルさんの言っている意味を理解した。
町を歩く人々。

露店の人、見回りの水の軍の兵隊さん。
その誰もが、ほんの一瞬だけ、入ってきたミャコたちのことを注視する。
だが、その視線を受けようとしたら、そんなことは初めからなかったみたいに、その視線が消えた。

その得体の知れない居心地の悪さ。
それは、ヤーシロの町でもルフローズの村でも、僅かに感じたものだったけど。
シノイでのそれは、なんというか規模が違った。

「……」
えっちゃんが無言のまま、くっついてくるのが分かる。
それは期待だ。
何かを待つ、期待の視線。
そこには怖いもの見たさの喜びがある。

「全く、不可解だと思わないかい？　これならまだ射殺すほどの敵意をぶつけられた方が正直だ」
後ろ手に、独り言のようにセイルさんは言う。

「だがその一方で、彼らが何かに追い詰められ、緊張しているのも確かなようだ。
まるで祭りの前日か……これから戦争でも起こそうか、なんてくらいに」

そして、町の中央広場まで行ったところで立ち止まり辺りを見回し、そう続けた。
確かに町は、セイルさんが言うように、何か共通なものに沸き立ち、緊張感が高まっているように思える。

本屋に花屋、武器屋に道具屋。
やっていない店もあるけど、買い物なんかしてる暇ないって感じに、どこも閑古鳥が鳴いている。

数人が集まって何やら話をしているのを見れば、どこか興奮しているようにも見えるし、見回りの兵隊さんなんかは、見回りもせずに素振りなんかしてて。
かと思えば、鐘つき係の兵隊さんは、一心不乱に辺りを警戒していた。

戦争。そんなセイルさんの言葉に、フラッシュバックするのは王殺しの罪を背負わされ、国中の人々に追われることとなった過去の記憶。
この昂ぶる感覚は、その時のものに近いような気がして。
いよいよミャコの中でいやな予感が止まらなくなってきたとき。

「ねぇ、ミャコ、あのでっかいの、何？」
呆けたようなえっちゃんの声がごく近くに届いてきて。
えっちゃんのほうを見、その指し示す方向を見やる。

「わっ……何あれ？」
それは、広場の土地全てを覆ってしまうんじゃないかってくらい大きい四角い何かだった。
一見すると、物凄く巨大な鏡にも見える。
と言うかぶっちゃけ、今はえっちゃんが持ってるルーシァ仕様の鏡のでっかいやつを想像してしまった。
ただ、鏡の部分はまっくろで、かろうじて縁取られた銀色が見えるくらい。

それを支えるのは、たぶん鉄だろう、大木のような柱だった。
「前に来たときは、こんなのなかったのに……」
「そうか、キミも知らないか。来たことがあると言っていたキミなら何か知ってるかと期待したのだが」
どうやらそれのために、セイルさんはここで止まったらしい。
それが何であるのか、何に使われているのか、セイルさんは町の人に思い切って聞いてみたそうなのだが、その返事は芳しくなかったようで。
「知らぬ存ぜぬの一点張りだったな、誰も彼も。それなのにも関わらず、本当は知ってるって顔をされる。全く、やってられないよ」
「めぇ」
お手上げだと両手を上げるセイルさんに、どこか切なげなルーシァもどきの羊さん。
結局、それについては何も分からずじまいで、どこか釈然としない気持ちのまま、ミャコたちはその場を後にして……。

その大きな四角を抜けるようにして後ろに回り（後ろは平べったい鉄の板だった）、その向こうにある神殿を目指す。
神殿……光の根源を表わす太陽の印が刻まれた白亜の神殿は、ミャコの想像以上に静かだった。
「妙だね。さっきはここにも嫌になるくらい人がいたのが見えたんだが」
神殿の中ほどまで来たところで、唸るようにセイルさんが呟く。
それは深々と白い地面へと染みていき……。

バババチィッ！

返ってきたのは。
「きゃぁっ！？」
雷が炸裂した音と、ナヴィの悲鳴だった。
「ディノ！？」
それが、知っている声だったから。
知っている人の聞くことのないだろう悲鳴だったから。
気付けばミャコは駆け出していた。

「ミャコ！」
後ろ手にえっちゃんの呼ぶ声。
それでも止まれない。
すぐに辿り着いたのは、大きな扉のある聖堂だった。
アイラディアの像がある神聖な場所。
その扉は開かれていて。
ミャコはえっちゃんやセイルさんが追いかけてきてくれていることを確認し、中へと飛び込む。

「終わりだ……アイラディア様の名の下に、塵と化すがよい、偽物の神を信じる愚者め！」
そこには、片膝をつき、青い髪を床にこぼしながらも水の剣を構えるディノと。
大きな斧に紫電をまとわせた……巨体の姿があった。
大きすぎて、言葉を喋っていてそうだという確信が持てなかったけど、たぶんトロールだろうそいつが、今まさに止めを刺そうと、その斧を振り上げている。
対するディノの構える剣は水。

到底それを受けきれるものじゃなかった。

「やぁぁーっ！」

低い姿勢で右手を前に突き出し、気付けばミャコは走っていて。

なのにそいつは、突然の闖入者に怯むことはなかった。

ミャコを見、わずかに凍えた笑みを浮かべて、その斧を振り下ろして……。

それからの一瞬は、ミャコにとってはすごく長いものだった。

「ガイアットよ、守りたまえ！」

「レッキー！　守って」

ディノに迫る斧は、這い出し伸び上がってきた地面に遮られ、ぶつかりあって。

流れ飛んできた雷が、ミャコのほうに飛んでくる。

だが、それは突如としてミャコの前に現れた氷の盾によって防がれ、打ち消されて。

「なっ……！？」

ようやく見せる、雷のトロールの驚愕の顔。

ミャコはそれを隠すように、手のひらを内側に開いて。

「風のキセキよ、その姿を示せ、アンヴァ・ヴァーレストッ！！」

そう叫んでいた。

ミャコの身体の中に眠るレイアークを発現させる、その一句を。

ガオオオォォンッ！

生まれるは白金の虎。
目の前のそれの断末魔と、虎の咆哮が重なって。
喰らわれる獲物。

長い一瞬が終ったとき、そこにあるのは鈍い黄色の輝きを放つ、石だけで……。

※　※　※

「はふぅ。びっくりしたぁ。ディノってばいきなりピンチなんだもん」
刹那の戦いが終わって気が抜けて。
レイアークを使った反動も加算され、ミャコはへなへなとへたり込み、ディノに笑いかける。

「全く、飛び出したら一直線なんだからな」
「ミャコ、自分勝手」
そこに、やれやれと苦笑を浮かべたセイルさんと、むすっとしてるのも可愛いえっちゃんがやってくる。

「ありがと、うん。助かったし、間に合ったよ」
アキの言っていた予言によるディノの危機が去ったと断言できるわけじゃないけれど。

それは恐ろしいくらいギリギリのタイミングだった。

あと一秒でも遅れてたらと思うと、ぞっとしてしまってますます力が抜けてくる。
とはいえ、目の前のディノが、さっきの雷のトロールに苦戦を強いられてたのは確かなんだろう。
何度か水のナヴィの弱点だろう雷の攻撃を受けてしまったらしく、その青銀のプレートアーマーはところどころが焼け焦げていて。
髪をくくっていた髪留めがちぎれてしまったのか、いつものトレードマークって言っていいポニーテールじゃなく、深海のような青い髪がディノを覆うように広がっている。

その澄んだアクアマリンを秘めし相貌は、どこか呆けたままでミャコのことを見ていて。
そのままあんまりにも動かないものだから、ちょっと心配になってくる。

「ディノ、大丈夫？」
だから伺うように声をかけると、はっと我に返ったかのように目をしばたかせ、
「今のは……レイアだけに許される力。それにその翼。あなたは、もしや」
ミャコを再度見て、いつのまにか通常状態になってたらしい翼を見て、そう問いかけてくるから。

「うん？　そうだよ。アタイはミャコ・ヴァーレスト。風のレイアで翼あるものなの」
先んじて頷き、そうきっぱり答えた。
もう黙ってるのに意味はないし、何より正直でいたかったから。

「私はエミィ・ルフローズ・レッキーノ……氷の姫？」
「始めまして、凛々しいナヴィの人。私はセイル・ガイアット。そ

の名も愛の狩人さ」
それに続けと、えっちゃんとセイルさん。
ディノは、それに礼儀正しく頷き、膝を突いたまま深々と頭を垂れて、
「危ないところを助けていただき……わたくし、ディノ・ウルガヴは深い感謝の念を禁じえません。
新しきアイラディアの神よ」
まずはえっちゃんとセイルさんに自己紹介をするみたいに。
それからミャコに向かって……そんな事を言ってくるディノ。

「あれ？　ミャコの名前また増えた」
「え、ちょ、ちょっと、新しい神ってどういうこと？　アタイはミャコだよ？」
ディノの態度を見て、ミャコを見上げて首を傾げるえっちゃん。
死神って言われるならともかく、新しい神ってなんなのさって感じで、思わずうろたえるミャコがいたけど。

「お名前まで聞かせていただけるとは、恐悦至極にございますわ」
「いや、だからね？アタイはミャコで、その新しい神さまっていうのじゃ」
「もうお隠しにならなくても結構ですわ。その黄金の翼、そのお声、かつてあなた様が城においでになられていた時に、しかと拝見させていただいてます。
それに何より、あなた様はわたくしの名を知っておられました。まるでわたくしの危機を予知していたかのように、この場所に参られました。それらのどれもが証明しています。あなた様が、この地に権化なされた、新しい神であると」

もう頑固なくらい、ディノはかたくなだった。
何故かミャコを新しい神さまだって信じ込んでいる。

「あーうー」
だけどそれに、ミャコは違うってすぐに反論できなかった。
今更ながら気付いたのが、お互いに初対面のはずなのに、平気で彼女の名を連呼するミャコ自身だったからだ。

「めぇー」
どうしようもない気まずい間。
それを破ったのはルーシァの鎧をかぶった羊さん？　で。

「話の腰を折るようで悪いがね、凛々しい騎士様。子猫ちゃん……彼女は別に隠してるわけじゃないと思うぞ。私と初めて会った時には、野に伏していたし……記憶喪失か何かじゃないかな。事実、かまをかけてみたけど、私の宿の宿賃を払ってないのにも気付いてなかったみたいだからね？」
「え？　あ、うん。言われてみれば、そうかも……」
笑顔でこれでいいんだろって顔をするセイルさんに、ミャコはこくこくと頷く。

前の世界の記憶はともかくとして。
ミャコにセイルさんの宿で目を覚ます前の記憶がないのは確かだった。
もしかしたら……ないと思うけど、ディノが言ってた通りなのかもしれないし、ディノの名前知ってることにも辻褄が合う。
若干後ろめたい気分もなくはなかったけど、ミャコはそれにうんうんと頷いていて。

「いろいろと情報が錯綜してるようだからね、まずはお互いのこと

を話そうじゃないか」
まとめるように手を叩いてセイルさんがそう言ったから。
改めてミャコたちが、ディノの知るミャコのこことか、ミャコたちがここに来た理由を話すことにしたのだった……。

28、水銀の騎士、時の氏神の正体に迫る

レイアの持つ命のキセキ。
正しく使われなければ世界が壊れてしまうこと。
ミャコたちがアキの予言の力をもとに、他のレイアたちを助けて回ってること。
レイアに迫る危機、それはディノだけじゃなく、光のレイアであるユーミも同じであること。
ミャコたちは……ディノに今まで会ったことを余すことなく、だけどかいつまんで話してみせる。

「……自分のさだめを変えられるのは自分自身だけですわ」
危ないところを助けられたことに拗ねているというか、プライドにきたのか。
一通りの話を受けて、初めにディノが口にしたのはそんな言葉だった。

ただディノのプライドっていうのは、ちょっとひねくれてて。
それは、自分一人でもやれました、的なものではなく。
どちらかというと、こんな自分のために何故、こんな労苦をって感じなのだ。

よく言えば自己犠牲が強いというか、悪く言えば卑屈すぎるというか……。
一見プライド高そうで実際お姫様みたいなもので、口調も含めて高飛車な印象を受けるのに、
よくよく見るとその中身は全く違う。

どうにも扱いづらいと言うか、落ち込みがちなミャコといると、二人して卑屈の底に転がっていっちゃうから、ウマはあうけどちょっと苦手な相手でもあった。

だけど、そんなディノだから、アキの予言のこと、ミャコたちがここにいる理由については快く受け入れてくれた。
騎士として本来仕えるべきであるユーミにも危機が迫っているわけだから、ディノが協力してくれるのは、ディノにとっては当然なのかもしれないし、ミャコたちとしてはもちろん助かるんだけど。

問題というか、どうにも戸惑ってしまうのは、その一番の理由がミャコとディノの言う新しい神だと何故か思い込んじゃってる点だろう。
違う、知らないでは埒があかないので、今度はそんなディノの言い分を聞いてみることにしたわけなんだけど。

ディノが言うには、新しい神と言うのは、ディノが城を離れるよりも大分前からウルガ王が懇意にしていた水の国の客人……相談役だったのだと言う。
王がいつ、どこでその神と名乗る人物と出会ったのかは分からない。だが、ウルガ王が全幅の信頼を置き、いつも側に仕えさせていたその人物は、どうにも不思議な人物だったという。

何故かいつも背中だけ開いた全身鎧を着ていて、その背中には黄金の縁取りがなされた大きな翼があったのだ。
声からしてナヴィ、ミャコと同じ風のナヴィではないかと囁かれたが、本人は自分は神であるの一点張り。
ディノはそんな彼女が、どうにも腑に落ちなかったそうだけど。
ユーミも、ユーミの兄であるガブリエ王子も、そんな彼女に心を開いているようだったので、特に

深くは考えなかったそうで。

「そうですね……ちょうどセイル様の肩上におられる方、あなた様と同じようなお姿でしたわ」

「めぇー？」

そんな話の途中で、ディノはルーシァもどきの羊さんに視線を向ける。

「でも、翼はミャコのとおんなじなんでしょ？」

「ええ、そうですわ。ですからミャコ様が新しい神様であると、わたくしは思ったのです」

ミャコはそう言うみんなに視線を向けられて、ちょっと考え込む。

違う、知らないって否定はしてきたけど、確かにミャコはそうなるためにアイラディア様に翼を託されたわけだし、そのためにみんなの命のキセキを集めていたのだ。

その事を考えると、確かに辻褄があっているような気がしなくもないミャコである。

だけど違うって思ったのも確かだった。

かつての世界から、今の世界へとやってきたミャコ。

そんな世界を移動したり、あるいはやり直すなんて力はミャコにはないわけだから……ミャコにそれをした誰かがいるのは確かなんだろうって思う。

今までは、それをしたのもアイラディア様だと思っていたけど……。

「同じ翼ね。……ところで、騎士さま。子猫ちゃんがその新しい神だと信じた理由、他にもあるようなことを言っていたけど」

「ええ、もちろんですわ。わたくしが確信したのはむしろそちらほうかもしれません」

すると、ディノは深く深く頷いて。

ミャコがその新しい神様であると思ったもうひとつの理由を話して

くれた。

神と名乗ったその正体不明のナヴィは、先に語る通り、水の国の客人にして王の相談役だった。
何でも彼女は、起こる未来を見る力があったのだと言う。
水の国は、世界は彼女の助言で画期的なほど豊に平和になったのだそうだ。
世界がナヴィにもやさしくなった、そのきっかけだろうウルガヴ法ですら、元々は彼女が考え出し、王が世界に広げたものなのだと言う。

「広場に、とても大きな鏡のようなものがあったでしょう？　あれもその方が王に頼んで作らせたものなのです。お伺いを立ててみても、何に使うのかまではウルガ王さまは教えてくれませんでしたど……」
ディノは、一通り話し終えた後、そう言ってミャコのことを見た。
それは、ディノがそうだと思い込んでる彼女が、ミャコだからなんだろう。

未来を見る力。
かつて体験した世界の記憶が、この世界に起こったことを示唆しているとするならば、確かにミャコは、未来を見てるってことになるんだろう。
ミャコは、えっちゃん、そしてセイルさんと顔を見合わせる。
どうやら二人ともミャコと同じ意見のようだった。
ディノの言う新しい神、それはミャコなんかじゃなくて。
もしかしたら……アキのことを言ってるんじゃないだろうか、って。
ミャコがそう口にしようとした時。

それは起こった。
遠くから聞こえる、なにかの危機を知らせるかのような、鐘の音が響いてきたのは。

「この音は……まさかっ！？」
それが何を知らせるものなのか、分かってるらしいディノは話もそこそこに血相を変えて聖堂を飛び出していく。
頷きあい、その後を追いかけるミャコたち。

聖堂を出たディノが神殿の裏手に回ったのが見えたので、すぐさまその後を追いかける。
神殿の裏手を抜ければ、そこはウルガヴの国まで続く街道のある町の出口だった。
すぐに視界が開けて、広大な緑の大地と青空、その半ばに大きなお堀に囲まれた水の国が見えて。

「……なんてこと！」
驚愕の呟きのままディノが見上げるのは、その上空だった。
そこには、ここへ来たときに見た黒い雲がある。
水の国の陽のあたりを塞ぐように。

「あっ」
すぐ近くでえっちゃんの声。
「ま、まさかあれが全部……？」
そう言うセイルさんの声も、心なしか震えているように思えて。
黒い雲だと思っていたそれ。
それは……雲じゃなかった。
端から細かくばらけて、水の国めがけて降っていくのが分かる。
急降下していくのが分かる。

まるで終わらない雨のように、空舞うことのできる黒い何かが、水の国を闇色に染めようとしていて……。

※　※　※

「地のキセキよ、その姿を示せ！ギャネル・ガイアットッ！！」

急いで城へと向かわなきゃ、アキの予言の通りのことが起きてしまうかもしれない。

そんな焦りの中、そう叫んだのセイルさんだった。

セイルさんの地のレイアーク。

それは、見上げるほどに大きな地の色をした牛だった。

そのあまりの大きさに、蹄を地面に打ち付ける音で大地が鳴動している。

鼻息は荒く、いつ走り出してもおかしくない状態だ。

「みな、彼の背に乗りたまえ！　とにかく時間がないっ……はっ！」

そう言うや否や、セイルさんはその牛のそばでその手のひらを大地につける。

とたん、バリバリと地面が盛り上がって、階段を作り出す。

終着点は、小高い丘のような巨牛の背。

セイルさんは早足にそこへ駆け上がっていって。

「でか。ミャコのにゃんこがちっちゃくみえる」

それに最初に反応したのは、その大きさに感動したらしいえっちゃ

んだった。
すぐにその後に続こうとしたミャコだったけれど。
真っ先に駆け出してもおかしくないだろうディノが、苦しそうに俯き、足を止めているのが目に入る。
何故ディノがそんな苦しそうなのか。
それは、王の娘であるユーミを守るための騎士である彼女が、その側を離れてここにいるその意味にも直結してるんだろう。

あまり突っ込んでいいことじゃないような気がしたから、ディノがここにいた意味をあえて問うようなことはしなかったけれど。
それこそ今は、そんな悠長なことを言ってる場合じゃなかった。
俯き頭を垂れた、ある意味らしい彼女に向かって、ミャコは言葉をぶつける。

「自分なんかいない方がいい……またそんな悲しいことを思ってるんでしょ」
「……っ」
驚きに染まる、ディノの表情。
でもその顔を上げることはなく、未だ俯いたままで。
構わずミャコは言葉を続ける。

「王子のこと……好きなんでしょ。叶うなら命のキセキをあげたいって、ディノは思ってる。
でも自分には無理だって、ユーミのほうが相応しいってそうも思った。
だからあなたは逃げた。二人から離れるように……遠ざかるように」
「わたくしは、逃げてなどっ……」
ミャコの辛辣ともとれる言葉に、かっとなりかけ、顔をあげかけたディノだったけど。
それは痛い部分でもあったんだろう。

堅く唇を結んで、顔は伏せたままだった。

「別にそれがダメだなんて言ってるわけじゃないよ、大切な人のために、大好きな人をゆずる。
ディノがその事を選んだのなら、それでいいと思う。何だったら、嫌なことは忘れようって旅に、
ミャコも付き合うし。……でもね、今はその事は関係ないの。ディノの大切な人も大好きな人も、
死んじゃうかもしれないんだ。こんなとこに立ち止まってたら、絶対後悔すると思う」

思い出すのは、大切なひと全てを失って、それを後悔しながらそれでも城に留まり続けたディノのことだった。
あの時はどうしようもなかったけれど。
今なら間に合う、後悔しなくてすむかもしれない。
そう思ったらいてもたってもいられなくなって。
気付けばミャコはそんな事を言っていた。
そしてそのまま、ディノの手を掴む。

「……ミャコ様は、わたくしの心内でさえ、お見通しなのですね」
ひどいナヴィだと、かつてそう言って笑ったときのディノとおんなじの表情。
そんなんじゃないよ、その旅の途中で、ディノが語ってくれただけだから。

そう言えればいいのに、その言葉はやっぱり口から出てこなくて。
正直になろうって思っていても、結局ミャコは心奥に何かを隠している。
……ひどいナヴィだって改めて自覚して。

「そんなかしこまらないで。ミャコでいいよ」
せめて、かつて呼ばれて呼ばれていた通りに、そんな想いを乗せて。
ミャコはディノの手を引っ張り、一緒にセイルさんのレイアーク…
…その背中へと乗り込んだのだった……。

29、臆病風、敵の御大将と相対す

セイルさんがミャコたちより早く来ていたのは、やっぱりそのレイアークの力のおかげだったらしい。

セイルさんの作り出した巨牛は、物凄い地響きと砂煙を上げて、一路城を目指す。

みるみるうちに、水の国を覆うように掘られた水の城が見えてきて。

巨牛はその少し前でその足を止めた。

「来るよっ！」

ミャコたちが降り立ったのを確認し、巨牛を還したセイルさんが空を見上げ、叫ぶ。

同じように見上げればそこには、黒い鳥のようなドリードがいた。

遠目から見たときには分からなかったけれど……翼と顔以外は人の姿をしており、その手には一体一体が様々な武器を持っている。

その、黒い雲を少しずつちぎるようにして降ってくるそれらのうち一体がミャコたちに気付き、槍を振り上げて突進してきた。

「ガイアットよ！」

だが、ミャコたちが動くより早く。

自身の信ずる根源の名を呼んだセイルさんが、それにより出現させた、ドリードの持つ槍よりも何倍も大きな槍を凪いだ。

そう、セイルさんはその大きな得物を薙いだだけだ。

でもそれだけで鳥のドリードは吹っ飛びばらばらになり、灰色の石となって堀に落ちた。

「とっても豪快だね」

「ふ、子猫ちゃんほどじゃないさ。……それより急いで中に入ろう。飛んで渡るにはいささか広いが、４人を抱えて飛べるかい？」

堀のない正門に回っていては時間がかかりすぎる。

とすると、ここを飛ぶしかないんだろう。

えっちゃん一人なら、なんとかなってたけど果たしてどうか。

「いいえ、それには及びません。ここは水の城。わたくしにお任せ下さい」

そんな事を考えていると、すっと前に出たのはディノだった。

ディノは、ミャコたちが返事するより早く、お堀の……水の中へと飛び込んで。

「水のキセキよ、その姿を示せ！　クァリ・ウルガヴッ！！」

水のレイアークを発動する。

ゴガァアアッ！！

たちまちお堀の水が轟音を立てて盛り上がって。

そこから生まれ出たのは、ディノを頭に乗せた、水の大蛇だった。

しかも、一匹じゃない。

堀に囲まれた城に覆いかぶさるような、数え切れないほどの数だ。

「お願いします、みなさんっ！」

水のないところで発動するよりはいくらかましなんだろうけど……

そう言うディノには、あまり余裕がないようだった。
その大きさでこの数、尚且つさっきの戦いの疲労も残っているだろうからだ。

「えっちゃん！」
「うんっ」
迷ってるヒマはない。
キツそうなディノの元へセイルさんが駆け寄り、大蛇の頭へ飛び乗ったのを確認してから、ミャコはえっちゃんに声をかけ、その手を掴んで手近な水の大蛇……その頭へと飛び乗る。
それが物凄い勢いで首を伸ばしたのは、まさにその瞬間で。

「にょおっ！？」
「っ！」
ミャコたちは水の大蛇ごと中空に投げ出され、城壁と飛び越えた。
「ヴァーレストよ！」
ミャコはそのまま落ちていくのを回避するために、そう叫んで翼をはためかせて。

その先は、戦場。
水の国の兵士たちと、黒い怪鳥のドリードたちが入り乱れて戦いを始めている。
水の兵士たちの数は、ミャコの思っていたよりも少なくて。
戦況は、空を飛べることもあり、ドリードたちのほうが優勢、といったところだろうか。

と。その真っ只中に飛び込んでいくたくさんの水の大蛇たち、そしてセイルさんとディノ。
城内へと食らいつくように落ちてゆく水の大蛇は、城内に降り立つ

とともに大量の水と化す。
その味方も敵も構わない攻撃にミャコは一瞬戦慄を覚えたけど。
その水が去った頃には戦況は一変していた。

水の軍の兵士は、水のナヴィで構成されていたらしい。
平和主義者で有名な彼女たちも、その身を、仲間を、国を守るためにはその力を発揮するのだろう。
ディノが運んできた水の力を利用し、水の力で生まれる剣や盾を手にしていた。
一方、怪鳥のドリードたちは、水に羽をやられたのか、墜落してもがいている。
これなら水の国の優位……そして勝利は時間の問題だろう。

水の国、やっぱりすごいなって、そう思った時。

「ミャコ！」
ミャコにしがみつくようにしていたえっちゃんの、切羽詰った声がごく近くで聞こえる。
その瞬間、射していたはずの陽がかげって。
視線を向ければそこにあるのは、城ほどに巨大な花のドリードだった。
それはいくつもトゲの生えた茎を伸ばし、城に向かっている。

でも、えっちゃんが声をあげたのはそれのせいじゃなかった。
ミャコの正面、今まであったはずの黒い雲が割れて……それぞれが黒い鳥のドリードになって、その中から現れたもののせいだった。
そこにいたのは、震えるほどの凶悪な存在感をぶつけてくる3つの

存在だ。

一つ目は、黒光りしたフルアーマー。
それだけだと一見ルーシァの親戚みたいにも思えるけど、様相は大きく異なる。

触れただけで切れてしまいそうな禍々しいフォルム。
羽もないのに不気味な紫の煙を足らしき部分から噴出させて宙に浮かんでいる。

二つ目は、同じく全身真っ黒の蝙蝠のような翼を生やした豹だった。
口からのぞいた牙は、その捕食者そのものの顔のゆうに三倍はある。

そして三つ目……いや、三人目と言ったほうがいいのかもしれない。
ミャコと同じ背中に黄金の縁取りがある、純白の翼を持った……ナヴィの姿をした、何者か。

「アキ……じゃない」
何故ならば、えっちゃんが思わずそう呟いてしまうほどに、その翼ある人はアキに似ていたからだ。
でも、えっちゃんがすぐにそれを否定したように、アキに似たその人はどう見てもアキじゃなかった。
まるで灰色の粘土で模倣したみたいに、その人には全ての色が抜け落ちていて。
髪も目も肌も服も、その翼以外は全て灰色一色だったからだ。
アキの姿を借りてみせたにしては随分稚拙すぎる。
それに何より。

「まんまと姿を現したな……神の地位を奪いしまがい物めっ！」

その憎悪のこもった声と、残酷な笑みを浮かべるその表情が、そっちこそまがい物じゃないと、ミャコに確信させる。

「まがい物はそっちじゃない。アキの真似にしてはお粗末すぎるんじゃない？」

ミャコは風の力をさりげに集めながら、はっきりきっぱりそう言ってやった。

その時思ってたのは、時のレイアと出会って戦うようなことになったらどうしようか、なんてことで。

「黙れっ！　アイラディア様の意志を継ぐのはこの私だっ！」

あっという間の沸騰。

その場に溢れる怒りの感情と、時の魔力。

「……この程度の挑発でキレるなんて程度が知れるわよ？」

やっぱり。

ミャコは内心でそう確信する。

尋常ならざるその時の魔力に、離れようともがくえっちゃん。

「……」

「……っ」

ミャコは、そんなえっちゃんをぎゅっと抱きしめて、えっちゃんにだけ聞こえる声で、そっと耳打ちした。

えっちゃんの抵抗がなくなったのはその瞬間で。

「いいだろう。時の眷族、ディアルの力をとくと見るがよい！」

目の前の灰色のナヴィの輪郭が一瞬ぶれる。

見えたのは鳥のくちばし。

たぶんそれこそが、そいつの正体だったんだろうけど。

「ヴァーレストよ！　とめて！」
その名乗りに返す代わりに、ミャコはそう叫んだ。
周りに展開する風の魔力。
ミャコはそのまま風を纏い、戦いやすい下へと降りようとして。

ギシィンッ！
聞こえてきたのは、世界が軋むような音。

「ギャルルゥッ！」
気付けば目の前に、黒い豹と、黒の鎧の姿があった。
黒い豹の顎が、ミャコの首もとめがけて伸びる。

かわせない。
ミャコにはえっちゃんを守るようにして背を向けるのがせいぜいせいで。

ブゥンッ……。
初めて聞く、不気味な音。

視界の端に映るのは、青い相貌をぼぅと光らせた、黒い鎧の姿で。
その口元から放たれるは、青い光の線。

ミャコとそれが繋がるように。
気付けばその光は、ミャコの翼を貫いていて。

ザザシュッ！
獣の息遣いが近い。
生ぬるく赤いものが、ミャコの視界を覆って。
ミャコは落ちてゆく。

「ミャコ！」

胸の中のえっちゃんの叫ぶその声を、心に響かせながら……。

２９、臆病風、敵の御大将と相対す（後書き）

短いです、まぁ、キリがいいって事で。

30、臆病風、その名の意味を知る

「……はっ」
息を吐き出すようにして目を覚ますと、そこは知らない場所だった。

「目が覚めましたか」
一瞬混乱してて状況を掴みかねていたミャコにかかる、冷たさを装ってる……聞き覚えのある、そんな声。
冷たい地面が何だか心地よくて抗いたかったけど、我慢して顔をあげ、声のほうを見る。

「わわっ」
そこには、白銀の髪を前のとこで編みこんでる、仏頂面でも凛々しくかわいらしいひとりのナヴィと。角を生やした白馬……ユニコーンの姿があった。

「全身打撲、凍傷、返り血の浄化。全て治療済みです。本来ならしかるべき代価をいただくのですが。その背中の翼だけは治せませんでした。すみません」
水の国の人が見たら何かの間違いなんじゃって思うかもしれない、そんなユーミのらしい言葉。
まんまりにもミャコの知ってるユーミと変わらなかったから、思わずミャコは苦笑を洩らしてしまう。
何がおかしいのでしょうと、その真珠の輝きを秘めた銀の瞳で、訝しげにミャコを見てくるとこなんかも、やっぱり同じで。

「大丈夫、これは元々ミャコのものじゃないから。……むしろこうして使いものにならなくなるのを望んでたのは、ミャコ自身かもしれないし」

大穴が開いて羽がぼろぼろになってるアイラディア様からもらった翼。
レイアの命のキセキを溜め込むことができるもの。
当然痛みはある。
身も心も。
だけど今は、前向きに考えたかった。
この翼が役に立たなくなったからこそ、みんなを守って……本当に意味で、いつか命のキセキを使える、その機会を与えてあげたいって、もう誰も悲しい思いをさせたくないって、そう思った。
ついさっきの瞬間のえっちゃんの悲しい声が心に響く。
それは、中々うまくいかないのかもしれないけど。
でもやれるって努力はしたかった。

「ユーミは無事だったんだね。よかった」
ミャコはがばっと立ち上がり、ユーミのレイアークだろう力のおかげか、身体に翼以外の異常がないことを確認すると、そう問いかける。
「ええ、おかげさまで。危ないところをねえ……ディノに助けられました」
まるで、それがダメだったみたいな慇懃な物言い。
それにミャコは少し首をひねる。

「当初の話と違うんじゃないですか？　ディノは、ここに来るはずじゃなかったはずです。
あなたを狙った彼らをおびき寄せる餌は、私だけで充分だったはずなのに」
ユーミの、ちょっときつめの非難の言葉。
だけどミャコには、どうも言っている意味が分からない。

「ディノには、町にいる父様と兄様を守ってもらえればそれでよかった。ここにいるのは、邪魔者の私一人でよかったんです。なのにあなたは、ディノを連れてきた」
分からないけど……分からないなりに、全容が見えてくる。

姿が見えないから気になってたけど、王や王子はここにはいないらしいということ。
ディノがユーミに遠慮していたように、ユーミもディノに遠慮していたと言うこと。
たぶん、ユーミもミャコのことを、ディノの言うところの新しい神だと思ってるらしいこと。

そして……。
新しいミャコと同じ翼を持つ、ディアルと言う名の、アキの姿を真似た何者かをおびき寄せると、ユーミは言ったこと。
まんまと姿を現した……ディアルがそう言っていたこと。

ミャコには分からないことだらけだけど……それでも一つだけはっきり分かることがある。
それは、誰かがミャコを新しい神へと仕向けようとしているってことで。

――――お前に全てを任せる。

遠い昔のアイラディア様の言葉。
深くは考えようとしなかったこと、本当はミャコに押し付けて、世界から逃げちゃったんじゃないのかって、ミャコはそう思っていた。
だけどそれは違うのかもしれない、

アイラディア様は、ずっと近くにいてくれたのかもしれない。
それは、本人に聞いてみなくちゃ分からないことだけど。
だが今は……。
その筋書き通りに、ミャコがしなくちゃいけないことがあるはずだった。

「そんなにいいコドゥなの？　ユーミのお兄様は？」
「な、何を言って」
図星を刺されたって真っ赤な顔。
鉄面皮のようでいて表情がくるくる変わって楽しい。
「ディノもあなたと同じこと言ってたわ。わたくしなんかより、ってさ。だからユーミとお兄様から離れてたんだと思うし」
言ってないかもしれないけど。
二人がそのお兄様のことを想ってる命のキセキで願いを叶えたいと思ってるのは間違いなさそうだったから……ミャコはそう言って笑う。

この世で一番嫌いだったコドゥのはずなのに。
この世界ではどうやらそうじゃないらしい。
この世界は、ミャコに知るアイラディアとは違う。
それはもう、何度も思ってきたことだけど。
それが、王の相談役をしてた人の仕業だとしたら……やっぱりその人こそが、この世界の神なんじゃないかなって、そう思う。

「勝手です、姉様は。一度腹を割って話さなくてはいけませんね」
「うん、それはいいね。んじゃ、今の状況、ぱっぱとなんとかしなくっちゃ」
ミャコとユーミは頷きあって駆け出す。

そうして。
ミャコたちの最後の戦いが、始まろうとしていた……。

※　　※　　※

「うわっ、さ、さむっ……」
部屋を出てすぐ、広がるのは白の世界だった。
全てが凍りついた世界。
えっちゃんの領域。
滑らないように駆け出しながら、ミャコはユーミにも話を聞きつつ、
ざっと状況を整理する。

青い光線に打ち抜かれ、落ちていったあの時。
えっちゃんに、よく見ててって耳打ちしたあの時。
ミャコはただ突っ立てたわけじゃなかった。
それは思いつきの初めての目論見だったんだけど。
相手が時の力を持つものだって分かってた時点で、その反則っぽい
力に勝つためにはどうすればいいのかって考えてた。
それが、風の力にお願いした、『とめて』って言葉に繋がってくる。
止めたのは風そのもの。
大気中に漂うその力の活動を停止させてもらった。
ちょうどミャコとえっちゃんを覆うように。
それは真空。
時を止めて攻撃してくるだろうって、そう思っていたから、それは
ミャコの予測にすぎなかったけど、出来としては５０点ってとこだ

ろう。

相手も中々慎重だった。
その真空の範囲に飛び込んできたのは、あの黒い豹だけで。
黒い豹は、ミャコに噛み付くその直前で、真空に刻まれた。
それで黒い豹は倒したんだろうけど。
黒い鎧の一撃を受けたミャコも一緒に落ちていってしまった。
ミャコはそこまではかろうじて覚えている。
ほんとはそれで終わらすつもりだったんだけど、そううまくはいかないらしい。

そして、ミャコがやられたことで切れてしまったえっちゃんが、レイアークを発動。
その無差別の攻撃に敵方も一時撤退。
ミャコもあえなく巻き込まれて。
セイルさんやディノになんとか助けられて……ってことらしい。
たまたまユーミが全ての怪我と状態変化を治すっていうレイアークの力を持ってたからよかったものの、でなければ今頃はミャコは、氷のオブジェになってたに違いない。
そんなミャコに、
「全て分かっていた上でのことでしょう？」
なんて冷たく言われて。
思わず苦笑を浮かべるしかなかったわけだけど。

やがて辿り着いたのは……元は中庭だっただろう白い世界だった。
そこには満身創痍のえっちゃん、セイルさん、ディノの姿。
この場から撤退したのか、水の兵士たちの姿はない。
青く切り裂く光線をばらまく黒い鎧と、これまた黒い、天井を塞ぐんじゃないかってくらい大きな怪鳥の姿があった。

「えっちゃん！」
ミャコは叫び、風の力を手のひらに込めて駆け出していた。
「ミャコ！」
ひびの入りかけた氷の盾で自分の身を守りながら肩で息をしてるえっちゃんが、まるでお化けでも見たみたいにびっくりしてるのが分かって。
その瞬間、砕ける氷。
迫る青い光線。

ドゴォッ！
ミャコはその進路に向かって風の塊を投げつける。
拡散して、進行方向が逸れた光は、えっちゃんの足元を掠めて。
よろめくえっちゃんを、なんとかミャコは支え、抱きしめるのに成功した。

「ミャコ……生きてる。あんなに血が出てたのに」
あの時のミャコがえっちゃんにどう見えたのか、
泣きそうなえっちゃんを見てると想像に難くない。
でもあれは、ほとんど敵の返り血で、むしろえっちゃんの氷で生死を彷徨ってました、なんて言えるはずもなく。
曖昧に濁してミャコは笑って。

「さぁ、こっから畳み掛けるわよ！」
ミャコはそのまま、きっと空を睨みつける。

「ぐぅっ、な、何をしているルック！　早く片付けろっ！」
ミャコの知らない間に、怪鳥の姿になってるディアル。
戻ってきたミャコに対しての狼狽を隠せないままに、黒い鎧のやつ

に命令する。
だが、そう言われた黒い鎧は、唸ったまま宙を浮いていた。
たぶん、あの光線を打つのには少し時間がかかるんだろう。
あるいは弾切れか。いずれにしても、これはチャンス。
相手は時を操る奴らだ。この隙を逃すわけにはいかなかった。
ミャコは一同をざっと見渡し、叫ぶ。

「セイルさん！　噴水の脇、通路の下よ！　ぶっ叩いて！」
「承知した！」
それはミャコが寝てる間戦ってたみんなもよく分かってるんだろう。
ミャコのその一言だけですべきことを理解してくれたのか、一声あげてその手に持つ大きな槍を、大地に突き刺す。
するとそのとたん、天高く吹き上がる水。

「ディノ！　えっちゃん、お願いっ！」
ミャコは再び手のひらに風を集め、その水に向かって駆け出す。
ミャコの叫びに一緒になって駆け出す二人。
それぞれの手のひらが噴き出す水に触れて。

「ウルガヴ様、頼みます！」
「ルッキー、がんばって！」
ハモる二人の声。
その瞬間、無軌道に上がっていた水は、蛇のように蠢き伸びて。
そしてそれを追うようにして、水が凍りだす。

ミャコはそこに躊躇いもなく足を踏み出した。
穴あきの翼を羽ばたかせて、周りの風に支えられて。
えっちゃんによってできたその道を駆け上がる。

「おのれぇっ！」
目前に迫ろうかろいう勢いのミャコに、激昂するディアル。
そこには、初めて現れた時のような冷静さは感じられない。

動揺しているのだろう。
ミャコに時の力を破られたのが、それを使うことに躊躇ってしまうくらいに。
えっちゃんたちがミャコが寝ている間に耐えられたのも、きっとそのおかげで。
ディアルがもっと冷静に力を使えていれば、負けていたのはミャコだったんだろう。

その場に満ちる、時の魔力。
力を使うその合図。

「ヴァーレストよ、守って！」
駆け出しながらのミャコのそんな声と、空間が軋む音が響いたのはほぼ同時。
次にミャコが気付いた時には、ルックと呼ばれた黒い鎧から打ち出された青い光線が、ミャコの目前まで来ていて。

バスゥン！
さっきと同じ要領で、光を拡散させることに成功する。
だがそれを受けた衝撃までは打ち消せなかった。
ミャコは狭く不安定な氷の道から弾き飛ばされて……

中空で静止した。

「なっ……！？」
驚愕に染まるディアルの声が聞こえる。

それもそうだろう。
大穴が開いてぼろぼろなはずの翼なのに、ミャコが空を飛んでいたのだから。
と、そんなミャコの不可解さを紐解くかのように。
背中の翼がアイラディア様からもらった翼が、散る花のように細かな羽となって風に流れて飛んでいった。

それでも、ミャコは落ちない。
羽ばたいている。

１２のナヴィの中で唯一空を支配することのできる風のナヴィ。
そう言われる由縁。
それは背中にある風の力によって作られて見えない翼があるからこそ、だった。

本当は、アイラディア様から貰った翼がなくても飛べたんだ。
ただミャコは、臆病だっただけ。
飛ぶことが、自分の力で飛ぶことが怖くて、ずっとその翼を広げられないでいた。
それが今になって飛べるようになったのは、アイラディア様から貰った翼がその役目を終えたからなんだろう。
それは、飛べないミャコの補助輪のようなものだったのかもしれない。

ミャコは両手のひらを合わせて、突き出す。
そして、驚愕に染まったままのディアルを見据え……口を開いた。

「風のキセキよ、その姿を示せ！　アンヴァ・ヴァーレストッ！！」

ガオオォォン！！

手のひらから生まれるは、白金の虎の咆哮。
伸び上がるように踊り出て、目の前の獲物を食らい尽くす。
その断末魔も、命奪うことの悲しみと罪を悔いる、その時間すらも。

そして……。
落ちていくのは、金色の石一つ。

（一つ？）
それを見てミャコははっとなった。
一人しとめ損ねた。
戦慄を覚え、辺りを見回す。

それは上空。
白金の虎の顎を……力を使って逃れたのか、いつの間に灰色の人の姿に戻り、ふらふらと血塗れで満身創痍のディアルの姿が見える。

「……くっ！」
まだ何かする気なのだろうか。
レイアークを使ったことの反動で、心と身体に軋む痛みを覚えつつも、その後を追いかける。
そんなミャコに気付いたんだろう。
しばらくして観念したのか、ディアルはミャコのほうを振り向いた。

「まだだ、まだ終わらんっ！」
そこには予想とは裏腹の、戦意を失っていない瞳があって。

ミャコはそんなディアルの背後に広がる光景に……息をのんだ。
それは、さっきも見た巨大な花。
あろうことか、そいつはシノイの町へと向かっている。

「見ろ！　このまま町は終わりだっ……」
その手にレイピアを構えているディアルは、額に血を零しながらも喜悦の表情を浮かべ、言葉を失うミャコにさらに言葉を続ける。

「止めたければ貴様の命を差し出せ！」
「……っ」
そして、時の根源を表わす紋様の入った、そのレイピアを向けてくる。
これ以上ない、ベタな脅し。
だがそれをミャコは受け入れることしかできそうになかった。
身体が動かない。
ただ、着実に歩みを進める花の怪物を見つめることしかできなくて……。

変化が起きたのはその時だった。
花のドリード、その胴体部分にぱっと小さな橙色の光が噴き出した。
あれは何だろう？
そう思って状況も忘れて目を凝らしたその瞬間。
四方八方、あらゆる角度から橙の光が飛んできた。
それは、火のついた矢のようにミャコには見えて。

「ば、ばかな……」
今度こそ全てのカードを失ったのか、呆然と声をあげるディアル。
まるで何かの儀式のような、神秘的で綺麗な光景。

気付けば火は、花のドリードを覆うように広がっていく。
それは……まるで町の人々が、火に弱い花の化物が襲うことが分かっていたかのような、
あまりに準備のよすぎる光景で。

――――『火事になるのは分かってたから避難させた』

その時思い浮かんだのは、そんなアキの言葉で。
やっぱりアキは……。
ミャコがそう確信を持ったとき。

「何故だ！？　何故こうもうまくいかない！　アイラディアの神は我らをお見捨てになったというのかっ……」
信じられない、と言った口調でディアルは赤い赤い火を見つめる。
その言葉に、ミャコは答える術を持ち合わせてはいなかった。

何故ならば。
ミャコのレイアークを受けたディアルは。
もうすでに……事切れる間際だったからだ。

ミャコのほうを見ないまま、ミャコに何も言わせないままに落ちてゆくディアル。

風に攫われ、ボロボロに崩れて……。
やがて銀色の石になって……見えなくなる。

「……」
残されたのはミャコと、風の泣く音。
いつの間にか熟していた太陽が、最後の勢いを持って白く燃える炎

と混じり、ミャコの目頭を熱くする。

結局、勝ったのか負けたのか。
これでよかったのか悪かったのかも分からないままで。

「疲れた……」
ただ思うのはそのこと。
思い出したらふっと力が抜けて……。

ミャコも落ちていく。
ようやく優しくなってくれた……その風に包まれながら。

そして……。
心地よい風の中で眠りに落ちるその瞬間。
ミャコが聞いたのは。
やけに近くに聞こえる羊の鳴き声と。

遥か遠くから聞こえる、大歓声だった……。

31、時の氏神の世界へ

それからの事は、あまりにハチャメチャで、ここまでしてきたことを忘れてしまうくらい衝撃的だった。

ミャコだけじゃなく、えっちゃん、セイルさん、ディノとユーミ。みんなへとへとのくたくたで。寄り添い助け合いながら、ウルガ王のいるシノイの町へと向かったのが運のつき。

ミャコたちは……特にミャコは、一生涯忘れないだろうってくらいの拍手喝采、歓声に迎えられることになったからだ。

コドゥもナヴィも関係ない。町じゅうの人や、王の警護と花のドリードと戦うために集まっていたという水の国の兵士たち全てが、町に辿り着いたミャコたちを待っていた。しかも、いつの間にか、どこで知ったのか、口々にミャコの名を、みんなの名を呼び拍手を送る。

それは決して嫌な雰囲気ではなかったけれど。何がどうなってるのか分からなかったから……すごく怖かった。どうしたらいいか分からなくなって、思わず泣きそうになって、いっそのことまた、意識の内の世界に逃げてしまおうか、なんて思ったとき。

そんなミャコたちを助けてくれたのは、ウルガ王とガブリエ王子だった。

ミャコたちは、今にも取って食われるんじゃなかろうかって群集の中、何とか彼らに連れられて。
事が終わるまで使っていたという宿屋の一室に案内された。

みんなが部屋に入っても余裕な広い、町一番の宿屋のその一室。
温和な王と、実はそれが一番衝撃だった……王にそっくりの、ミャコの記憶とはまるで別人の優しそうな王子は、そこで思わず卒倒してしまうくらいありえないことを語りだす。

まぁ、言葉通り卒倒しちゃったわけだから、あんまり細かい事は覚えてないんだけど。

一言でいえば、ミャコはこの世界をつくり、救った神になってしまったらしい。
当然、神様なんて言うくらいだから、今ではみんながミャコのことを知っていると言う。

その人となり。
思うこと。
今までなしてきたこと。

みんなが知ってて、しかも感動して共感しているというのだ。
そんな恥ずかしいことあるわけないじゃんって断固主張したかったミャコだったけど。
まさしくそれを証明するかのようにガブリエ王子が見せてくれたのは……二冊の本だった。

タイトルは『臆病風の冒険』。

続き物らしく、背表紙にはそれぞれ1、2と書かれていて。
勧められるままにそれを見て、ミャコは愕然とした。

まず手に取ったのは、出たばかりだという2巻。
その物語に出てくる主人公の名前が臆病風のナビィであるということを除けば、
それはミャコがこの世界に来てから水の国に来るまでのほぼ全てのことが余さず記されていたのだ。
しかも心を覗かれてるんじゃないかってくらいミャコの心の中まで詳しく。
それだけでも恥ずかしいを通り越して天に召されそうだったけど。

かなり昔に出たという1巻はもっとひどかった。
何故なら、今の今まで語ることのなかった、誰も知るはずのない前の世界のミャコのことが書かれていたからだ。
後悔ばかりの悲しい話。
まるでずっとミャコの隣にその作者がいたみたいに。
あるいはミャコ自身が書いたみたいに、それは記されていて。

一緒にそれを拝見したみんなが、貰い泣きしていて。
得体の知れない恐怖とともに、何だかミャコも泣きたくなったけど。

衝撃の事実はまだ終わらない。
少なくとも、この本だけならその主人公がミャコだとは知らない人なら分からないはずだったのに、
今回の水の国で起きたことで、その主人公がミャコなのだと知られてしまったのだという。

何故してそんな殺生なことが起こったのか。
それは町の広場にある、ヴルックの力によって作られた、大きな鏡

のせいらしい。
そこには、ミャコとその仲間たちの活躍がリアルタイムで展開されていたのだという。

「悲しい風のナビィの物語は、小さい頃によく読んだよ。
……今考えれば世界を支えてくれるナビィのみんなを大切にしようって戒めの物語だったんだろうね。その待望の続編が出て、今回の件で初めてこの物語の主人公が実在してるって知ったんだ。礼を言わなきゃならないな。今回の件も、弟の件も」
まるで憧れの人物を見るようにそんなことを言うのは、もはやすっかり別人のガブリエ王子で。

「もうすぐ三巻が出るらしいのう。今回の件が本になるということは、いよいよわしらも登場するわけじゃな。今から楽しみじゃわい」
同じ憧れを見るような目。興奮した様子でそんなことを言うウルガ王。

「にゃ～っ！　誰よっ、こんなの書いたのっ！！」
だからミャコがそう叫びたくなったのも当然の帰結で。
話の流れは、作者って誰なんだろうってことと、探してとっちめてやる！　って展開に移行する。

「アキヨ・シリヴァだって、ミャコ」
そして……1巻に感動しきり？だったえっちゃんが、ぐすぐす言いながら作者の名前を読み上げて。
なんていうかそれは……偽名にもならない分かりやすすぎる名前で。

「確か、事が終わったら一度落ち合う手はずになっていたはずだよ。私の宿屋に、アキたちとはね」

セイルさんの、心底楽しげなその一言に、今後のミャコたちの指針が決まったわけで。

それからすぐに、ミャコと同じように物語の、新しき神の仲間として有名人になってしまったディノとユーミをみがわ……じゃなかった、この場を任せて。
冷めやらぬ観衆の目を避けるようにして、ミャコはセイルさんとえっちゃんとともに、ヤーシロにあるセイルさんの宿屋にやってきたんだけど。

そこには……アキの姿はなかった。

その代わりにマイカとアズミズ、この世界では初めて会うカコとコウの姿があった。
どうやら、ここにいるみんなは、アキに先に水の国へ行っている、なんて言われたらしい。
そんなみんなも、ミャコたちと同じくらい世界で有名人の人気者になってるらしくて。

一人が好きなコウはほとほと困り果てていて。
そう言うのが嫌いじゃないカコは喜んでいたけれど。

それは……よくよく考えてみると、レイアとしてその身に危険を感じながら生きる必要がなくなった、というわけで。
ある意味、ミャコのほんとの願いが叶った、とも言えるわけだけど。

こうしてみんなで集まって……お互いの紹介をするよりも早く、ミャコには非常に気になることがあった。
それはカコの肩、コウの肩、そしてセイルさんの肩にそれぞれ座し

ているルーシァ？のことで。

「ねえミャコ、私気づいたんだけど……ルーシァの胸のとこにあるまるいのって、これとおんなじ？」
えっちゃんが、ルーシァから借りた不思議な鏡を取り出し、そんなことを言う。
言われてみればそうだと納得して。
考えついたのは一つの結論だった。
シノイの町にあったでっかい鏡に映されていたというミャコたち。
一体それは誰が映していたのか？と。
たぶん、その時のみんなの心は一つになってただろう。

それに気づいたのか、めぇめぇ鳴いてルーシァ？のそれぞれが別々に一目散に逃げ出す。

「ま、まてっ！」
彼女らはきっと何か知っている。
そんな確信を持たせるような行動。
特に示し合わせることもなく、三手に分かれてミャコたちは追走劇を始めた。

ミャコとともにそのうちの一体を追いかけたのは、やっぱりというかなんというか、えっちゃんで。
ルーシァのフルアーマーを着ていたそいつは、ミャコたちを誘うように逃げてゆくうちに、その鎧をこぼれ落としてその正体を晒した。
中身は、その鳴き声の通りの金色の羊で。
たぶん、ルーシァのレイアークなんだろう。

そんな考えを証明するがごとく。
金色の羊に導かれて辿り着いたのは、ヴルックの洞窟だった。
いつの間にやらグーラの灯りが取り外されてる、本来の入り口を無視して、いつか通った裏道へ。

そしてさらに波打つ崖の下にある秘密の入り口を通っていく羊さん。
その頃になると、明らかに誘ってるってことにも気づいていて。
ミャコはえっちゃんと手を繋ぎ、羊さんの消えた闇を進む。

前に来た時は、早すぎて沢山分かれ道があったことしか分からなかった場所。
そこを羊さんは、ぼぅと金色に体毛を光らせながらミャコたちを導いていく。
一度目通った道とは明らかに違うルートで。

そして……小一時間ほど進んでたどり着いたのは、くりぬかれた岩肌にぽつんと木の扉が見える、そんな場所だった。
その扉の真ん中には、もこもこのへこみがあって。
そこにぴったりとはまる羊さん。
それにびっくりしていると、いつの間にかそこに羊さんはいなくて。
キィ、と軽い軋みを立てて扉が開いているのが分かる。

ミャコはえっちゃんと一度だけ顔を見合わせ、思い切ってその扉を開け放った。
するとその先に広がっていたのは、真っ暗闇の中に星のようなカラフルな光を明滅させているような……そんな部屋だった。

「フフ、来るのはあんたたちだと思っていたわ」
そして、真ん中奥にある背もたれの高い椅子。

ふいにくるりと振り返ったそこには、そう言って笑うルーシァの姿がある。

「ルーシァ、おっきくなってる」
そう、えっちゃんが言うように……ミャコたちと同じくらいの背格好をしたルーシァが。

「違う違う、元々この大きさだったのさ。あの小さな姿は世間の目をくらますカモフラージュだったの。……この世界の神も含めてね」
本物のルーシァ。
言われてみれば、そりゃそうなんだろう。
同じナヴィにしてはあの姿は小さすぎた。
当たり前すぎてそんな事忘れてたけど。

「この世界の神様って、アキなんでしょ？」
「いかにも。まぁ、流石にあそこまであからさまなら分かると思うけど」
「ここにいるルーシァのこと、アキも知らなかったんだ？」
「ええ。……たまたま、偶然だけどね。ワタシの作ったミニルーシァちゃんを、ワタシだと勘違いしてくれたみたい」
そう言うルーシァは楽しそうだった。
何か話したいことを話したくてうずうずしてる、そんな感じ。

「なんで、ほんとのこと言わなかったの？」
「それが、好都合だったからかな。この世界の神の、アキ様の本当の正体を知るために。……実はね、神としてこの世界を救ってくれたアキ様には、ワタシたちの知らない真の姿があるみたいなんだ。この世界にいたあのアキ様は、ほんとのアキ様じゃない。だってあの姿は、かつてこの世界を支配していた……アイラディア様のもの

だもの」
えっちゃんが聞くと、ルーシァは大きくなっても変わらない、まくしたてるような口調でそう言って。
「勝手にワタシたちを救ってさ、黙って帰っちゃうなんて……許さないから」
その後に、きっとルーシァの本音だろう言葉を乗せて。

「その話をミャコたちにしたってことは……ルーシァには、アキを探す方法があるってことだよね？」
「さすがミャコさん、話が早くて助かるよ。そう、まさにこの場所がそうなんだな。……分かりやすく言えば、ここはアキ様を探すための時の扉そのものなんだよ。時空を超えて、異界に続いてる」
「そ、それって……大丈夫なの？　危なくない？」
そう言うルーシァの言葉が、あまりにも分かりやすくミャコの不安を煽って。
気付けばミャコは、そう聞いていた。
すると、あろうことかルーシァはそれに頷いて。

「分からない。何せ試したことないから。……だから、この旅に出るかどうかは、ミャコさんたちに任せるよ。これは背負わなきゃいけない宿命じゃない。オマケみたいなものだから」
秘密めいた仕草で、そんな事を言う。

「……」
「……」
ミャコは再び、えっちゃんと顔を見合わせる。
でもミャコの中では、もうその答えは出ていた。
たぶんそれだけルーシァが話し上手だったんだろう。
正直言えばわくわくしていた。

その与えられた使命から外れた、オマケの旅に。

「私の答えはきまってる。ミャコは私のいちばんだから、ミャコのしたいようにすればいい」

「だってさ、あっついねー、このこの。……で？　ミャコさんはどうしたい？」

返ってきたのは、泣きたくなるくらいのそんな言葉で。

「……行くよ。オマケの旅に行って、アキに会って、言わなくちゃいけないことがあるから」

ミャコは、その決まっていた答えを口にする。

「オーケー。いい答えだ。んじゃ、二人とも真ん中に立って……そう、その魔方陣みたいなやつの真ん中に……」

破顔するルーシァ。

さくさくとミャコたちを部屋の真ん中に導いて。

「では、いい旅を。みんなも連れて、ワタシもすぐに行くからさ」

「あ……」

最後には、悪戯っぽいルーシァの笑顔。

先発の毒見めいた事をやらされてると気付いたのはその時で。

その瞬間。

ミャコたちは……その世界から、剥離した。

31、時の氏神の世界へ（後書き）

次で完結です。相変わらず駆け足の唐突ですみません。

32、臆病風と、終幕。可能性のひとつ

それから……どれくらいの時が経ったんだろう。
幻想の世界を旅していた頃を、アルバムの中の懐かしい思い出みたいに懐かしめるくらいには時は経ったし、いろいろなことがあったと思う。
でも、ついにその日がやってきたのだ。

「抱きしめても止まらないくらい大好きなえっちゃんとの！　通算100回目のデートが！」
「観弥子。口から妄想がたれ出てる」
「いやな言い方するねぇ、えっちゃん。妄想じゃなくて本音なのに」

セーラー服の可愛いえっちゃん。
本名坂額恵美（さかびたい・えみ）。
アタイ、二希観弥子（ふたき・みやこ）は、そんな連れないえっちゃんの手を取り、デート……もとい、あるお宅を目指していた。

「でも、よく見つけられたよね。この無駄に広い世界でさ、さすがるしあ様々ってとこ？」
「そのうちにやばいとこに侵入（ハッキング）して、つかまる未来しかみえないけど」
ちょっと大人びて、毒舌スキルを身につけてるけど、やっぱり根本は変わらないえっちゃん。
やる気のなさそうに、そんな毒を吐いている。

「しっかし、こんな近くの町にいるとは思わなかったよね。そう言えば、舞香たちは？
連絡取ったの？」
「大勢で押しかけられてもこまるだろうからって、いつもの毒味役の先発隊」
「うわ、懐かしい、そのフレーズ」
思わず、今までの色んな苦労が思い出されて、苦笑するミャコ。
まさかねぇ、アイラディアの世界が、ほんとにアキにつくられた世界だったとは思ってもみなかったわけだけど。

「うん、ここかな」
やがてえっちゃんは立ち止まり、空を見上げる。
「でかっ、億ションじゃん。もしかしなくても、アキってお金持ちのお嬢様？」
「わかんないよ。もしかしたらお嬢様じゃなくてお坊ちゃまかも」
「えー？　女の子のフリしてたってこと　ネカマってやつ？　それは見たいような見たくないような……」
「あんな世界つくっちゃうようなひとだから。可能性はゼロじゃないかも。……やめとく？　男の子ぎらいのミャコさん？」
楽しげなえっちゃん。
部屋番号を確認し、玄関ホールのインターホンがある場所へと向かう。
そんなえっちゃんに、ミャコは慌ててついていって。

「うぅ、緊張するなぁ……何て言えばいいんだろ」
もうそれは治ったもん！ってとこを主張するみたいにえっちゃんの隣に並ぶ。

「正直にいえばいい。あなたのつくった世界からやってきました、って」
「……そだね」
インターホンの向こうにアキが出たら、どんなリアクションをするんだろう。
そう考えたら楽しくなってきて。
ミャコはえっちゃんと顔を見合わせると。
えっちゃんと一緒になって、そのボタンを押したのだった……。

32、臆病風と、終幕。可能性のひとつ（後書き）

あとがき

今までで最長となりました。Ｍｉｓｓｉｏｎ、これにて了です。
相変わらずぜんぜん終わってないのに終わってます。
どの話も基本的に続きものの一部分で、お気づきだとは思いますが、
話同士がリンクしているせいもあるでしょうけど。
そんなわけで？　補完のためのアキ視点の話も構想中であります。
ただ、次にお送りするお話は別ものなので（世界観は同じようなものだけど）、
いつお送りできるかは未定です。すみませぬ。
でもって毎度のことですが、感想批評指導ご指摘いただけると助かります。
一番なのは、相互評価してもらえることですかね。
ファンタジーに限らず苦手なジャンルは特にないので、お暇な方は付き合ってもらえると助かります。
それでは。伊吹ノアでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3806j/

Mission

2010年12月18日20時54分発行